

神奈川大学大学院

言語と文化論集

特別号 2025年3月

外国語学研究科 中国言語文化専攻 博士後期課程修了(2024年3月)

博士学位論文

清末中国人日本留学生の団体活動と『訳書彙編』

郭夢垚

神奈川大学大学院 人文学研究科

目 次

序論	1
一、研究背景と対象	1
二、本論文の問題意識と先行研究	4
三、本論文の構成	15
第 I 部 中国人留学生の団体と活動	19
第一章 中国人留学生の予備教育と彼らの交友関係——日華学堂を中心に	21
はじめに	21
第一節 日華学堂の留学生とその予備教育	22
第二節 留学生の交友関係	42
第三節 湖広総督張之洞の長孫である張厚琨の日本留学	50
むすび	58
第二章 励志会の成立とその活動の全容	60
はじめに	60
第一節 励志会の成立とその趣旨	61
第二節 励志会の会員	64
第三節 励志会の活動	74
第四節 励志会会員の沈翔雲の日本「留学」	82
むすび	91
第三章 訳書彙編社と教科書訳輯社	93
はじめに	93
第一節 訳書彙編社の成立と変遷	94
第二節 訳書彙編社の社員構成	97
第三節 訳書彙編社の担当者	103
第四節 教科書訳輯社とその教科書出版	105

目次

第五節 訳書彙編社員の日本での学習歴——呉振麟と金邦平を中心に.....	113
むすび	120
第四章 清国留学生会館の設立から終焉まで.....	122
はじめに.....	122
第一節 清国留学生会館の設立交渉——清国駐日公使と留学生、そして、日本の動き ..	124
第二節 清国留学生会館の所在地とその構造	137
第三節 清国留学生会館の組織構成と励志会の役割	142
第四節 清国留学生会館と訳書彙編社.....	151
第五節 清国留学生会館の終焉.....	159
むすび	162
第II部 『訳書彙編』について	163
第五章 『訳書彙編』の発行——創刊と財政、販売を中心に	165
はじめに.....	165
第一節 『訳書彙編』の創刊趣旨——「開民智」	167
第二節 『訳書彙編』の発行と誌面構成	171
第三節 『訳書彙編』の財政状況と販路	179
むすび	192
第六章 20世紀初中国人留学生界における雑誌の発行と「開民智」の風潮.....	193
はじめに.....	193
第一節 横浜の開智会と『開智録』	195
第二節 杭州日文学堂と『訳林』	202
第三節 蘇州励学訳社と『励学訳編』	210
第四節 「開民智」の風潮と雑誌間の相互関係	216
むすび	226
第七章 20世紀初中国人留学生界における社会主義知識に関する翻訳活動.....	230
はじめに.....	230

目次

第一節 19世紀末日本の社会主義運動.....	232
第二節 20世紀初中国における社会主義に関連する知識の紹介.....	233
第三節 『訳書彙編』と『政法学報』における社会主義に関連する知識の翻訳.....	240
第四節 『浙江潮』の中の社会主義の関連記事.....	250
むすび.....	260
結論.....	262
本論文に関連する既発表論文.....	267
資 料 編.....	269
一、「励志会章程」.....	271
二、清国留学生会館歴代幹事表.....	274
三、『訳書彙編』の「敘例」、「簡明章程」及「簡要章程」.....	278
四、『訳書彙編』と『政法学報』の目次.....	280
五、『訳書彙編』の代理販売所.....	294
六、『開智録』の目次.....	303
史料・文献一覧.....	308

序論

本論文は、留学生雑誌『訳書彙編』を手がかりとして、同誌の編集を担当した団体「勵志会」の活動を考察し、同団体の活動が清末期近代中国の社会にどのような刺激と変化をもたらしたのかを分析し、考察するものである。ここでは、まず本論文の研究背景と対象、及び問題意識と先行研究について述べる。

一、研究背景と対象

1896 年、日清戦争後、清国駐日公使裕庚の呼びかけに応じて、中国政府は、13 名の学生を選抜して日本に送り出した。近代的な国家体制を目指す中国にとって、新しい近代的な留学の時代が始まったのである。そして、2 年後の 1898 年からは張之洞、劉坤一らの地方の重臣の提唱によって、浙江省、江蘇省、湖北省などの各地方から続々と清国政府の官費による留学生が派遣され、日本留学熱が巻き起こった。

この時期の日本への留学について、洋務派官僚の領袖である張之洞は『勸学篇』を著し、日本留学のメリットを以下のようにまとめている。

至遊学之國，西洋不如東洋：一路近省費，可多遣；一去華近，易考察；一東文近於中文，易通曉；一西書甚繁，凡西學不切要者，東人已刪節而酌改之。中東情勢風俗相近，易仿行，事半功倍，無過於此。¹

〔遊学の国については、西洋よりも東洋〔日本〕に行くべきである。一、地理的近く支出が少ないため、多くの学生を派遣できる。一、中国から地理的に近いため、考察に行きやすい。一、日本語と中国語は似ているため、学びやすい。一、西洋の書物は複雑すぎて量が多く、西学が不可欠でないところは、日本人がすでに適宜削除したり変更したりしている。中国と日本はその情勢と風俗が似ているため、真似しやすく、少ない労力で大きな効果を得ることができるので、これに過ぎるものはない。〕

¹ 張之洞『勸学篇・遊学第二』苑書義等主編『張之洞全集』第 12 冊著述・詩文・書札・附録、河北人民出版社、1998 年、9738 頁。

張之洞は日本のアジア主義者が提出した「日清同盟論」に興味を持っており、「同文同種」の理念に賛同する意思を示した上で、①地理的に近く、②互いが使用する文字が同じで、③さらに風俗、いわゆる慣習も似ていることを理由に上げ、日本留学の長所を述べている²。このような留学理念はさらに1901年、湖広総督張之洞と两江總督劉坤一が連名で上奏した「変通政治人材為先導旨籌議摺」という改革案に要約・明記されている。すなわち、

而教法尤以日本為最善。文字較近。課程較速。其盼望学生成就之心。至為懇切。伝習易。經費省。回華速。較之学於欧洲各国者。其經費可省三分之二。其学成及往返日期。可速一倍。³

〔而して教法は日本を以て最も善と為す。文学は相近く課程は較速かにして、其学生の成業を希望するの心をして、懇切ならしめ、其伝習は易く其經費は少く、帰国は速かなり。之を欧洲各国に較ぶれば、其經費三分の二を省く可く、其業成りて往返するに及でも、期日の速なること一倍なるべし。〕⁴

それだけでなく、戊戌変法失敗後、日本に亡命した梁啓超は、『清議報』を通して中国国内の知識人と学生に日本留学を勧めていた。梁啓超も張之洞とほぼ同じ理由を並べ立て、日本留学を推奨しているが、特に文字が同じである点を強調し、後には中国人が日本語を効率よく学ぶことを目的とした『和文漢読法』という日本語学習書まで刊行している⁵。

このような動きのなかで、中国人日本留學生の派遣は、年々人数が増え、1900年の義和団事件後には、東京にいる留學生は、文系と陸軍を合わせて約100名余りにのぼり、1902年初には約300名を数えた、という⁶。そして、1905年前後になると、清国政府の遊学奨励と科挙制度の廃止、そして日露戦争で日本がロシアに勝利したことなどの影響で、

² 張之洞『勸学篇・遊学第二』苑書義等主編『張之洞全集』第12冊著述・詩文・書札・附録、9737-9739頁。

³ 劉坤一・張之洞「変通政治人材為先導旨籌議摺」、光緒二十七年五月二十七日（1901年7月12日）、20丁裏（劉坤一・張之洞撰『江楚会奏变法三摺』沈雲龍主編『近代中国史料叢刊続編』第48輯、文海出版社、1977年、40頁）。

⁴ 劉坤一・張之洞共著、東亞同文会訳『劉張変法奏議 一名清国改革上奏』東亞同文会、1902年5月、28頁。注目したいのは、翻訳者がこの部分に傍点をつけて強調している。

⁵ 梁啓超「論学校七：変法通議三之七・訳書 続第二十七冊」『時務報』第33冊、1897年7月20日。

⁶ 清国留學生会館幹事『清国留學生会館第一次報告』東京並木活版所、1902年10月、「偕行社之記事」、5頁。

日本に留学する中国人学生の総数はさらに急増し、一時期にはついには約 8000 名に達したと言われうる⁷。この 8000 名という数字が、清末の中国人留学生の総数の頂点である、と言われている⁸。

ところが 1905 年末、日本留学熱の最中に、「清国留学生取締規則」が日本政府によって頒布され、中国人留学生はその「規則」に反対し、同盟休校の運動を繰り広げながら、一斉帰国することになり、留学生の数が次第に減少することとなる。

一方、1898 年以降に入ると、中国人留学生の人数の増加に伴い、留学生の間では、旧来の出身省、または民族に根差した郷土意識、そして地域主義を乗り越え、近代的な国民と国家意識を形成するためにも、留学生同士の結束を高めるべきであるとする意見が次第に高まり、様々な親睦団体や同郷団体が次々と結成されることとなった。

1899 年に結成された勵志会の成立を皮切りに、広東独立協会、東京青年会、清国留学生会館、軍国民教育会、各省の同郷会が次々と結成され、そのほかにも日本で翻訳出版された欧米の先進的な知識を中国に紹介するために多くの翻訳、出版団体が立ち上がった。これらの団体と組織は、それぞれの目標達成に向かって集会、演説、翻訳、出版などの活動を展開した。ところが、この時期の中国人留学生団体の政治的立場は、古い伝統中国を擁護する一群の人もいれば、新しい近代中国を目指す人々が入れ混じりつねに混乱しており、各団体の人員構成も常に変わっている。

この時期の多くの団体のなかでも注目されるべき団体が勵志会であり、その活動の一端は『訳書彙編』という雑誌を通してある程度の輪郭を描くことができる。1900 年 12 月に勵志会によって創刊された最初の中国人留学生雑誌『訳書彙編』は、その後 1904 年 5 月の発行停止まで 3 年半にわたって発行された。

馮自由は以下のように雑誌『訳書彙編』を高く評価している。

〔訳書彙編〕訳筆流麗典雅，風行一時。時人咸推為留学界雜誌之元祖。自後各省學生次第倡辦月刊，吾國青年思想之進步，收效至巨，不得不謂訳書彙編實為之倡也。⁹

⁷ 実藤惠秀は 1905 年—1906 年の留学生人数が約 8000 名であると主張した。さねとうけいしゅう『増補中国人日本留学史』くろしお出版、1970 年、55-61 頁。

⁸ 実藤惠秀のほか、1905 年と 1906 年の留学生人数について、凡そ以下の数字が挙げられる。1906 年、7283 名（二見剛史・佐藤尚子「〈付〉中国人日本留学史関係統計」『国立教育研究所紀要』第 94 集、1978 年、99-118 頁）。1905 年、8000 名、1906 年、12000 名（李喜所「清末留日学生人数小考」『文史哲』1982 年第 3 期）。

⁹ 馮自由「勵志会与訳書彙編」『革命逸史』初集、中華書局、1981 年、99 頁。馮自由『革命逸史』初集は 1939 年、商務印書館（長沙）によって出版された。1949 年以降、馮自由が大陸で批判されていたため、1981 年になって、北京の中華書局はやっと 6 巻の『革命逸史』を出版した。

『訳書彙編』はその翻訳が流暢で、華麗かつ典雅で、一時を風靡した。当時の人は皆この雑誌を「留学界雑誌の元祖」と称賛している。それ以来、各省の学生が次第に月刊の発行を提唱し、我国青年の思想の進歩に大きく貢献したことについては、この『訳書彙編』によって推進されてきたことを言わなければならない。]

馮自由の『訳書彙編』に対する高い評価を見ても、同時代においてこの雑誌が果たした役割が極めて大きかったことを伺うことができるが、この『訳書彙編』の刊行を起爆剤にして、その後を追うように『遊学訳編』、『湖北学生界』、『浙江潮』、『江蘇』などの留学生雑誌が発行され、中国人留学生界の活動と思想がさらに多様化したことも重要である。

1905 年 8 月、中国同盟会が東京で成立してから、中国人留学生団体の活動も新しい段階に入った。清国政府の支配を否定し、革命を提唱する雑誌の『二十世紀之支那』、『洞庭波』、『民報』などが発刊され、これら雑誌の革命宣伝と各省の同盟会分会の活動によって、中国人留学生界のなかにまで革命思想が広がることになる。

そこで、本論文では、最初の中国人留学生¹⁰が派遣された 1896 年から「清国留学生取締規則」事件と同盟会が成立する 1905 年までの時期に注目し、初期の中国人留学生団体の形成、発展、そして活動の変遷を主な考察の対象としたい。特に、そのなかでも、本論文は、中国人留学生団体の嚆矢である勵志会に着目し、その活動と密接な関連がある日華学堂、訳書彙編社、清国留学生会館の発展・変化について検討を試み、さらに『訳書彙編』の編集、流通、販売などから、同時期に発行された雑誌との関係などについて考察していく。

二、本論文の問題意識と先行研究

清末の中国人日本留学生に関する研究については、舒新城、松本亀次郎、実藤惠秀¹¹、黃福慶らの論考が留学生史研究の基礎を固めた先駆けとなった研究として名高い¹²。

¹⁰ 本論文は、「留日学生」などの定義・範囲の曖昧な表現を使わず、「中国人留学生」あるいは「中国人日本留学生」という用語を使用している。

¹¹ 本文中は、一貫性を保つため、「実藤惠秀」の表記だけを使用しているが、注釈と引用文献の記載は原文に忠実に「さねとうけいしゅう」と注記している。

¹² 松本亀次郎『中華留学生教育小史』東西書房、1931 年。舒新城『近代中国留学史』上海中華書局、1927 年。舒新城編『近代中国教育史料』上海中華書局、1928 年。

そのなかで、最も注目すべきは実藤恵秀による一連の研究成果である。実藤は、戦前に中国人日本留学生史の代表的な研究として『中国人日本留学史稿』を刊行しており¹³、戦後にも続いて留学生史研究を深め、豊富な成果をあげ、1970年に『増補 中国人日本留学史』を出版した¹⁴。同書は中国人留学生が伝統的な知識人から革命運動に参加することになる過程はもちろん、留学生の日常生活、日本人との交際、翻訳と出版活動、日本語彙の受容などの面にも注目している。

本論文との関連においても以下の3点において示唆するところが大きい。

一つ目は、実藤恵秀は清末期中国人留学生の受け入れ学校について概説しながら、この時期の速成教育に対して「留学というほどでもなかったことを認識しなければならない」という厳しい評価を下した一方、「中国の新文化を築き上げる」¹⁵ことに一定の役割を果たしたことをも認めている。本論文のなかでこの速成教育については触れることは少ないが、清末期の1899年から1904年のわずか5年という短い期間に中国人留学生が近代思想に触れ、勵志会を組織し、近代的知識を中国に移植することを狙い『訳書彙編』という雑誌を発行できたこと自体がある種の速成の学習なしでは成し得なかった成果であることは指摘しておかなければならない。

二つ目は、実藤恵秀が中国人留学生の出版した雑誌と書籍などを利用し、訳書彙編社、教科書訳輯社、湖南編訳社、会文学社などの団体の翻訳活動を考察し、近代中国の出版物が内容と形式の両面で近代的な形式に変貌する過程において中国人留学生の出版物が果たした影響を高く評価している点である。本論文の研究と分析においても実藤の先行研究と分析は大いに道標の役割を果たしてくれた。

三つ目は、実藤恵秀の研究において、中国人留学生が翻訳する過程において政治、経済、社会、文化は言うまでもなく、理系の科学と医学の分野に至るまで、学術用語、または学術概念の伝播と移植という面から大きく貢献したことを指摘している点である。彼は『増補 中国人日本留学史』のなかで、日本語からの中国語に翻訳された語彙をまとめ、日本語の語彙が中国語に翻訳される過程を検討し、日本から借用した語彙の輸入が近代化を求める中国の知識人の文化受容に大きく貢献した点を指摘している。なお、同書は訳書彙編社、教科書訳輯社、中国留学生会館などの留学生団体に対する考察にお

¹³ 実藤恵秀『中国人日本留学史稿』日華学会、1939年。この時期の同氏の著書は『近代日支文化論』（大東出版社、1941年）、『明治日支文化交渉』（光風館、1943年）などがある。

¹⁴ さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』（くろしお出版、1970年）。また、同氏『中国留学生史談』（第一書房、1981年）は1943年前後、『東亜文化園』に発表された文章を修正加筆したのちにまとめて出版したものである。

¹⁵ 前掲さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』、87頁。

いても優れており、本論文の第三章と第四章との関係でも重要な示唆を得たことは特筆しなければならない。

実藤恵秀に次ぎ、中国人留学生の問題に注目したのは永井算巳の研究である¹⁶。たとえば、「成城学校入学事件」をめぐって、実藤恵秀がこの事件が中国人留学生の団結を象徴することとして発展し、当時の清国政府を非難する反封建的な闘争の様相を帯びると同時に、日本を攻撃する反帝闘争の性格をも持っていた、としたのと異なり、永井算巳はこの事件が、「清国留学生取締規則」事件の前奏曲であり、「清末期的危機に瀕した西太后政府に内包された矛盾と苦悶の姿相を可成りあらわに看取できる」¹⁷といい、この事件を清末革命史の枠組みの中で理解する必要があると指摘した。

その後、1970年代から、阿部洋を中心とする研究グループは、主に教育史のアプローチから中国人日本留学生史の研究を推し進めている¹⁸。そのうち清末期の研究では、特に日本人教習の活動、及び彼らが中国の教育近代化に果たした役割に注目した多くの研究成果を発表していると言える。たとえば、蔭山雅博は清末期に中国で活躍した日本人教習の活動を考察し、特に彼らが中国の新式学堂の建設、及び師範教育、女子教育の改革などの分野で大きく貢献したが、中国人の師範留学生が帰国した後、彼らが教員として新式学堂で就職したことで日本人教習は衰退することになると言及した¹⁹。

一方、台湾の留学生史研究を代表する先行研究としては、黄福慶『清末留日学生』（1975年）を挙げなければならない。黄福慶は、清末の中国人留学生の派遣政策に関連する政府と学部などの資料を利用し、中国人留学生の日本での活動を考察し、特に留学生が活躍した雑誌の発行と翻訳活動の実態を明らかにし、革命と立憲という中国近代史叙述の主流である革命史の視点から同盟会と関係のある留学生団体の政治活動についても考察している²⁰。

¹⁶ 永井算巳『中国近代政治史論叢』汲古書院、1983年。

¹⁷ 永井算巳「所謂呉孫事件について」『中国近代政治史論叢』、127頁。

¹⁸ 論文集として、阿部洋編『日中関係と文化摩擦』巖南堂書店、1982年。阿部洋編『日中教育文化交流と摩擦——戦前日本の在華教育事業』第一書房、1983年。これらの論文集以外、彼らの研究は学術誌『国立教育研究所紀要』に掲載された。

¹⁹ 蔭山雅博「清末における教育近代化過程と日本人教習」前掲阿部洋編『日中教育文化交流と摩擦——戦前日本の在華教育事業』、5-47頁。また、細野浩二と二見剛史はそれぞれ東文学堂と京師法政学堂で働いた日本人教習を手がかりとして、彼らの影響を論じている。細野浩二「清末中国における「東文学堂」とその周辺——明治末日本の教育権収奪の論理をめぐる素描」、二見剛史「京師法政学堂と松本亀次郎」阿部洋編前掲書、49-97頁。

²⁰ 黄福慶『清末留日学生』中央研究院近代史研究所、1975年初版。また、瞿立鶴『清末留学教育』（三民書局、1973年）、林子勲『中国留学生教育史1847至1975年』（華岡出版、1976年）などは留学生の通史的研究として、中国人留学生の派遣政策を概説した。

1990年代以降、中国大陸の留学生史研究も発展しつつある。王曉秋、王奇生、田正平、沈殿成、李喜所などによる多くの通史的研究が挙げられているが、主に日本と中国政府の留学政策、外交問題、教育交流などのマクロな視点からのアプローチが多い²¹。

日本では1990年代末から、大里浩秋と孫安石がリードしている神奈川大学の研究グループが、外務省外交史料館や台湾国史館に所蔵された留学生関連資料を発掘し、研究問題はさらに細分化し、学際的共同研究が進み、研究成果としてすでに五つの論文集が出版されている²²。

そして2000年以降の中国人留学生史の研究は、清国政府、中華民国政府、日本の各大学の保管している公文書の公開などにより、研究テーマは多様化し、今は中国人留学生史の研究は、中国人留学生の派遣前の教育、日本留学中の活動、留学生帰国後の活動という三つの時期に分けて研究する手法へとさらに細密化している。

本論文では、上記の中国人日本留学生史の先行研究から多くを学びながら、以下の四つの問題点について改めて検討していく。

一、中国人留学生の予備学校研究の再検討

1896年から1900年前後にかけて、中国人留学生は来日してから正規の学校に入学するまでに予備学校で日本語と普通学などの教育を受けなければならない。この時期は、実藤恵秀の言うように、中国人留学生の「少数良質の時代」であると評価されている²³。

これらの予備学校に関する研究は、舒新城、松本亀次郎、実藤恵秀、阿部洋などの通史的な視点に立った論考がすでに発表されており、弘文学院²⁴、日華学堂、成城学校、振武学校などの学校の創立と規模、教育の内容と教員構成などについては多くが解明され

²¹ 王曉秋『近代中日啓示録』（北京出版社、1987年）、『近代中日文化交流史』（中華書局、1992年）。王奇生『中国留學生の歴史軌跡 1872—1949』（湖北教育出版社、1992年）、『留学と救国——抗戦時期海外学人群像』広西師範大学出版社、1995年。田正平『留學生与中国教育近代化』広東教育出版社、1996年。沈殿成主編『中国人留学日本百年史』遼寧教育出版社、1997年。李喜所『中国留学史論稿』中華書局、2007年。

²² 大里浩秋・孫安石が編著した論文集は以下の5冊がある。『中国人日本留学史研究の現段階』（御茶の水書房、2002年）、『留學生派遣から見た近代日中関係史』（御茶の水書房、2009年）、『近現代中国人日本留學生の諸相——「管理」と「交流」を中心として』（御茶の水書房、2015年）、『中国人留學生と「国家」・「愛国」・「近代」』（東方書店、2019年）、『明治から昭和の中国人日本留学の諸相』（東方書店、2022年）。

²³ さねとうけいしゅう「少数良質の時代」『中国留學生史談』第一書房、1981年。この文章は最初に、1943年11月の『東亜文化圏』第2巻第11号に「少数良質の時代 留日學生史談（二）」というタイトルで掲載された。この表現は、阿部洋『中国の近代教育と明治日本』（福村出版、1990年）の中でも使われている。

²⁴ 弘文学院は1901年、嘉納治五郎が設立した中国人留學生の語学と普通学を教える予備学校である。1903年、乾隆帝の諱「弘曆」を避諱するために、「宏文学院」と改名した。本論文は学校名の混乱を避けるために、以下、弘文学院を用いる。老松信一「嘉納治五郎の中国人留學生教育」『武道学研究』第8巻第2号、1976年を参照。

ているが²⁵、そのほかの留学生の経費（授業料、雑費）、授業で実際使われた教科書、そして留学生の生活（衣食住）の実態については、資料不足などの理由でまだ不明な箇所が多い。

この予備学校の研究において、最も注目すべき研究成果が次のように挙げられている。老松信一は、講道館に所蔵された中国人留学生の関連資料を分類整理した上で、弘文学院が成立してから発展し、後には閉鎖に至る経緯を明らかにし、嘉納治五郎の留学生教育思想、清国教育振興策、そして速成師範教育を推奨した理由などについて検討した²⁶。

その後、講道館が所蔵する資料を駆使した弘文学院の研究が次第に増え、北岡正子は魯迅の弘文学院時代を中心に「嘉納治五郎の中国視察」、「成城学校入学事件」、「弘文学院学生退学事件」などのいくつかの中国人留学生と深く関わっている事件の経緯を考察した²⁷。また、酒井順一郎は嘉納塾から弘文学院時期にかけて、留学生に対する日本語教育と衣食住の方面に注目した²⁸。そして、郭夢垚は江蘇省崇明県出身の留学生である馮閻模と馮閻模の日本留学時代を考察し、講道館所蔵資料と『東亜同文会報告』などの史料に基づいて彼らの嘉納塾と東京同文書院における学業と生活について明らかにした²⁹。

そのほか、実藤恵秀は日華学堂が果たした役割に注目し、その存在について紹介し³⁰、後に日華学堂の学堂日誌と堂監を務める宝閣善教の日記などの資料に基づいて、日華学堂の教育内容を考察しているほか³¹、いくつかの概説的な論考においても、日華学堂に触れられた³²。また、樂殿武と柴田幹夫は、日華学堂研究会を組織し、日華学堂に関連する

²⁵ 代表的な研究として、舒新城『近代中国留学史』（上海中華書局、1927年）、松本亀次郎『中華留学生教育小史』（東西書房、1931年）、実藤恵秀『中国人日本留学史稿』（日華学会、1939年）、同『増補 中国人日本留学史』（くろしお出版、1970年）、林子勲『中国留学生教育史 1847 至 1975 年』（華岡出版、1976年）、阿部洋『中国の近代教育と明治日本』（福村出版、1990年）などの論考がある。

²⁶ 老松信一「嘉納治五郎と中国人留学生教育」『講道館柔道科学研究会紀要』第V輯、1978年。

²⁷ 北岡正子『魯迅 日本という異文化のなかで——弘文学院入学から「退学」事件まで』関西大学出版部、2001年。

²⁸ 酒井順一郎『清国人日本留学生の言語文化接触——相互誤解の日中教育文化交流』ひつじ書房、2010年。このほか、荊建堂は講道館所蔵の留学生資料を駆使し、弘文学院の成立、嘉納治五郎の教育思想などに関する一連の研究成果を出した。荊建堂「清末における留日学生派遣政策の成立——「弘文学院」設立経緯の再検討」（『KGU 比較文化論集』第4号、2012年）、「嘉納治五郎の留学生教育と中国近代教育——中国教育視察中の言動を中心に」（『KGU 比較文化論集』第5号、2013年）、「弘文学院における嘉納治五郎の留学生教育思想」（『神話と詩』第11号、2013年3月）。

²⁹ 郭夢垚『「崇明県志」から見る清末における江蘇省崇明県の留日学生——馮閻模と馮閻模を事例に』『戦台史学』第174号、2022年2月。また、北村淳子「東京同文書院における初期日本語教育（明治32-34年）——チェンバレン本をめぐる」（『日本国際文化学会年報』第7号、2009年6月）は教科書から東京同文書院の留学生の日本語教育を考察した。

³⁰ 実藤恵秀「中国人日本留学史稿（五）」『日華学報』第62号、1937年7月。1939年、『日華学報』に連載された「中国人日本留学史稿」は、『中国人日本留学史稿』にまとめて日華学会により出版された。また、同じものが同氏『増補 中国人日本留学史』にも述べられている。

³¹ 「日華学堂の教育」前掲さねとうけいしゅう『中国留学生史談』。この文章も最初に、1944年2月の『東亜文化圏』第3巻第2号に「日華学堂の教育 留日学生史談（五）」というタイトルで掲載された。

³² たとえば、舒新城『近代中国留学史』（上海中華書局、1927年）、松本亀次郎『中華留学生教育小史』

全ての資料を収集した上で、学堂の創立から廃校までの歴史を解明しながら、学堂の監督と教師の役割、留学生の受け入れ、学業、生活、交際などの様々な方面から再考察した³³。特にこの研究会が日華学堂日誌を解説・翻刻し、『日華学堂章程要覽』や外務省外交史料館所蔵の日華学堂関連資料などを発掘したことも評価すべきであろう。

一方、陸軍関係の留学生を受け入れた成城学校と振武学校に関する研究について、留学生史の研究分野においても、最も注目されているテーマの一つである³⁴。中村義は、留学生の派遣、在籍中の成績、そして陶成章、蔡鍔、良弼など中国の近代史でも名が知られる著名な人物の在学中の活動を紹介し、特に1903年に一時廃止された成城学校留学生部の復活の経緯について考察をしている³⁵。そのほか、宮城由美子は、成城学校留学生部の設立、遊歴官の視察、留学生の生活と活動などの方面を取り上げ、中国政府が軍事留学生を日本に派遣した目的は、近代的な軍隊制度を設立すると同時に将校を育成するという目的があったことに対して、留学生は軍事留学を昇進の手段として考えていたことを指摘した³⁶。浜口裕子は成城学校と振武学校の陸軍留学生に関する一次資料が現存することを確かめ、二つの予備学校の留学生に関する一連の論考を出し、清末中国人陸軍留学生の研究を推し進めている³⁷。

(東西書房、1931年)、石錦「早期中国留日学生の活動と組織（1896—1901）」、『思与言』第6巻第1期、1968年）、林子勲『中国留学生教育史 1847 至 1975 年』（華岡出版、1976年）、阿部洋『中国の近代教育と明治日本』（福村出版、1990年）などの論考がある。

³³ 饒殿武・柴田幹夫編著『日華学堂とその時代——中国人留学生研究の新しい地平』武蔵野大学出版会、2022年。

³⁴ 成城学校と振武学校に関する研究成果が豊富であり、枚挙にいとまがない。本文で紹介された研究のほか、李慶国は成城学校史料を利用し、留学時期の呉禄貞に注目した。李慶国「呉禄貞と日本（1）——呉禄貞に関する伝記資料をめぐって」（『追手門学院大学国際教養学部紀要』第10巻、2016年）、「呉禄貞と日本（2）——呉禄貞に関する伝記資料をめぐって」（『追手門学院大学国際教養学部紀要』第13巻、2020年3月）。邱佩文「明治時期成城学校中国留学生之研究」（浙江工商大学修士論文、2017年12月）は清末期成城学校の留学生の受け入れ経緯、留学生の生活と活動などを考察した。陳力衛「成城学校中国人留学生史へのアプローチ」（『成城・経済研究』第231号、2021年1月）は、近代における成城学校の中国人留学生受け入れの経緯と特徴を考察した。

³⁵ 中村義「成城学校と中国人留学生」辛亥革命研究会『中国近現代史論集』汲古書院、1985年、251—275頁。中村義の論考の次に、同書では、小林共明は、東洋文庫に所蔵された清国学生監理員の文書を駆使し、振武学校の開校、留学生受け入れの政策、教育体制の変化などを検討した。小林共明「振武学校と留日清国陸軍学生」前掲辛亥革命研究会『中国近現代史論集』、277—309頁。

³⁶ 宮城由美子「成城学校と中国人留学生についての一考察」『佛教大学大学院紀要』第35号、2007年1月。

³⁷ 浜口裕子『満洲国留日学生の日中関係史——満洲事変・日中戦争から戦後民間外交へ』（勁草書房、2015年）、「日露戦争直後の中国人留学生——振武学校8期生東北出身者の動向を中心として」（『政治・経済・法律研究』第23巻第1号、2020年10月）、浜口裕子・家近亮子「留学生に関する成城学校史料目録——個人情報保護法と歴史史料」（『政治・経済・法律研究』第24巻第1号、2021年10月）。浜口氏の紹介によると、成城学校史料を所蔵した成城中学校・高等学校は同学校の資料公開を停止することを決めたため、現在、すべての資料整理は止まっている状態であるという。これからの成城学校に関する研究は、この資料公開の難関を突破するのか研究者の共通の問題になる。

以上、中国人留学生の予備学校に関する研究について見てみたが、今までの先行研究では、個別の予備学校の研究に注目するものの中国人留学生同士の交友関係や往来などについて、まだ多くの疑問が残っている。

そこで、本論文は、日華学堂の教育課程と留学生の成績などについて検討を加えた上、日華学堂を中心に展開された中国人留学生の交友関係及び団体作りのための活動について究明していきたい。

二、中国人留学生が組織した団体及活動に関する再検討

中国近現代史の叙述において、中国人留学生が組織した団体を研究する際に、いままでは必ずと言っていいほど中国同盟会（1905 年）の設立を重視し、さらに革命団体の前史として東京青年会（1902 年）、軍国民教育会（1903 年）など中国革命に関わる運動に傾斜した留学生団体に研究の中心が置かれていたと言える。

従来の研究では、張玉法は『清季の立憲団体』（1971 年）において、強学会、保皇会、政聞社などの立憲と地方自治を主張する団体の活動を究明した後³⁸、『清季の革命団体』（1975 年）を著し、中国人留学生が日本で組織した東京青年会、軍国民教育会、中国同盟会などの革命団体の活動が興中会、華興会、光復会につながる系譜を考察した³⁹。また、日本では上垣外憲一が、蔡鏐、黃興等の革命者の留學生生活を概論し⁴⁰、小島淑男も中国人留学生の革命運動に注目し、中国国民会の活動を集中的に考察した論考を発表している⁴¹。

もちろん、これらの革命重視史観に異を唱える研究も 1990 年代以降は徐々に登場し、沈渭濱は『孫中山与辛亥革命』（1993 年）のなかで勵志会、広東独立協会、支那亡国紀念会、東京青年会、軍国民教育会などの留学生団体の人員構成と活動に注目する必要があることを強調した⁴²。また、桑兵は『清末新知識界の社团与活動』（1995 年）のなかで、勵志会、国民会、支那亡国紀念会、軍国民教育会の成立と解散、組織綱領、及び会員の政治的な立場などの問題を分析した⁴³。しかし、革命重視史観にせよ、革命重視史観に反対する立場をとるにせよ、その研究の中心が依然として中国人留学生と革命運動、または孫文と日本留学生との関係に置かれていることに変わりはない。

³⁸ 張玉法『清季の立憲団体』中央研究院近代史研究所、1971 年初版。

³⁹ 張玉法『清季の革命団体』中央研究院近代史研究所、1975 年初版。

⁴⁰ 上垣外憲一『日本留学と革命運動』東京大学出版会、1982 年。

⁴¹ 小島淑男『留日学生の辛亥革命』青木書店、1989 年。

⁴² 沈渭濱『孫中山与辛亥革命』上海人民出版社、2016 年。

⁴³ 桑兵『清末新知識界の社团与活動』生活・読書・新知三聯書店、1995 年。

一方、中国人日本留学生史の分野から中国人留学生の団体とその活動を研究しようとする試みも当然あり、実藤恵秀は『増補 中国人日本留学史』(1970年)において、清国留学生会館の成立と終焉、主な業務、及びその職能を検討し、清国留学生会館を「留学生の大本営」と称している⁴⁴。また、孫安石と郭夢珪の論考は、実藤恵秀がまだ利用できなかった会館報告の資料を用い、会館の組織構成と運営などについて新たな考察を加えたものである⁴⁵。そのほかに、近年に入り、留学生同郷会の成立と活動についての研究が始められるようになる⁴⁶。

本論文は、以上の研究を参考にしつつ中国同盟会成立以前の留学生界の団体活動に焦点を置き、従来の先行研究ではまだ解明が不十分であった勵志会の成立、趣旨、その活動を究明した上で、この団体と深く関わっている訳書彙編社、教科書訳輯社、清国留学生会館などの団体との間に交差する連携関係が見える点についても明らかにしたい。

初期の中国人留学生の団体は、まだ「革命」あるいは「立憲」という明確な主義主張を表明していない場合も多く、特に「革命」思想に至っては、まだ清国打倒を明らかに主張することはなかなかできなかった。この初期の中国人留学生の団体を母体として、後に革命活動に従事する人が出現した場合も多いことから、勵志会、清国留学生会館、中国留学生総会、及び各省県の同郷会など非革命団体の活動を再検討することは、中国近代史研究においても大きな意義があると考えられる。

三、中国人留学生が発行した雑誌に関する研究の見直し

清末の中国人留学生が発行した雑誌の総数については統計方法と基準によって大きく異なり、たとえば、実藤恵秀は62種、黄福慶は65種、沈殿成は83種、谷長嶺と葉鳳美は97種の説をそれぞれ提示している⁴⁷。ところが、清末の時期を1905年という時点をも

⁴⁴ 前掲さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』、195-203頁。また同氏「清国留学生会館ものがたり」『明治日支文化交渉』(光風館、1943年)、「清国留学生会館」『中国留学生史談』(第一書房、1981年)。

⁴⁵ 孫安石「清国留学生会館研究初探——「国家」と「愛国」のはざま」(孫安石・大里浩秋編著『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』東方書店、2019年3月)、郭夢珪「清国留学生会館の設立と勵志会・訳書彙編社との関係について」(『中国研究月報』第75巻第11号、2021年11月)。

⁴⁶ 古川次郎「雲南同郷会と『演話報』」(『国際教養学部論叢』第10巻第2号、2018年3月)は雲南同郷会と『演話報』との関係、王鼎「清末における湖北留日学生の留学経験とその影響——黃州府三兄弟を事例に」(『アジア教育史研究』第30号、2021年3月)は湖北同郷会と黃州同郷会の関係、胡穎「清末の日本における中国人留学生同郷会について——湖南省留日同郷会の初期活動を中心に」(『人文研究(神奈川大学)』第199号、2019年12月)は湖南同郷会の初期活動を、それぞれ考察する論考を発表している。

⁴⁷ 前掲さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』(418-420頁)、黄福慶『清末留日学生』(188-195頁)、沈殿成主編『中国人留學日本百年史』(267頁)、谷長嶺・葉鳳美「辛亥革命時期的留日学生期刊」(歐美同学会・中国留學人員聯誼會編『留學人員与辛亥革命』華文出版社、2012年、93頁)。なお徐志民「晚清留日学生報刊与中日關係」(『日本学』第13輯、世界知識出版社、2006年、141頁)は沈殿

に大きく分けると 1905 年以前の雑誌の総数は 12、3 種を超えないことがわかる。また、この 1905 年以前の中国人留學生が発行した雑誌の内容は、まだ革命の論理ではなく、欧米の新しい知識と理論を受容し、一般の中国人を啓蒙したいという価値に重点をおいていたことがわかる。

中国人留學生が発行した雑誌に関する先行研究は、主に新聞史、出版史の分野と文学の翻訳史の分野で蓄積が見られた。

まず、新聞史、出版史では、早くも 1926 年に戈公振『中国報学史』が清末の日本留學生界が発行した雑誌に注目し、①中国の人々に近代化を訴える雑誌、②欧米の先進的な学問を中国に導入することを主張する雑誌、③国家と華僑による貿易と商業の振興を主張する雑誌、④法律に関する知識を紹介し、立憲を求める雑誌、⑤女子教育と女性の權益を提唱する雑誌、という五つの種類に留學生雑誌を分類することを試みている⁴⁸。

このほか、張静盧輯注『中国近代出版史料初編』、方漢奇『中国近代報刊史』、史和等編『中国近代報刊名録』、馬光仁『上海新聞史（1850—1949）』、周佳榮『瀛洲華声——日本中文報刊一五十年史』などの論考が新聞史と出版史に問題関心から中国人留學生が発行した雑誌を取り上げるも、雑誌の創刊と廃刊時期、発行頻度、そして発行地などをまとめるのみで、雑誌の詳細な誌面分析までは行っていない⁴⁹。

次に、翻訳史の研究については、たとえば、譚汝謙「中日之間訳書事業的過去、現在与未来」、田雁『日文図書漢訳出版史』などが挙げられているが、同じく雑誌の概略について紹介しているのみである⁵⁰。

また、中国人留學生史の研究においても、留學生雑誌に対する研究は重視されており、実藤恵秀、黄福慶、阿部洋、董守義などの論考はいずれも清末の留學生が発行した雑誌を概説し、各雑誌の内容や特徴を紹介している⁵¹。

成の 83 種説を賛同した。このほか、董守義『清代留学運動史』（遼寧人民出版社、1985 年、303-308 頁）は実藤恵秀の 62 種を参照した上で、63 種を提出している。

⁴⁸ 戈公振『留学界之出版物』『中国報学史』上海商務印書館、1926 年、165-170 頁。

⁴⁹ 張静盧輯注『中国近代出版史料初編』（群聯出版社、1953 年）、方漢奇『中国近代報刊史』（山西人民出版社、1981 年）、史和等編『中国近代報刊名録』（福建人民出版社、1991 年）、馬光仁『上海新聞史（1850—1949）』（復旦大学出版社、1996 年）、周佳榮『瀛洲華声——日本中文報刊一五十年史』（香港三聯書店、2020 年）を参照。

⁵⁰ 譚汝謙「中日之間訳書事業的過去、現在与未来」同氏主編『中国訳日本書総合目録』香港中文大学出版社、1980 年。張迪「近代中国における日本書籍の翻訳と紹介——19 世紀末から 20 世紀初頭の概況とその特徴」『言葉と文化』第 10 卷、2009 年。田雁『日文図書漢訳出版史』南京大学出版社、2017 年（同書の日本語版は 2020 年出版される。田雁著、小野寺史郎・古谷創訳『近代中国の日本書翻訳出版史』東京大学出版会、2020 年）。また、この問題に注目した修士と博士論文も少なくない。劉紅「近代中国留學生教育翻訳研究（1895—1937）」（華中師範大学博士論文、2014 年 5 月）、翟貞瑾「清末留日學生翻訳活動研究」（遼寧大学修士論文、2018 年 5 月）、陳翼思「清末民初日書訳介研究」（上海師範大学修士論文、2018 年 5 月）などがある。

⁵¹ 前掲さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留學史』、黄福慶『清末留日學生』、董守義『清代留学運

以上、中国人留學生が発行した雑誌に関する先行研究について紹介したが、本論文との関係で特筆すべき研究は、清末の新聞雑誌と知識伝播との関係を論じた李仁淵の『晚清の新式伝播媒体と知識份子——以報刊出版為中心的討論』（2005年）である。

同書は、中国近代史において欧米の多種多様な学術概念を輸入するにあたり、日本で発行された翻訳書とその日本語語彙の多くを再び中国語に翻訳する過程で、中国人留學生が発行した雑誌が大きく貢献したことを高く評価している。また、東京と横浜で発行された中国人留學生の雑誌が上海、杭州などの出版先進の地域を経由し、中国の内地に広がる流通網が構築され、近代的な知識が最終的には中国の読者の認識にまで届いたことを指摘している⁵²。

本論文では、以上の先行研究から多くを学びながら、1905年以前に創刊された留學生雑誌に関心を寄せ、特に「留学雑誌の元祖」と称される『訳書彙編』の編集、出版、販売、流通、誌面内容などを全面的に検討し、さらに『訳書彙編』とほぼ同時期に発行された雑誌の『開智録』、『訳林』、『勵学訳編』などとの関係にも触れていきたい。

四、清末中国人留學生の社会主義に関する理解と翻訳活動

中国では社会主義の関連文献を集めた代表的な資料集としては⁵³、姜義華編『社会主義学説在中国的初期伝播』（1984年）と北京大学『馬蔵』編纂研究中心が編纂した『馬蔵』（2019年）⁵⁴が重要である。これらの論考は、1870年代から1908年頃の中国における初期社会主義に関する新聞、雑誌、著作物をまとめたもので有用である⁵⁵。『馬蔵』はまだ一部しか出版されていないが、その収録の文献から見れば、今までの資料集の中では最も全面かつ詳細なものといえよう。

動史』、阿部洋『中国の近代教育と明治日本』、王奇生『中国留學生の歴史軌跡 1872—1949』。また、彭爽「清末留日學生雑誌研究」（東北師範大学博士論文、2021年12月）。

⁵² 李仁淵『晚清の新式伝播媒体と知識份子——以報刊出版為中心的討論』稲鄉出版社、2005年。また、桑兵「清末民初伝播業の民間化と社会変遷」（『近代史研究』1991年第6期）、許小青「1903年留日學生刊物的伝播網絡」（『中州學刊』2001年11月第6期）、章清『清季民国時期的「思想界」』（社会科学文献出版社、2014年）も雑誌の流通網の重要性を論じている。

⁵³ 王毅「近十年来馬克思主義在中國早期伝播的研究与展望」（『教学与研究』2018年第8期）によれば、2007年から2018年までの約10年間、関連研究は1000本以上の研究論文、100本以上の学位論文が数えられる。ただし、この総括文章は民国期、特に1919年五四運動前後に注目する研究をまとめることで、清末中国の社会主義の伝播に関する研究が紹介されていない。

⁵⁴ 『馬蔵』とは、仏教の経蔵の意味をとり、マルクス主義に関するすべての文献を包括するものである。この資料集は2019年から出版され、2021年に至って第8巻まで出版された。また孫江主編『『共産党宣言』在中國——『共産党宣言』の訳本と底本』（南京大学出版社、2020年）は『共産党宣言』の底本とドイツ・フランス・イギリス・ロシア・日本の言語から翻訳された中国語訳本を揃えた。

⁵⁵ 姜義華編『社会主義学説在中国的初期伝播』復旦大学出版社、1984年。また、黄开沅・刘宋斌・房列曙編『五四運動前馬克思主義在中国的紹介与伝播』（『中国現代政治思想史資料叢書』第3輯、湖南人民出版社、1986年）は姜義華編の資料集と類似するものとして、清末から五四運動前にかけての社会主義またはマルクス主義の関連文献をまとめている。

また、中国の社会主義・マルクス主義の伝播に関する通史的論考としては、著作編訳局馬恩室編著書、李其駒等編著書、鐘家棟等編著書、徐素華などの論考があり、日本に留学した中国人留学生が果たした役割について言及しているが、まだ概説の段階にとどまっている⁵⁶。

そのほかに清末期の社会主義・マルクス主義などの輸入をめぐる思想史、概念史、翻訳史の研究がある⁵⁷。たとえば、京都大学の狭間直樹は、清末期中国の社会主義の受容と伝播過程を考察し、中国人留学生の翻訳活動が果たした役割を強調している⁵⁸。また、陳力衛は「社会」、「主義」、「社会主義」、「共產主義」、「帝国主義」などの名詞の輸入と受容について検討した⁵⁹。王汎森は近代思想史の脈絡において、「主義」という用語が中国に伝播した過程を論じている⁶⁰。

しかし、以上で紹介した社会主義思想の中国への伝播については、1905 年以前の中国人留学生が果たした役割についてはまだ検討の余地が多く残っている⁶¹。

一方、1900 年代初の留学生雑誌の中、すでに初期社会主義に関連する知識の紹介が見られる。従来の留学生雑誌に関する先行研究では、教育、軍事、師範、政治学、法学などの分野の知識が注目されているが、社会主義思想に関してまだ十分に明らかにされていない。たとえば、『訳書彙編』の研究について、西洋思想（主に政治学と法学）の受容

⁵⁶ 著作編訳局馬恩室編『馬克思恩格斯著作在中国的伝播——紀念馬克思逝世一百周年』（人民出版社、1983 年）、李其駒・王炯華・張耀先主編『馬克思主義哲学在中国——从清末民初到中華人民共和國成立』（上海人民出版社、1991 年）。鐘家棟・王世根主編『20 世紀——馬克思主義在中國』（上海人民出版社、1998 年）、徐素華『馬克思主義哲学在中国——伝播・応用・形態・前景』（北京出版社、2002 年）、同『馬克思恩格斯著作在中国的伝播——MEGA² 視野下の文本、文献、語彙学研究』（中国社会科学出版社、2013 年）。このほか、研究論文も少なくない。蔣大椿「五四運動前唯物史観理論在中国的伝播」（『安徽史学』1995 年第 2 期）、欧陽躍峰「20 世紀初革命派對馬克思主義的紹介」（『安徽師範大学学報』第 35 卷第 2 期、2007 年 3 月）、張国偉「馬克思主義著作在中国的出版与伝播（1899—1945）」（華東師範大学博士論文、2017 年 5 月）などの論考がある。

⁵⁷ 清水稔「湖南への社会主義思想伝播に関する一考察」（『佛教大学総合研究所紀要』第 3 号、1996 年 3 月）、「近代中国とマルクス主義との出会いについて——とくに辛亥革命前後を中心として」（『文学部論集』第 92 号、2008 年 3 月）。また、尹徳樹「文化視域下馬克思主義在中国的早期伝播与発展」（南京師範大学博士論文、2013 年 5 月）、孫建昌「社会主義学説在中国的早期紹介与伝播（1900—1908）」（山東大学博士論文、2014 年 10 月）、盛福剛「中国におけるマルクス主義文献の初期受容に関する研究——日本からの伝播・翻訳を中心として」（日本東北大学博士論文、2016 年）などが挙げられる。

⁵⁸ 狭間直樹『中国社会主義の黎明』岩波書店、1976 年。

⁵⁹ 陳力衛『東来東往——近代中日之間の詞語概念』社会科学文献出版社、2019 年。また、陳力衛「近代各『主義』の伝播与清議報」孫江・陳力衛主編『亞洲概念史研究』第 2 輯、生活・読書・新知三聯書店、2014 年。

⁶⁰ 王汎森『思想は生活の一種方式——中国近代思想史の再思考』聯経出版事業股份有限公司、2017 年。また、金観濤・劉青峰『觀念史研究——中国現代重要政治術語の形成』法律出版社、2009 年。

⁶¹ 1905 年以降、社会主義の伝播に関連する研究について、永井算已「社会主義講習会と政聞社」（前掲永井算已『中国近代政治史論叢』）、狭間直樹「幸徳秋水の第一回社会主義講習会における演説について」（『鷹陵史学』第 1 号、1975 年 3 月）、石母田正「幸徳秋水と中国——民族と愛国心の問題について」（『石母田正著作集』第 15 巻、岩波書店、1990 年）、富田昇「社会主義講習会と亞洲和親会——明治末期における日中知識人の交流」（『集刊東洋学』第 64 号、1990 年 11 月）、鄭国民「社会主義講習会と日本思想的関係」（『社会科学研究』2008 年第 3 期）などの研究がある。

について誌面の分析を通して考察する論考が多い⁶²。孫宏雲は『訳書彙編』に関する一連の研究を発表し、同誌に掲載された政治学の関連文章を分析し、同誌が日本の政治学の著作を中国に導入する際に重要な役割を果たしたことを評価した⁶³。陳靈海は『訳書彙編』や『浙江潮』などの留学生雑誌で活躍していた「攻法子」が中国国内における近代「法系」概念導入に果たした役割を再評価する必要性を指摘している⁶⁴。楊瑞は「法族」、「法系」概念の創成と伝播を考察し、特に「法系」概念を中国に紹介した「攻法子」が果たした役割を評価した⁶⁵。

そこで、本論文では、1905 年以前、中国人留學生が社会主義に関する知識に接触した萌芽期に関心を払い、具体的に『訳書彙編』、『浙江潮』などの留学生雑誌に掲載された社会主義関連の記事に依拠し、当時の留學生が抱いていた社会主義理解について検討する。

三、本論文の構成

本論文は序論、本論の七つの章と結論、そして資料編で構成され、さらに本論の第 I 部「中国人留學生の団体活動」は、勵志会、訳書彙編社、教科書訳輯社、清国留學生会館など、初期の中国人留學生の団体活動について述べる。

第一章では、清末期の中国人留學生が在籍していた予備学校である日華学堂を考察しながら、日華学堂における中国人留學生の日常生活と交友関係を究明する。また、清国最初の高級官僚の子弟として日本に留学した張厚琨（湖広総督張之洞の孫にあたる）の留學生活を考察する。この部分は、1896 年から 1900 年前後の留學生の生活と活動を検討

⁶² この研究視点の中では、留學生の意識や認識をめぐる論考もある。孫瑛鞠「清末、中国人日本留學生の近代国民意識形成に関する一考察——1896 年から 1901 年までの留學生界に着目して」（『中国研究月報』第 849 号、2018 年）は『清議報』、『訳書彙編』、『開智録』に載せられた留學生の言論から、留日學生の「国民意識」を分析している。王曉雨・陳其松「清国人日本留學生の見た「世界」とその言説」（『北東アジア研究』第 30 号、2019 年 3 月）は『訳書彙編』をはじめとして留學生の出版活動から留學生の「世界」に対する認識を考察した。

⁶³ 孫宏雲「學術連鎖——高田早苗と欧米政治学在近代日本与中国之伝播」（『中山大学學報（社会科学版）』2013 年第 5 期）、「楊廷棟訳『原政』の底本源流考」（『政治思想史』2016 年第 1 期）。また、苗禱琦「「西政」徂東——『訳書彙編』と晚清政治学伝播的「日本渠道」」（中国人民大学修士論文、2020 年 6 月）は同誌の編集人員、体裁、伝播などを概説した上で、近代中国の政治学の受容めぐって、同誌に掲載された『政治学』を取り上げ、その概念を分析している。このほか、宋曉煜「清末における加藤弘之の著作の翻訳および受容状況——『強者の權利の競争』とその中国語訳を中心に」（『ICCS 現代中国学ジャーナル』第 10 巻第 1 号、2017 年 6 月）がある。

⁶⁴ 陳靈海「攻法子と「法系」概念輸入中国——近代法學史上的里程碑事件」（『清華法學』2017 年第 6 期）。

⁶⁵ 楊瑞「清季民初法系知識的東學背景及其衍行」（『近代史研究』2022 年第 2 期）。

していることから、1900 年以降より活発化する中国人留学生の団体活動の「前史」として位置付けることができる。1900 年以降、中国人留学生は、異国日本で清国政府の管轄を遠く離れているという地理的な条件を利用し、多くの団体を組織し、日本で触れた先進的な学問や知識を中国に翻訳・出版しながら、新しい知識を中国側に伝達する活動に従事することとなる。

このような新たな知識の受容、新式教育の普及、革命思想の宣伝などにおいて最も活発であった団体が、励志会、東京青年会、軍国民教育会、清国留学生会館などであった。その中でも励志会、訳書彙編社、教科書訳輯社は中国人留学生が初期に組織した団体の一つで、日本の政治、経済、法律等の様々な方面の書籍を翻訳し、出版した団体として注目すべき活動を展開した。

第二章、第三章では、励志会、訳書彙編社、教科書訳輯社の成立の時期、団体の変遷、社員の構成などについて再検討を行い、その中心的な役割を果たした構成員がときには重複し、ときにはその人脈を継承するなどの共存関係にあったことを解明した。つまり、1899 年秋、励志会は留学生の親睦団体として成立し、学術を重視し、演説会を通じて留学生界の思想を啓蒙することを目指した。その後、1901 年、訳書彙編社が励志会から独立し、『訳書彙編』を編集するなどの活動を展開し、さらに 1902 年前半には教科書訳輯社が成立し、訳書彙編社の「分家」として励志会の教科書出版の活動を継承している。

第四章では、励志会と訳書彙編社の会員名簿と『清国留学生会館報告』に掲載された会員名簿に依拠して清国留学生会館と励志会、そして訳書彙編社の人脈のつながりとの関連性を探し出した。励志会の活動を引き継いだ清国留学生会館の成立の経緯、及びその成立過程において励志会の会員が中心的な役割を果たしたことを解明し、励志会、訳書彙編社、そして清国留学生会館が密接なつながりを持っていることを、その組織構成、寄付金、図書雑誌の寄贈、雑誌の発行所として登録された住所など様々な角度から解明し、指摘した。

以上の第Ⅰ部は、励志会、訳書彙編社、教科書訳輯社、清国留学生会館の個別の活動の実相を明らかにすると同時に、この四者の活動に参加した人脈関係はときには重複し、ときには継承される共存関係を持っていることを解明し、そして、清国留学生会館の成立に伴い、励志会の活動は次第に形骸化することとなり、訳書彙編社は『訳書彙編』の編集と発行の住所を清国留学生会館内に移していることを指摘した。

第Ⅱ部では、中国人留学生の団体である励志会が発行した『訳書彙編』の誌面内容の分析に注目している。

『訳書彙編』は、中国人留学生が発行した雑誌の「元祖」と称され、中国人留学生によって初めて発行された雑誌であった。1900 年から 1902 年にかけての留学生界において、欧米と日本の知識と思想を中国に輸入したのは、ほかでもなく、『訳書彙編』であったと言ってもよい。それだけでなく、『訳書彙編』は編集、販売、流通等の様々な方面において後から発行された留学生雑誌の手本となり、後の留学生雑誌の発行の指南役を果たしたと言える。

第五章は、『訳書彙編』の創刊の趣旨、誌面構成の変化、資金問題、販売網の特徴などを明らかにした。特に雑誌の財政問題という従来の研究では重視されていなかった点に注目し、同誌第 4 期の発行後、購読者と各代理販売所からの代金延納があり、膨大な郵便料が雑誌の存続を脅かした実態を明らかにすることができた。そのため、雑誌側は読者の代金延納に対する罰則を強化し、支払いの催促、定価の引き上げなどの対策を打ち出して、廃刊の危機を乗り越えたことを解明した。

その後、『遊学訳編』、『湖北学生界』、『浙江潮』、『直説』、『江蘇』、『雲南』などの留学生雑誌が『訳書彙編』の体裁と編集などになり次々と創刊された。これらの雑誌は、欧米からの近代知識を日本経由で中国に伝播する情報の運び手として、留学生の様々な活動や主張を中国国内に伝える役割を担ったのである。

第六章は、『訳書彙編』の誌面内容に着目し、同誌とほぼ同時期に発行している『開智録』、『訳林』、『励学訳編』を取り上げ、それぞれ東京、横浜、杭州、蘇州にある四つの雑誌がともに翻訳する原本の注目点は異なるものの「民智」を開くことを提唱している点に注目した。戊戌変法後の中国では、啓蒙思想の伝播に伴い、「開民智」という目標が中国知識人の共通の認識として成り立っていた。そこで、「民智を開く」ために、中国の知識人と海外の留学生は新聞や雑誌を発行し、欧米と日本の先進的な思想と政治理論を翻訳することに力を入れ、互いの連絡網を築き、その影響を広げようとした。そこで、最も大きく活躍したのが日本の中国人留学生であったことは言うまでもない。

第七章は、『訳書彙編』、『政法学報』などの留学生雑誌に掲載された社会主義に関する記事に注目する。20 世紀の初頭、中国では社会主義に関する知識（マルクスの科学的社会主義にも触れられたが、主にサン・シモン、フーリエの空想的社会主義）の紹介が盛んになり、社会主義に関連する様々な翻訳と著述活動が行われた。この初期社会主義に関連する記事は、『訳書彙編』、『政法学報』、『浙江潮』などの留学生雑誌にも掲載されていた。この時期、社会主義は、西洋の先進的な知識の中の一つとして捉えられ、翻訳活動に従事した留学生たちがどれほど意識的に、または主体的に社会主義を理解し、紹介

しようとしたのかを究明することは容易なことではない。しかし、これらの社会主義に関する知識が紹介されていることから、中国人留学生や知識人の間で、社会主義思想に強い関心を寄せていたことは否定できない。

第 I 部 中国人留学生の団体と活動

第一章 中国人留学生の予備教育と彼らの交友関係——日華学堂を中心に

はじめに

1896 年、13 名の中国人留学生が日本に派遣され、清国駐日公使館の東文学堂を離れて嘉納治五郎（1860—1938）¹の下で教育を受け、中国人日本留学生の歴史を切り開いた。その後、官費と私費の留学生が相次いで日本に赴き、1900 年頃には、百数名に達することとなった。彼らは、嘉納治五郎塾（嘉納塾）、成城学校、日華学堂、東京（横浜）高等大同学校、東京同文書院などの留学生の予備学校に分かれて入学し、普通学と日本語教育を受けることとなる。ところが、各学校の寄宿舎に集中して暮らしていた彼らは、日本政府と学校の監督下で学習や生活をしていたため、相互の交流が多いとは言えなかった。

しかし、このような困難な状況の中でも、最も多くの文系の留学生在籍していた日華学堂は、中国人留学生の交友関係を深める点に大きな役割を果たしたが、その詳細はまだ十分に理解されていない。

実藤恵秀は早くも日華学堂が果たした役割に注目し、その存在について紹介し²、のちに日華学堂の学堂日誌と堂監を務める宝閣善教の日記などに基づいて、日華学堂の教育内容を考察している³。このほか、いくつかの概説的な論考においても、日華学堂に触れられた⁴。

¹ 嘉納治五郎（1860—1938）、明治～昭和時代の教育家。講道館柔道の創始者。1881 年、東京大学文学部政治学科及び理財学科を卒業。翌年哲学科選科を卒え、以後学習院講師、同教授、同教頭、第五高等中学校校長、第一高等中学校校長、文部省普通学務局長、東京高等師範学校校長などを歴任した。また私財を投じ、日清戦争後急増した清国留学生教育のために亦楽書院、さらに弘文（宏文）学院の経営に尽瘁している。

² 実藤恵秀「中国人日本留学史稿（五）」『日華学報』第 62 号、1937 年 7 月。1939 年、『日華学報』に連載された「中国人日本留学史稿」は、『中国人日本留学史稿』にまとめて日華学会により出版された。また、同じものが同氏『増補 中国人日本留学史』（くろしお出版、1970 年）にも述べられている。

³ 「日華学堂の教育」さねとうけいしゅう『中国留学生史談』（第一書房、1981 年）。この文章も最初に、1944 年 2 月の『東亜文化園』第 3 巻第 2 号に「日華学堂の教育 留日学生史談（五）」というタイトルで掲載された。

⁴ たとえば、舒新城『近代中国留学史』（上海中華書局、1927 年）、松本亀次郎『中華留学生教育小史』（東西書房、1931 年）、石錦「早期中国留日学生的活動与組織（1896—1901）」『思与言』第 6 巻第 1 期、

日華学堂に関する近年の最も注目すべき論考は、樂殿武・柴田幹夫編著『日華学堂とその時代——中国人留学生研究の新しい地平』である。同書は、日華学堂に中国人留學生が派遣され、実際に勉強した学業内容と日本での日常生活などについて考察しており⁵、特に日華学堂の学堂日誌などの一次的な資料の整理と公開をしている点、高く評価すべきである。筆者は同書に「日華学堂と励志会」と「日華学堂と清国留學生の翻訳活動」の二つの論考を書き上げ、日華学堂の日本語教育、及び日華学堂と励志会との関係を検討したが、その予備教育の全体像を把握するためには、その他に普通学の状況も考察する必要がある。

本章では、1900 年以前に、中国人留學生が在籍した代表的な予備学校の一つである日華学堂の普通学と日本語教育の内容を紹介したあと、留學生の日常生活と交友関係に焦点を当て、今までの先行研究では十分に利用されていない日華学堂の学堂日誌と『日華学堂章程一覽』に依拠し、日華学堂という「場所」が中国人留學生の活動の拠点として重要な役割を果たしていた点について再検討することとしたい。

中国人留學生の交友関係の事例については、清国政府の高官を務めた湖広総督張之洞の長孫である張厚琨が学習院大学に在籍していたときの教務課日記や近衛篤磨の日記などに基づいて、中国人留學生の生活実態を考察する。

第一節 日華学堂の留學生とその予備教育

表 1-1 は、外務省記録と関連資料を参考に 1900 年以前に設立された中国人留學生を対象にした予備学校についての情報をまとめたものである。

表 1-1 1900 年前に設立された中国人留學生対象の予備学校

学校	設立時期	主な管理者	目的/特徴	最多数数 (1900 年前)	備考

1968 年)、林子勲『中国留學生教育史 1847 至 1975 年』(華岡出版、1976 年)、阿部洋『中国の近代教育と明治日本』(福村出版、1990 年)などの論考がある。

⁵ 樂殿武・柴田幹夫編著『日華学堂とその時代——中国人留學生研究の新しい地平』武蔵野大学出版会、2022 年。

嘉納塾/嘉納 学校	1896. 6	嘉納治五郎、本 田増次郎、三矢 重松	日本語翻訳（通 訳）の育成	13 名 (7 名卒)	1899. 10、亦楽書院と改 名。弘文学院の前身と も言える。
日華学堂	1898. 7	高楠順次郎、宝 閣善教	高等の学校に進 学/文系留学生	26 名	
成城学校 留学生部	1898. 7	賀屋義矩、田村 松之助	陸軍人材の育成/ 軍事留学生	約 55 名 (45 名卒業)	最初、軍事留学生しか 受け入れなかったが、 1903 年再開、文学留学 生の学級も開設した。
東京高等大同 学校	1899. 7	梁啓超、柏原文 太郎	梁啓超の私塾、 文系留学生	11 名	1901. 5、東亜商業学校 と改名。後で清華学校 (東京) になる。
東京同文書院	1899. 11	中西重太郎、田 野橋次、水谷彬	日清親善、教育 提携/文系留学生	約 12、3 名	東亜同文会に附設。

出典：外務省記録、講道館所蔵中国人留学生関連史料、日華学堂の学堂日誌、成城学校留学生部『留学生部出身者名簿』（軍人会館出版部、1937 年）、『成城学校八十年』（日産印刷株式会社、1965 年）、丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』（上海人民出版社、1983 年）、『東亜同文会第 7 回報告』（1900 年 6 月 10 日）、『東亜同文会第 17 回報告』（1901 年 4 月 1 日）、『東亜同文会第 27 回報告』（1902 年 2 月 1 日）、長谷川勝政『英学者本田増次郎の生涯 信仰・博愛と広報外交』（教文館、2019 年）などの資料に基づいて作成。

注：嘉納塾、または嘉納学校とも呼ばれるが、どちらも公式の学校名ではない。嘉納治五郎が作った私塾のような学校である。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623200（第 16-34 画像）、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部（B-3-10-5-3_2）（外務省外交史料館）。

表 1-1 が示すように、1900 年頃の中国人日本留学生界において、これら五つの予備学校が中国人留学生を受け入れ、日本の高等教育機関に入学するための予備教育を提供していた。これらの予備学校については、中国人留学生を受け入れた人数、学校の規模や教師、そして、教育カリキュラムなどが、それぞれ異なっており、互いを直接、比較することはなかなか難しいが、中国人留学生に与えた影響の大きさから見れば、日華学堂と日華学堂に在籍した中国人留学生が特に重要であると言える。

一、日華学堂の中国人留学生

日華学堂は、最初に浙江省求是書院⁶から派遣された学生を教育するために設立された予備学校である。浙江省の留学生派遣の目的について、在杭州領事館事務代理速水一吼より外務大臣西徳二郎あての電報では、以下のように述べられている。

右四名ニシテ、是等ハ未タ其修ムル学課ニ就テ、一定ノ方針ヲ定メス、又之ヲ派遣スル巡撫ニ於テモ、外国學術ヲ知得セサルニ付、是亦一定ノ目的ナシ。帝国ハ文武共ニ學術ノ精微ナルヲ聴キ、漠然トシテ留学スルモノナリ。凡ソ學術ハ粗ヨリ精ニ入り、普通ヨリ専門ニ移ルハ、当然ノ階梯ナレハ、今回ノ学生ヲシテ、直チニ専門ノ学課ヲ修メシムルハ出来得、万カラサルニ付、先ツ普通学ヲ修ムル方適当ト被存。⁷

つまり、浙江省派遣の留学生は専門の學術を学ぶために日本に派遣されたが、速水事務代理の立場からは、彼らの学力がまだ十分ではなく、まず、中等学校程度の教育内容に該当する「普通学」を修める必要がある、という判断があった。

そこで、速水は、「小官愚考ニハ、右留学生ヲシテ、政府直轄ノ高等ナル学校ニ入学セシメンニハ、夫々試験ノ順序モアリ、且留学生ノ為メ、特別ノ教授法ヲ設ケントスルモ、手続上六ヶ敷カル可シ。若シ私立学校ナレハ、其間ニ変化融通ノ道アレバ差当リ、確實ナル私〔立〕学校ニ入学セシムル方捷徑ナルヘリ存候」⁸、というように、中国人留学生をまずは留学生のための予備教育を実施する私立学校に入学させるべきだという提案したのである。

このような事情もあり、1898 年 7 月上旬、高楠順次郎は日本外務省の委託を受け、日華学堂を設立し、浙江省派遣の留学生の予備教育を行い始めた⁹。同年 9 月、蚕糸を学ぶために留学にやってきた汪有齡はまず日華学堂に転入し、勉強しながら蚕業の勉強をあきらめ、文系の研究を目指すことで進路を変更している¹⁰。10 月、私費留学生の呉振麟が日華学堂に入学したが、最初この 2 人はともに浙江留学生として同じ学級に編入され

⁶ 1897 年 8 月頃、浙江巡撫廖寿豊が杭州で求是中西書院を設立し、これは浙江省での学堂設立の嚆矢である。清・陳瑤修、清・王荃纂、屈映光統修、陸懋勳統纂、齊耀珊重修、吳慶坻重纂、民国『杭州府志』（1922 年）卷 17 学校四（『中国地方志集成・浙江府県志輯』1、上海書店出版社、1993 年、464 頁）。

⁷ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623200（第 40 画像）、「浙江省ヨリ文武留学生并ニ遊歴官派遣ノ件」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部（外務省外交史料館）。

⁸ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623200（第 40 画像）、「浙江省ヨリ文武留学生并ニ遊歴官派遣ノ件」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部（外務省外交史料館）。

⁹ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623200（第 83 画像）、「南洋公学留学生就学概況報告」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部（外務省外交史料館）。

¹⁰ 「汪有齡 十九」上海図書館編『汪康年師友書札』第 1 冊、上海古籍出版社、1986 年、1089 頁。

た。当時、日華学堂堂監を務めた宝閣善教は彼らとともに記念写真をおさめている（図 1-1）。

図 1-1 1898 年の日華学堂の中国人留学生



出典：中島重義編『宝閣先生追悼号』中央商業学校、1940 年、巻頭。

注：後列の真ん中に立つ人が日華学堂堂監の宝閣善教である。

翌年、南洋公学¹¹と北洋大学堂¹²からの留学生在が相次いで派遣され、日華学堂に入って予備教育を受けることとなった。

そして、1898 年から 1903 年頃に日華学堂が完全に廃校するまで、日華学堂は合計 26 名の中国人留学生を受け入れている。**表 1-2** はこれらの留学生の情報をまとめたものである。

¹¹ 1896 年 12 月、光緒帝の承認を得て、大理寺正卿盛宣懷は上海に南洋公学を設立し、自ら公学の初任督辦に就任している。現在の上海交通大学と西安交通大学の前身。「上海南洋公学」朱有瓚主編『中国近代学制史料』第 1 輯下冊、華東師範大学出版社、1986 年、508-548 頁。

¹² 1895 年 10 月、光緒帝の承認を得て、天津海関道盛宣懷は天津に北洋大学堂（その前身が天津中西学堂）を設立した。これは、中国の初めての近代的な大学として創立された学堂である。1912 年、校名を北洋大学校に改名し、さらに翌年国立北洋大学に変更していた。現在の天津大学の前身。「天津中西学堂」前掲朱有瓚主編『中国近代学制史料』第 1 輯下冊、490-508 頁。

表 1-2 日華学堂に在籍した中国人留学生

NO. (注 1)	派遣/ 費用	姓 名	字	出身	学 歴 (注 2)
1	浙江巡撫 / 浙江官費	陸世芬	仲芳	浙江 仁和	浙江求是書院→日華学堂 (1898. 7—1899. 9) →第一高等学校 (1899. 9—1900) →東京高等商業学校 (1900—1903)
2		錢承誌	念慈	浙江 仁和	浙江求是書院→日華学堂 (1898. 7—1899. 9) →第一高等学校 (1899. 9—1901) →東京帝国大学法科選科政治学科 (1901— 1903)
3		陳 楓	楽書	浙江 義烏	浙江求是書院→日華学堂 (1898. 7—1899. 9) →第一高等学校 (1899. 9—1902) →東京帝国大学工科選科造兵学科 (1902— 1906)
4		何燭時	燮侯	浙江 諸暨	浙江求是書院→日華学堂 (1898. 7—1899. 9) →第一高等学校 (1899. 9—1902) →東京帝国大学工科採鉱冶金科 (1903— 1906. 7)
5		汪有齡	子健	浙江 杭県	杭州蚕学館→山本憲私塾 (1897) →競進社蚕業講習所 (1898) →日華学堂 (1898. 9—1899. 9) →第一高等学校 (1899. 9—10) →1899. 10、病氣のため退学帰国
6	浙江巡撫 /私費	呉振麟	止欺	浙江 嘉興	上海育才書塾→日華学堂 (1898. 10—1899. 9) →第一高等学校 (1899. 9—1901) →東京帝国大学法科選科政治学科 (1901— 1903)
7	南洋大臣 / 南洋官費	章宗祥	仲和	浙江 烏程	南洋公学→日華学堂 (1899. 1—9) →第一高等学校 (1899— 1901) →東京帝国大学法科選科政治学科 (1901—1903)
8		富士英	意城	浙江 海塩	蘇州中西学堂 (1895—1897) →南洋公学→日華学堂 (1899. 1—9) →東京専門学校 (1899—1902) →早稲田大学政 治科 (1902—1906)
9		雷 奮	繼興	江蘇 華亭	南洋公学→日華学堂 (1899. 1—9) →東京専門学校 (1899. 9— 1900)
10		胡昶泰	伯平	江蘇 太倉	南洋公学→日華学堂 (1899. 1—9) →第一高等学校 (1899— 1900) →1900 年 12 月、アメリカ留学 (注 4)

第一章 中国人留学生の予備教育と彼らの交友関係——日華学堂を中心に

11		楊蔭杭	補塘	江蘇 無錫	南洋公学→日華学堂（1899.1—9）→東京専門学校（1899.9—1900）→早稲田大学法律科（1906頃—1907）
12		楊廷棟	翼之	江蘇 呉県	南洋公学→日華学堂（1899.1—9）→東京専門学校（1899.9—1900）
13	私費	陳玉堂	不明	広東 饒平	日華学堂（1899.2—1899.9）→大成学館（1899.9—?）
14		黎 科	沢舒	広東 香山	北洋頭等学堂→日華学堂（1899.3—9）→東京帝国大学工科選科土木工学科（1899.9—1900.8）
15		張煜全	昶雲	広東 南海	福州英華書院/香港皇仁書院→北洋頭等学堂→日華学堂（1899.3—9）→東京帝国大学法科選科政治学科（1899.9—1900）→1901年、官費でアメリカ留学、カリフォルニア大学校（1901—1903）→イエール大学（1903—1904）
16		王建祖	長信	広東 番禺	香港皇仁書院→北洋頭等学堂→日華学堂（1899.3—9）→東京専門学校（1899.9—1900.3）→1902年、私費でアメリカ留学、カリフォルニア大学校（1902—1905）
17	北洋大臣 / 北洋官費	張 奎	星五	江蘇 上海	北洋二等学堂→日華学堂（1899.3—9）→東京帝国大学工科選科応用化学科（1899—1902）
18		金邦平	伯平	安徽 黟県	北洋二等学堂→日華学堂（1899.3—9）→東京帝国大学農科大学（1899.9—1900.6）→東京専門学校（1900.9—1902）→早稲田大学政治科（1902—1905）
19		周祖培	仲蔭	江蘇 蘇州	北洋二等学堂→日華学堂（1899.3—9）→東京専門学校（1899.9—1900）
20		安慶瀾	不明	直隸 天津	北洋水師学堂→日華学堂（1899.3—9）→東京帝国大学工科選科造兵学科（1899—1900）
21		高淑琦	毅韓	浙江 錢塘	北洋水師学堂→日華学堂（1899.3—9）→東京帝国大学工科選科土木工学科（1899—1902）
22		蔡成煜	蔚文	直隸 天津	北洋水師学堂→日華学堂（1899.3—9）→東京帝国大学工科選科応用化学科（1899—1900）
23		鄭葆丞	幼周	福建 閩県	北洋水師学堂→日華学堂（1899.3—9）→東京帝国大学工科選科土木工学科（1899—1900）

24		沈 琨	朗斎	直隸 静海	北洋水師学堂→日華学堂（1899.3—9）→東京帝国大学工科選 科機械工学科（1899—1902）
25		張瑛緒	執中	直隸 天津	北洋水師学堂→日華学堂（1899.3—9）→東京帝国大学工科選 科機械工学科（1899—1902）
26	私費	鄭康耆	不明	広東 香山	1899年3月、鄭は入学届を出し、4月2日入堂したが、5月27 日、鄭父より帰国を強いられ、7月、帰国とともに退学。

出典：外務省記録、日華学堂の学堂日誌に基づいて、『日華学堂章程要覽』、北京清華学校編『遊美同学録』（北京清華学校、1917年）、朱有瓚主編『中国近代学制史料』（第1輯下冊、華東師範大学出版社、1986年）、上海図書館編『汪康年師友書札』（上海古籍出版社、1986年）、黄振威『番書与黄龍——香港皇仁書院華人精英与近代中国』（香港中華書局、2019年）などを参照して作成。

注1：名簿の順序は日華学堂の入学順による。

注2：（）内は在籍時期、？は日付不明を指す。

注3：学堂日誌によれば、1899年5月21日、広東出身の梁炳光、譚錫鑰は来堂し、入学する予定だったが、6月3日、ある理由で入学を諦めた。

注4：胡昶泰は南洋公学総辦何嗣愷の女婿であり、1900年12月、日本留学からアメリカ留学に変え、1901年1月に、アメリカについてまもなくボモナ・カレッジに入学し、卒業できず、一年後帰国した。郭晶萍・徐珊珊『美国海關檔案与清末南洋公学留美生史実』『歴史檔案』2020年第1期。

表 1-2 が示すように、日華学堂の留学生はその入堂時期によって、それぞれ異なるクラスに編入されたが、それはおおよそ三つの学級に分けられる。すなわち、

- ① 1898年7月入学、浙江求是書院の学級（6名）：錢承詒、陸世芬、陳槐、何燭時、汪有齡と呉振麟がこの学級に編入（以下、浙江班と略称）。
- ② 1899年1月末入学、南洋公学の学級（6名）：章宗祥、富士英、雷奮、胡昶泰、楊蔭杭、楊廷棟（以下、南洋班と略称）。
- ③ 1899年3月末入学、北洋大学堂と北洋水師学堂の学級（12名）：黎科、張煜全、王建祖、張奎、金邦平、周祖培、安慶瀾、高淑琦、蔡成煜、鄭葆丞、沈琨、張瑛緒（以下、北洋班と略称）。

浙江班、南洋班、北洋班の学生たちはどのような教育を受けていたのか、その教育の実態について考察する必要がある。

二、日華学堂の予備教育

日華学堂の予備教育は主に普通学と日本語・英語の言語教育の部門により構成された。その具体的なカリキュラムについて、『日華学堂章程要覧』の「第二章 学科課程」の箇所では、以下のように記されている。

第二章 学科課程

第一条 本学堂所定学科分爲二科，一曰正科，一曰另科。正科分爲普通予備科及高等予備科，另科分爲予備撰科及日語專修科。

第二条 普通予備正科，肄業年限定爲二年。授以日語、英語、或德語、歴史、輿地、算学、格致、化学、博物等一切普通学大旨，以備進各高等学校及専門諸学校。

第三条 高等予備正科，肄業年限約爲一年。授以法学、文学、工学、理学、農学各専門学予備功課，爲進帝国大学各科之地歩。

第四条 予備撰科，爲頗普通学之学生從速造就進帝国大学及各種高等専門学校之地歩者設，該学生須在正科功課之内，拏定数科，学習肄業，無有年限，約以二年爲期。

第五条 日語專修科，專爲学生願速通日語者設，專教日語，肄業年限約爲一年。

第六条 本学堂所定学科課程，開列於下。惟願学予備撰科者，必須拏定正科之内三分二以上功課学習。¹³

〔第二章 学科課程。第一条 本学堂が定めた学科は、二科目があり、一つは正科、もう一つは另科〔別科〕。正科は普通予備科と高等予備科、另科は予備撰科と日本語專修科である。第二条 普通予備正科は、その修業年限が二年に定められ、日本語、英語またはドイツ語、歴史、輿地、算学、格致、化学、博物等の一切の普通学の大旨を授け、各高等学校や専門学校の進学に備えるためである。第三条 高等予備正科は、その修業年限が約一年であり、法学、文学、工学、理学、農学、各専門学の予備科目を授け、帝国大学に進学できるように備える。第四条 予備撰科は、普通学を精通する学生が早めに帝国大学、及び各高等・専門学校に進学するために設ける。これら

¹³ 『日華学堂章程要覧』于宝軒編纂『皇朝蓄艾文編』卷16 学校、上海官書局、1902年、16丁裏-20丁表。また樊殿武・柴田幹夫編著前掲書（379-392頁）は、『要覧』の中国語原文を繁体字のままに刊行したので参照されたい。

の学生は正科の科目内に数科目を選択して学ぶべきであり、修業年限がないが、約二年に定められている。第五条 日本語専修科は、もっぱら学生が日本語を早めに上達できるように設ける。日本語の授業だけであり、修業年限が約一年である。第六条 本学堂が定めた学科課程は以下のように書き並べる。ただし、予備選科に入りたい学生は、正科の科目内に三分の二以上の科目を修業しなければならない。]

このカリキュラムは1899年6月前後にできたものだが、その条文から見れば、日華学堂は普通予備科、高等予備科、予備選科、日本語専修科という四つの学科を設けており、一見すれば詳細なカリキュラムが設置されているように見えるが、実際には、一度も計画通りに実行されなかったことから、言い換えれば、これらの学科は、中国人留学生を募集するために作られた表の宣伝用に過ぎないのではないか、という批判もあったようである¹⁴。

それでは、日華学堂は、実際にはどのような科目を設置していたのか。

1899年2月と3月、高楠順次郎は前後2回にわたり中国人留学生の教育に関する報告書を日本外務省に進呈した。その中には、添付書類として「日華学堂現行授業課程表」（図1-2）と「日華学堂教師姓名及手当」というものが付されている。

¹⁴ 王鼎・郭夢堯『日華学堂章程要覽』解説 樂殿武・柴田幹夫編著前掲書、379-382頁。実は、日華学堂のカリキュラムは何度も改訂されたことがある。後述のように、1899年2月、高楠順次郎が日本外務省に提出した報告書によれば、その時の学科設置は第一年級（前期、後期）、第二年級（前期、後期）、法科第三年級（前期、後期）、工科第三年級（前期、後期）からなる。1ヶ月後、高楠は「南洋公学留學生就学概況報告」に修訂後の学科課程を出し、その学科が普通科第一年級（前期、後期）、普通科第二年級（前期、後期）、法科予備専修科、文科予備専修科、理工科予備専修科、医科予備専修科のように修正を加え、文科と医科を増加した。

図 1-2 日華学堂現行授業課程表

出典：JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081623200 (第 65 画像)、「日華学堂現行授業課程表」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部(B-3-10-5-3_2)(外務省外交史料館)。

表 1-3 は「日華学堂教師姓名及手当」によって作成したものである。

表 1-3 日華学堂教師の担当科目

担当科目	教師姓名	学歴/履歴	授業時間/ 週	手当
物理、化学、会話、読	梅原融	慶應義塾文科卒業/本願寺文学寮教授	15 時間	20 圓
日本文法、読書、作文	海野詮教	〔東京〕専門学校卒業	12 時間	12 圓
歴史、英語	林田源太郎	〔東京〕専門学校卒業	6 時間	7 圓
植物、算術、幾何学	吉川寿太郎	〔東京帝国大学〕医科大学第三年生	6 時間	8 圓
地理	櫻井義肇	〔西本願寺普通教校卒業〕/元京都文学寮教師	3 時間	5 圓
会語、読法	酒匂祐三		3 時間	7 圓
英文法	宝閣善教	〔東京帝国大学〕文科大学第三年生	3 時間	15 圓(堂監 給料共)

会 話 実 習（臨時手 伝）、物理	麻田駒之助	元彦根中学教師	6 時間	6 回
英文	高楠順次郎	〔西本願寺普通教校、オックスフォード 大学卒業/東京帝国大学文科大学講師〕	3 時間	

出典：JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081623200 (第 66 画像)、「日華学堂教師姓名及手当」、在本邦清国留
学生関係雑纂/陸海軍外之部(B-3-10-5-3_2) (外務省外交史料館)。□ 内の内容は筆者が補足したもの。

以上の資料と日華学堂の学堂日誌を参照しながら、日華学堂の普通学と言語教育の実態について見ていきたい。

1、普通学

まず、日華学堂の普通学の教育の内容について見ておこう。

普通学という科目はいつ頃から浙江班のカリキュラムとして加えられたのだろうか。
『日華学堂日誌第一冊』の記述によると、その科目の変化を以下のようにまとめられて
いる。

1898 年 8 月 3 日、本日より地誌課を開始し、櫻井義肇氏其教授を務めらる。

10 月 3 日、梅原・櫻井と共に物理・数学の教科書撰定の為め、上野図書館に趣く。

10 月 4 日、此日、物理学教科書を購求す。

10 月 5 日、此日、算術教科書を購求す。

12 月 6 日、本日より万国史の授業を開始す。

1899 年 1 月 18 日、海野・林田の両君来堂、来週より教授の分担を依頼す。

1 月 22 日、吉川君来訪、氏に授業の分担を依託す。此日、学科を改正し、新旧両級の
の時間表を示す。¹⁵

つまり、1898 年 8 月から、日華学堂は地理、物理、数学、万国史などの授業を導入し
たことがわかるが、資料不足のため、各授業の割当時間や教科書の詳細などについては、
まだ多くの不明点が残っている。

¹⁵ 『日華学堂日誌第一冊』、1898 年 8 月—1899 年 1 月。

そして、翌年の 1899 年 1 月末には、南洋公学学生が日華学堂に入学したことに伴い、新しいカリキュラムが編成された。表 1-4 は「日華学堂現行授業課程表」に依拠し、その中で普通学の科目を抽出して作成したものである。

表 1-4 日華学堂現行普通学授業の時間割表

甲級授業時間表（浙江班）						
	8—9 時	9—10 時	10—11 時	11—12 時	13—14 時	14—15 時
月曜			世界史/林田	地理学/櫻井		
火曜	物理学/梅原				植物学/吉川	算数学/吉川
水曜			世界史/林田	地理学/櫻井		
木曜	物理学/梅原				植物学/吉川	幾何/吉川
金曜			世界史/林田	地理学/櫻井	算数学/吉川	
土曜				幾何/吉川		
一週計	梅原担当：物理学 2 時間 林田担当：世界史 3 時間 櫻井担当：地理学 3 時間 吉川担当：植物学、幾何、算数学、各 2 時間					

出典：JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081623200（第 61-66 画像）、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部(B-3-10-5-3_2)(外務省外交史料館)。

注：担当教師の全名は梅原融、林田源太郎、櫻井義肇、吉川寿太郎。

表 1-4 が示すように、浙江班の授業科目と時間数は、物理学 2 時間、世界史 3 時間、地理学 3 時間、植物学 2 時間、幾何 2 時間、算数学 2 時間であったから、一週間の合計は 14 時間になる。日華学堂の普通学の科目の数と時間は、同時代のその他の予備学校の内容に比べて充実したものであっただろうか。その教育の内容を同時期の成城学校の授業科目と時間（図 1-3）を比較してみれば、

図 1-3 成城学校の清国学生一年半教育学科配当授業回数表

出典：JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B12081617100（第112画像）、「清国学生一年半教育学科配当授業回数表」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸軍学生之部 第一巻（B-3-10-5-3_1_001）（外務省外交史料館）。

成城学校の授業科目は日本語、日本文、地理及地文、歴史、美術、幾何初步、幾何、代数、平面三角法、博物初步及生理衛生、化学、物理、図画、体操などにより構成され、日本語、日本文（言語科目）と体操（軍事科目）を除けば、科目の数が11科目に及んでいることがわかる¹⁶。もちろん、この事実のみを単純に比較することはできないが、日華学堂の授業科目と時間数は、成城学校に比べ少ないことは間違いない。

それでは、浙江班の学習状況はどうであろうか。1899年4月5日、『国土』第7号に掲載された「日華学堂在学の清国学生」という記事において、以下のような評価がなされている。

同学堂〔日華学堂〕の学課は、日本語英語数学を主とし、其他地理歴史博物物理化学等も之を受け居るが、上級の者は既に英語はフランクリン自叙伝、スウキンソン万国

¹⁶ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B12081617100（第113画像）、「清国学生教授学科科目程度表」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸軍学生之部 第一巻（B-3-10-5-3_1_001）（外務省外交史料館）。また、授業内容と留学生の成績について、中村義「成城学校と中国人留学生」（辛亥革命研究会『中国近現代史論集』汲古書院、1985年）に詳しく論じられたので参照されたい。

史等を講習するに及び、算術は卒業して、目下幾何代数を修め、後者の教科書としてスミス小代数書を使用しつつありと云う。¹⁷

なお、1898 年 10 月 30 日、浙江班の学生は学期末試験を受けたが、その成績が外務省記録に現存している。表 1-5 は浙江班の成績をまとめたものである。

表 1-5 浙江班の学生の第一学期試験の成績表

	数学	物理	歴史	地理	読本	会話	作文	合計	平均	席次
陸世芬	75.5	79	70	78.5	80	72	79.5	534.5	76	4
陳槐	81	88	92	87.5	84	87.5	79	609	87	1
錢承誌	80	85	100	79.5	79	91.5	80	595	85	3
何燭時	86	80	90	80	85	94.5	85.5	601	86	2
汪有齡	70.5	70	80	69	76.5	79.5	76	521.5	74.5	5
呉振麟	10 月 30 日後入学、成績未詳。									

出典：JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623200（第 61 画像）、「第一学期試験の成績表」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部（外務省外交史料館）。注：□は筆者により、この科目の最高得点を指す。

表 1-5 が示すように、陳槐、錢承誌、何燭時の 3 名の間に成績の大きな差は出ないが、陸世芬と汪有齡の成績は他の 3 名に比べ立ち後れた様子が見える。

興味深いことに、彼らの成績から、各自の将来の進学とのつながりを伺うことができる。たとえば、1 位と 2 位の優秀な成績を収めた陳槐と何燭時は数学・物理において優れた成績をおさめ、ともに第一高等学校を経て東京帝国大学の工科大学に進学し、それぞれ選科造兵学科と採鉱冶金科を専攻しながら¹⁸、後に多くの理工系の中学校教科書を翻訳した¹⁹。

以上、日華学堂の普通学教育の状況を考察したが、学堂日誌の記載によれば、三つの学級の中、浙江班だけが普通学の教育を受けていた、と推定される。これについては、

¹⁷ 「日華学堂在学の清国学生」『国土』第 7 号、1899 年 4 月 5 日、53-54 頁。

¹⁸ そのうち何燭時は選科生ではなく、東京帝国大学における最初の本科卒業生として高く評価されている。「帝国大学を卒業したる清人何燭時氏」『東京朝日新聞』1906 年 7 月 13 日。

¹⁹ たとえば、陳槐は『物理学』、『物理易解』、『中等算術教科書』、『中学物理教科書』など、何燭時は『中学生理教科書』、『中等最新化学教科書』などの教科書を翻訳した。詳しくは本論文の第三章第四節「教科書訳輯社とその教科書出版」を参照。

南洋班と北洋班の学生は留学前に、すでに普通学教育を受けていたことで²⁰、日華学堂で再び普通学を学ぶことよりも、早めに高等の学校に進学し、専門の知識を学んだほうが良いという考えが強かったためであると言えよう。実際には、北洋班の学生は 1899 年 4 月に高楠順次郎を経由し、東京帝国大学において専門科目の聴講を希望することを外務省政務局長内田康哉に求めている²¹。

2、言語教育

普通学の教育と異なり、日華学堂の言語教育は浙江班、南洋班、北洋班の三学級において共通して実施されたことで、関連する資料も多く残されている。その言語教育は日本語と英語により構成され、学生の学習歴とレベルに基づいて時間割も随時調整されている。

表 1-6 は「日華学堂現行授業課程表」に基づいて、日本語と英語科目の時間割当の配分をまとめたものである

表 1-6 日華学堂現行言語授業の時間割表

甲級授業時間表（浙江班）						
	8—9 時	9—10 時	10—11 時	11—12 時	13—14 時	14—15 時
月曜	英文法/宝閣	和文法/海野			英語/高楠	
火曜		和文法/海野	英読本/林田			
水曜	英文法/宝閣	和文法/海野			英語/高楠	
木曜		和読本/海野	英読本/林田			
金曜	英文法/宝閣	和文法/海野				英語/高楠
土曜		和読本/海野				
一週計	宝閣担当：英文法 3 時間 海野担当：和文法、和読本 6 時間 林田担当：英読本 2 時間 高楠担当：英語 3 時間					
乙級授業時間表（南洋班）						

²⁰ 南洋公学と北洋大学堂のカリキュラムについて、楊柳「南洋公学の日本留学生派遣」、樂殿武「北洋大学堂と北洋水師学堂から派遣された最初の留学生」、樂殿武・柴田幹夫編著前掲書、45-91 頁。

²¹ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623200（第 96 画像）、日華学堂より外務省政務局長内田康哉あて、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部（外務省外交史料館）。

月曜	邦文読本/海野	語学/酒匂	会話/梅原	会話/梅原		
火曜	邦文読本/海野	会話/梅原	会話/梅原		会話実習/麻田	
水曜	邦文読本/海野	語学/酒匂	会話/梅原	会話/梅原		
木曜	邦文読本/海野	会話/梅原	会話/梅原		会話実習/麻田	
金曜	邦文読本/海野	語学/酒匂	会話/梅原	会話/梅原		
土曜	邦文読本/海野	会話/梅原	会話/梅原		会話実習/麻田	
一週計	海野担当：邦文読本 6 時間 酒匂担当：語学 3 時間 梅原担当：会話 12 時間 麻田担当：会話実習 3 時間					

出典： JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081623200 (第 61-66 画像)、「日華学堂現行授業課程表」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部(B-3-10-5-3_2)(外務省外交史料館)。

注：担当教師の全名は宝閑善教、梅原融、海野詮教、林田源太郎、高楠順次郎、酒匂祐三、麻田駒之助。

表 1-6 から以下の点が指摘できる。

1899 年 2 月、浙江班の学生は日本語教育のほかに普通学の科目が加えられ、言語教育の授業時間が少なくなり、一週間あたりの時間は、日本語が 6 時間、英語が 8 時間配分されることとなった。一方、入堂したばかりの南洋班は、日本語の授業しか行われておらず、週 24 時間にのぼり、1 ヶ月後には、授業内容は読書 6 時間、語法 3 時間、会話 12 時間、会話演習 6 時間となり、前回の報告より 3 時間増えた、合計 27 時間に達している²²。

北洋班の場合には、「〔酒匂教師が〕直ニ新入生十三名ニ對シ、五十音、羅馬字ニテ音ヲツケシ扣ヲ生徒ニ渡シ教授ス」²³と記されていることから、南洋班と同様に、日本語による教授が施されたことが確認できる。

この日本語授業の実態については、章宗祥は次のように述べている。

日華教日語，用英日課本，初上課時，教習之日語講釈，不能明其意，則比視英文。

毎週復習，教習誦英語一句，余等以日語答之。²⁴

²² JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081623200 (第 85 画像)、「現修学科目課表」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部(B-3-10-5-3_2)(外務省外交史料館)。

²³ 『明治三十一年一月改 学堂日記』、1899 年 4 月 3 日。

²⁴ 章宗祥「任闕斎主人自述」中国人民政治協商會議全國委員會文史資料委員會編『文史資料存稿選編・教育』中国文史出版社、2002 年、927 頁。

〔日華学堂の日本語授業は、英日課本〔英語から日本語を学ぶ教科書〕が用いられた。最初、授業は教師の日本語での説明では意味がよくわからないため、英語と比較していった。復習の時には、教師が英語で文章を暗唱し、私たちは日本語で答えるというやり方でした。〕

南洋と北洋から派遣された留学生たちに対して、「皆本国にて英語を専修し、又日本語も日常の談話位は通曉する者多ければ、教授の際には日英両語を併用する由」²⁵と書かれるように、彼らがほとんど英語の基礎を持っていたことから²⁶、英日対照で日本語を教授することは当時として最善の選択肢であったと言える。

ここで注目したいのは、彼らが使用したとされる日本語の教科書である。果たして、中国人留学生は具体的にどのような教科書を使い日本語を学んでいたのだろうか。日華学堂の教師は、よく岡崎屋書店と丸善書店に教材を注文していることは確認できるが、残念ながら具体的な書名を挙げておらず、ただ「英日課本」と判然としない記述しか残っていない。

そこで、ここでは成城学校の教科書を参考に分析を進める。成城学校の日本語学習の教科書としては、「尋常小学読本、高等小学読本、西武雄『ガーフィールド傳』、山本勝助編『修身要訓』、塩井正男『中学日本文典』」などが使用されていた²⁷。

1900年8月、唐宝鏐と戢翼翬は中国人向けの日本語学習書『東語正規』（図1-4）を作成しており、それ以前には、中国人留学生向けの日本語教材は存在しなかった²⁸。このことから、日華学堂は日本人学生向けの国語教科書を使用していた、と推定される。

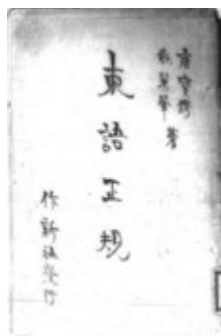
²⁵ 「日華学堂在学の清国学生」『国土』第7号、1899年4月5日、54頁。

²⁶ そのうち、張煜全と王建祖のように、北洋大学堂に入学する前に、すでに英語の学習歴を持っている学生も少なくない。黄振威『番書与黄龍——香港皇仁書院華人精英与近代中国』香港中華書局、2019年、77、143頁。

²⁷ 李慶国「吳禄貞と日本（1）——吳禄貞に関する伝記史料をめぐって」『追手門学院大学国際教養学部紀要』第10巻、2017年1月、30頁。

²⁸ 1900年、『東語正規』が販売されるものの、当時の日本人教習はこの日本語学習書をあまり利用していないようである。この時期、蘇州の包天笑らは日本人に従って日本語を勉強したが、依然として日本初等小学校の教材が使われていた。包天笑『艸影樓回憶錄』香港大華出版社、1971年、158頁。

図 1-4 『東語正規』の表紙



出典：唐宝铸・戡翼翬著『東語正規』作新社、1906年1月第10版（初版1900年8月）、東京都立中央図書館実藤文庫所蔵。

教師や堂監は、堂生の日本語を向上させるため、授業以外でも常に中国人留学生と会話することで、日本語能力の向上に努めていた。たとえば、舎監の田代直樹は、「[1899年4月1日] 舎生ト同食卓ニ就キ、食物ノ精粗ヲ監督スルノ傍ラ、成ルベク彼等ヲシテ日本語ニ熟セシムルノ方針ヲ採ル」²⁹という記録を残している。

このような日本語教育のおかげで、中国人留学生はどの程度、その語学能力を向上させることができたのであろうか。この点を、1899年8月4日、光緒皇帝の万寿節を祝うために、日華学堂の教師と学生が避暑地の楓川楼で開催した祝宴を事例に考える。

当日の宴会の様子について、日華学堂の学堂日記のほかにも『時事新報』にも記事が掲載されており、「始ニ錢承鋌ノ日本語紹介ニ依リ、章宗祥演壇ニ進ミ、支那語ヲ以テ萬寿節ヲ祝スル草稿演説ヲナシ、次ニ汪有齡出デ、明晰ナル日本語ノ演説ヲナシ」³⁰とあり、錢承鋌と汪有齡の二人が日本語で発言し、とりわけ汪の日本語については「明晰」、「流暢」と称賛されている。しかし、これについて、章宗祥は以下のように回想している。

²⁹ 『明治三十一年一月改 学堂日記』、1899年4月1日。

³⁰ 『明治三十一年一月改 学堂日記』、1899年8月4日。また、1899年8月10日の『時事新報』では、祝宴に関する記事も確認され、「留学生汪有齡は流暢なる日本語を以て世界の事情に照らし、清国根本的改革の止むべからざる所以を述べて、此改革の原動力たる清国今上帝の万歳を祝する旨を演説し」と記される。

先期予備選説、由日語教習將原稿修正、子健日語稍優、公舉其持稿宣誦。及開宴、子健起立、沿々照原稿背誦、無一字錯誤、竟為極自然之演説。客大驚許、以為子健必留東甚久、故語學純熟如此、不知其臨時暗記也。³¹

〔皆は演説の原稿を準備し、学堂の教師が修正してくれたもので、子健〔汪有齡〕の日本語がやや優れていたの、彼を推挙して原稿を読み上げることに決めた。宴席の途中、子健が立ち上がり沿々と原稿をそのまま暗唱し、一字も間違いなく、ごく自然な演説になった。来客は大いに驚き、子健が日本に長く留学しているから、日本語が上手であると思ったが、実は、彼が日本語を臨時で暗記したことを知らなかったのである。〕

このように章宗祥の回想によれば、「明晰」で、「流暢」だ、と称賛された汪有齡の日本語演説は、事前に暗記したものであった。

中国人留学生たちの日本語運用の能力については以下のような事例もある。1899年11月11日付の学堂日誌には、

此日、胡生来談。再ヒ学堂ニ復帰シテ、日本語ヲ専修シタキ旨願出ツ。盖シ高等学校ノ授業困難ニシテ邦語ニ通セサレバ、殆ト其数ナキヲ以テナリ。³²

とあり、高等学校に聴講生として入学した胡昶泰は、日本語能力が十分ではないので、日華学堂に戻りたい、という願書を出した³³。ほぼ同時に、第一高等学校に入った章宗祥も「この時、日本語がまだ上達しておらず、講堂で受講しても、即時に理解できない」³⁴とあるように、日本語に苦心していた様子が窺える。

このような状況下で、本来であれば日本語ができない中国の知識人向けに出版された梁啓超の『和文漢読法』は、思いがけず中国人留学生の日本語学習の需要とも一致しており、「日本語を勉強するにあたり、速成を求めて文法をあまり気にしなかった」³⁵当時の留学生にとって、大いに役に立った。

³¹ 章宗祥「任闕齋主人自述」前掲『文史資料存稿選編・教育』、928頁。

³² 『明治三十一年一月改 学堂日記』、1899年11月11日。

³³ 胡昶泰の帰堂は実際に内情があると思われるが、口実としても日本語の問題で帰堂が認められるという事実は学生の中で、ある程度の共通性があると推測される。

³⁴ 章宗祥「任闕齋主人自述」前掲『文史資料存稿選編・教育』、927頁。（是時日語程度未到、在講堂聴講、不能即時明瞭。）

³⁵ 章宗祥「任闕齋主人自述」前掲『文史資料存稿選編・教育』、925頁。（因是学日文、但求速解、于文法不甚注意。）

一方、日華学堂に在籍していた中国人留学生は英語による交流には長けていた、という記録がある。学堂日誌の1899年4月23日条には、「法科大学生菊池恵次郎ナル者陳玉堂へ面会ニ来り、他生ト英語ニテ談話ス」とあり、同年8月7日付の条には、「楓川楼ニ止宿セル高等商業学校外国語学部生某来り、生徒ト英語ニテ談話ス」とある。

とりわけ北洋班の学生は高い英語の運用能力を身に付けていたようである。『行雲録』の1899年3月31日条によれば、宝閣は、

高楠兄と共に、各所定の部屋に導き。少休の後、我室に一同を集めて、其目的、希望を述へしむ。彼等巧に英語を以て応答し、毫も遺憾なし。³⁶

と記しており、彼らの英語能力を高く評価している。南洋班と北洋班の学生の英語運用の能力の高さは新聞などにも記載されており、多くの人が知るところであった。

『時事新報』の1899年8月6日付の「清国留学生の現在及将来」という記事には、

成城学校に在る五十名の学生は、〔中略〕殊に獨逸語を自由に話し得るもの一兩名、其他も多くは英語を解し、便利少なからず。〔中略〕日華学堂に在る三十名の留学生は、〔中略〕先來の學生は既に日本語をも十分に話し、読書作文其他普通学科の大略を習得せるもの六名は正則に大学に進む希望にて、本年九月より第一高等学校に入り、法科工科を修むる志望にて、他の上海南洋公学、天津頭等学堂派遣の内、五六名は早稲田専門学校に入学せしむる由にて、其内には予備学科十分に於て英語の素養又深く対訳に自由なるものありと云ふ。〔中略〕高等師範学校内の留学生は元八名なりしが、〔中略〕日本語の習修には最熟し、其内一人は過般同国公使館の通訳書記に採用せられ、其他は尚ほ同校に在りて勉学せり。³⁷

とあり、日本語が上達しているのは、嘉納塾と日華学堂浙江班の学生であるが、成城学校と日華学堂南洋班、北洋班の学生は日本語よりも英語が得意であったことがわかる。彼らの日本語はやはり、日本での生活が長くなり、または正式に学校に進学してから、少しずつ上達したものと思われる。

³⁶ 宝閣善教『行雲録』未公刊、1899年3月31日。『行雲録』と『燈焰録』は宝閣善教の日記であり、これについて、柴田幹夫「序章」樂殿武・柴田幹夫編著前掲書、15-17頁を参照。

³⁷ 「清国留学生の現在及将来」『時事新報』1899年8月6日。傍点が筆者による。

このように日本語の運用能力に若干の問題はあったものの、新しい知識と理論を中国国内に紹介することを切実に望んでいた中国人留学生たちは、訳書活動に従事するようになる（後述の第三章を参照）。

第二節 留学生の交友関係

1902 年初、清国留学生会館が正式に成立するに伴い、中国人留学生は次第に神田神保町の界限に集まり、神保町周辺が中国人留学生活動の中心地として発展していった。こうした変化は、さらに中国人向けに学校（予備学校と官・私立の専門学校、私立大学）、書店、下宿屋、中華料理店などの開設を促した³⁸。

しかし、これは 1902 年頃の話で、清国留学生会館が設立される以前の 1900 年頃までには、神保町のような「中国人留学生が密集して暮らしていた町」と言える場所はまだ出来上がっていなかった。そうすると、東京の各地に分散して生活している留学生たちはどのように交流を維持していたのか、という問題を検討する必要がある。

まず、1900 年頃の各予備学校の校舎変遷を整理しておこう。**表 1-7** は各々中国人留学生の予備学校の位置をまとめたものである。

表 1-7 中国人留学生の予備学校の位置

予備学校	校舎及寄宿舎の位置
嘉納塾/嘉納学校	神田三崎町 1 丁目 2 番地（校舎兼寄宿舎、1896. 6—1899）
日華学堂	本郷駒込西片町 19 番地（校舎兼寄宿舎、1898. 6—1898. 11）→小石川指ヶ谷町 140 番地（校舎兼寄宿舎、1898. 11—1899. 3）→本郷東片町 145 番地（校舎兼寄宿舎、1899. 3—1900 未）
成城学校留学生部	市ヶ谷仲町 60 番（寄宿舎、1898. 6—1899. 1）→牛込区葉王寺前町 33 番（成城学校郊外第一寄宿舎、1899. 1—3）→市ヶ谷河田町陸軍省附属家（寄宿舎、1899. 3—?）
東京高等大同学校	牛込区東五軒町（校舎）、小石川久堅町（寄宿舎）

³⁸ 鳥居高「中国人留学生と神田神保町『中華街』の形成と特徴——明治末期を中心に」高田幸男編著『戦前期アジア留学生と明治大学』東方書店、2019 年。

東京同文書院	牛込山吹町（校舎兼寄宿舎、1899.10—1900.6）→牛込中里町（校舎兼寄宿舎、1900.6—1901.2）→赤坂檜町10番地（校舎兼寄宿舎、1901.3—1902.1）→神田錦町（校舎兼寄宿舎、1902.1—?）
--------	---

出典：外務省記録、日華学堂の学堂日誌、『成城学校八十年』（日産印刷株式会社、1965年）、丁文江・趙豊田編『梁啓超年譜長編』（上海人民出版社、1983年）、『東亜同文会第7回報告』1900年6月10日、『東亜同文会第17回報告』1901年4月1日、『東亜同文会第27回報告』1902年2月1日に基づいて作成。

表 1-7 が示すように、各予備学校の中、嘉納塾だけが移転したことがないが、日華学堂、成城学校、東京同文書院はいずれも2回以上移転している。その理由について、学堂日誌の1899年2月7日条に、「堂生も次第に多数となり、室内狭隘を告るに至れり」³⁹と書かれるように、受け入れ留学生の人数が増加するに伴い、寄宿舎と教室が次第に狭くなったためである、と推測される。

各学校の寄宿舎が1ヶ所ではなく、複数の箇所に分散していたこと、そして、校舎の移転が多かったことから、中国人留学生の往来はそれほど活発ではなかっただろう、ということは容易に推測できる。それだけでなく、各学校の学生管理の規則が厳しかったことを考えると、多人数の中国人留学生が集会を行うことは難しかった。

そうであるにもかかわらず、留学生間の往来は中断することはなかったが、その重要な役割を担ったのは日華学堂の学生たちであった。

表 1-8 は日華学堂の学堂日誌（**図 1-5**）に依拠し、1898年から1900年にかけて、中国人留学生の往来に関する記述をまとめたものである。

図 1-5 日華学堂の学堂日誌の表紙



³⁹ 『明治三十一年一月改 学堂日誌』、1899年2月7日。

第一章 中国人留学生の予備教育と彼らの交友関係——日華学堂を中心に

出典：宝閣善教等『日華学堂日誌第一冊』と『明治三十一年一月改 学堂日誌』。日華学堂の学堂日誌は未公開資料であるが、その原本は今、中国の西安交通大学檔案館に所蔵されている。なお、学堂日誌の翻刻版は樊殿武・柴田幹夫編著前掲書の資料編にも掲載された。

表 1-8 留学生の往来に関する記述

年	月日	主要事項
1898	10. 17	本田氏の監督スル留学生四人〔朱光忠、駁翼翬、唐宝鏐、馮閭樓〕来訪、当堂学生ト会谈ス。
	11. 27	時ニ成城学校幹事田村松之助君、清国留学生二人ト共ニ来訪、又王子養蚕伝習所の下井盛夫君ハ嵇侃生ト共ニ、相次テ来訪、暫時対談シテ去ル。
	12. 4	夜、嵇生〔侃〕来リ一泊ヲ乞フ、之ヲ許ス。
	12. 17	午後、嵇君〔侃〕来訪。
	12. 30	学生一同王子ニ嵇君〔侃〕ヲ訪フ。
	12. 31	此夜、嵇生〔侃〕ニ一泊ヲ許ス。
1899	1. 4	堂生一同成城学校ノ留学〔生〕ヲ訪フ。
	1. 6	在成城学校留学生蕭君〔星垣〕来堂、午餐ヲ会食セシム。
	2. 9	清国公使館ヨリ馮国勳君来訪。本日ハ在京留学生一同ニ午餐ヲ饗スル筈ナレバ、堂生ノ来会ヲ許サレタキ旨ヲ述ヘ、且ツ缶詰數十個ヲ堂生ニ頒与セラレタシトテ持参ス。
	2. 11	此日、嵇生〔侃〕一泊ヲ乞フ、之ヲ許ス。
	3. 12	午後、成城学校ノ留学生来訪。
	4. 2	午前、成城学校清人新入生ヘ面会ニ来ル。
	4. 3	西ガ原養蚕所ノ見習生清人嵇侃来リテ生徒ヲ訪フ。
	4. 15	嵇侃来訪宿泊。
	4. 16	成城学校ノ同学生ヲ訪フ。
	5. 6	横浜大同学校長徐勤及ビ同人ノ朋友ニシテ、同国ノ文官タル鄭藻裳来堂。其同郷人陳玉堂、黎科、王建祖、鄭康耆等ヘ面談ス。
	5. 15	教育時論編輯主任辻武雄氏、葉基楨、葉基勳二人ノ兄弟ヲ伴ヒ来堂。
	5. 16	黎〔科〕、金〔邦平〕、沈〔珉〕、安〔慶瀾〕四生成城校ニ赴ク。
	5. 19	本学堂創立当時ノ舎監中嶋裁之氏清国ヨリ携ヘ来レル張溥〔張維〕ヲ伴ヒ来堂。
	5. 27	成城校清人面会ニ来ル。
	6. 4	青柳某〔篤恒〕、清人張溥〔張維〕ヲ伴ヒ来リ、生徒ニ面談セシム。

	6. 12	十九名ノ生徒腕車ヲ連ネ公使館へ赴キ、端午ノ挨拶ヲナス。
	6. 17	生徒中成城校ニ同国人ヲ訪フモノアリ。
	7. 1	学習院生徒ニシテ張之洞ノ令孫張厚琨、成城校生并ニ日本学生ト同道来堂シ、階上ニテ生徒ト談ズ。嵇侃来堂宿泊ス。
	7. 16	生徒ノ一部成城学校ヲ訪問ス。
	7. 23	成城学校生数名来堂。
	8. 10	善隣書院教師松平康国氏ニ拉セラレタル張溥〔張繼〕来舍。
	8. 10	善隣書院教師松平康国氏ニ拉セラレタル張溥〔張繼〕来舍。
1900	1. 31	堂生終日公使館ニ趣キ、新年ノ祝宴ニ列ス。
	5. 8	客生唐へ退堂センコトヲ促ス。
	5. 22	唐生ヨリ尚ホ一ヶ月間許宿泊ヲ許可セラレンコトヲ乞フ。
	6. 10	西ヶ原養蚕試験所ニ在ル嵇侃ヲ日華学堂へ在宿セシメラレンコトヲ請フ。
	10. 10	浙江省湖州府烏程県人沈翔雲（廿五才）ナル者、章生〔宗祥〕ノ依頼ニ依リ錢監督ノ保証ニテ一ヶ月間当学堂ニ寄宿スルコトヲ許ス。

出典：宝閣善教等『日華学堂日誌第一冊』と『明治三十一年一月改 学堂日誌』により作成。

表 1-8 によると、日華学堂、成城学校、嘉納塾などの中国人留学生は、日華学堂を中心に、互いの交際を続けていたことがわかる。そして、日華学堂の留学生在他の学校を訪ねていくことよりも、日華学堂に来訪する留学生の回数の方がはるかに多かった。中でも、王子の養蚕伝習所の嵇侃は、日華学堂に 8 回ほど訪ねており、次に成城学校の留学生は 7 回学堂を訪問するのに対して、日華学堂の留学生は 5 回、成城学校を訪ねている。

北洋班の学生の入堂に伴い、学堂管理者は堂生を監督するために寄宿舎規則を制定することになるが、堂監の宝閣善教は、その日記『行雲録』に、以下のようにその経緯を記している。

〔1899 年 4 月 1 日〕又檣原〔陳政〕氏来堂、留学生一同を集めて種々諭示する所あり。氏曰く新来生の言語挙動稍不遜の嫌あれば、監督者は規律を励行する事必要ありと。夫れ、或は然らん依て田代舎監と共に寄宿舎細則数十条を制定し、近日発布の上厳正に取締る事となせり。⁴⁰

⁴⁰ 宝閣善教『行雲録』未公開、1899 年 4 月 1 日。

現存する『日華学堂章程要覧』によれば、学生が守るべき規則を合計 18 条の「学生須知」に定めている。その中の第 14 条は、堂生の外出と校外者の来訪について、次のように記している。

第 14 条 学生例準出外遊走之外。不準出門。遇有不得已。須告明舍監允準後。方得出門。⁴¹〔第 14 条 学生は定例許可の外出以外、勝手に外出することが禁じられる。やむを得ない場合舍監に許可をもらった後、ようやく外出することができる。〕

この条目により、堂生が外出するには舍監の許可を得なければならないと規定しているからその管理が厳しかったことがわかる。

一方、「学生須知」の第 17 条は、

学生遇有来訪人。除考察員由職員導引外。不準延入房內。只準客庁会談。⁴²〔来訪者が来る場合、考察員が学堂の職員より案内されることを除いて、堂生は来訪者を堂内に招くことが禁じられ、客間で会談することしか許可されない。〕

とあるように、校外者は日華学堂内の指定場所のみで活動できたが、学堂日誌が記載する碁侃の例で見られるように外部の留学生の止宿もほぼ許可されたことから、寄宿舎の管理者が規定を厳しく適用していたわけではないことが窺われる。

当時、他の予備学校においても類似する管理規則が制定されていた。以下、二つの予備学校を例として分析していきたい。一つ目に、日華学堂とほぼ同時に留学生教育を始めた成城学校は、陸軍教育の予備学校として中国の軍事留学生のみを受け入れ⁴³、その寄宿舎は市ヶ谷河田町にあった⁴⁴。1899 年 10 月 18 日、四川派遣の視察官である沈翊清は成城学校を訪問し、中国人留学生の一日の生活を以下のように記述している。

⁴¹ 『日華学堂章程要覧』前掲于宝軒編纂『皇朝蓄艾文編』、22 丁裏。

⁴² 『日華学堂章程要覧』前掲于宝軒編纂『皇朝蓄艾文編』、23 丁表。

⁴³ 成城学校の文学生班は 1903 年 10 月になって開校した。編纂委員会『成城学校八十年』日産印刷株式会社、1965 年、38 頁。

⁴⁴ 最初、中国人留学生の寄宿舎は市ヶ谷仲ノ町 60 番にあり、舍監が退職の陸軍歩兵大尉賀屋義矩であった。1899 年 1 月、湖広総督と南洋大臣から派遣された新入生 33 名が入学してから、まず牛込区薬王寺前町にある成城学校校外第一寄宿舎に入居し、2 月末、寄宿舎が市ヶ谷河田町にある新築屋に移転された。前掲『成城学校八十年』、36 頁。張大鏞『日本武学兵隊略』浙江書局、1899 年（呂順長編著『教育考察記』上冊、杭州大学出版社、1999 年、61 頁）。

起床五点。朝食六点。診察有病否六點三十分。自習七点至八点。中食十一點五十分。入浴午後一点至七点。夕食四點三十分。散歩自夕食後至六點三十分。自習自六點三十分至七點三十分。就寝八點三十分。消灯九点。⁴⁵

[5時起床、6時朝食、6時30分診察、7時～8時自習、11時50分昼食、午後1時～7時入浴、4時30分夕食、6時30分まで散歩、6時30分～7時30分自習、8時30分就寝、9時消灯。]

この記述を額面通り受け取れば、成城学校の学生の一日の活動は、軍隊や兵營に準ずるような規則正しいもので、「每晚留学生監督が学生を一度点呼し、外出止宿が禁じられる」⁴⁶ことから、日華学堂より学生の外出管理が日華学堂より厳しかったと言えよう。

もう一つには、日清戦争以降、中国との交流を深めることを目指した東亜同文会によって、「日清の關係、日に接近するに従ひ、彼の我地〔日本〕に学ぶもの漸時多きを加へ、若し之れが適當の監督所なからんか、徒に身を誤らんことを恐る故に」⁴⁷という目的で設立された東京同文書院である。

1899年11月に設立された東京同文書院は、特に中国からの文系留学生の管理と育成を目指し、最初には5、6名の学生が所属していたが、1902年2月頃には、ついに20名前後にのぼるようになった。この東京同文書院の学校兼寄宿舎が、牛込区中里町に置かれた。

東京同文書院の寄宿舎の管理に関して、『東京同文書院章程』の「第九章 寄宿舎」に以下のように書かれている。

第33条 本院学生ハ總テ寄宿舎に入ラシムルモノニシテ特別ノ事情アルニアラザレバ通学セシムルコトナシ

第34条 寄宿舎ハ舎監ノ統督ニ帰ス

第35条 寄宿舎ノ取締ニ關スル規則ハ必要ニ応シテ院長之ヲ定ム⁴⁸

⁴⁵ 沈翊清『東遊日記』福州吳玉田印刷、1900年、7丁裏、東京都立中央図書館実藤文庫蔵。句点は筆者による。

⁴⁶ 李宗棠『東遊紀念第一考察學務日記』、1901年、12丁、東京都立中央図書館実藤文庫蔵。（每晚監督点名一次。不得出外留宿。）

⁴⁷ 『東亜同文会第6回報告』、1900年5月12日、24頁。

⁴⁸ 『東亜同文会第27回報告』、1902年2月1日、10頁。

この寄宿舎規則は、1902 年 1 月に掲載されたが、1900 年頃の東京同文書院にはまだ、12、3 名の留学生しかいなかったことから、寄宿舎規則が大きく変わっていないことを想定すれば、日華学堂と成城学校の規則に比べ、その規定は緩やかなものであった、と感じられる。

この時期、中国人留学生は各校の管理規則によって、その活動は構内と寄宿舎という限られた場所に制限されていた。1900 年以降、留学生人数が増加し、高等学校に進学する学生が増えるにつれて、中国人留学生の全員が学校の寄宿舎に居住することは現実的に不可能になり⁴⁹、留学生にも、学校の管理者にも、外部の下宿屋で生活し通学することが、最善の選択肢とされることとなった。この頃から、中国人留学生は、学校の管理と束縛から抜け出し、日本の社会とより密接に交流し、自由かつ活発な活動を送ることとなったといえよう。

1900 年末には、日華学堂の事実上の廃校とともに、多くの中国人留学生は下宿屋に移し、その生活はいつそう分散したかのように思えるが、少人数の集会は、下宿屋に移ったあとも続いていたようである。たとえば、東京帝国大学に入った章宗祥は、呉振麟、銭承詒、陳槐、張瑛緒、沈琨とともに本郷区丸山新町の一軒家を借りた相借家の生活を送っていた⁵⁰。雷奮、楊蔭杭、楊廷棟の 3 人も「牛込区早稲田付近の土首 3 番町に間借りし、当日雷等は『訳書彙編』と『国民報』への記事を書く場所として使っていたり、留学生はよくその場所を借りて集会の中心地とし、特に日華学堂の学生がよく寄り合った」⁵¹とあるように、中国人留学生の交際は下宿家に移ってからでも依然として続いた。

こうした留学生の交際に対して、1905 年に来日した黄尊三（1880—1951）は「留学生としては、神経を使い、心配も多いので、友人との往来によって、心の安定を維持し、神経を和らげることができる」⁵²と説いている。国を離れた 20 歳前後の中国人留学生にとって同じ若者との交流は、心を安定させる重要な役割があったものだろう。

しかし、日華学堂を中心とする中国人留学生の往来はあくまでも少人数かつ私的なものであり、中国人留学生の間で、組織的な連絡網ができていたとは言い難い。多くの人数が集まる留学生の集会が 1902 年以前に開催された記録は管見の限り見当たらないが、

⁴⁹ 1900 年以降、成城学校、弘文学院、東京同文書院などの僅かな予備学校はまだ寄宿舎を提供していた。

⁵⁰ 章宗祥「任闕斎主人自述」前掲『文史資料存稿選編・教育』、929 頁。

⁵¹ 馮自由「日教員窃皮蛋之笑話」『革命逸史』初集、中華書局、1981 年、132 頁。（其時雷奮、楊蔭杭、楊廷棟三人税居牛込区早稲田附近土首三番町，即当日雷等為訳書彙編及国民報撰文之所，留学生恒偕其地作聚會集中点，尤以日華學生為多。）

⁵² 黄尊三著、実藤惠秀・佐藤三郎訳『清国人日本留学日記 1905—1912 年』東方書店、1986 年、110 頁。

中国の伝統的な祝祭日にあたる旧暦の正月には、中国人留学生が集まったであろうことは、想像できる。

たとえば、1899年2月9日、公使館翻訳の馮国勲は、「本日ハ在京留学生一同ニ午餐ヲ饗スル筈ナレバ、堂生ノ来会ヲ許サレタキ旨ヲ述ヘ」⁵³た記録からわかるように、清国公使館は、留学生を招集して新年会を開催した。こうした集会は定例として、1899年の端午と1900年の新年にも同じく公使館より行われており、留学生の間に交流を深め、人脈を広げる役割も果たしただろう。

このような状況に対して、沈翔雲は次のように述べている。

向者吾邦之土。留学是邦。散处各校之中。会面甚少。即偶相見。亦不過尋常応酬数語寒酸而止。同国之人。互相隔膜。無親愛聯結之氣。為各国所見笑者也。故不可無会。

54

〔以前、我が清国から多くの人々が日本に留学にやってきました。各校に分散して暮らしており、頻繁に会うことはなく、たまに出会っても、ただの挨拶のような言葉をかけるしか言いません。同じ国の留学生であっても、お互いにわだかまりがあり、親近感が全く感じられず、各国の笑い物となっていました。ですから、会のような組織を作らなければなりません。〕

沈の言うように、「頻繁に会えない」中国人留学生はときに他の学校に訪れるものの、その交友関係は狭い範囲にとどまることから、留学生の団体や組織などを作らなければ、互いの絆を深めることは実現できない。この状況を変えるために、勵志会という中国人留学生の最初の団体が成立した、と言える（後述の第二章を参照）。

以上、日華学堂の予備教育と1900年頃の中国人留学生の交友関係を考察したが、次に、留学生界においても特別な存在と言える湖広総督張之洞の長孫である張厚琨の日本留学を取り上げ、彼がどのような留学生生活を送ったのか、他の留学生との交友関係を持ったのかについて検討する。

⁵³ 『明治三十一年一月改 学堂日誌』、1899年2月9日。

⁵⁴ 沈翔雲「恭祝皇上万寿演説 即中国学生会第二集」『清議報』第54冊、1900年8月15日、13丁表。

第三節 湖広総督張之洞の長孫である張厚琨の日本留学

表 1-8 の示すように、日華学堂に訪れる留学生の中、張厚琨（約 1880—1901）（図 1-6）という人物があり、他の官費留学生と異なり、湖広総督張之洞の長孫である彼は清国の貴族、または重臣の子弟の一人として日本留学を経験しており、日・中両国の政府からも重視され、特別な待遇を受けていた⁵⁵。

まず、張厚琨の留学の経緯を見ておこう。

図 1-6 張厚琨の肖像



出典：「故花翎知府銜張厚琨君肖像」『学習院輔仁会雑誌』第 57 号、1900 年 3 月、折込。

1898 年夏、在上海日本総領事代理である小田切万寿之助は、湖北省の出張をきっかけに、湖広総督の張之洞に中国人留学生の派遣を勧誘した。その後、小田切の斡旋によって、学習院の院長であった近衛篤磨は、「清国上流ノ子弟三四名ハ必ス学習院ニ於テ、薰陶スルノ勞ヲ採ルヘキ事」⁵⁶口頭で承諾している。

⁵⁵ 張厚琨に関する先行研究が少ない。村松弘一「調査報告 明治一昭和前期、学習院の中国人留学生について」（『学習院大学国際研究教育機構研究年報』第 3 号、2017 年 2 月）は、学習院大学に保管された「学生名簿」を利用し、明治から昭和前期まで学習院に在籍したことがあった中国人留学生（台湾の学生も含まれる）の入学・退学の状況を整理した上で、張厚琨、張仁榮、溥傑等の留学生を取り上げ、彼らの入学の経緯を紹介した。胡穎『清末の中国人日本留学——派遣と経費を中心に』（学術研究出版、2021 年、129-130 頁）は張厚琨の留学経費に注目し、彼が特別な待遇を受けたことを指摘した。また、孔祥吉・村田雄二郎編『罕為人知的中日結盟及其他——晚清中日関係史新探』（巴蜀書社、2004 年、302-310 頁）は外務省記録を利用し、張厚琨の贅沢な留学生生活を概説した。以上の研究はそれぞれの注目点によって張の留学生生活の一部分を明らかにしたが、不明なところはまだまだ多く残っている。

⁵⁶ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623200（第 37 画像）、「湖北総督張之洞ノ孫張厚親

その後、1899 年 1 月 7 日、小田切より外務次官の都筑馨六にあてた電報の中では、小田切は張之洞と近衛篤磨院長との交渉の経過を述べながら、張之洞の長孫の張厚琨を学習院に入学させることが許可されたことを言及している⁵⁷。

しかしながら、張厚琨の日本留学については当初、学習院への入学ではなく、日華学堂に留学させる予定であったようである。当時、日華学堂の堂監を務める宝閣善教の日記『行雲録』1899 年 1 月 21 日付には、以下のように記されている。

午後、湖北道台張斯栴、并に張之洞の孫張坤申〔厚琨〕等、檜原氏と共に来堂。先づ階上に招して、茶菓の饗をなし、堂則学科等に就き種々質問に答へ後、堂内所々を見聞し、大に其整頓せしに、感せしものの如し。張坤申〔厚琨〕君も愈近々の中、当学堂に入学する事となりぬ。⁵⁸

宝閣は、檜原陳政、張厚琨の一行が日華学堂を訪れた理由について、入学前の実地調査を兼ねたものと理解したようだが、結局、二日後の 1 月 23 日には、急転直下話が変わり、「張〔厚琨〕君は近衛公に依頼して学習院に入学せしむる事」⁵⁹となった、という。

しかし、宝閣の日記を再度、読んでいけば、張厚琨が日華学堂への入学することを希望したということもなく、入学の手続きなどについても一切言及しておらず、張厚琨の一行の日華学堂訪問の目的が誤解されてしまったのではないかと疑わざるを得ない。

小田切万寿之助の言うように、そもそも張之洞が最初から子弟を日本の華族学校に入学させる旨を表明し、他の予備学校を視野に入れたことはなかったかもしれない。

湖北省で選抜された留学生が発する前に、小田切万寿之助はすでに外務次官都筑馨六に彼らの行程を報告している。

〔琨〕日本学習院へ留学志願之件具申」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部（外務省外交史料館）。

⁵⁷ 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第 2 巻、鹿島研究所出版会、1968 年、240-242、256-257 頁。また、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623200（第 36-38 画像）、「湖北総督張之洞ノ孫張厚親〔琨〕日本学習院へ留学志願之件具申」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部（外務省外交史料館）。

⁵⁸ 宝閣善教『行雲録』未公開、1899 年 1 月 21 日。

⁵⁹ 宝閣善教『行雲録』未公開、1899 年 1 月 23 日。

今回張総督ヨリ本邦ニ派遣スルモノハ、武備学生二十名ニシテ、清暦十一月廿六日、即ち本月七日〔1899年1月7日〕、漢口ヲ出発シ、当地ヨリハ本月十四日〔1月14日〕出帆ノ日本郵船会社汽船薩摩丸便ヲ以テ、渡航ノ予定ニ有之候間。⁶⁰

1899年1月7日、張厚琨は張之洞より派遣されたそのほかの陸軍学生20名とともに招商局の汽船「江裕号」に搭乗し、漢口を出発した。1月14日、上海で「薩摩丸」に乗船し、1月18日には神戸に上陸し、翌日の19日、汽車を乗り換えて東京に向かう予定であった⁶¹。その後、1月の22日、25日、27日、29日には、張斯杻、鄭國華、張厚琨、及び通訳の植原陳政の一行は4回にわたり、近衛篤磨院長を訪れ、入学前の手続きや入学後の学業、生活などの様々な方面について意見を交換している⁶²。

1899年の2月1日には、張厚琨の学習院入学式が行われ、近衛院長、両幹事、張斯杻、鄭國華、植原陳政等がその場で立ち会った⁶³。学習院の『教務課日記』に、「張厚琨本日入学ス。但科級未定ニ付、日ニ授業之課目ヲ選シテ」⁶⁴とあるように、張の入学、及びカリキュラムの状況が記されている。

しかしながら、翌年の1900年の秋に、張厚琨は学習院を退学することになった。なぜ退学したのか、そして、約一年半にわたって彼はどのような学習院での留学生活を送ったのか。まずは、学習院における張厚琨の優遇ぶりを見ることにする。

日本の華族の子弟が学ぶ学習院に入学した張厚琨が受領する留学経費は、湖北武備学堂から派遣された学生らの2倍で毎月50元、年額で600元が支給された⁶⁵。この年額600円という金額は、湖北省は言うまでもなく、清国から派遣された全ての留学生の中でも最も多い金額であった。さらに、驚くことにこの600円という経費には、学習院に支払う授業料は含まれていなかった。

1899年3月1日、張厚琨が学習院に入学した1ヶ月後、外務次官の都筑馨六より学習院長近衛篤磨あての公文書には、

⁶⁰ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081617100 (第77画像)、「張総督派遣ノ学生出発ニ関スル件」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸軍学生之部 第一巻(B-3-10-5-3_1_001)(外務省外交史料館)。

⁶¹ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081617100 (第91画像)、兵庫県知事大森鍾一より外務大臣青木周藏あて、在本邦清国留学生関係雑纂/陸軍学生之部 第一巻(B-3-10-5-3_1_001)(外務省外交史料館)。

⁶² 前掲近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第2巻、253、255、258-259、261頁。

⁶³ 前掲近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第2巻、264頁。

⁶⁴ 『明治三十二年 教務課日記』、1899年2月1日。また、『学習院一覽』(秀英社、1900年2月、104頁)では、「科級未定 外国人 張厚琨」と記された。

⁶⁵ 「札北善後局等発游学日本各員、生応需半年学費附單」苑書義等主編『張之洞全集』第5冊公牘、河北人民出版社、1998年、3986-3987頁。また、湖北武備学堂から派遣された学生の経費は、毎月25元、年額で300元が支給された。

本院ニ在学ノ清国留学生張厚琨、半ケ年学資トシテ金百五十円、湖広総督張之洞ヨリ在上海小田切総領事代理ヲ経テ送越候趣ヲ以テ、前記金額現金ニテ去ル四日、御回付相成、正ニ領収致候。⁶⁶

という内容が記されたことがわかる。そして、同月 31 日に院長代理の文事秘書官長であった細川潤次郎より都筑馨六あての文書には、張厚琨の授業料が支払われた領収書（図 1-7）が付されている。

図 1-7 張厚琨の授業料に関する記録



出典：JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081625400（第 252 画像）、学習院長代理文事秘書官長細川潤次郎より外務次官都筑馨六あて、在本邦清国留学生関係雑纂/留学生学費之部(B-3-10-5-3_5)(外務省外交史料館)。

このことから張厚琨の学費は、年額 600 元とは別に、毎月 25 元が張之洞から在上海日本総領事代理の小田切万寿之助を経て、送金されていたことがわかる。

当時の中国人留学生の多くは、授業料、旅費、家賃、雑費などを含め、年額 150 元から 200 円で学業と生活を維持できたことから見て、張厚琨の年額 600 元は間違いなく破格の待遇であった⁶⁷、と言えよう。

⁶⁶ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081625400（第 251 画像）、外務次官都筑馨六より学習院長近衛篤麿あて、在本邦清国留学生関係雑纂/留学生学費之部(B-3-10-5-3_5)(外務省外交史料館)。

⁶⁷ 章宗祥「第三章 遊学之経費」『日本遊学指南』、1901 年、27 頁、東京都立中央図書館実藤文庫蔵。

張厚琨の学習院での勉学もまた、特別なものであった。学習院の初めの中国人留学生として、張厚琨が入学する際に、学科と学級のいずれも定められず、カリキュラムも彼の好みに合わせるために随時調整されたようにすら見える⁶⁸。

『時事新報』の1899年8月6日の記事「清国留学生の現在及将来」からすると、張厚琨は「一方には高級の学科を受け、一方には下級の教課を踏めるなどして同級生に奇異の感を与ふるなど」、「特に一人の教師を同住せしめ完全の教育」を施された、とあるように、学習院の他の日本人の学生からも不思議に感ぜられていた。

実際、近衛篤麿院長は、張厚琨の学業と生活を監督するために荻村錦太教授を監督者として同宿させた一方、榊弘二郎、岩倉具張（岩倉具定公爵の嗣子）、岩倉道俱（岩倉具視公爵の四男）を学生として同住させ、張厚琨から漢文の勉強を受けさせた⁶⁹。要するに、張厚琨は学習院に籍を置いた同時に、教師の役目も果たしたこととなる。ここからも張厚琨が受けた特別な待遇が読み取れよう。

張厚琨の学習院での成績がどのようなものであったのかについては成績表などの関連資料が見当たらず、その状況を明らかにすることはできない。ただし、張の学業を監督する立場にいた荻村教授は、張の学業に関して、近衛院長とよく意見交換している記載が多く残されている。表 1-9 は『近衛篤麿日記』から張厚琨の学事に関する記述をまとめたものである。

表 1-9 『近衛篤麿日記』における張厚琨の学事に関する記述

年	月日	張厚琨の学事に関する事項
1899	2. 1	李盛鐸【張生入学に付挨拶の為】 張厚琨入学式執行
	2. 3	岩倉道俱【中等五年級】に張生の指導学生を命ず。
	2. 5	外務大臣より、張生学事監督として今度陳昌基来朝したるに付、張斯枸、鄭国华は帰国するとの通牒を受けたり。
	2. 10	官舎に立寄、張生の事に付荻村教授と打合せ、六時帰邸。 伊沢修二【張生の日本語教師に栗野某採否の件】
	2. 11	荻村教授はじめ張生、榊、両岩倉等率ひて徒歩丸木に至り、撮影す。

⁶⁸ 『明治三十二年 教務課日記』、1899年2月1日。

⁶⁹ 最初、張の教え子として決められたのは「高等科学生榊弘二郎」の一人だが、この後、「岩倉具張と岩倉道俱に張生の指導学生を命ずる」ことになる。前掲近衛篤麿日記刊行会『近衛篤麿日記』第2巻、258-259、264、265頁。

第一章 中国人留学生の予備教育と彼らの交友関係——日華学堂を中心に

	2. 14	官舎に赴き、張生語学教師に囑託せんとする栗野某を荻村及び本人に紹介し、色々打合を為す。
	2. 22	荻村錦太【張生学事に付】
	2. 26	荻村錦太【張生学事の件】
	3. 11	檜原陳政【張厚琨学事の件】
	3. 12	荻村錦太【張厚琨学事の件】
	3. 20	李盛鐸、張斯恂、鄭國華、陳昌基を案内の為なり。檜原陳政を通訳の為同席せしむ。主として張生の学事に付打合と為す【張生と其家僕引はなしの事等】
	3. 26	荻村錦太【張生の事】
	3. 30	檜原陳政【張生の事。荻村錦太、張生を召連て来る。余不在中に張生の勤むべき事柄に付訓諭する処あり、今福某通訳。
	3. 31	張斯恂 檜原陳政【張生の事】
1899 年 4 月から 11 月にかけて、近衛篤磨は欧米諸国及びアジア各国の視察に赴いた。		
1899	12. 13	荻村錦太 張厚琨【張生学事に付】
1900	1. 9	荻村錦太【張等昨日来奔走中の事】 ^(注 1)
	4. 9	張厚琨【同人父近々渡来するとの事。其他同人に地図により世界の大勢に付説示す事たり】
	6. 7	荻村錦太【張学事に付て相談。本人近不勉強の事】
	7. 11	銭恂【張厚琨学事に付。協議の為あり】
	7. 14	荻村錦太【張生学事に関する】
	7. 16	荻村錦太 高橋謙【張厚琨の事に付張権に詰問の為来集の処。張権違約して来らず】
	7. 17	荻村錦太 中西正樹 銭恂 馮閻模【下に記す】 張厚琨の事に付、張権に申聴かさん為、昨日も招寄せしに来らず、本日來れと申遣せしに馮閻模をして別紙の書面を送れり。無礼極れり。〔中略〕然るに張権來りてより濫りに課業を休ましめ、寄宿を離れしめ、規律ある生活に稍習熟したるものを誘惑線とするものの如し。 小田切万寿之助【張権に関する事如此愚物は速かに帰国せしむるを可とする事】
	7. 21	荻村錦太【張生学事の件】
	8. 16	荻村錦太、銭恂よりの書面を示して、張総督は張権、張厚琨に帰国せよと三回迄打電し來れり 【尤も北清事变終らば再び厚琨を留学せしむるとの事】との事。

出典：近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第 2 巻と第 3 巻、鹿島研究所出版会、1968 年により作成。原文にある割注は【】で示した。

注 1: 「張等昨日来奔走中の事」というのは、清国皇族良弼を学習院に入学させることを指す。『近衛篤磨日記』第 3 卷、13 頁。

表 1-9 が示すように、張の学事に関して、荻村教授が近衛院長に度々報告し、たまに「不勉強」であるという評価を伝えているが⁷⁰、総じて言えば、近衛院長は張厚琨が学業に専念することに大いに期待した。たとえば、1900 年 7 月 17 日、張厚琨の父親である張権が日本視察に来た時、張厚琨の学業に悪影響を与える張権の一連の「無礼」な行為に対して、近衛篤磨院長は、「張権来りてより濫りに〔張厚琨の〕課業を休ましめ、寄宿を離れしめ、規律ある生活に稍習熟したるものを誘惑線とするものの如し」というように、強い不快感を表した。

張厚琨の留学生生活は、その他の官費留学生に比べても豪華なものであった。たとえば、兵庫県知事大森鍾一より外務大臣青木周蔵あての文書には、以下のような記述が見える。

豫テ渡来ノ聞ユアリタル清国張之洞劉坤一等ノ部下ニ属スル本邦派遣留学生ノ一行ハ、昨十八日薩摩丸便ニテ来朝シ、一泊ノ上、本日〔19 日〕午十二時半發汽車ニテ、上京セリ。該人名ハ左ノ通ニ有之候。〔中略〕派遣委員、〔官名略〕張斯杻、〔官名略〕羅治霖、〔官名略〕鄭國華ノ三名。留学生、張厚琨（張之洞ノ孫ト云フ、同人従者周樹林、蔣漢堂、袁舛、王福ノ四名アリ）。呉元沢、高曾介、盧静遠〔中略〕以上二十名湖北選派、專習武備。⁷¹

その他の官費留学生が単身留学すると比べ、張厚琨は日本に入国する際に 4 名の使用人を連れていたということから、その見栄っ張りが想像できるだろう。それだけではなく、入学後、張厚琨は貴族院の議長官舎に住みながら、「一人の従僕を具し、食事万端を扱はしめ」、衣食住に関わることを一切心配せず、「居止風采全く貴族的」⁷²であり、「毎月 200 元、少なくとも 100 元は必ずかかる」⁷³というものであった。これらのことから、張厚琨が豪華で贅沢な生活を送っていた一端を垣間見ることができる。

⁷⁰ 前掲近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』第 3 卷、170 頁。

⁷¹ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081617100 (第 91、92 画像)、兵庫県知事大森鍾一より外務大臣青木周蔵あて、在本邦清国留学生関係雑纂/陸軍学生之部 第一卷(B-3-10-5-3_1_001)(外務省外交史料館)。傍点は筆者による。

⁷² 「清国留学生の現在及将来」『時事新報』1899 年 8 月 6 日。

⁷³ 「銭恂 三十一」前掲上海図書館編『汪康年師友書札』第 3 冊、3014 頁。(若張孫公子毎月用二百元光景、至少亦必百元一月、則亦罕觀耳。)

留学中、張厚琨の交友関係は学習院の先生と一部の留学生、及び公使館の館員に限られ、その交際が広いとは言い難い。すでに述べた通り、張は 1899 年 1 月に日華学堂を訪問した後、同年 7 月 1 日、「成城校生、並ニ日本学生ト同道来堂シ、階上ニテ生徒ト談ズ」⁷⁴とあるように、成城学校の留学生とともに再び日華学堂を訪れていることが確認できる。

言い換えれば、張厚琨は少なくとも、日華学堂や成城学校の留学生との間に付き合いがあった。ただし、彼ら留学生がどのような気持ちで張厚琨と話し合ったのか、あるいはどのように張厚琨の生活を見たのか、史料的な限界のため明らかにできないが、前述した湖北留学生監督銭恂の評価から、彼は確かに特別な存在とみなされたと思われる。

張厚琨の日本留学は、1900 年 8 月 16 日、「義和団事件」の勃発であつてなく幕を下ろすことになる。すなわち、張之洞は「今回北方に於て、日本軍の動作各国よりも活潑なる為、南清にも種々の疑念ありて」、「子孫〔張樞、張厚琨〕を日本に質として日本に歟を通ずるものなりとの非難も起り、これを制止するには、是非共、同人等と呼返へすの必要あるなり」と⁷⁵、と近衛院長に伝えている。また、張之洞は「北清事変終らば再び厚琨を留学せしむるとの事」⁷⁶を近衛院長と約束していることから、張厚琨の日本留学は一時的な中断であるはずであったが、その約束は実際に守れず、張厚琨の再留学は実現することはなかった。1901 年 10 月 26 日付、張之洞より近衛篤麿あての書簡には、その理由が以下のように説明されている。

小孫厚琨、上年遊学貴邦、因事回華、未遑畢業。今年本擬再続前遊、会以家事羈牽、行期屢展。⁷⁷〔孫の厚琨は、昨年〔1900 年〕貴邦に遊学していたが、用事で帰国し、卒業できなかった。今年〔1901 年〕、再び留学を続けに行かせるつもりだが、家事の都合により出発期日が一度ならず延びてしまった。〕

1901 年 10 月に至って、張厚琨は弟の張厚璠を連れて日本陸軍の秋季大演習を見学するために、湖北省が派遣する演習視察団の一員として再び日本に赴き⁷⁸、10 月 26 日、ついに近衛篤麿院長と再会を果たすことになった⁷⁹。

⁷⁴ 『明治三十二年学堂日誌』、1899 年 7 月 1 日。

⁷⁵ 前掲近衛篤麿日記刊行会『近衛篤麿日記』第 3 巻、271-272 頁。

⁷⁶ 前掲近衛篤麿日記刊行会『近衛篤麿日記』第 3 巻、271 頁。

⁷⁷ 李廷江編著、衛藤沈吉監修『近衛篤麿と清末要人——近衛篤麿宛来簡集成』原書房、2004 年、450 頁。

⁷⁸ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B07090198500 (第 258、259 画像)、「湖北派遣大演習視察員ニ關スル件」、帝国陸軍大演習関係雑件 第一巻(5-1-3-0-18_001)(外務省外交史料館)。

⁷⁹ 前掲近衛篤麿日記刊行会『近衛篤麿日記』第 4 巻、300 頁。

しかし、残念なことに、日中両国の政府に高く期待された張厚現は、1901年12月に日本から帰国したあと、武昌の文昌門を通る際に、落馬事故で亡くなってしまうという非業の最期を遂げてしまうこととなる⁸⁰。

張厚現は、清末の中国人留学生界において、清国の皇室と重臣につながりがある留学生として学業の大成が大いに期待されながら、豪華で贅沢な生活を送っていたことが明らかにになり、他の留学生とは異なる特別な待遇を受けたことで、その他の中国人留学生からは大いに批判され、様々な問題や紛争を巻き起こりもした。

張厚現は短い人生のうちに大きな功績を上げることはできなかったが、皇室と重臣の子弟が海外に留学する道を開拓した点は無視できない⁸¹。また、中国人留学生史のみならず、日清戦争後、日中間の外交関係から見れば、彼の留学を成し遂げるための日中政府間の交渉の過程を究明する価値があるだろう。

むすび

本章では、日華学堂の予備教育と中国人留学生の交友関係について考察した、そこで得られた結論は、以下のようにまとめることができる。

一つ目は、外務省記録の中に記載された日華学堂のカリキュラムなどを丹念に拾い上げることによって、初期の中国人留学生を受け入れた日華学堂の普通学と日本語教育の実態を明らかにすることができた。日華学堂が準備した普通学の教育は、浙江班の学生しか受けていなかっただけでなく、その科目と授業時間などは同時代の成城学校よりもむしろ不十分なものであった。また、日本語教育の面において、当時は留学生向けの日本語教科書がまだ準備されていなかったため、日華学堂の教師は日本語と英語の対訳という教授法を使って日本語を教授していた。浙江班の学生の日本語能力は、日本語能力が最も高かったと評価される嘉納塾の学生に次ぐ2番目とされたが、南洋班と北洋班の学生の日本語能力は高く評価されていなかった。

⁸⁰ 胡鈞重編『張文襄公（之洞）年譜』巻四、1939年、17丁表。なお、胡鈞版の底本として、許同華編『張文襄公年譜 十巻』巻7（上海商務印書館、1946年、139頁、台湾・国立中央図書館蔵）には、より詳しく記述されている。

⁸¹ 清末期から民国時期にかけて、張厚現の後に学習院に入学する清国重臣の子弟が数名いた。たとえば、両広総督、雲貴総督、四川総督を歴任した岑春煊の子である岑德徴と岑徳広が1908年に入学し、さらに1920年代、黎元洪長子の黎紹基と張之洞五子の張仁棗がともに学習院に入学した。前掲村松弘一「調査報告 明治一昭和前期、学習院の中国人留学生について」。

結局、日華学堂で実施された予備教育は、その教育内容を高く評価することができず、特に基礎ができていた南洋班と北洋班の学生にとっては、彼らの留学の目的を達成するために一助となるものとは言えないものであったといえよう。

二つ目は、日華学堂の学堂日誌と『日華学堂章程要覧』に依拠し、中国人留学生の交友関係が日華学堂の留学生を中心に展開されたことを明らかにした。当時の中国人留学生界において、日華学堂の学生管理は、相対的に緩いものであったため、嘉納塾、成城学校などの中国人留学生はよく日華学堂を訪問したり、寄宿したりしていた記録が残っており、日華学堂の学生は活発な留生活活動を展開することができ、一時期ではあったが、日華学堂は中国人留学生の活動の本部ともなった、と評価できる。

三つ目は、学習院大学の所蔵資料と近衛篤麿の日記などの資料から、湖広総督の張之洞の長孫である張厚琨の留学経緯と生活を考察することができた。張厚琨は小田切万寿之助の斡旋下、学習院院長の近衛篤麿と連絡を取り、入学の許可をもらった。湖北省のその他の官費留学生と違い、張は4名の使用人を連れて日本で留生活を送るという贅沢な生活を送った。年額600円の官費の奨学金のほか、学習院の授業料は別途で支給され、貴族院の議長の官舎に住みながら、教師と学生の二重の身分を持ったことなどからも、彼が特別な待遇を受けたことがよくわかる。

留学生の予備学校として設立された日華学堂は、浙江求是書院、南洋公学、北洋大学堂からの中国人留学生を受け入れ、普通学と日本語を教授したのみならず、彼らを日本の風俗や生活に快適に過ごせるために、様々な課外活動を取り入れていた。

1900年末、日華学堂の中国人留学生の多くが東京帝国大学と第一高等学校、東京専門学校などの学校に進学し、日華学堂の運営は事実上、停止することとなった。しかし、日華学堂で修学した多くの留学生たちは、励志会、訳書彙編社、清国留学生会館などの中国人留学生の最も中心なる各団体での活動を続け、相互の交流と親睦を深め、日本の近代的な知識体系を中国国内に導入するための翻訳活動に従事し、また遅れて来日する中国人留学生を支援など様々な活動を展開することとなった。

次章では、日華学堂と深く関わっている励志会に注目し、その成立、社員構成、活動などについて検討する。

第二章 勵志会の成立とその活動の全容

はじめに

1896 年以後の中国では、多くの知識人が「救国」、「救亡」、「強国」という目標に向けて、それぞれ改革、立憲、そして革命など様々な陣営に属しながら各自の解決方法を模索していた。いま現在の視点からは、当時の知識人は各々の「派」に帰属しているかのように見えるが、実際には彼ら自身が一つの「派」に帰属しているという強い意識を持っていたとは言えない。むしろ、自分たちが考える救国の方法や思想、そして主張を宣伝するために、共通の目標を持ったことで団体を結成し、最終的には外から「改革派」や「革命派」などと規定されることになった、と言えよう。

日本の中国人留学生は、清国政府の管轄を遠く離れているという地理的な特徴を利用し、多くの団体を組織し、出版、宣伝など様々な活動を通して、清末民国初期の日中の歴史に大きな影響を与えたと言える。このような新たな知識の受容、新式教育の普及、革命思想の宣伝に中心的な役割を果たした組織が、勵志会、東京青年会、軍国民教育会、清国留学生会館、中国留学生總會、中国同盟会などの団体であった。そして、そのうち、最初に成立した組織が、勵志会という団体であった。

勵志会は、清末民初の時期に成立した初期の留学生団体として注目され、山口一郎は勵志会の会員と 1900 年 8 月の自立軍蜂起との関係について触れて、勵志会がアジアの民族独立運動の動向にも影響を与えたことにも言及している¹。

一方、大陸と台湾の先行研究において、石錦は、初期の中国人留学生の団体活動を論じつつ、主に馮自由の『革命逸史』と曹汝霖の回顧録を利用し、勵志会が中国人留学生によって最初に組織された親睦団体であったが、後に君主立憲を主張する団体に変容したと指摘した²。そして、張玉法は、初めて勵志会の会員名簿の作成を試み、その上で勵

¹ 山口一郎「清国留学生記」後藤基巳編『東海往来物語』河出書房新社、1959 年。

² 石錦「早期中国留日學生的活動と組織（1896—1901）」『思与言』第 6 卷第 1 期、1968 年。

志会が政治的性格の薄い団体であったと指摘した³。張の論考に基づいて、大陸側の沈渭濱は勵志会の会員として二人を補充したが、初期の留学生団体の流れに焦点に当てたのみで勵志会に関する本格的な考察はできなかったように思われる⁴。むしろ、勵志会に対する本格的な検討を加えたのは、桑兵と尚小明であり、桑兵は勵志会の成立と解散、組織綱領、及び会員の政治立場などの問題を本格的に分析した⁵。尚小明は同盟会が成立する前の留学生界において、勵志会から軍国民教育会までの留学生団体の関係と沿革を検討したが⁶、依然として革命史のコンテクストから、勵志会を「革命」に傾斜している団体と理解している。

以上、勵志会の研究について簡単に紹介したが、これらの先行研究は、団体の成立、趣旨、会員構成、活動などに注目し、勵志会を概説したもので、この団体の発展と日華学堂、訳書彙編社との関係などにはほぼ触れておらず、その全体像についてもまだ多くが不明なままである。

そこで、本章では、勵志会の成立から解散までの過程に注意を払い、その団体の会員情報をまとめた上で、勵志会増補『和文漢読法 附訳書彙編叙例』という資料を駆使し、彼らの活動を全面的に再検討することとしたい。さらに勵志会の会員の一人であった沈翔雲が果たした役割を検討し、この団体の実態をより一層明らかとすることを試みたい。

第一節 勵志会の成立とその趣旨

勵志会は 1899 年秋に東京で成立した中国人留学生の団体とされるが、その団体に関連する資料は少なく、その評価をめぐっても異なる資料が混在している。

たとえば、馮自由は次のような回想による記述を残している。

勵志会為庚子〔1900 年〕東京留学界所組織。其時各省学生東渡留学者不過百數十人，尚無何種結合，此会実為留学界創設団体之先河。有会章五条，不外以聯絡情感策勵志節為宗旨，對於国家別無政見。⁷

³ 張玉法『清季の革命団体』中央研究院近代史研究所、1975 年初版。

⁴ 沈渭濱『孫中山と辛亥革命』上海人民出版社、2016 年。

⁵ 桑兵『清末新知識界の社団と活動』生活・読書・新知三聯書店、1995 年。

⁶ 尚小明「同盟会成立前留日学界革命団体の衍変」『広東社会科学』2023 年第 3 期。

⁷ 馮自由「勵志会と訳書彙編」『革命逸史』初集、中華書局、1981 年、98-99 頁。

〔勵志会は、1900 年に東京の留学生により組織された。当時、中国の各省から派遣された留学生は百数十人に過ぎず、各自は互いに何らの結びつきもなかった。それ故に、この勵志会は留学生界において作られた団体の先駆けと言える。会章は五条あるが、留学生の間において、絆を結び合い、志を励まし合うことを〔組織の〕宗旨とする以外は、国に対する政見等は持たなかった。〕

この記述によれば、勵志会は留学生同士が互いの親睦を深め、留学の志を励まし合うために設立された団体であったように思える。勵志会の会員であった曹汝霖は、「留学生はみな勵志会を組織し、お互いの交誼を図る機関としていたが、そこでは学術の研究を行ったり、時事問題の討論会を開催したりすることもあった」⁸、と回想している。また、秦毓蓀も「勵志会の宗旨は平和である。後に君主立憲を主張する者は、大半はこの中の人物である」⁹、という経緯を書き残している。

このほかに、1900 年 11 月 14 日、清国駐日公使を務めた李盛鐸が当時の湖広総督張之洞に送った電報の中でも勵志会の成立時期、特に団体の趣旨などについて言及している。

勵志会始自去秋，專為研究學問及訳書而設，月聚一次，演説皆系學問，未及国事。¹⁰

〔勵志会は 1899 年秋に、もっぱら学術を研究し翻訳をするために設けられた団体で、会員が毎月一回集まる。その演説の全ては、学術に関することであり、国事には触れていない。〕

この李盛鐸の電文からも、勵志会が 1899 年秋に成立した留学生の親睦団体であったことがわかる。なお、1900 年夏、沈翔雲は「今夏四月〔1900 年 5—6 月〕、東へ渡って遊学にやって来たが、留学生がすでに同志を集め、団体を組織しながら翻訳を行なっていた」¹¹、というように留学生の活動を記述している。これらの当時の資料によれば、勵志会は 1899 年秋に成立したという説は、信憑性があるように思われる¹²。

⁸ 曹汝霖著、曹汝霖回想録刊行会編訳『一生之回憶』鹿島研究所出版会、1967 年、9 頁。

⁹ 秦毓蓀著、周新国・劉大可校閲「天徒自述（節選）」『近代史資料』総 111 号、中国社会科学出版社、2005 年、142 頁。（宗旨和平、後來主張君主立憲者大半此中人物。）

¹⁰ 「湖広総督張之洞宛」、光緒二十六年九月二十三日（1900 年 11 月 14 日）、陳旭麓主編『義和団運動盛宣懷檔案資料選輯之七』上海人民出版社、2001 年、381 頁。

¹¹ 沈翔雲編、勵志会増補『和文漢読法 附訳書彙編叙例』勵志会訳書処、1900 年 7 月（李長波編集・解説『近代日本語教科書選集』第 7 巻、クロスカルチャー出版、2010 年初版）。（今夏四月。東渡来遊。而留学之士已糾合同志開會訳書。）

¹² 勵志会の成立時期について、張玉法の 1900 年 8 月の自立軍蜂起の前にすでに結成された説と、桑兵の 1900 年 8 月の自立軍蜂起以後に結成された説がある。前掲桑兵『清末新知識界的社團与活動』、148—

一方、馮自由は、勵志会の活動が革命派に傾度していたことを窺わせる記述も残している。すなわち、

惟是時革命思潮已風起雲湧，會員中主張光復主義者大不乏人。激烈派如戡元丞、沈翔云等均任會中幹事，故亦不啻一革命宣傳機關。¹³

〔当時、革命思潮が既に湧き起こり、会員の中では、光復主義〔中華の復興を目指す考え〕を主張する人が少なくなかった。急進派の戡元丞、沈翔云等がみな勵志会の幹事を務めたため、あたかも革命を宣伝する機関のような有様であった。〕

また、会員の秦力山は「〔勵志会の〕会章五条は、純粋な革命主義の団体であった」¹⁴、と述べているほか、唐才質「自立会庚子革命記」、傅光培「庚子漢口起事中の傅慈祥」などの文章では、勵志会が革命団体であったという認識も読み取れる¹⁵。

勵志会が革命団体であるのか、またはただの留學生の親睦を図る団体であったのか、については、これら相互に矛盾した評価資料のみでは判断することはできないが、おそらく初期の勵志会は留學生同士の交誼と學術を重視する団体であり、革命を目指す団体ではなかったようである。しかし、会員それぞれの考えや時代の変化によって、後に革命活動に傾斜する会員が多くなり、彼らの経歴が目立ったことで、勵志会はいつの間に革命団体であるという理解が生まれたのだろう。

最後に、張繼と章宗祥の回顧を引用してこの節を結びたい。

張繼：光緒二十五年、乙〔己〕亥、（一八九九）、〔中略〕中國學生立勵志社，發行詠書彙編，尚無革命與不革命之分。¹⁶

〔光緒二十五年、己亥、（一八九九）、〔中略〕中國學生は勵志社を設立し、詠書彙編を発行しているが、まだ革命と反革命の区別はなかった。〕

149 頁。

¹³ 前掲馮自由『革命逸史』初集、99 頁。

¹⁴ 彭国興・劉晴波編『秦力山集（外二種）』中華書局、2015 年、185 頁。（会章五条、為順粹之革命主義。）

¹⁵ 唐才質「自立会庚子革命記」杜邁之・劉洪決・李龍如編『自立会史料』岳麓書社、2009 年、66 頁。

傅光培「庚子漢口起事中の傅慈祥」『湖北大学学报』1982 年第 5 期。

¹⁶ 張繼『張溥泉先生回憶錄・日記』沈雲龍主編『近代中国史料叢刊三編』第 3 輯、文海出版社、1985 年、4 頁。勵志会のほか、「勵志社」という呼称もたまに現れたが、同じ団体を指しているため、本論文は一律に「勵志会」を使用している。

章宗祥：勵志会本身初未有實行革命之謀劃，然漢口唐才常之役，及第一次第二次革命，皆有會員犧牲。勵志会會員個人以義合，而不以会自相標榜，可稱最純潔之団体。其後留東者人数漸增，各会紛立，遂生党派。¹⁷

〔勵志会は最初、革命を実行する考えはなかったが、〔1900年8月の〕自立軍の蜂起、第一次、第二次革命のいずれにおいても、會員の犠牲があった。勵志会の會員はみな義を感じて集まった組織で、団体が自らを自讃したことはなないため、最も純潔な団体であると言える。その後、留学生の人数が増え、各会が次々と組織され、ついに党派が生まれた。〕

第二節 勵志会の會員

1901年1月1日、勵志会は上野精養軒で新年の懇親会を開催している。その日の様子を、馮自由は以下のように述べている。

莅会者有來賓菲律賓獨立軍代表鵬西，日本進歩党代表犬養毅，横浜興中会會員尤列、翟美徒及該会會員賁元丞、張鎡緒、錢承志〔誌〕、富士英、曹汝霖、王寵惠、沈琨、陸世芬、吳振麟、張奎、夏循壇、馮閱模、嵇慕陶、雷奮、高淑琦、陳梲、呂烈煌、張〔楊〕廷棟、葉基楨、金邦平、張繼、薛錦標、唐才質、廖世綸、章宗祥、王宰善、閔柄榮等三十余人。特拍照以志紀念，甚盛事也。¹⁸

〔参加者には、來賓のフィリピン獨立軍の代表鵬西、日本進歩党の代表犬養毅、横浜の興中会會員尤列、翟美徒、そして、勵志会會員〔會員名略〕等30余名がいた。記念のために集合写真を撮り、甚だ盛大な行事であった。〕

まず注目したいのは、参加者の中に、犬養毅や興中会の會員尤列¹⁹等が出席した事実によって、勵志会は孫文派、及び日本のアジア主義者となつてつながりがあることがわかる、と

¹⁷ 章宗祥「任闕齋主人自述」中国人民政治協商会全國委員会文史資料委員会編『文史資料存稿選編・教育』中国文史出版社、2002年、927頁。

¹⁸ 前掲馮自由『革命逸史』初集、99頁。鵬西とは、フィリピン獨立運動に携わったボンセ・リチャウコという人物であり、当時、武器、弾薬を調達するために日本に派遣された。

¹⁹ 尤列、また尤列（1865—1936）は、字が令季・惟孝・少統、小園・吳興季子と号する。広東省順徳の人。広州算学館で修業。排滿革命を提唱し、革命運動に身を投じる。南洋シンガポールで閩南日報を発行し、革命を宣伝する。孫文、陳少白、楊鶴齡とともに「四大寇」と呼ばれる。前掲馮自由「興中会四大寇訂交始末」「尤列事略」「尤列事略補述一」「尤列事略補述二」『革命逸史』初集、8-9、26-41頁。

いうことである。何より、戢翼翬、張鎡緒をはじめとした 27 名の勵志会会員の姓名が記録されているので、この資料は勵志会会員に関する最も重要な資料であると言える。この資料によれば、勵志会の会員構成も何うことができるだろう。

勵志会の会員構成について、張玉法は 42 名を提示し、沈渭濱は范源廉と蔡鏗の 2 名を加え、44 名としたが、尚小明はさらに訂正・補足し、43 名になった²⁰。しかし、その全貌についてはまだ不明なところが多く残っている。たとえば、先行研究に整理された会員の留学履歴があまり簡略であり、嵇侃（即嵇慕陶）、呂烈煌、薛錦標、関柄榮に関する詳細な情報が欠けている。なお、葉瀾²¹、董鴻禱²²、秦毓璠²³の留学経歴から見ると、彼らが勵志会に加入した可能性は高くないため、勵志会の会員名簿から削除すべき氏名も見える²⁴。要するに、会員の多くの日本留学歴なども明らかになっておらず、会員名簿の情報は、訂正が必要な箇所が少なくない²⁵。

そこで、筆者は従来の研究を踏まえ、勵志会会員の日本での学歴（在籍学校及時期）や、彼らが受給した留学費用の分類を書き加えた上で、嵇侃、薛錦標、劉慶雲、呉祖蔭、藍天蔚²⁶についてはその個人情報に補充し、李宗棠の『東游記念第一考察学務日記』に基づき、呂烈煌の字、出身、教育経歴などの空白を埋め²⁷、下記表 2-1「勵志会の会員名簿」を作成した²⁸。

²⁰ 前掲張玉法『清季の革命団体』、253 頁。前掲沈渭濱『孫中山と辛亥革命』、152 頁。特に、尚小明「同盟会成立前留日学界革命団体の衍変」（90 頁）は、勵志会の会員として劉慶雲、呉祖蔭、万廷献、藍天蔚を補足するとともに、汪榮宝、葉瀾、董鴻禱、秦毓璠、良弼を削除したという結論が筆者に手がかりを提供してくれた。

²¹ 葉瀾、字が青漪、江蘇仁和人。『蒙學報』選述を務めた。蔡元培日記 1901 年 10 月 5 日条（中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第 15 卷「日記」、浙江教育出版社、1998 年、358 頁）によれば、この日、葉瀾と葉瀾が日本留学に赴いた。1902 年、千葉専門医学校に入学し、卒業できず中退した。在日中、葉瀾は董鴻禱、秦毓璠とともに青年会を組織したが、勵志会との関係が確認できない。

²² 董鴻禱、字が恂士、浙江仁和人。湖北自強学堂を卒業し、1900 年、日本遊学してまもなく帰国、1901 年、使館官費生として東京公使館東文学堂に入り、1902 年 1 月、早稲田大学邦語政治科に入学し、1906 年卒業。董は銭恂の女婿であり、青年会の発起者の一人でもある。葉瀾と同じく、董鴻禱は留学に來た時、勵志会の活動が次第に衰退の道を辿り、彼と勵志会との接点も見当たらない。

²³ 秦毓璠は「天徒自述（節選）」（前掲『近代史資料』総 111 号、141-142 頁）に、勵志会の宗旨などを述べたが、自分が勵志会に参加していたような話は一度もしなかった。勵志会の会員ではない可能性が高いと筆者は考えている。

²⁴ 尚小明「同盟会成立前留日学界革命団体の衍変」（90 頁）は、汪榮宝、葉瀾、董鴻禱、秦毓璠、良弼の 5 名を勵志会の会員から削除すべきだと主張したが、良弼以外の 4 名についてその解明過程と関連資料を公開していない。筆者はそのうち葉瀾、董鴻禱、秦毓璠の 3 名を賛同した上で、汪榮宝と良弼について異なる意見を持っている。

²⁵ たとえば、戢翼翬は成城学校（張説）、高等師範学校（沈説）には入学したこともなく、東京専門学校（早稲田大学の前身）で学んでいた。

²⁶ 家庭来稿「事略」（張難先『湖北革命知之録』上海商務印書館、1944 年、25 頁）には、劉慶雲、呉祖蔭が勵志会を組織することに言及した。章宗祥「任関斎主人自述」（前掲『文史資料存稿選編・教育』、927 頁）には、藍天蔚が勵志会会員のことを指摘した。

²⁷ 李宗棠『東游記念第一考察学務日記』、1901 年、50 頁、東京都立中央図書館実藤文庫蔵。

²⁸ 郭夢奎「清末中国人日本留學生の初期活動について——勵志会と訳書彙編社を中心に」（孫安石・大里浩秋編著『中国人留學生と「国家」・「愛国」・「近代」』東方書店、2019 年、30-32 頁）に旧版の「勵

表 2-1 勵志会の会員名簿

NO.	姓 名	字	出身	学 歴 (注1)	留学 費用	備 考
1	戢翼翬	元丞	湖北 房県	嘉納塾（1896—1899）→亦楽書院（1899）→ 東京専門学校（1899—1902）→早稲田大学政 治科（1902、推選校友）	使館 官費	自立軍に関与/ 『国民報』創刊 者/青年会会員
2	呂烈煌	星如	安徽 旌徳	嘉納塾（1896—1899）→亦楽書院（1899）→ 東京専門学校（1900）→明治法律学校（1901 —？）	使館 官費	清国外務部通訳 官
3	哲 侃	慕陶	浙江 湖州	杭州蚕学館（1897）→山本憲私塾（1897）→ 競進社蚕業講習所（1898）→西ヶ原蚕業講習 所（1899）→東京高等蚕糸学校（1899— 1901）	浙江 官費	清国最初の蚕業 留学生/帰国後、 杭州蚕学館に就 く
4	陸世芬	仲芳	浙江 仁和	浙江求是書院→日華学堂（1898—1899）→第 一高等学校（1899—1900）→東京高等商業学 校（1900—1903）	浙江 官費	
5	陳 楓	楽書	浙江 義烏	浙江求是書院→日華学堂（1898—1899）→第 一高等学校（1899—1902）→東京帝国大学工 科選科造兵学科（1902—1904）	浙江 官費	清 華 学 校 （ 東 京）の教習
6	錢承誌	念慈	浙江 仁和	浙江求是書院→日華学堂（1898—1899）→第 一高等学校（1899—1901）→東京帝国大学法 科選科政治学科（1901—1903）	浙江 官費	
7	呉振麟	止欺	浙江 嘉興	上海育才書塾→日華学堂（1898—1899）→第 一高等学校（1899—1901）→東京帝国大学法 科選科政治学科（1901—1903）	私費→ 浙江 官費	日本貴族院議員 の伊沢修二の女 婿
8	劉慶雲	伯剛	湖北 漢陽	不明→成城学校（1899—1900）→陸軍士官学 校（1900—1901）	湖北 官費	即劉道仁

「志会の会員名簿」が掲載された。

第二章 勵志会の成立とその活動の全容

9	呉祖蔭	念慈	湖北 武昌	不明→成城学校（1899—1900）→陸軍士官学校（1900—1901）	湖北 官費	
10	傅慈祥	良弼	湖北 潜江	両湖書院/湖北武備学堂→成城学校（1899—1900）→陸軍士官学校（1900）	湖北 官費	自立軍蜂起で殺害される
11	呉禄貞	受卿/ 綏卿	湖北 雲夢	湖北武備学堂→成城学校（1899—1900）→陸軍士官学校（1900—1902）	湖北 官費	自立軍に関与
12	章宗祥	仲和	浙江 烏程	南洋公学→日華学堂（1899）→第一高等学校（1899—1901）→東京帝国大学法科選科政治学科（1901—1903）	南洋 官費	
13	富士英	意城	浙江 海塩	南洋公学→日華学堂（1899）→東京専門学校（1899—1902）→早稲田大学政治科（1902—1906）	南洋 官費	
14	雷 奮	繼興	江蘇 華亭	南洋公学→日華学堂（1899）→東京専門学校（1899—1900）	南洋 官費	青年会会員
15	楊蔭杭	補塘	江蘇 無錫	南洋公学→日華学堂（1899）→東京専門学校（1899—1900）→早稲田大学法律科（1906 頃—1907）	南洋 官費	
16	楊廷棟	翼之	江蘇 吳県	南洋公学→日華学堂（1899）→東京専門学校（1899—1900）	南洋 官費	青年会会員
17	葉基楨	希賢	江蘇 吳県	不明→東京帝国大学農科（1900 頃—1904）	私費	辻武雄とともに日本留学
18	鄭葆丞	幼周	福建 閩県	北洋水師学堂→日華学堂（1899）→東京帝国大学工科選科土木工学科（1899—1900）	北洋 官費	自立軍蜂起で殺害される
19	高淑琦	毅韓	浙江 錢塘	北洋水師学堂→日華学堂（1899）→東京帝国大学工科選科土木工学科（1899—1902）	北洋 官費	
20	蔡成煜	蔚文	直隸 天津	北洋水師学堂→日華学堂（1899）→東京帝国大学工科選科応用化学科（1899—1900）	北洋 官費	自立軍蜂起で殺害される
21	張瑛緒	執中	直隸 天津	北洋水師学堂→日華学堂（1899）→東京帝国大学工科選科機械工学科（1899—1902）	北洋 官費	

第二章 勵志会の成立とその活動の全容

22	沈 珉	朗斎	直隸 静海	北洋水師学堂→日華学堂（1899）→東京帝国 大学工科選科機械工学科（1899—1902）	北洋 官費	
23	黎 科	沢舒	広東 香山	北洋大学堂→日華学堂（1899）→東京帝国大 学工科選科土木工学科（1899—1900）	北洋 官費	自立軍蜂起で殺 害される
24	張 奎	星五	江蘇 上海	北洋大学堂→日華学堂（1899）→東京帝国大 学工科選科応用化学科（1899—1902）	北洋 官費	
25	金邦平	伯平	安徽 黟県	北洋大学堂→日華学堂（1899）→東京帝国大 学農科大学（1899—1900）→東京専門学校 （1900—1902）→早稲田大学政治科（1902— 1905）	北洋 官費	青年会に加入し てまもなく退会
26	馮閔模	歴甫	江蘇 崇明	不明→東京公使館東文学堂（1899—1900）→ 東京同文書院（1900—1901）→東京高等工業 学校応用化学科（1901—1902）→東京帝国大 学法科選科政治学科（1902—1909）	使館 官費	
27	薛錦標		広東 香山	不明→成城学校（1899—？）→東亜商業学校 （1901—？）→市加古阿麻大学法政科（？— 1912？）	私費	官費生としてア メリカに派遣さ れる
28	夏循塏	爽夫	浙江 杭州	不明→亦楽書院（1900）→東京法学院大学 （1900 頃—1904）	湖北 官費	
29	范源廉	静生	湖南 湘陰	湖南時務学堂→南洋公学→東京高等大同学校 （1899—1900）→東京商業学校（1901—1902） →高等師範学校（1902—1903）→法政大学 （1903—？）	私費	自立軍蜂起に巻 き込まれる/法政 速成科
30	蔡 鏐	松坡	湖南 邵陽	湖南時務学堂→南洋公学→東京高等大同学校 （1899—1900）→東京商業学校（1901）→成城 学校（1901—1902）→仙台第二連隊（1902— 1903）→陸軍士官学校（1903—1904）	私費	原名は蔡良寅
31	唐才質	法塵	湖南 瀏陽	湖南時務学堂→南洋公学→東京高等大同学校 （1899—1900）→東京商業学校（1901）	私費	唐才常の三弟/自 立軍に関与/保皇 会に参加

第二章 勵志会の成立とその活動の全容

32	秦鼎彝	力山	湖南 長沙	湖南時務學堂→東京高等大同學校（1899—1900）	私費	自立軍の大通蜂起をリード/『国民報』創刊者
33	王璦芳	小宋	湖北 恩施	兩湖書院→東京同文書院（1899—1900 末）→東京高等商業學校（1901—1905）	湖北 官費	『湖北學生界』編集者
34	程家樞	韻孫	安徽 休寧	兩湖書院→東京同文書院（1899—1901 末）→東京帝國大學農科（1902 頃—1904）	湖北 官費	青年會會員
35	藍天蔚	秀豪	湖北 黃陂	湖北武備學堂→成城學校（1899—1901）→陸軍士官學校（1901—1902）	湖北 官費	拒俄義勇隊の隊長
36	良弼 (注 2)	賁臣	清宗 室	成城學校（1899—1901）→陸軍士官學校（1901—1902）	湖北 官費	
37	廖世綸	綬青	江蘇 嘉定	上海東文學社→東京同文書院（1901—1902）→東京高等工業學校（1902—1904）	私費	
38	沈翔雲	虬齋	浙江 烏程	湖北武備學堂（除名）→成城學校（？）(注 3)	私費	自立軍に關与/『国民報』創刊者/青年會會員
39	張 繼	懿孫	直隸 滄縣	保定蓮池書院→東京專門學校（1900—1902）→早稻田大學（1902—1903 頃、推選校友）	私費	1899 年、中島裁之とともに日本遊学/青年會會員
40	王宰善	釜士	江蘇 上海	不明→東京高等商業學校（1900—1903）	私費	育材書塾校長王植善の従兄弟
41	曹汝霖	潤田	江蘇 上海	經元善家塾→漢陽鐵路學堂→東京法學院大學（1900—1904）	私費	
42	王寵惠	亮畴	廣東 東莞	香港皇仁書院→北洋大學堂→東亞商業學校（1901 頃）→イエール大學（1902—1904）	私費	南洋公學教習/『国民報』撰述
43	汪榮宝	衰甫	江蘇 元和	南菁書院/南洋公學特班→慶應義塾大學（1902 頃）→早稻田大學（1903 頃、推選校友）	私費	青年會會員/『江蘇』編集者
44	関柄栄 (注 4)	不明	不明	不明	不明	

第二章 勵志会の成立とその活動の全容

出典：張玉法『清季の革命団体』（中央研究院近代史研究所、1975 年初版、253-255 頁）を参照しつつ、日本外務省記録、台湾中央研究院近代史研究所檔案館藏外務部檔案、日華学堂の学堂日誌、『東亜同文会報告』第 5 回—第 17 回、清国留学生会館幹事『清国留学生会館報告』第 1 次—第 5 次（東京並木活版所、1902 年—1905 年）、成城学校留学生部『留学生部出身者名簿』（軍人会館出版部、1937 年）、『東京帝国大学一覧』（1898 年—1908 年）、郭榮生校補『日本陸軍士官学校中華民国留学生名簿』（龍溪書舎、2014 年復刻版）、『東京高等工業学校一覧』（1901 年—1907 年）、『東京高等商業学校一覧』（1899 年—1903 年）、『東京専門学校政学部学費舍費月俸領取簿』（早稲田大学大学史センター）、『大正 4 年 11 月調 早稲田大学校友会会員名簿』、明治大学百年史編纂委員会編『明治大学百年史』第 1 巻史料編（明治大学、1986 年）、松本亀次郎『中華留学生教育小史』（東西書房、1931 年）、張難先『湖北革命知之録』（上海商務印書館、1944 年）、曹汝霖著、曹汝霖回想録刊行会編訳『一生の回憶』（鹿島研究所出版会、1967 年）、馮自由『中国革命運動二十六年組織史』（上海商務印書館、1912 年）、馮自由『革命逸史』（中華書局、1981 年）、張繼『張溥泉先生回憶録・日記』（沈雲龍主編『近代中国史料叢刊三編』第 3 輯、文海出版社、1985 年）、湯志鈞編『陶成章集』（中華書局、1986 年）、林逸『民国蔡松坡先生鏢年譜』（台湾商務印書館、1987 年）、皮明庶等編『吳祿貞集』（華中師範大学出版社、1989 年）、天野郁夫『旧制専門学校論』（玉川大学出版部、1993 年）、歐陽哲生等編『范源廉集』（湖南教育出版社、2010 年）、趙統『南菁書院志』（上海書店出版社、2015 年）などの資料を利用し、修正加筆して作成。なお、本名簿の順序は会員の日本到着年月による。

注 1：（ ）内は在籍時期、？は日付不明を指す。

注 2：陶成章『浙案紀略』（湯志鈞編『陶成章集』中華書局、1986 年、332 頁）において、良弼が勵志会の会員であることが言及されている。また、良弼の成城学校入学について裏話もある。「今般清国皇族愛新覺羅良弼の人來りタルにより、同人を学習院に入學せしめ度も、最早成城学校に内決したる様子なり、何とか致方なきやとの事なり」とあるように、佐田弘二郎と張厚琨は良弼を学習院に入學させたいが、近衛篤磨院長が 2 人の運動を制止した。近衛篤磨日記刊行会編『近衛篤磨日記』第 3 巻、鹿島研究所出版会、1968 年、13 頁。

注 3：沈翔雲の派遣と留学履歷について、本章の第四節「勵志会会員の沈翔雲の日本「留学」」を参照。

注 4：関柄榮は、1901 年の勵志会の新年会に出席したが、彼に関して多くの資料を調べても見当たらないので、表の最後に置いた。

上記「勵志会の会員名簿」によれば、勵志会の会員は総数 44 名であったことがわかる。彼らは 1896 年から 1902 年までの 6 年の間に相次いで日本に赴いた。この表 2-1 から読み取れる勵志会の特徴は以下のようにとまとめることができる。

第一には、勵志会の会員の出身は特定の省に集中しておらず、全国の各省の留学生により構成されていたことである。具体的に言うと、江蘇省、浙江省各 10 名、湖北省 7 名、湖南省、直隸省各 4 名、安徽省、広東省各 3 名、福建省 1 名、清宗室 1 名からなっている。

た。清末期、日本に留学した多くの留学生の出身は、浙江省、江蘇省、湖北省、直隸省が多くを占めた。日本に留学生を派遣する事業に最も熱心であったのが、江蘇省、浙江省、湖北省などであったことを考えれば、このような会員構成は極めて妥当な構成であったと言える。

周知の通り、中国人は郷土意識が非常に強い。明清時代においては、各省の会館という組織が非常に発達していた。会館は異郷で仕事や生活をする人々にとって、故郷との絆を維持するのみならず、現地での支援を受けることができる重要な血縁組織であった²⁹。それゆえ、留学生よりも早く日本に定住していた清国人（華僑、商人など）は、すでに会館を設立していた³⁰。しかし、中国人留学生の状況は、華僑とはまた大いに異なる。1900 年前後に東京にいた中国人留学生は、短期の武備学生（軍事留学生）を含め百数十人しかおらず³¹、中国人留学生の中で同郷会を組織する契機はまだ不十分であった³²。しかし、1902 年からは日本への留学生が増えていくに伴い、各省の留学生は出身省を中心とした郷土中心の同郷会を次々と組織することとなった。

西洋の新たな知識に接した中国人留学生に、従来の方言や習慣などの各省を単位とする出身地の限界を乗り越える意識が潜在的に備わっていたことも重要であろう。勵志会の活動は、最初の段階では留学生同士の親睦活動を主にするものであったが、のちに雑誌『訳書彙編』の刊行という出版活動を展開した際には、すでに出身の省を超え、近代的な意味においての国民国家を意識した近代化の完成という目標意識が強く芽生えていたと考えられ、勵志会は中国の出身省という限界を乗り越えた、おそらく最初の団体になることができたと評価できる。

第二の特徴は、勵志会の会員は、東京の各校に分散していたが、その会員構成が日華学堂 17 名、成城学校 8 名、東京高等大同と東京同文書院各 4 名、亦楽書院 3 名であったことが示すように、日華学堂の留学生が圧倒的に多かった。言い換えれば、勵志会と日華学堂の学生と深く関わりを持っていたことの裏付けになる。

²⁹ (米) 孔飛力 (Philip A. Kuhn) 著、李明欽訳『他者中的華人——中国近現代移民史』江蘇人民出版社、2016 年、8-11 頁。原書は Philip A. Kuhn, *Chinese Among Others: Emigration in Modern Times*, NUS press, 2008.

³⁰ 中華会館は広東会所、三江会所等の既存の商業団体を整理・調整して新しく成立した統一組織である。汪向榮「神戸理事府」『日本教習』生活・読書・新知三聯書店、1988 年、284-288 頁。内田直作「第二部 中華会館」『日本華僑社会の研究』同文館、1949 年。伊藤泉美『横浜華僑社会の形成と発展——幕末開港期から関東大震災復興期まで』山川出版社、2018 年。

³¹ さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』くろしお出版、1970 年、544 頁。李喜所「清末留日学生人数小考」『文史哲』1982 年第 3 期。

³² 「留学生会館之起源」によると、この時期、留学生界において、同窓会や懇親会のような小団体が存在している。清国留学生会館幹事『清国留学生会館第一次報告』東京並木活版所、1902 年 10 月、1-3 頁。

第一章で述べたように、19世紀末の中国人留学生は嘉納塾、成城学校、日華学堂、東京（横浜）高等大同学校、東京同文書院などの複数の予備学校に分散して生活しており³³、互いの交際も多くはなかった。中国人留学生らは、このように東京各地に分散し、交流の少ない現状を変え、互いの絆を深め、励まし合うことを目的にして勵志会を成立させたのである。

第三には、勵志会は、会員の個々人の政治的立場を問わず、政治的な活動も積極的に行わない団体であったということである。1900年前後の中国人留学生は、西洋の新知識と理論に初めて接し、新たな政治制度や選挙制度などに関連する知識を吸収したが、その当初から「革命派」、または「立憲派」の違いがまだはっきりと区別できるものではなかった。

しかし、後になると会員の経歴に基づいて二つの派に分かれるようになる。すなわち、穏健派（のちの改革派、立憲派）は陸世芬、曹汝霖、章宗祥、王瓊芳、富士英らであり、君主立憲を主張した。特に、1901年に清国政府が張之洞と劉坤一の意見を採択し³⁴、日本と欧米各国への「遊学」を推奨するとともに、留学生が試験に合格すれば、科挙試験の進士と挙人の地位に当たる資格を与え、官位も取れるようにしたことで、穏健派はさらに勢力を伸ばした。たとえば、章宗祥、吳振麟らは、清国官吏の日本視察に積極的に協力し、派遣された日本事情を見学する遊歴官の通訳と案内役を多く務めていた³⁵。

一方、急進派は耿翼翼、吳祿貞、傅慈祥、鄭葆丞、黎科、蔡成煜、沈翔雲等を含め、その中には1900年8月の唐才常の自立軍蜂起に関与した会員も少なくなかった³⁶。この事件後、日本に留学する中国人留学生の人数も急増し、中国人留学生界の政治をめぐる考える方も複雑になり、耿翼翼、金邦平、程家樸、張継らは次第に穏健派からかけ離れ、

³³ 「清国留学生の現在及び将来」『時事新報』1899年8月6日。

³⁴ 「交通政治人才為先導旨籌議摺」、「遵旨籌議变法謹擬整頓中法十二摺摺」、「遵旨籌議变法謹擬採用西法十一摺摺」、「請專籌巨款舉行要政片」。いわゆる、「江楚会奏变法三摺」である。劉坤一・張之洞撰『江楚会奏变法三摺』（沈雲龍主編『近代中国史料叢刊續編』第48輯、文海出版社、1977年）を参照。また苑書義等主編『張之洞全集』第2冊奏議（河北人民出版社、1998年、1393-1452頁）に簡体字に変換され収録されている。

³⁵ 前掲馮自由『革命逸史』初集、102頁。また、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081626400（第164、165画像）、「5. 帝国大学ニ在学清国留学生本邦ニ於ケル諸制度視察ニ関スル件」、在本邦清国留学生関係雜纂/雑之部 第一卷（B-3-10-5-3_6_001）（外務省外交史料館）。

³⁶ 自立軍蜂起は1900年8月、光緒帝を擁立するため、唐才常が計画した武装蜂起を指している。実際に、蜂起直前、情報漏洩で湖広総督張之洞が即座に鎮圧した。また庚子漢口之役、自立軍起義とも呼ばれた。本論文は一貫性を保つために、自立軍蜂起を使用している。事件の詳細について、前掲『自立会史料』11-23頁は、馮自由により書かれた自立軍に関する記事をまとめ、「自立会起事始末」というタイトルをつけたので参照されたい。馮自由はまた『中華民国開国前革命史』上編（良友印刷公司、1928年）の「庚子唐才常漢口之役」という箇所、「自立軍会章」など文書を提示し、蜂起の経緯を述べた。張難先『湖北革命知の録』（上海商務印書館、1944年、19-42頁）にも、自立軍蜂起（庚子漢口之役）の経緯が詳しく記された。

1902年冬に葉瀾、秦毓澐とともに東京青年会（図2-1）を結成することになった³⁷。この東京青年会こそが、民族主義を掲げ、破壊主義を目的とした初めての「革命」団体と称された。東京青年会の結成は、勵志会の事実上の分裂を意味したが、二つの団体が対立することを意味したわけではなかった。後述のように、二つの団体の会員がともに、清国留学生会館の運営に参加しているのはその一例であった。

図2-1 壬寅年（1902年）東京青年会成立の写真



（後列）胡景伊、金邦平、□□□、汪榮宝、蘇子毅〔即蘇曼殊〕、薩端、王嘉駒〔即王嘉渠/王家駒〕、蔣方震、華鴻、嵇鏡、吳綰章、□□□、紐璦、□□□、□□□

（前列）謝曉石、潘贊化、秦毓澐、陳由己〔即陳独秀〕、熊慕蓮、周宏業、張肇桐、□□□、董鴻禔、董緝堂
出典：馮自由「壬寅年東京青年会成立攝影」『逸経』第31期、1937年、30頁。
注：この写真は、青年会の中心人物である秦毓澐が所蔵していたものである。秦が1937年4月5日亡くなった後、馮自由は4月21日に弔問に訪れ、秦毓澐の息子秦鑑源からこの写真をもらった。秦毓澐は写真の裏に名前を記し忘れた人物を□□□で表記した。

1903年初、勵志会は、政治信条の面においては立憲派寄りの合計9章43条の新章程を改正し、『訳書彙編』に掲載している。以下は、改正後の章程の「第一章 綱領」である。

第一章 綱領

第一条 研究実学以爲立憲之予備

³⁷ 前掲馮自由『革命逸史』初集、102頁。金邦平が青年会に参加してまもなく退出した。

第二条 養成公德以為國民之表率

第三条 重視責任以為辨辦之基礎³⁸

〔第一章 綱領。第一条 立憲の準備のために実学を研究する。第二条 國民の手本となるために公德を養成する。第三条 やり方の基礎とするために責任を重視する〕

特に第一条に書かれるように、この時期の勵志会は組織の改組に伴い、立憲の主張を明確に掲げ、それを実現するために、実学の研究を提唱していたことが明らかとなる。

最後、勵志会の解散については、1904年3月29日付の『警鐘日報』に掲載された社説「論立会之理由」では、勵志会の解散時期の項目下に「未久」（間もない）が明記された³⁹。管見の限りでは、勵志会の解散に関するその他の新聞記事、回顧録、または檔案資料が見当たらないことで、現段階では『警鐘日報』の記事に従い、勵志会は3月29日を前夜した時期に解散したと考えておく⁴⁰。

第三節 勵志会の活動

勵志会の最も重要な活動は、雑誌を刊行出版することであった。勵志会は中国国内に新たな知識を紹介するために、当時の日本で出版された最新の政治、法律、行政に関連する書籍を翻訳し、雑誌『訳書彙編』を発行することを目指した。勵志会と『訳書彙編』の関連性については、1900年7月に出版された『和文漢読法』（梁啓超原著）の奥付、及び同書の最後に付された「訳書彙編簡明章程」において明確に記されている。

勵志会は翻訳や出版などの活動を活発に実施するために、勵志会訳書処（図2-2）という部局を設置していた。前述した『和文漢読法』⁴¹とは、梁啓超の原著に基づいて勵志会

³⁸ 「勵志会章程（壬寅十二月改正）」『訳書彙編』第2年第12期、1903年3月13日。「勵志会章程」の中国語原文は本論文の資料編「勵志会章程」を参照。

³⁹ 『警鐘日報』、1904年3月29日。

⁴⁰ 桑兵の論述では、『警鐘日報』の「論立会之理由」の掲載日付が間違っており、3月9日ではなく、3月29日の記事としており、本論文もそれに従った。前掲桑兵『清末新知識界の社团与活動』、155頁。

⁴¹ 『和文漢読法』に関する研究は豊富であるが、主に日本語教育、1900年前後の日本文化の受容、梁啓超の日本観などの方面から分析されている。中でも、『和文漢読法』の版本を考察した研究として、夏曉虹「和文漢読法」（清末小説研究会『清末小説から』第53号、1999年4月）、陳力衛「梁啓超『和文漢読法』における「和漢異義字」について——『言海』との接点を中心に」（沈国威編著『漢字文化圈諸言語の近代語彙の形成——創出と共有』関西大学出版部、2008年）、李海「梁啓超と『和文漢読法』（この文は、最初に2011年10月無窮會の『東洋文化』復刊第107号に、「船津輪助蔵『和文漢読法』と梁啓超」というタイトルで掲載され、さらに同氏『日本亡命期の梁啓超』（桜美林大学北東アジア総合

会員の沈翔雲により編輯印行された日本語学習書であり、励志会が増補版に関わった出版物の成果の一つとして数えられる書物である。

図 2-2 沈翔雲編、励志会増補『和文漢読法 附訳書彙編叙例』の奥付



出典：沈翔雲編、励志会増補『和文漢読法 附訳書彙編叙例』励志会訳書処、1900年7月、奥付（李長波編集・解説『近代日本語教科書選集』第7巻、クロスカルチャー出版、2010年初版）。

一方、「訳書彙編簡明章程」によれば、

〔この雑誌は〕毎月1冊、一年12冊、そして毎冊50頁を基準として編集する計画であり、毎月1日に出版する。第1冊は9月1日に発行される予定である。〔中略〕郵便の連絡先は、日本東京本郷区東片町一百四十五番地、訳書彙編発行所である。間違いないきよう。光緒二十六年五月、同人で公啓。⁴²

という条文が書かれている。

研究所、2014年）に収録された）がある。この中、陳力衛と李海は励志会版『和文漢読法』を触れたが、主に言語学の視点から検討した。また陳力衛「「同文同種」的幻影——梁啓超『和文漢読法』と日本辞書『言海』」（同『東来東往——近代中日間の詞語概念』社会科学文献出版社、2019年）は近年の関連研究を増補している。

⁴² 前掲『和文漢読法 附訳書彙編叙例』、「訳書彙編簡明章程」、55頁。（一 是編按月一冊。全年十二冊。每冊以五十頁為率。每月初一日出書。第一冊定於九月初一日發行〔中略〕一 各處來函。請徑寄日本東京本郷区東片町一百四十五番地。訳書彙編發行所。不悞。光緒二十六年五月。同人公啓。）

これによって、勵志会と『訳書彙編』の関係が明らかとなる。まず、勵志会訳書処と訳書彙編発行所の住所は同じく日華学堂の所在地、当時の東京本郷区東片町 145 番地に置かれた⁴³。したがって、日華学堂にいた中国人留學生が翻訳活動に中心的に携わったと想定することは不思議ではないだろう。この時期、発行所の名称は二つが記されているが、勵志会訳書処と訳書彙編発行所は同じ組織であったと思われる。これは、勵志会が『訳書彙編』の最初の編輯と発行機関であった根拠である⁴⁴。

さらに、『和文漢読法』の編輯と印行者は沈翔雲と署名され、『訳書彙編』の編輯兼発行者は日本人の坂崎斌⁴⁵に変わるが、両方の住所はいずれも東京芝区愛宕下町 4 丁目 8 番地であった⁴⁶。そのみならず、坂崎斌は沈翔雲版の『和文漢読法』を校正して跋文を書いた人物である⁴⁷。この点を見ると、坂崎斌と沈翔雲の二人は単なる偶然ではなく、雑誌の発行に名義を貸し出すほど親密な関係であった⁴⁸、と推測される。これらのことから勵志会系統と訳書彙編発行所は、ほぼ同一機関であったと言える。

そうだとすると、中国人留學生が編集した雑誌であるにもかかわらず、なぜ発行人を日本人の坂崎斌の名義にしたのだろうか。それは、日本政府の新聞紙条例の改正からその理由を類推することができる。

1871 年 12 月に頒布された明治政府の『新聞紙条例』において、「第六条 内国人ニシテ満二十歳以上ノ男子ニ非サレハ発行人印刷人とナルコトヲ得ス」⁴⁹、という内容の条文が見える。すなわち、この条例によって日本国内で新聞紙を発行するためには、その発行人、印刷人として日本人の登録が必要となったのである。

ところが、1899 年 2 月には、この第 6 条については、「年齢満二十年以上ニシテ帝国内ニ居住スル者ニアラサレハ発行人編輯人印刷人トナルコトヲ得ス」⁵⁰という改正が加わり、

⁴³ 前掲『和文漢読法 附訳書彙編叙例』、「訳書彙編簡明章程」、55 頁。『日華学堂日誌第一冊』、1899 年 3 月 30 日。

⁴⁴ 包天笑『鉅影楼回憶録』（香港大華出版社、1971 年、161-162 頁）では、『勵志彙編』は勵志会により発行されたとするが、包は『勵志彙編』と『訳書彙編』を取り違えたと思われる。詳細は、本論文の第六章第三節「蘇州勵学訳社と『勵志彙編』」を参照。

⁴⁵ 坂崎斌（1853—1913）、明治時期の小説家、ジャーナリスト、自由民権運動家。号は坂崎紫淵。土佐藩出身。江戸生まれ。1880 年、『高知新聞』の主編になり、自由党に加入し、自由民権運動に参加。晩年、維新史料編纂局の編纂委員を務めた。洋々道人（高木伊三）『逝去者人物論』金鱗堂、1888 年。『新訂政治家人名事典 明治～昭和』日外アソシエーツ、2003 年。

⁴⁶ 前掲『和文漢読法 附訳書彙編叙例』と『訳書彙編』第 1 期（1900 年 12 月 6 日）の奥付を参照。

⁴⁷ 前掲『和文漢読法 附訳書彙編叙例』、52 頁。

⁴⁸ 1887 年に頒布された『新聞紙条例』の第 11 条によれば、新聞紙の発行人、編輯人、印刷人に署名される者は、全ての責任を負うべきである。「御署名原本・明治二十年・勅令第七十五号・新聞紙条例改正」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A03020017300、御署名原本・明治二十年・勅令第七十五号・新聞紙条例改正（国立公文書館）。

⁴⁹ 「御署名原本・明治二十年・勅令第七十五号・新聞紙条例改正」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. A03020017300、御署名原本・明治二十年・勅令第七十五号・新聞紙条例改正（国立公文書館）。傍点が筆者による。

⁵⁰ 「御署名原本・明治三十二年・法律第五号・新聞紙条例第六条中改正」、JACAR（アジア歴史資料セン

同年7月から正式に施行されることとなった⁵¹。これは、1900年12月に『訳書彙編』が発行される際には、外国人であっても新聞紙、または雑誌を発行することが可能であったことを意味する⁵²。

しかし、勵志会が依然として日本人の坂崎斌を招き入れ、『訳書彙編』の発行人として登録しているのは、なぜだろうか。なかなか具体的な理由を説明することができないものの、日本人を発行人として登録することによって、勵志会は日本と清国の両政府から雑誌の発行を制限される危険を避けることができる、という考えがあったかもしれない。

また、「訳書彙編簡明章程」は1900年5月に定められており、『訳書彙編』は同年9月には第1期が発行される予定であったが、勵志会の会員数々が同年8月の自立軍蜂起という事件に巻き込まれ、当初の発行計画がやむを得ず変更されたという経緯もあったであろう。結局、訳書彙編発行所も新しい場所に移設し⁵³、『訳書彙編』の第1期は、当初の計画から遅れ、1900年12月ようやく発行された。

『訳書彙編』は、勵志会の出版活動を代表する重要な雑誌であり、その誌面には勵志会の活動の断片がわかるような事実がいくつか記されている。『訳書彙編』第1期に掲載された「簡啓」（布告、図 2-3）によれば、勵志会は以下のような三つの業務を行っていたことがわかる。

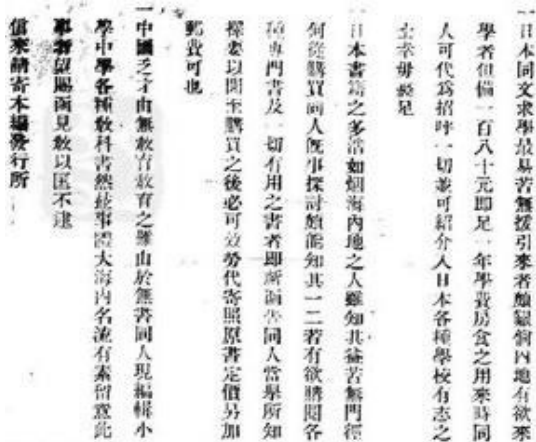
ター）Ref.A03020370000、御署名原本・明治三十二年・法律第五号・新聞紙条例第六条中改正（国立公文書館）。傍点が筆者による。

⁵¹ 「御署名原本・明治三十二年・勅令第百八十六号・明治三十二年法律第五号（新聞紙条例第六条中改正）施行期日」、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.A03020399100、御署名原本・明治三十二年・勅令第百八十六号・明治三十二年法律第五号（新聞紙条例第六条中改正）施行期日（国立公文書館）。

⁵² 実は、1902年4月の『訳書彙編』第2年第4期から、編輯兼発行人が坂崎斌から胡英敏に変わることになった。徐志民「晚清留日学生報刊与中日関係」（『日本学』第13輯、世界知識出版社、2006年、151頁）は、『新聞紙条例』の制定から日本人が留学生雑誌の発行人となる理由を検討しているが、条例の改正が留学生雑誌への影響についてまだ検討の余地がある。

⁵³ 新しい場所は東京牛込区喜久井町20番地と東京麹町区飯田町6丁目24番地である。『訳書彙編』第1期、1900年12月6日。

図 2-3 『訳書彙編』の「簡啓」



出典：『訳書彙編』第1期、1900年12月6日。（全国報索引より）

まず、一つには中国人の日本留学の手続きや学校紹介などの支援を行っていたことである。

日本文、求学最易、苦無援引、来者頗艱。倘内地有欲来学者、但備一百八十元即足一年学费、房食之用。来時同人可代為招呼一切、並可紹介入日本各種學校。有志之士幸毋裹足。⁵⁴

〔日本と中国は同文なので、学問を求めやすい。しかし、援助と案内がなければ、留学を実現するのはなかなか難しい。もし中国から日本に留学することを望む人がいれば、180元を準備すれば一年分の学費と家賃、そして食費の用は足りる。日本に来る時、同人〔勵志会のこと〕が一切の世話をして、日本の各種の学校を紹介することができる。志のある人々は躊躇する必要はない。〕

これは、中国人留学生が日本に来ることを勧誘し、日本に留学した場合には該当の学校まで案内することを支援業務である。1901年、勵志会の会員の章宗祥が、『日本遊学指

⁵⁴ 「簡啓」『訳書彙編』第1期、1900年12月6日。句点は筆者による。

南』を著し、留学の年限、経費、方法などを詳細に紹介している⁵⁵。1902年3月、清国留学生会館の成立に伴い、会館幹事は「招待規則」を制定し、招待幹事を設け、留学生に対する案内と支援の活動が重要視しているが、これらの留学案内を最も早い時期に提供していたのが実は勵志会であったことは重要である⁵⁶。

二つには、中国国内の人々はもちろん、初めて日本にやってきた中国人留学生のために良質な書籍を選択し、購入した上で、郵送することを代行する支援業務である。

日本書籍之多、浩如烟海。内地之人雖知其益，苦無門徑，何從購買。同人既事探討，頗能知其一二。若有欲購閱各種專門書，及一切有用之書者，即祈函告同人，當舉所知挾要以聞。至購買之後，必可效勞代寄，照原書定価，另加郵費可也。⁵⁷

〔日本の書籍の多さは、海のように広いのである。中国国内の人々はこれら書籍が有益であることを知っているが、どのような方法で購入すれば良いか、困難を覚えている。同人〔勵志会会員〕はこの事情についてよく理解しているので、専門書や一切の有用な書籍を購入することを希望する人は、同人に手紙で知らせてくれれば、我らのできる限りの必要な情報を手伝いする。また、書籍を購入した後は、郵送を代行することができる。書籍の価格に送料を加えれば、それで十分である。〕

中国の知識人が近代以降、日本との交流を進める中で、中国ですでに散逸した漢籍を探し求め、または欧米からの新しい知識に関連する書籍を求める「訪書活動」は、清国駐日公使の黎庶昌が在職時期の1881年から1884年の間に行った活動が有名で、黎庶昌と楊守敬の二人は、中国ですでに散逸した貴重な書籍を蒐集し、『古逸叢書』を編集出版している。さらに、日清戦争後になると、清国政府から派遣された各種の学校視察、農業、商業関連の視察と調査などのために訪日した吳汝綸、羅振玉、繆荃孫、張謇など多くの官吏や学者がそれぞれ漢籍と最新の書籍に関連する調査活動を行なっている⁵⁸。そして、彼らが買い求めた書籍の範囲も日本の教科書はもちろん、日本の先進的な学校制度などに関連する書籍を含む幅広いものであった。勵志会が支援を表明した書籍の代理

⁵⁵ 章宗祥『日本遊学指南』、1901年、東京都立中央図書館実藤文庫蔵。

⁵⁶ 清国留学生会館の成立と活動について、本論文の第四章「清国留学生会館の設立から終焉まで」を参照。

⁵⁷ 「簡啓」『訳書彙編』第1期、1900年12月6日。句点は筆者による。

⁵⁸ 中国人の訪書活動に関して、多くの東遊日記に記されている。たとえば、嚴修撰、武安隆・劉玉敏点校『嚴修東遊日記』天津人民出版社、1995年。傅雲龍『遊歷日本図経』王宝平主編『晚清東遊日記彙編』上海古籍出版社、2003年。また呂順長が編著した『教育考察記』（杭州大学出版社、1999年）に多くの東遊日記が収録されている。

購入と郵送は、知識の伝播の方面においても、情報提供の面においても、頻繁に來日できない中国人、及び日本留学に興味ある人々にとっては、役に立つ貴重なものであったことは間違いない。

三つには、中国の小学校、中学校において新式教育の普及のために教科書を編集出版することであった。

中国乏才，由無教育，教育之難，由於無書。同人現編輯小学、中学各種教科書。然茲事体大，海内名流，有素留意此事者，望賜函見教，以匡不逮。信來請寄本編發行所。

59

〔中国に人材が乏しいのは教育が無いためで、教育の困難さは、教科書がなかったからである。そのため、同人は小学校、中学校の教科書を編纂している。しかしながら、この活動は極めて重要なので、国内外の編纂に関心を持って下さる方々には、このことに留意して書簡にてご教示いただき、不足を補っていただきたいと思う。郵便の連絡先は本訳書彙編發行所である。〕

この教科書編纂に関わる活動は、後には「教科書訳輯社」に引継がれることになり、さらに豊富な翻訳の成果があげられることについては本章第四節「教科書訳輯社と教科書出版」で詳述したい。

最後に、勵志会のもう一つの活動は、中国人留学生に対する演説会であった。ところが、この演説会の内容が清国政府の存立を脅かすものになるのではないかと張之洞は強く警戒している。彼が駐日公使李盛鐸あての電報では、次のような記述が見える。

聞湖北学生頗多為康党所惑，他省学生亦有。其始創為勵志会，各省学生与康党皆入其中。初則數日一会，近則或每日一会，每会必有演說，議論悖謬，大約皆欲效唐才常所為，実堪駭异。⁵⁹

〔湖北省留学生の多くがすこぶる康有為派に惑わされており、他省の学生にも康有為派に傾倒するような者がいると聞きました。勵志会が創設されると、各省の留学生と康有為派は皆がその会に加入しました。最初は、会員が数日おきに集会を開きまし

⁵⁹ 「簡啓」『訳書彙編』第1期、1900年12月6日。句点は筆者による。

⁶⁰ 「駐日公使李盛鐸宛」、光緒二十六年閏八月初八日（1900年10月1日）。前掲苑書義等主編『張之洞全集』第10冊電牘、8317頁。

たが、最近、毎日集まるようになり、集会のたびに、演説会が必ず行われ、でたためな議論が行われました。会員はおおよそ唐才常のような行為を真似しようとしており、実に驚きを禁じ得ません。]

この電報から、特に湖北省留学生の動きが張之洞の不满を買っていたことや、勵志会の集会は「数日おきに」から「毎日」開催されるまで頻繁に開かれていたことがわかる。章宗祥は、この集会の様子については、次のように回想している。

毎星期日、与成城同人之維新派会合〔中略〕組織勵志会、仮日本茶室為会所、上野三宜亭、牛込〔込〕清風亭時往聚集、清茶煎餅、議論自由。〔中略〕会時演説、或講学、或論政、随各人意、絶無形式上之規制。而對於品行一端、極重視。⁶¹

〔毎週の日曜では、〔日華学堂の中国人留学生は〕成城学校の維新派の同士と会合し、勵志会を組織し、活動会場として上野の三宜亭や牛込の清風亭などの日本茶室を借りて、しばしば集まり、茶や煎餅などを用意し、自由に議論している。〔中略〕会では、時に演説、或いは講学、或いは論政というように、各人の思うまま行われ、形式上の規制は一切なし。そして、勵志会は会員の品行について、非常に重視している。〕

従来、勵志会の活動は、主に演説会と翻訳活動のみが注目されてきたが、上記の『訳書彙編』の中に掲載された「簡啓」を詳細に検討することによって、その活動は、中国人留学生の来日を支援すると中国国内の人々のために書籍を代理で購入し、郵送してあげる活動なども組み込まれていたことを明らかにすることができた。

以上、勵志会の成立と解散に至る経緯、会員の構成、組織の主な活動などを考察したが、勵志会、日華学堂、『訳書彙編』の三つのものをつなげる人がまさにこの時期の留学生界で活躍している沈翔雲という人物である。次節では、沈翔雲の日本留学時代に注目して議論を展開する。

⁶¹ 章宗祥「任闕齋主人自述」前掲『文史資料存稿選編・教育』、927頁。

第四節 勵志会会員の沈翔雲の日本「留学」

従来の沈翔雲の経歴については、そのほとんどが馮自由の『革命逸史』に掲載された「沈雲翔事略」（沈翔雲）に依拠して紹介されているが、実はその内容には間違っているところが多いため⁶²、それを大幅に修正する必要がある⁶³。

この節では、沈翔雲の日本留学の経緯、日本での活動（主に出版と演説活動）、及び日本滞在中の交際という三つの方面から検討を試みる。

1900年5月12日に張之洞の長子張権は、湖北省の軍事視察団を率いて上海を出発し、日本を遊歴に出発した。この時に乗船した「博愛丸」には、湖北省留学生監督の銭恂と知県の徐元瀛のほか、15名の留学生（図 2-4）が同乗していた。そして、これら留学生の名簿の中で、後に中国人留学生界に革命のうねりをもたらしたことで有名になる沈翔雲、董鴻禱、黄軫（即ち、黄興）などの名前を確認することができる⁶⁴。

⁶² 前掲馮自由「沈雲翔事略」『革命逸史』初集、80頁。この文章は最初に1937年の『逸経』第31期に掲載され、掲載当初の題名が「沈翔雲事略」であった。1939年、商務印書館（長沙）が馮自由『革命逸史』初集を出版するときに、沈翔雲の名前に関する記述が間違いないことが確認できる。しかし1943年、商務印書館（重慶）が再び『革命逸史』を出版するときに、なぜかわからないが、沈翔雲の名前をすべて「沈雲翔」に書き直した。そして、いままで依然としてこの間違いの表記がそのままに用いられている。

⁶³ 沈翔雲の留学時代に触れる研究は多くないが、凡そ以下の研究が挙げられる。孔祥吉「孫中山友人沈翔雲史実考略」（同氏『從東瀛皇居到紫禁城』広東人民出版社、2011年）は、沈翔雲の留学時代から帰国後の活動について全面的に考察したが、主な貢献として沈翔雲に関する一次資料（日本外務省記録や第一歴史檔案館など）を探し出したが、その結論の多くは独断に過ぎるという批判が少なくない。それに対して、曾業英「沈翔雲回国参加過自立軍起義考辨」『社会科学輯刊』2017年第3期）は張之洞の関連資料を駆使し、沈翔雲が間違いなく帰国して自立軍蜂起に参加したことを明らかにした。このほか、左松涛「清末学堂師長与辛亥革命——以自强学堂为中心」『武漢大学学报』2011年第4期）は沈翔雲の留学時代の活動に少し触れたが、主に張之洞と銭恂との関係に注目している。張耀傑「陳其美的謀士沈翔雲」（同氏『民国底色 政学両界人和事』江蘇文芸出版社、2012年）は、沈翔雲の人生最後の10年を紹介した。

⁶⁴ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081624900（第42-45画像）、「張権及湖北武官軍事視察ノ為メ本邦へ渡航之件並ニ湖北学生渡航之件」、在本邦清国留学生関係雑纂/学生監督並視察員之部（B-3-10-5-3_4）（外務省外交史料館）。

図 2-4 湖北省派遣の留学生



出典：JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.B12081624900 (第44、45画像)、別紙「公信第127号」、在本邦清国留学生関係雑纂/学生監督並視察員之部(B-3-10-5-3_4)(外務省外交史料館)。

注：図の中の留学生に関して、哨官武備学生の嚴寿民、艾忠琦、戴任の3名。湖北派遣の留学生監督である知府錢鈞、知県徐元瀛、及び留學生の馬肇禔、盧定遠、劉修鑑、姚恭寅、董鴻禔、沈翔雲の6名。一時滞在の學生は陳間威、李熙、盧弼、左全孝、尹集馨、黃軫の6名。

これらの学生全員がどの学校に配属されたのかは不明だが、まず、15名の留学生のうち、馬肇禪、盧定遠、劉修鑑の3名は東京同文書院に入学したことは確認できる⁶⁵。そして、そのほかの学生が在籍した状況などについては、彼らの以後の行方から幾つかの新たな事実を確認することができる。

- ① 哨官武備留学生の戴寿民、艾忠琦、戴任の3名は、日本の学校に入学せず、呉元愷、張彪の一行とともに湖北に戻った。
- ② 錢恂の婿である董鴻禪は当時、日本の学校には入学せず、帰国後に科挙試験を受験し、1901年5月頃には東京公使館の東文学堂の東文学生として二度来日し、ついに1902年1月に早稲田大学に入学することができた⁶⁶。
- ③ 陳問威、左全孝の2名は、日本の学校に入学しなかった。二人は帰国後、湖北自強学堂の漢文教習を務めており、さらに1901年12月、教科書編纂のために日本に派遣された羅振玉の視察団の一員として同行していた⁶⁷。
- ④ 盧弼、李熙、黃軫の3名は入学せず、1902年6月、再度湖北省より派遣され、弘

⁶⁵ 『東亞同文会第9回報告』、1900年7月26日、9頁。

⁶⁶ 外務部檔案、「咨送東文学堂學生年貫職名清單由」、中央研究院近代史研究所檔案館藏、館藏號 02-12-039-02-016。

⁶⁷ 羅振玉『扶桑兩月記』教育世界社、1902 年（前掲呂順長編著『教育考察記』上冊、218 頁）。また、JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081623400（第 214 画像）、「清国学生出発ノ件報告」、在本邦清国留学生関係雜纂/陸海軍外之部(B-3-10-5-3 2)（外務省外交史料館）。

文学院の師範科に入学した⁶⁸。

陳問威、左全孝、盧弼、李熙、黃軫の5名は、1900年5月に派遣された湖北省からの一時滞在の留学生であったが、彼らがいつ頃湖北省に戻ったのかは不明である。

しかし、1900年6月20日の宇都宮太郎日記には、「呉元愷、張彪一行を送て横浜に至り、其れより、出勤す。此一行と共に張之洞より託しある29名の士官下士中12名も同行帰国す。義和団の為に帰期を早めしなり」⁶⁹と書かれていることから、義和団事件によって一時滞在の留学生が実際に学校に入学しておらず、呉元愷、張彪と一緒に湖北省に戻った可能性が高いと思われる。

以上の分析を踏まえ、沈翔雲は帰国しなかったが、果たして学校に入ったのかについて、彼の湖北省での活動をまず、見てみる。沈翔雲（約1875—1914）は、当初は湖北武備学堂出身であったが⁷⁰、教官との間で揉め事が生じ、学堂を除名され、私費留学生として日本にやって来た。これについて、「諮北学院將武備学堂藉端生事之学生朱建時等三名注劣」には、以下のような記述がある。

武備学生竟有与委員滋鬧情事，操演之時，亦有乱行嬉戲者，実属不遵軍律，不敦士品。且查該学生等平日在堂，亦多有藉端生事者，查有方賓觀、沈翔雲、朱建時、黃顯榮、黃瑞蘭五人，最不安靜，均即行革除出堂。⁷¹

〔武備学生は、繰り返し委員と揉め事があった。訓練中に遊んで戯れる学生もあり、本当に軍律を守らず、士人の品行に従わない人がいた。且つ彼らは平日においても、よく問題を引き起こしている。調査の結果として、方賓觀、沈翔雲、朱建時、黃顯榮、黃瑞蘭の五名が最も騒がしい、大人しくない、全員をすぐ退学させることとなった。〕

⁶⁸ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081623400 (第282、283 画像)、「湖北派遣留学生一行名録」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部(B-3-10-5-3_2)(外務省外交史料館)。この後、盧弼は早稲田大学に入学した。

⁶⁹ 宇都宮太郎関係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第1巻、岩波書店、2007年、86頁。宇都宮太郎(1861—1922)は、明治、大正時代の陸軍軍人。日清戦争の中、大本営陸軍参謀として、情報収集・分析業務に当たる。その後、清国の陸軍留学生の派遣にも尽力。1901年1月に駐イギリス大使館附武官に就任。2007年4月から11月にかけて、宇都宮太郎の15年分の日記を遺族が公開し、出版された。

⁷⁰ 前掲馮自由「沈雲翔事略」『革命逸史』初集、80頁は、沈翔雲が湖北自強学堂の学生と主張したが、間違いなく誤りである。

⁷¹ 前掲苑書義等主編『張之洞全集』第5冊公牘、4014—4015頁。この公文書は光緒二十六年四月二十五日(1900年5月23日)付である。宇都宮太郎は5月18日付の日記(前掲『日本陸軍とアジア政策 陸軍大将宇都宮太郎日記』第1巻、81頁)に、「張之洞の子張権、昨日来朝、其公使館内に寓せし由に付き」と記しているように、5月12日に出発した視察団は、同月17日にすでに東京に着いた。つまり、沈翔雲は5月23日付の公文書で除名されたのはありえないだろう。史料的な限界で、この矛盾のことはまだ解明できていない。

また、1900年6月7日、張之洞より湖北留学生監督錢恂あての電報では、

沈翔雲系学堂最不安分之生，滋事荒謬，已牌示革除。此次雖自備貲斧，斷不可与鄂生同学，防其染習敗群，須另派一堂為要。⁷²

〔沈翔雲は、湖北武備学堂では最も己の分際をわきまえない学生であり、騒ぎを起こし、すでに公示により除名された。今回、彼が私費で遊学にやってきたが、湖北省の留学生らと同じく学ばせてはいけない。ほかの留学生が悪い影響に染まることを防ぐためにも、彼を別の学堂に入学させることが必要である。〕

張之洞は、湖北省の留学生全体が沈翔雲の問題行動によって惑わされることを心配し、特に錢恂に指示を出し、沈を別の学校に通わせたほうが良い、とも言っている。これらのことから沈翔雲は、日本留学前の湖北武備学堂の在籍の時から、すでに張之洞から強い不信感を買っていたことがわかる。

以上の二つの公文書から、沈翔雲は湖北武備学堂を除名され、私費留学生として日本にやって来た可能性が高い。しかし、私費留学生だからこそ、義和団事件によって同時に派遣されたほかの湖北省留学生が張之洞に呼び戻されたときには、沈翔雲はそのまま日本に滞在することができるようになった。

沈翔雲がどの学校に入学したのかという最初の問題に戻りたい。1914年4月11日、『申報』に掲載された「沈翔雲槍斃紀」という記事によれば、沈翔雲は湖北武備学堂と日本の成城学校で学んだことがある⁷³、という。成城学校に入り引き続き軍事を学ぶのは、武備学堂出身の沈翔雲にとっては、十分可能性があると思われる。ただし、すでに公開された成城学校の中国人留学生関連資料によれば、沈翔雲は入学したとしても、卒業まで至っていなかったことが確認できる。

清末から中華民国初期にかけて、清国の中央政府と地方政府はどのように中国人留学生を管理するのかという問題に常々苦しんでいた。とりわけ清末期において、清国駐日公使館、留学生監督処などの部署は中国人留学生を効率よく管理し、留学生の動きを把握することを試みたが、留学生の中途退学、または他の留学生の名をかたり替え玉にな

⁷² 「鄂督署（張之洞）致東京錢念劬（錢恂）電」、光緒二十六年五月十一日（1900年6月7日）、『近代史所藏清代名人稿本抄本・第二輯』第222巻電稿、大象出版社、2014年、466頁。

⁷³ 1914年4月11日、12日、『申報』のほか、上海の『新聞報』（「槍斃沈翔雲罪狀」）、『時報』（「沈翔雲槍斃之罪狀」）、『生活日報』（「沈翔雲槍斃記」）にはほぼ同じ内容の記事が掲載されたことから見れば、その情報源は、北京の軍政執法処が出した通告であろうか。

る事件がしばしば起きていた。つまり、沈翔雲が確かに成城学校に入学したが、卒業までできず中途退学していた可能性はあるだろう。

また、湖北省から派遣された陸軍留学生がほとんど成城学校で予備教育を受けたことから、沈翔雲が同じ成城学校に入学したことは事実であれば、湖北省留学生監督銭恂は張之洞の指示に従わなかったことがわかる。

後述のように、日本における沈翔雲の活躍ぶりから見れば、おそらく彼は一時的に成城学校に在籍したが、積極的に学生活動を送った後、成城学校から退学していた。

事情はともかく、沈翔雲は東京に到着してまもなく、活発な留學生活動をし始めている。まず、最初に日本語が読めない中国人のために、沈は梁啓超原著の『和文漢読法』を編集印刷し、その「自序」に以下のように記している。

翔雲乃往湖北学武備。今夏四月〔1900 年 5—6 月〕。東渡来遊。而留学之士已糾合同志開會記書。以訳成東籍餉我内地人士誠先務也。〔中略〕翔雲亦志読東籍而未通東文之人也。既得是冊。因念吾郡同志之憾。更推念他郡他省同志之憾。急付排印。以代手寫。將以貽我内地之同志焉。⁷⁴

〔翔雲は湖北に赴き、武備を学んだ。今夏四月〔1900 年 5—6 月〕、東へ渡って遊学にやって来たが、留学生がすでに同志を集め、団体を組織しながら翻訳活動を行っていた。翻訳をした日本の書籍を、清国内地の人々に提供するのは、誠に重要なことである。〔中略〕翔雲も日本の書籍を読めるようになりたかったが、未だ日本語に通じていないのである。だがもうこの書籍が手に入ったのである。我郡〔浙江省湖州府〕の同志の遺憾〔日本語が読めない〕を思い、さらにその他の郡、他の省の同志の遺憾にも思い至るため、手書きではなく、急ぎ組版の印刷をして、清国内地の同志に提供することとした。〕

この『和文漢読法』は、勵志会増補の奥付（図 2-2）により、1900 年 7 月 24 日に印刷されたことがわかる。そして「勵志会序」に「沈君は数百冊の『和文漢読法』を印刷したが、求めに応じきれないほどであった」⁷⁵とあるように、沈翔雲版の『和文漢読法』は、勵志会増補版より早く、5 月末から 7 月 24 日の間に印刷されただろう⁷⁶。日本語が通じな

⁷⁴ 前掲『和文漢読法 附訳書彙編叙例』、「自序」、1-2 頁。句点が筆者による。

⁷⁵ 前掲『和文漢読法 附訳書彙編叙例』、「勵志会序」。句点は筆者による。（沈君所印数百本。不足応来者之求。）

⁷⁶ 前掲李海『日本亡命期の梁啓超』、56 頁。

い沈翔雲が、『和文漢読法』の編集をわずか2ヶ月ほどで完成させたことは確かに疑念を抱かざるを得ないが、実は『和文漢読法』の特徴から考えると、その可能性が全くないわけではない。『和文漢読法』は、この本に収めた内容の全体は、「三千言に過ぎず、日本文を読む方法が簡単かつ明確に述べられている」⁷⁷とあるように、この本は分量が少なく⁷⁸、系統的な日本語学習書ではなく、日本語を急ぎ勉強するための要点をまとめた簡易的な「速習書」ともいうべきものであった。

沈翔雲は、このように出版活動に精を出しながら、その他に励志会の演説会にも積極的に参加していた。1900年11月14日付の駐日公使李盛鐸より張之洞にあてた電報では、「本年六月、湖北省の留学生沈翔雲は励志会で演説した。彼の演説の内容にはデタラメが多いが、『清議報』にその内容が掲載された」⁷⁹、と報告している。その演説内容には、以下のような一節がある。

蓋禁開会演説偽政府之政策也。榮祿之政策也。群附和奸党之政策也。非皇上之政策也。諸公既為祝皇上万寿而來。自必深服皇上之仁愛。〔中略〕揣諸公之意。必曰開会演説。康梁之事也。〔中略〕若開会演説。皆中国所禁。則犯其禁令。於将来保举之事。甚有関礙。則無論目前中国滅亡可待。科举已停。遑論保举。且保举吾者官吏而已。則保举我亦不過為官吏。何如我自己保举自己為第一等英雄。第一等豪傑。以救民之重且大也。⁸⁰

〔思うに、人々の開会や演説を禁じるのは偽政府〔清国政府を指す〕の政策、榮祿の政策、奸党に相槌を打つ人々の政策であって、皇上〔光緒帝〕の政策ではないのです。皆さんが皇上の誕生祝いのために来ているのを見ると、心から皇上の仁愛に敬服していることがわかります。〔中略〕皆さんの思いを推測するに、開会や演説をするのは、康有為、梁啓超派が行うことだと思っています。〔中略〕開会や演説のようなものは、みな中国政府により禁じられており、もしこの禁令を犯したら、将来官吏に推薦される際に影響があります。しかし、今の中国が滅亡の危機に陥っているのは無論のことですが、科举はすでに中止されているのだから、官吏推薦を論じる暇な

⁷⁷ 前掲『和文漢読法 附訳書彙編叙例』、「自序」、1頁。句点は筆者による。（和文漢読法一冊。字不過三千言。而指示読と文之法簡要明晰。）

⁷⁸ 前掲李海『日本亡命期の梁啓超』、56頁によって、沈翔雲版の『和文漢読法』は38頁程度である。

⁷⁹ 「湖広総督張之洞宛、光緒二十六年九月二十三日（1900年11月14日）。前掲陳旭麓主編『義和団運動盛宣懷檔案資料選輯之七』、381頁。（惟本年六月有由鄂來東學生沈翔雲赴該会演説、語多悖謬、刊入『清議報』等語。）

⁸⁰ 沈翔雲「恭祝皇上万寿演説 即中国学生会第二集」『清議報』第54冊、1900年8月15日、13丁表-14丁表。句点は筆者による。

どありません。なお、私を官吏に推薦できるのは官吏だけであり、〔官吏が〕私を官吏に任用したとしても、清国政府の官吏になることしかできません。私はむしろ、自身を推薦することで英雄・豪傑になり、人々を救うという任務を果たしたいのです。〕

この演説は、1900年7月24日の光緒帝の誕生祝いの会で行われ、「恭祝皇上万寿演説」という題名で『清議報』第53冊と第54冊に掲載された。この段落から次のようなことが指摘できる。

沈翔雲は、光緒帝を開明的な君主とみなし、今の中央政府が開会や演説を禁じていることは全て榮禄をはじめとする「奸党」のせいにした。そして、開会や演説をするのは康有為、梁啓超の一派だけではなく、われわれの留学生もこうした活動を行うことができる。しかし、こうした活動は、官吏になるという将来の進路に悪影響を与えるため、多くの留学生が消極的な態度を取るのである。そこで、沈は留学生が役人の仕事につくことに反対し、むしろ、中国の人々を苦難から救い出す事業に身を投じるべきであると力説している。

沈翔雲の演説が実現できたのは、勵志会の集会において、演説の内容が制限されていたことが、当時の勵志会が革命を目指す組織ではなく、逆に保皇派の主張に近かったことをあげる事ができよう。ただし、留学生の保皇の主張と康有為派のそれにはまた相違があり、留学生は皇帝を「共和」の象徴にしたいと考えたという⁸¹。

日本に着いてから、わずか2ヶ月ほどの間に、沈翔雲は留学生の出版と講演活動に積極的に関与したに留まらず、1900年8月、自立軍が蜂起したときは、安徽大通の戦いにも参加していたようである⁸²。そして、張之洞により自立軍が鎮圧され、唐才常と多くの留学生が逮捕されたときにおいても、沈翔雲の活動が中断することはなかった。当時、上海にいる東亜同文会の上海支部の幹事井上雅二は、自立軍として逮捕された参加者の救援のことについて、以下のような日記を書き記している。

〔8月〕23日 早朝、趙仲宣来り、唐等を救はんが為め、在東京なる錢洵に打電せん事を相談す。是れ亦一策なりとし、乃ち、「唐才常及留東学生等三十余、在漢被拘、

⁸¹ 曾業英「沈翔雲回国参加過自立軍起義考辨」『社会科学輯刊』2017年第3期。

⁸² 章宗祥「任闕齋主人自述」、前掲『文史資料存稿選編・教育』、928頁では、沈翔雲が安徽大通の戦いに参加する経緯も記されている。

乞公顧大局、保志士、速電張帥、並在日託当道設法。沈翔雲代表」電文を錢恂⁸³に発す。

83

すなわち、沈翔雲は当時上海に滞在しながら自立軍の蜂起に関連し、逮捕された人々の救援活動に参加し、後述するように、錢恂と交渉しているが、その結果は、失敗に終わってしまった。

同年10月、自立軍蜂起と鎮圧という難関を免れた沈翔雲は密かに日本に戻り、日華学堂にやってきた。1900年10月10日付の『明治三十一年一月改 学堂日誌』によれば、沈翔雲は、「章生〔宗祥〕の依頼に依り錢監督の保証にて1ヶ月間当学堂に寄宿することを許す」という措置が取られた経緯が記されている。つまり、沈は日華学堂に入学することではなく、章宗祥と留学生監督錢恂の保証で、日華学堂に1ヶ月間寄宿していたのである。

同年冬、自立軍の蜂起に参加していた中心人物の尤列、秦力山、唐才質、沈翔雲が東京で孫中山（孫文）と記念写真を撮ったが、その場にも沈翔雲は立ち寄っている（図2-5）。おそらく沈翔雲はこの時、孫中山と初めて会ったのだろう⁸⁴。

図2-5 1900年冬、日本東京にて孫文と自立軍蜂起の中心的人物との集合写真



左から右：尤列、唐才質、孫中山、秦力山、沈翔雲。

⁸³ 近藤邦康『井上雅二日記——唐才常自立軍蜂起』『国家学会雑誌』第98巻第1、2号、1985年、171頁。

⁸⁴ 馮自由「沈雲翔事略」『革命逸史』初集、81頁では、1899年、沈翔雲が戢翼輩、吳祿貞を連れて孫文を訪れと書かれたが、沈翔雲が1900年4月頃に日本にやってきたという事実からみれば、この記事について、馮自由が明らかに誤記している。前掲沈渭濱『孫中山与辛亥革命』は「把視線転向留学生」の箇所、馮自由の説を踏襲している。

第二章 勵志会の成立とその活動の全容

出典：「1900 年冬、孫中山と起義失敗の自立軍骨干人物在日本東京合影」上海孫中山故居記念館編『孫中山——紀念孫中山先生誕辰 130 週年』上海人民出版社、1996 年、22 頁。

注 1：この写真は、1912 年 4 月に上海の商務印書館編訳所が編纂した『大革命写真画』第 12 集に初めて掲載されたものであった。掲載当時には、「運動革命時之孫大總統及其友沈翔雲唐麟等」と名付けられたが、撮影の時期が明記されていなかった。なお、唐麟（唐才常の息子）とされた人物は実は、唐才質（唐才常の三弟）である。1936 年に至るまで、『逸経』第 2 期に掲載された馮自由「革命逸史——尤列事略」（26 頁）に、同じ写真は「丙午年孫中山尤列沈翔雲秦力山唐才質在東京合照」という写真名で掲載されたことがわかる。しかし、撮影の時期として書かれた「丙午年」が問題あり、実は丙午年（1906 年）ではなく、1900 年の冬である。その理由について、孫中山は 1900 年 11 月 10 日、台湾基隆を離れて日本に赴き、16 日に東京に到着した。陳錫祺主編『孫中山年譜長編』上冊、中華書局、1991 年、257 頁。

注 2：この写真の沈翔雲の顔の部分は馮自由「沈翔雲事略」（『逸経』第 31 期、1937 年、29 頁）にも使われたことから、沈の生前の唯一の写真かもしれない。

この間、張之洞は、海外に渡航した留學生が革命派の言説や行動に加担しないように「勸誡」（訓戒）するために、「勸戒上海国会及出洋學生文」⁸⁵という勸告の文章を出したことで、日本の中国人留學生界から大非難を浴びていた。沈翔雲をはじめとする章宗祥、戢翼翬などの留學生はともに「是中國民復南皮張尚書書」⁸⁶を作成し、張之洞に強く反駁を加えていた。

沈翔雲のこのような活躍が張之洞の怒りをかっただろう、ということは容易に推測できる。張之洞は、日本駐漢口領事の瀬川浅之進に照会を出し、劉廣雲、吳祖蔭、程家樞、王璟芳、盧静遠、吳祿貞、沈翔雲の 7 名の學生を名指しで、「凡乱謀悖論ハ皆彼等ノ主唱スル所ニシテ、尤モ陰譎ノ徒」と罵倒し、吳祿貞と沈翔雲の 2 名が在籍している学校から除名させることを求めている⁸⁷。

沈翔雲と日華学堂との接触は、彼が日本に上陸する半年前に遡ることができる。前述したように、1900 年 7 月 24 日、勵志会増補の『和文漢読法』が上梓され、この本の発行

⁸⁵ 「張之洞勸戒上海国会及出洋學生文」『中国旬報』第 31 期、1900 年 12 月 6 日。なお、許同莘編『張文襄公年譜 十卷』巻七（上海商務印書館、139 頁、1946 年、台湾国立中央図書館蔵）を合わせて見れば、これは、張之洞が光緒二十六年八月（1900 年 8 月 25 日から 9 月 23 日の間）に書き上げた文章であったことが確認できる。また留日同學生編「中国危亡警告書」（『近代史資料』総 53 号、中国社会科学出版社、1983 年）にも収録されている。

⁸⁶ 1903 年 11 月に出版された『黄帝魂』は「覆張之洞書」という名でこの文章を収録した。さらに留日同學生編「中国危亡警告書」（前掲『近代史資料』総 53 号、22-34 頁）もこの文章を収録し、作者が「是中國民」の偽名を名乗った。留學生監督銭恂が汪康年にあてたの書簡には、この文章の作者は一人ではなく、沈翔雲、章宗祥、戢翼翬らがともに作成したと説明された。「銭恂 二十六」上海図書館編『汪康年師友書札』第 3 冊、上海古籍出版社、1986 年、3009 頁。

⁸⁷ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081624900（第 50-56 画像）、湖北省派遣ノ學生監督上ニ関シ湖広總督張之洞ノ願望、在本邦清国留學生關係雜纂/學生監督並視察員之部（外務省外交史料館）。

所が日華学堂に置かれた勵志会訳書処であったことは先に述べたが、さらに同年 5—6 月（光緒二十六年五月）に、沈が書いた「自序」の通り、沈翔雲と日華学堂の学生との往来、及び勵志会の加入などがこの時期に実現したと思われる。

1900 年 5 月から、おおよそ半年にわたって沈翔雲は日本と清国を頻繁に行き来し、出版と演説などの活動を行いながら、中国国内の革命運動にも関与していた。沈翔雲は知識の啓蒙を重視するだけではなく、政治活動に積極的に関与した先駆者として高く評価されるべきだと考えている。

むすび

本章では、勵志会の成立、団体の趣旨、会員の構成、団体の活動、及び沈翔雲の活動について検討したが、そこで得られた内容は、以下のようにまとめることができる。

一、勵志会は 1899 年秋に東京で成立した留学生の親睦団体であり、最初は留学生が定期的な集会を開催し、会員相互の親睦を深めることを目的とした団体であり、中国人留学生同士が故郷を離れて異国に滞在する寂しさ、不安などを和らげる役割をも果たしていた。

二、勵志会は総数 44 名の会員を数えるが、その会員構成においては江蘇、浙江、湖北省出身の留学生が多く、日華学堂と成城学校に在籍した留学生がもその中心的な役割を果たした。なお、会員の政治的立場は、後になり急進派と穏健派に分かれることになるが、彼らの活動が最初から政治活動に傾倒したものではなかった。

三、本章では、沈翔雲編と勵志会増補の二つの『和文漢読法』という資料を掘り下げた結果として、日華学堂と勵志会、『訳書彙編』とのつながりを確認した。また、勵志会は演説会や『訳書彙編』の発行など活動を通じて、留学生と中国国内の知識人向けに活発な啓蒙活動を展開した。それに、後から来日する留学生を支援する活動、国内の知識人に代わって書籍を代理で購入し、郵送する活動をも展開した。従来の研究で指摘したように日本の中・小学校の教科書を中国語に翻訳し出版するという事業に加え、勵志会の組織活動の全体像を明らかにすることができた。

四、19 世紀末に来日した留学生たちは、日本留学の先駆者として道なき道を開拓し、戢翼翬、章宗祥、沈翔雲のような初代の中国人留学生の中心人物は、飛躍的に成長した。章宗祥は『日本遊学指南』を著述し、留学の経費、日本の学校への申請の方法、日本で

の生活など様々な情報を書き残したが、これは留学生を支援する重要な参考書を提供してくれた点からも高く評価しなければならない。

また、沈翔雲は湖北武備学堂を除名され、私費留学生として日本留学を果たしたが、梁啓超『和文漢読法』の編集印刷に尽力し、多くの中国人が日本語の書面語を学習する時に参考になる有用な書籍を印刷した。そして、沈翔雲は、学生活動家として清国政府の保守派とは対立する立場から演説会などの活動にも積極的に参加しただけではなく、自立軍蜂起という立憲派の革命運動にも直接、関与した⁸⁸。彼らの諸活動は 20 世紀の初頭、日本留学を目指す多くの中国人留学生を案内する羅針盤の役割を果たした。

次章では、勵志会の活動を引き継いだ訳書彙編社と教科書訳輯社に注目し、この二つの団体がどのような翻訳と出版活動を行ったのか、またはその特徴について検討を加えることとしたい。

⁸⁸ 1901 年、沈翔雲は敢翼輩、秦力山、馮自由とともに「排満革命」を掲げる『国民報』を創刊したが、四期までで廃刊してしまった。この後、南洋を遊歴した沈はしばらく両広總督陶模の幕僚となったが、まもなく隠遁していた。1911 年の辛亥革命後、沈は再び官界に出て滬軍都督府に入り、陳其美を補佐し、1914 年に二次革命で逮捕・処刑された。郭夢垚「沈翔雲的『留日』與革命活動考述」『口述歷史與辛亥革命研究 國際學術研討會論文集』（未公刊、2023 年 11 月）は、沈翔雲の帰国後の活動を詳細的に考察した。

第三章 訳書彙編社と教科書訳輯社

はじめに

清末の中国人留学生界は、中国国内の知識人が世界の潮流となる知識を取り入れる窓口の役割を果たした。中国人留学生は多くの翻訳・出版団体を組織し、新聞、雑誌、図書などの出版物を通して、西洋の新知識の翻訳、政治思想や理論の導入、新たな教育理念の開発など様々な方面において、極めて大きな役割を担った。

その中で、訳書彙編社は代表的な出版団体として、勵志会の『訳書彙編』の編集を継承した上で、活発な翻訳活動を展開していった。

一方、1900 年以降、清国政府の新式教育の提唱に応じ、新式学堂が相次いで設立され、さらにその学堂教育に相応しい、新しい教科書も求められていた。このような背景の下、教科書訳輯社は勵志会の教科書出版の計画を引き継いで、中国の中・小学校向けの教科書の翻訳出版に取り組んでいた。

従来の研究では、ほとんどの論考は清末期中国人留学生の翻訳団体をまとめて扱った。実藤恵秀は、訳書彙編社の成立、社員構成、活動の内容、出版された書籍などの状況を概説した¹。同氏は、続いて『訳書彙編』に掲載された教科書訳輯社の出版広告を手がかりに、この団体がかつて中学教科書を翻訳・出版することを目指したと指摘するとともに、「教科書訳輯社が訳書彙編社の分家ともいうべきもの」²であると説いた。

一方、石錦は、訳書彙編社の活動、社員の構成及び構成の特徴を考察した³。そして、黄福慶は、実藤恵秀の研究を踏まえ、訳書彙編社の社員構成に触れながら、勵志会と訳書彙編社との関係にも言及した上、留学生雑誌の『江蘇』に掲載された教科書訳輯社の出版広告を取り上げ、訳書彙編社と中学教科書出版の活動との関係について紹介した⁴。

¹ さねとうけいしゅう「留学生の翻訳団体」『増補 中国人日本留学史』くろしお出版、1970 年、259-273 頁。

² 前掲さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』、264 頁。

³ 石錦「早期中国留日学生的活動と組織（1896—1901）」『思与言』第 6 卷第 1 期、1968 年。

⁴ 黄福慶『清末留日学生』中央研究院近代史研究所、1975 年初版。

また、呂順長は、浙江省の留学生を手がかりとして、訳書彙編社と教科書訳輯社の活動において、浙江省出身の留学生が果たした役割を検討した上で、二つの団体の出版目録から書籍の翻訳は、政治と法律、中学教科書に集中しているという特徴を考察した⁵。

以上の先行研究は、当時の研究状況の中で入手できた一部の『訳書彙編』に基づいて議論を展開するもので、訳書彙編社の成立時期を確定することができず、なお社員の構成と変遷についても、その詳細を明らかにできず、一部には推論の域を超えないものすらも含まれている。また、訳書彙編社、教科書訳輯社と深いかかわりを持つ日華学堂、勵志会についてほとんど触れていない。

そこで、本章では、現存している『訳書彙編』の全号とその他の留学生が発行した雑誌、及び出版物の出版情報などに基づいて、勵志会から生み出された訳書彙編社と教科書訳輯社に注目し、その成立と解散、社員の構成、団体の活動などの詳細を解明しながら、日華学堂と二つの団体との関係を検討し、さらに社員の日本での学習歴を外務省記録などに依拠して明らかにしたい。

第一節 訳書彙編社の成立と変遷

訳書彙編社の成立時期について、従来の研究では、実藤恵秀が提示した 1900 年成立説が大きな支持を得ている⁶。しかしながら、『訳書彙編』は 1900 年 12 月に発行事業を始めたのは確実であるとしても、訳書彙編社が 1900 年に成立したかどうかにはまだ疑問が残っている。

1902 年 12 月、『訳書彙編』第 2 年第 10 期に掲載された「出版確認書」（翻印禁止書、**図 3-1**）を見ると、「日本の法科大学〔東京帝国大学法科大学〕に留学した呉振麟等によれば、光緒二十七年〔1901〕、我等は日本東京にいて同志を集めて訳書彙編社を設け、欧米と日本の政治、法律、および専門に関連する書物を編訳し、毎月一冊の訳書彙編として発行することとした」⁷という経緯が書かれている。そして、この記事において、「光緒二十七年」（1901）という時期が明確に記されている。

⁵ 呂順長「浙江早期留日学生的訳書活動」『清末中日教育文化交流之研究』商務印書館、2012 年。

⁶ 前掲さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』、259 頁。上垣外憲一『日本留学と革命運動』（東京大学出版会、1982 年、83 頁）も同じ見解を踏襲している。また、中国側の研究で同じ見解を持った著作として、沈殿成主編『中国人留学日本百年史』（遼寧教育出版社、1997 年、68 頁）、前掲呂順長『清末中日教育文化交流之研究』（202 頁）がある。

⁷ 「出版確認書」『訳書彙編』第 2 年第 10 期、1902 年 12 月 27 日。

図 3-1 『訳書彙編』の「出版確認書」



出典：『訳書彙編』第2年第10期、1902年12月27日。（全国報刊索引より）

団体の成立時期をさらに確認するために、訳書彙編社の変遷について整理する必要があると思われる。表 3-1 は、『訳書彙編』とそれを後継する雑誌である『政法学報』の奥付から関連する出版情報をまとめたものである。

表 3-1 『訳書彙編』と訳書彙編社の変遷

雑誌名	発行段階	発行時期	発行所名	発行所住所	備考
訳書彙編	発行前（計画）	1900. 5 — 1900. 11	訳書彙編 発行所	東京本郷区東片町 145 番地	日華学堂/勵志 会訳書処
	第 1 期	1900. 12		(1) 東京牛込区喜久井町 20 番地 (2) 東京麹町区飯田町 6 丁目 24 番地	(1) は金邦平 の住所 (2) は『国民 報』の発行所

第三章 訳書彙編社と教科書訳輯社

	第2期	1901. 1		(1) 東京牛込区喜久井町 20 番地 (2) 東京麹町区飯田町 6 丁目 24 番地 (3) 東京本郷区丸山新町 19 番地	(3) は章宗祥等の借家
	第3期—第8期	1901. 4 — 1901. 10		(1) 東京牛込区喜久井町 20 番地 (2) 東京本郷区丸山新町 19 番地	
	第9期—第2年 第3期	1901. 12 — 1902. 6	訳書彙 編 社	東京本郷区丸山福山町 15 番地	教科書訳輯社の 発行所
	第2年第4期— 第2年第12期	1902. 8 — 1903. 3		清国留学生会館（東京神田区駿河台鈴 木町 18 番地）	教科書訳輯社の 発行所
政法 学報	第1期—第8期	1903. 4 — 1904. 5			

出典：『訳書彙編』第1—9期、第2年第1—12期、1900年12月—1903年3月と『政法学報』第1—8期、1903年4月—1904年5月。

表 3-1 によると、『訳書彙編』が、1900 年 5 月に発行が計画されたのち、1901 年 10 月の第 8 期の出版に至るまで、その発行機関は訳書彙編発行所であった。その後、1901 年 12 月の第 9 期から訳書彙編社に変更されていた⁸。つまり、訳書彙編社という名称は『訳書彙編』よりも後から使用されたということが確認できる。訳書彙編社は 1901 年 11 月頃に訳書彙編発行所から名称を変更し、新しい団体として『訳書彙編』の編集と発行を引き継ぐようになった。

そして、『訳書彙編』の発行所は、最初に日華学堂の所在地に置かれる予定であったが、日華学堂の廃校により、第 1 期の雑誌の発行以降、「牛込区喜久井町 20 番地」（金邦平の住所）と「麹町区飯田町 6 丁目 24 番地」を明記することとなった。さらに第 2 期から、「東京本郷区丸山新町十九番地」（章宗祥らの借家）が加わり、雑誌の発行所は 3 ヶ所となった。その後、1901 年 12 月には、発行所は「東京本郷区丸山福山町 15 番地」に移転され、教科書訳輯社と同じ発行所を共有することとなった。

1902 年初、清国留学生会館が成立して間もなく、訳書彙編社と教科書訳輯社はともに、清国留学生会館内にその住所を移してから、雑誌発行所の住所は固定し、1903 年 4 月に

⁸ ほぼ同時期、1901 年 11 月 30 日に刊行された『波蘭衰亡戦史』は訳書彙編社の名義で発行されている。訳書彙編社同人『波蘭衰亡戦史』訳書彙編社、1901 年 11 月 30 日初版、東京都立中央図書館実藤文庫蔵。

『訳書彙編』はその雑誌名を『政法学報』と改称したが、発行所は訳書彙編社と同じく清国留学生会館内に置かれ、廃刊まで移動することはなかった。

第二節 訳書彙編社の社員構成

訳書彙編社の社員については、1902年1月、『訳書彙編』第2年第1期に「訳書彙編社社員姓氏」が掲載されていることからその全容を窺うことができる。表 3-2 はこの「訳書彙編社社員姓氏」記載の社員について、学歴や留学費用などの情報を追加し、まとめたものである。

表 3-2 訳書彙編社の社員名簿

NO.	姓 名	省籍	日本 到着	学 歴		卒業 (注1)	留学 費用	備 考
				中 国	日 本			
1	戢翼翬	湖北 房県	1896	不明	嘉納塾→亦楽書院→東京専門 学校→早稲田大学	1902 修	使館 官費	『国民報』 創刊者
2	王植善	江蘇 上海	南洋公学師範部卒業。上海の育材書塾（『訳書彙編』の「代派処」、後の南洋中学）の校長。光緒三十一年（1905）、日本遊歴。					
3	陸世芬	浙江 仁和	1898	浙江求是 書院	日華学堂→第一高等学校→高 等商業学校	1903 卒	浙江 官費	教科書訳輯 社の担当
4	雷 奮	江蘇 華亭	1899	南洋公学	日華学堂→東京専門学校（校 外生・政治科）	1900 中	南洋 官費	『国民報』 主筆
5	楊蔭杭	江蘇 無錫	1899	南洋公学	日華学堂→東京専門学校（校 外生・政治科）→早稲田大学	1900 中 1907 卒	南洋 官費	『国民報』 主筆
6	楊廷棟	江蘇 吳県	1899	南洋公学	日華学堂→東京専門学校（校 外生・政治科）	1900 中	南洋 官費	『国民報』 主筆
7	周祖培	江蘇 吳県	1899	北洋大学 堂	日華学堂→東京専門学校（校 外生・政治科）	1900 中	北洋 官費	
8	金邦平	安徽 黟県	1899	北洋大学 堂	日華学堂→東京帝国大学農科 →東京専門学校→早稲田大学	1903 卒 1905 卒	北洋 官費	

第三章 訳書彙編社と教科書訳輯社

9	富士英	浙江 海塩	1899	蘇州中西 学堂／南 洋公学	日華学堂→東京専門学校→早 稲田大学	1902 卒 1906 卒	南洋 官費	
10	章宗祥	浙江 烏程	1899	南洋公学	日華学堂→第一高等学校→東 京帝国大学法科選科政治 ^(注2)	1903 卒	南洋 官費	
11	汪榮宝	江蘇 元和	1901	南菁書院 ／南洋公 学特班	慶應義塾、早稲田大学 ^(注3)	1902 中 不 明	私費	『江蘇』編 集者
12	曹汝霖	江蘇 上海	1900	漢陽鐵路 学堂	東京法学院大学 ^(注4)	1904 卒	私費	
13	錢承詒	浙江 仁和	1898	浙江求是 書院	日華学堂→第一高等学校→東 京帝国大学法科選科政治	1903 卒	浙江 官費	
14	呉振麟	浙江 嘉興	1898	上海育材 書塾	日華学堂→第一高等学校→東 京帝国大学法科選科政治	1903 卒	私費→ 浙江 官費	

出典：「訳書彙編社社員姓氏」『訳書彙編』第2年第1期、1902年3月の他、日本の外務省記録、日華学堂の学堂日誌、清国留学生会館幹事『清国留学生会館報告』第1次―第5次（東京並木活版所、1902年―1905年）、『東京帝国大学一覽』（1899年―1904年）、『東京高等商業学校一覽』（1899年―1903年）、『大正4年11月調 早稲田大学校友会会員名簿』、早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史』（早稲田大学出版部、1978年）、曹汝霖『一生之回憶』（曹汝霖回想録刊行会編訳、鹿島研究所出版会、1967年）、章宗祥『任闕齋東游漫録』（1929年、東京都立中央図書館実藤文庫蔵）と章宗祥「任闕齋主人自述」（中国人民政治協商会議全国委員会文史資料委員会編『文史資料存稿選編・教育』中国文史出版社、2002年）などを参照して作成。

注1：「卒」は卒業、「修」は修業、「中」は中退を指す。本名簿は卒業した後、さらに他の学科もしくは同じ学科を複数回卒業した者を含む。

注2：章宗祥の日本学歴については、秦孝儀『中国現代史辞典 人物部分』（近代中国出版社、1985年）や徐友春主編『民国人物大辞典（増訂本）』（河北人民出版社、2007年）などの辞典に、「章宗祥」に関して、明治大学で学士号取得という記述もあった。だが、章宗祥本人の回想（『任闕齋東游漫録』と「任闕齋主人自述」）に照らしてみれば、明治大学とその前身校明治法律学校に関する話は一度もなかったため、明治大学に所蔵された中国人留学生の個人情報で確認できない現段階では、章宗祥が明治大学に在籍したことがある可能性は低いと思われる。

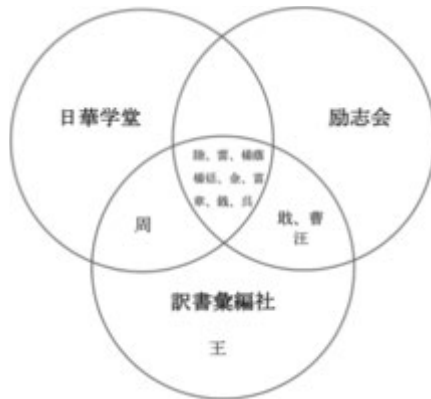
注3：汪榮宝は、1901年12月、湖北より派遣され、1902年慶應義塾を中退して休暇を理由に帰国した。1903年日本に戻り、改めて早稲田大学に入学したが、卒業しておらず、1908年、推選校友に挙げられた。趙林鳳『中国近代憲法第一人——汪榮宝』（新鋭文創、2014年、80、81頁）は、汪榮宝の在籍学校の順序を逆に述べている。

注4：曹汝霖は、東京法学院外国語学校（中央大学の前身）に入学した。「訳書彙編社社員姓氏」には明治法学院と記されているが、東京法学院の誤りと思われる。前掲天野郁夫『旧制専門学校論』。

表3-2から、以下のような点が指摘できる。

第一には、訳書彙編社が日華学堂、勵志会と深い関わりを持っていたことである。図3-2「訳書彙編社と勵志会、日華学堂の関係図」は、表3-2「訳書彙編社の社員名簿」に基づいて、この三者の関係を図で表したものである。

図3-2 訳書彙編社と勵志会、日華学堂の関係図



注：略記される姓名は、戴翼翬、王植善、陸世芬、雷奮、楊蔭杭、楊廷棟、周祖培、金邦平、富士英、章宗祥、汪榮宝、曹汝霖、錢承誌、吳振麟。

図3-2から、驚くことは訳書彙編社に所属した14名の内、周祖培と王植善を除いた、12名全員が勵志会の会員であるという点である。周祖培は、金邦平と同期として北洋二等学堂から派遣された学生であるが、そのほかの情報が少なく、彼自身が勵志会に加入していたかどうか確認できない。もう一人の王植善は、南洋公学の師範部を卒業してから1905年に一時期、日本に立ち寄ったが、厳密に言えば彼は留学生ではなく、上海王氏育材書塾（南洋中学の前身）の校長であった。彼は戴翼翬、章宗祥、曹汝霖、吳振麟等

の旧知の友人との関係を通して、社員になったとされる⁹。なお、後述のように、上海育材書塾は長い間、『訳書彙編』の上海「代派処」（代理販売処）として上海を含む中国全土に雑誌を販売する業務を担っていた。

一方、日華学堂の立場から見れば、戢翼翬、曹汝霖、汪榮宝、王植善の4名はこの予備学校の出身ではない。王植善は言うまでもなく、戢翼翬は嘉納塾の学生であり、在籍時期には日華学堂を訪れていた記録が残る（第一章を参照）。曹汝霖と汪榮宝は予備学校に入らず、直ちに私立の専門学校に入学したので、日華学堂とは関係がないことは確かである。

訳書彙編発行所と明記された『訳書彙編』の第1期から第8期までの間の編集を担当する人が誰なのか同誌には記載がなく、訳書彙編社の社員と訳書彙編発行所時期の編集者がどれほど重複するのかわからないが、社員構成から見ると、勵志会から生み出された団体である訳書彙編社は、日華学堂の学生がその中心的役割を果たし、その発行所の名称が変わったあとも団体の構成に大きな変化はなかった可能性が高い。

その傍証として、1901年12月15日、『訳書彙編』第9期に掲載された「訳書彙編社発行書目（已刊）」という広告の中で、本社同人編輯『和文漢読法』と憂亜子増広『再版和文漢読法』という2種類の『和文漢読法』が見える。『和文漢読法』の版本流通に関する研究によれば、この「本社同人編輯」のものは前述した勵志会増補版を指すのはほぼ間違いない¹⁰。つまり、訳書彙編社と勵志会のメンバーが重複したことは確かであり、勵志会訳書処（日華学堂）→訳書彙編発行所→訳書彙編社といった、団体の間での継承関係もうかがうことができる。

第二には、訳書彙編社は、勵志会と深い人的つながりを持っていたため、社員の政治的な立場も勵志会の時の人間関係をそのまま継承していた可能性が高い、という点が指摘できる。彼らののちの活動を参考に整理すれば、急進派としては戢翼翬、雷奮、楊蔭

⁹ 王植善は勵志会会員との関係が親密であり、具体的には以下のような記載がある。南洋公学に在学する時期では、王植善の同学の中、章宗祥、楊蔭杭、雷奮がおり、互いに深い友情が結ばれた。1900年、章宗祥は育材書塾で代講したことがある。章宗祥「任闕斎主人自述」中国人民政治協商会議全国委員会文史資料委員会編『文史資料存稿選編・教育』中国文史出版社、2002年、923頁。なお1900年8月の自立軍蜂起（庚子漢口之役）後、戢翼翬は従弟の戢翼翹を連れて上海の育材書塾に入学させた。李毓澍等『戢翼翹先生訪問記録』中央研究院近代史研究所口述歴史叢書6、1985年。曹汝霖は育材書塾の教師を務め、その後、王植善の妹と結婚した。曹汝霖著、曹汝霖回想録刊行会編訳『一生の回憶』鹿島研究所出版会、1967年、2頁。また勵志会会員の王宰善は、王植善の従兄弟として、小林丑三郎の『日本財政之過去及現在』を一部翻訳し、『訳書彙編』第2年第8期（1902年11月15日、1-85頁）に掲載されている。

¹⁰ これについて、陳力衡も似たような見解を述べている。同氏「梁啓超『和文漢讀法』における「和漢異義字」について——『言海』との接点を中心に」沈国威編著『漢字文化圈諸言語の近代語彙の形成——創出と共有』関西大学出版部、2008年、443頁。訳書彙編社版の『和文漢読法』の存在を完全に否定できないにもかかわらず、関連資料が見当たらない現段階では、しばらく棚上げにしておきたい。

杭、楊廷棟、汪榮宝が、穩健派としては章宗祥、錢承詒、吳振麟、陸世芬、曹汝霖、富士英、金邦平がそれぞれ論陣を張ったことがわかる。

さらに、詳しく言えば、戢翼翬、雷奮、汪榮宝は民族主義を掲げた青年会に加入し、戢翼翬、雷奮、楊蔭杭、楊廷棟等は排満を主張する『国民報』を発刊した。一方、章宗祥、錢承詒、吳振麟、陸世芬、曹汝霖、富士英等は、次第に清国政府の政治主張に近寄るようになった。穩健派の中で、金邦平は一時に青年会に加入したが、まもなく退会した¹¹。社員の周祖培はその政治的立場は不明であり、王植善は 1905 年に中国同盟会に加入しているが、章宗祥、曹汝霖とも深い友情を持っていたことを考えると、1902 年の時点では、おそらく穩健派に傾く立場にあったのだろう。

このような政治的立場の違いが『訳書彙編』の編集に対してどれほど直接的な影響を及ぼしたのかを判断することはなかなか難しいが、訳書彙編発行所時期の一例をあげて検討していこう。

1901 年 5 月、戢翼翬、沈翔雲、秦力山等は国民会を成立し、革命を提唱する『国民報』を発刊しており、励志会会員の雷奮、楊蔭杭、楊廷棟を主筆として招いた¹²。しかし、実は『訳書彙編』第 1 期（1900 年 12 月）から第 8 期（1901 年 8 月）までの「新書告白」の項目において、「国民報告白」（図 3-3）という発刊のお知らせがすでに掲載されていた。この広告が単なる販売を目的にしたものか、『国民報』の影響を広げるためのものなのか定かではないが、少なくとも広告を掲載するに当たって、『訳書彙編』編集陣の内部で何らか議論になっただろう、ことは推測される。

言い換えれば、少なくともこの時期では、訳書彙編社の社員の間で政治的立場の相違がある者の、相互が対立または、分裂するまで至っていなかったと思われる。逆に、『国民報』と『訳書彙編』の発行所はともに麴町区飯田町 6 丁目 24 番地を名乗っていた状況から見れば、二つの雑誌の趣旨が大いに異なったとしても、編集者たちの関係が発行所に共有するまでの共通意識があったことは間違いないだろう¹³。

¹¹ 馮自由「壬寅東京青年会」『革命逸史』初集、中華書局、1981 年、102 頁。

¹² 前掲馮自由『革命逸史』初集、96 頁。また、彭国興・劉晴波編『秦力山集（外二種）』（中華書局、2015 年、45-51 頁）では、『国民報』序例と『国民報』章程が掲載された。

¹³ 馮自由は「一触即発」や「犬猿の仲」（積不相能、遂成水火）のように、両派の関係を描写したが、以上の分析によれば、この時期、留学生の間では矛盾や不和が存在しているものの、相容れない関係に至らないと思う。前掲馮自由『革命逸史』初集、102 頁。

図 3-3 「国民報告白」



出典：『訳書彙編』第1期、1900年12月6日。

広告内容：「国民報告白」本報宗旨。以昌世界之公理。振国民之精神為第一要義。半月一冊。首社説。次時論。次紀事。次來文。次訳編。次答問。現已經常創辦。不日即可告成。叙例另刊。有欲定閱者。請函告日本東京麹町區飯田町6丁目24番地國民社掛號可也。

第三には、社員の専門分野についてであるが、彼らが日本留学中に所属した学校で学んだ専門が主として政治と法律であった事実である。これは『訳書彙編』が政治と法律に関連する専門書籍の翻訳を編集趣旨の一つとして列挙していることとも一致する結果であると言える。

訳書彙編社の社員である戢翼翬、雷奮、楊蔭杭、楊廷棟、周祖培、金邦平、富士英、汪栄宝の8名はいずれも東京専門学校（早稲田大学の前身）の政治科で学んでおり、政治科専門の学生が訳書彙編社のうち、最も多くの人数を占めている¹⁴。章宗祥、銭承詒、呉振麟は、第一高等学校を経て東京帝国大学の法科大学に入り、政治学科選科生として政治学を学んだ。また曹汝霖は、東京法学院大学（中央大学の前身）に入学した¹⁵。

初期の留学生団体や組織における一つの特徴は、人員が常に変動していることである。その原因については、政治的立場の対立、在籍学校の変化、帰国、または欧米への留学

¹⁴ その中では、雷奮、楊蔭杭、楊廷棟、周祖培は東京専門学校の校外生制度を利用して早稲田大学の準校友となっている。戢翼翬と汪栄宝は早稲田大学での学習歴があるが、卒業しなかったため、のちに推選校友とされている。『大正4年11月調 早稲田大学校友会会員名簿』、281、283頁。ただし、1905年8月の『早稲田学報』第121号（77頁）に掲載された「殿試及第者」において、戢翼翬が「早稲田大学政治科卒業」と記され、どちらの記載が正しいのかはまだ疑問が残っている。

¹⁵ 曹汝霖は日本にやってきてしばらくの間は、東京専門学校に学んだが、通学に時間がかかるため、改めて東京法学院大学に入学した。前掲曹汝霖『一生之回憶』、8頁。

など各個人が置かれた状況の変化が関係していると思われる。励志会についても、訳書彙編社についても、資料に限りがあるため、一時期の社員構成しか考察できていないが、今後、両団体の人員の在籍状況をより詳細に比較すると、その関連性、あるいは継続性を明らかにすることは可能であろう。

第三節 訳書彙編社の担当者

訳書彙編社の運営を実際に取り仕切ったのは誰なのかについては、議論が分かれる。馮自由は以下のように述べている。

同時留学界之有志者嘗発刊一種雑誌、曰『訳書彙編』、庚子下半年〔1900年〕出版。江蘇人楊廷棟、楊蔭杭、雷奮等主持之。楊、雷亦励志会会員。¹⁶
〔そのときに留学生中に同じ志を持つ者が雑誌を発刊したが、雑誌名は『訳書彙編』であり、1900年後半に出版された。江蘇省出身の楊廷棟、楊蔭杭、雷奮等が主宰した。楊、雷は励志会の会員である。〕

江蘇省出身の楊廷棟、楊蔭杭、雷奮が『訳書彙編』を主宰したという馮自由の説に対し、実藤恵秀は戢翼輩が訳書彙編社の社長を務めた、と指摘している¹⁷。なお、范鉄権と孔祥吉も実藤恵秀と同じような観点を持っている。つまり、戢翼輩が日本に在留した時期が最も長かったことと、彼の日本語の翻訳能力が最も優れていたこと、それに励志会の成立にも直接、関与したことから、団体を組織する能力なども高かったことから、訳書彙編社の実質上の責任者は戢翼輩である、と推論された¹⁸。

また、「訳書彙編社社員姓氏」名簿の順番がどのような基準にもとづいたものであるか定かではないが、戢翼輩の氏名が最初に置かれていることから、彼が訳書彙編社の運営を実質的に担当した可能性が一番高いのではないか。

一方、「壬寅年訳書彙編担任訳員及幹事之姓氏」という名簿も残されている¹⁹。

¹⁶ 前掲馮自由『革命逸史』初集、99頁。

¹⁷ 前掲さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』、260頁。

¹⁸ 范鉄権・孔祥吉「革命党人戢翼輩重要史実述考」『歴史研究』2013年第3期。

¹⁹ 「壬寅年訳書彙編担任訳員及幹事之姓氏」『訳書彙編』第2年第1期、1901年4月3日。

表 3-3 1902 年『訳書彙編』担任職員及幹事の姓名

NO.	姓 名	字	1902 年の職位/在籍学校
1	王植善	培孫	上海育材学堂總理
2	陸世芬	仲芳	東京高等商業学校
3	金邦平	伯平	早稲田大学
4	汪榮宝	衰甫	慶應義塾大学
5	曹汝霖	潤田	東京法学院大学
6	富士英	意城	早稲田大学
7	錢承誌	念慈	東京帝国大学法科選科
8	章宗祥	仲和	東京帝国大学法科選科
9	呉振麟	止欺	東京帝国大学法科選科

出典：「壬寅年訳書彙編担任職員及幹事之姓氏」『訳書彙編』第2年第1期、1902年4月3日より作成。

表 3-3 によると、1902 年、『訳書彙編』の翻訳と幹事は王植善等 9 名が担当したとされ、戢翼翬、楊蔭杭、雷奮、楊廷棟、周祖培の 5 名は名簿に記されていない。

実際にこの年、戢翼翬は早稲田大学を中退して上海に戻り²⁰、上海を中心とする翻訳や出版の事業を展開していた。『国民報』の廃刊に代って、彼は上海にて『大陸』雑誌を発刊し、その主筆として楊蔭杭、雷奮、楊廷棟を招いた²¹。それとともに、戢翼翬は出洋学生編集所と作新社を設立するなど、非常に多忙な時期を迎えた。

ここで、実藤恵秀が提唱した戢翼翬の訳書彙編社の社長説を支持するのであれば、戢翼翬は訳書彙編社社員の身分を維持したまま、上海で多忙な活動を展開しながら、具体的な仕事は日本にいる社員たちに任せていた、ということになる。

この時期、訳書彙編社の実際の担当者は表 3-3 の順番で記載されているから、王植善もしくは陸世芬が訳書彙編社を主宰した、と言えるだろうか。実は、そうでもない。王植善は当時、上海の育材書塾の校長を務めていたので、むしろ東京に滞在していた陸世芬が訳書彙編社の日常業務を担当した、という推論ができる。

²⁰ 戢翼翬は早稲田大学政治科に入ったが、卒業するまでに至っておらず、1905年に推選校友とされた。早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史』第1巻、早稲田大学出版部、1978年、923頁。また、『大正4年11月調 早稲田大学校友会会員名簿』、281頁。

²¹ 『大陸』雑誌は戢翼翬らにより上海で作られた雑誌であり、その創刊号が1902年12月に作新社によって刊行された。また鄒振環「戢元丞及其創辦的作新社与『大陸報』」『安徽大学学报』2012年第6期を参照。

しかし、前述のように、『訳書彙編』第2年第10期に掲載された「出版確認書」（翻印禁止書）に、「日本の法科大学に留学した呉振麟等によれば、光緒二十七年、我等は日本東京にいて同志を集めて訳書彙編社を設け」²²たという記述があることから、表3-3の最後に姓名が見える呉振麟が訳書彙編社の代表である、という説も成り立つだろう。

なお、その他の証拠として、1902年7月に農業関連の学校や施設を視察するために訪日していた黄環は、清国留学生会館幹事から『同瀛録』、『会館章程』、『訳書彙編』など出版物をもらっているが、その日記に『『訳書彙編』は法科大学校学生の呉振麟らが放課後に政治学の書籍を翻訳し、印刷している。南洋大臣はすでに部下に、この雑誌を一括して購入するよう命令している」²³、と書き記している。以上の記述によれば、戢翼翬、王植善、陸世芬よりも呉振麟が訳書彙編社の実際の運営を担当した可能性ははるかに高いと思われる。

当然、訳書彙編社の成立と活動は、一人の努力に帰すべきではないであろう。戢翼翬は、日本の優れた学術関連の書籍を翻訳・出版する団体を組織するという計画を思いつき、それを実践したが、団体の結成や『訳書彙編』の編集出版はやはり彼一人ではなく、多くの社員が協力したことによって、成功にたどり着いたと評価しなければならない。

最後に、訳書彙編社の解散はいつ頃であったのか。

第二章で述べたように、勵志会の解散は1904年3月頃であった。同年5月20日に、勵志会の関連団体であった訳書彙編社は、『政法学報』癸卯第7、8期合刊（最終号）を発行している。日本と中国を含む一次資料（外務省記録、檔案資料、日記など）と新聞雑誌などの関連記事では、その後の訳書彙編社に関連する記述が出版物、新聞記事、檔案資料では確認できない。以上のことから、現段階では訳書彙編社は1904年5月に『政法学報』最終号の発行後に解散した、と推測される。

第四節 教科書訳輯社とその教科書出版

1901年7月、湖広総督張之洞と両江総督劉坤一が連名で「江楚会奏变法三摺」を上奏し、多くの改革策を提出した。その中、中国の伝統的教育への改革については、「興学堂」

²² 「出版確認書」『訳書彙編』第2年第10期、1902年12月27日。（奨留学日本法科大学学生呉振麟等稟称。窃生等於光緒二十七年。在日本東京糾集同志。創設訳書彙編社。）

²³ 黄環『考察農務日記』鍾叔河編『走向世界叢書』岳麓書社、2016年、57頁。《『訳書彙編』法科大学校学生呉振麟等於課餘訳録有關政治学術之書、印刷成編、南洋大臣已通飭所属一体購閱。）

（学堂を興す）、「奨励遊学」（遊学を奨励する）などの策が出されている。同年9月、張之洞と劉坤一は清国の中央政府に先立ち、江楚編訳官書局を設置し、新式学堂用の教科書の翻訳出版に着手している²⁴。

1902年、日本学制に倣った「欽定学堂章程」の発布は、中国の伝統的書院の改革と新式学堂の設立に拍車をかけた。同年、京師大学堂は編書処と訳書局を設置し²⁵、自ら教科書の編纂を始めると同時に²⁶、「現在、教科書の翻訳は急務である。総訳は外国でよく使われている教科書を選び、翻訳者の知識に応じて専門分野を割り振り、制限時間内に翻訳を納品する」²⁷と書かれたように、外国の教科書も翻訳している。

このような背景下、日本の中国人留学生は教科書の翻訳出版に従事し始めている。勵志会は早くも教科書の重要性を認識し、日本の中・小学校向けの教科書の翻訳出版を計画したが、団体の離散によって翻訳出版の継続は難航してしまった。その後、教科書訳輯社が、勵志会による教科書出版の計画を引き継いで、多くの教科書を翻訳出版しており、中国国内の新式教科書の普及のために大きな役割を果たした。

教科書訳輯社の成立時期について、資料不足のため、日付まで確認できていないが、1902年4月に発行された『訳書彙編』第2年第1期に初めて掲載された「教科書訳輯社広告」（図3-5）によると、1902年4月頃、教科書訳輯社はすでに教科書の翻訳を始めており、出版体制が整っていた、と考えられる。

²⁴ 柳詒徴「国学書局本末」国学図書館編『江蘇省立国学図書館第三年刊』南京公孚印書局、1930年11月、10頁。

²⁵ 羅惇勳「京師大学堂成立記」『庸言』1913年第1巻第13期、2-3頁。編書処総纂は李希聖、訳書局総辦は嚴復である。

²⁶ 「光緒二十八年（1902）大学堂謹擬編書処章程」朱有瓚主編『中国近代学制史料』第2輯上冊、華東師範大学出版社、1986年、861-864頁。

²⁷ 「光緒二十八年（1902）大学堂謹擬訳書局章程」前掲朱有瓚主編『中国近代学制史料』第2輯上冊、860頁。（現在所訳各書、以教科為當務之急、由總訳採取外国通行本、察訳者學問所長、分派深淺專科、立限付訳。）

図 3-5 教科書訳輯社の広告



出典：『訳書彙編』第2年第1期、1902年4月3日。（全国報刊索引より）

また、教科書訳輯社の発行所は、「東京本郷区丸山福山町15番地」²⁸と記されており、訳書彙編社と同じ場所にあった。その後、1902年8月、『訳書彙編』の発行所が移転するに伴い、教科書訳輯社の発行所も清国留学生会館に移されている。

次に、教科書訳輯社を運営していた中心人物を確認しておきたい。陳槐輯著『物理易解』（図3-6）に掲載された「出版確認書」（翻印禁止書）を見ると、

抛留学日本生員陸世芬等稟称。窃生等在日本東京糾集同志。創設教科書訳輯社。編訳東西教科新書。以備各省学堂採用。²⁹

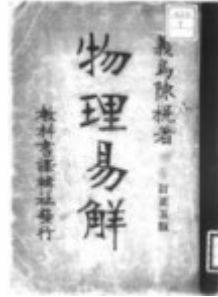
〔日本に留学した陸世芬等によれば、我等は日本東京にて同士を集めて教科書訳輯社を設け、欧米日本の新しい教科書を編訳し、各省の学堂の採用に備える。〕

と記されており、訳書彙編社の社員の陸世芬が代表者として明記されており、彼が教科書訳輯社の実務を担当していた、と推定される。

²⁸ 第1期の広告に「東京本郷区丸山小幡山町15番地」と書かれたが、第2、3期の「教科書訳輯社広告」の発行所を参照すれば、「丸山福山町」が正確な表記である。

²⁹ 陳槐輯著『物理易解』教科書訳輯社、1905年7月訂正第5版（初版1902年11月）、東京都立中央図書館実藤文庫所蔵。

図 3-6 『物理易解』の表紙



出典：陳槐輯著『物理易解』教科書訳輯社、1905年7月訂正第5版（初版1902年11月）、東京都立中央図書館実藤文庫蔵。

次に教科書訳輯社の社員構成を見ていく。同社は訳書彙編社と違い、その社員名簿が残存しておらず、人員構成の全貌や変化を明らかにすることはできないが、その代表者が訳書彙編社の社員であり、書籍の発行所も訳書彙編社と同じ場所であることを明記していることからすると、訳書彙編社と密接な関係を有していたことは間違いない。つまり、教科書訳輯社の幹事や社員は日華学堂、勵志会、訳書彙編社との間で緊密な交流を持っていた、と推定される。

なお、教科書訳輯社によって出版された教科書の著者をまとめると、陳槐と何燭時という人物の名前が頻繁に登場しており、同社の人員構成を確認できない現段階では、少なくとも、陸世芬、陳槐、何燭時の3名が教科書訳輯社の活動を支えていたと思われる。

教科書訳輯社は、中学用教科書の翻訳と出版を業務の中心としていた。その教科書の発行について、社員は以下のように記している。

原定仿講義録之例。按月分類出書。各処同志來函。多有以時日太久。未得全貌為言者。故同人公議。改為單行本出書。³⁰

〔本来であれば、講義録の形式を参照し、教科書を分類し、毎月連載することに決めていたが、各処の同志から書簡をもらい、この形式は時間が長くかかり、教科書の

³⁰ 「教科書訳輯社広告」『訳書彙編』第2年第1期、1902年4月3日。句点は筆者による。

全貌が見えないという意見があった。故に同人（仲間）で議論し、単行本で出版することにした。〕

つまり、教科書訳輯社は、『訳書彙編』と同様の形式で、一冊の教科書を数ヶ月に分けて連載し、出版する予定であったが、外部からの意見を受け入れて単行本での出版に切り替えたのである。同時に、図 3-5 が示すように、23 種の教科書の出版計画も掲載されている。

表 3-4 教科書訳輯社の出版計画

書 名	編著者	書 名	編著者
倫理学		中国歴史	
東洋史		西洋史	
中国地理		中等万国地理	矢津昌永講述
中地文学	矢津昌永	算術小教科書	藤沢利喜太郎編
初等幾何学教科書	長沢亀之助	代数学	上野清
平面三角学	菊池大麓	中等物理教科書	水島久太郎
中等化学教科書		普通生理教科書	片山正義
中等植物学	三好学編	中等動物学	石川千代松
新式鉱物学	脇水鉄五郎	図画術	
体操教範		国民新読本 英文	
法制教科書		経済教科書	
中等管理教授法			

出典：「教科書訳輯社広告」『訳書彙編』第 2 年第 1 期、1902 年 4 月 3 日。

表 3-4 は前掲の図 3-5 「教科書訳輯社広告」に掲載された出版計画を表でまとめたものであるが、それによれば、3 ヶ月後の 7 月 19 日になってようやく第 1 種『中等物理教科書』第 1 巻（水島久太郎著、陳規訳補）が上梓された³¹。また、いくつかの書籍については、その出版が確認できないものもある。

³¹ 「教科書訳輯社広告」『訳書彙編』第 2 年第 4 期、1902 年 8 月 31 日。

以下、表3-5「教科書訳輯社の刊行書籍」は、北京師範大学図書館が作った「晚清民国教材全文庫」(<http://jiaocai.bnu.edu.cn/>)に収録された中国近現代の教科書に基づいて、『民国時期総書目中小学教材』、『中国訳日本書総合目録』、『中国近代中小学教科書総目録』、『晚清新学書目提要』などの図書目録を参照しつつ、教科書訳輯社より出版された教科書をまとめたものである。

表3-5 教科書訳輯社の刊行書籍

書名		出版時期	原著	著訳者	出典
小学理科教科書 ^(注1)		1902.9	棚橋源太郎・樋口勘次郎『小学理科教科書』金港堂、1900年。	曾沢霖	『訳書経眼録』に収録(熊月之編『晚清新学書目提要』、298頁)。
中学物理教科書		1902.9	水島久太郎『近世物理学』上/下、春陽堂、1894年。	陳樸 訳補	『訳書経眼録』に収録(熊月之編前掲書、301頁)/北京師範大学図書館に所蔵あり。
中学生理教科書		1902.8	(米) スチール著、片山正義訳述『普通生理学教科書』共益商社、1893年訂正8版(1887年初版)。	何矯時 訳補	『民国時期総書目中小学教材清末中小学教材』、353頁/北京師範大学図書館に所蔵あり。
物理易解		1902.11		陳樸	図3-6を参照
教育志叢 ^(注2)	青年教育	1903.3?	不明	不明	「教育志叢発刊辞」『訳書彙編』第2年第12期、1903年3月。
	国家教育	1903.3?	不明	不明	
	教育学原理	1903.4	尺秀三郎・中島半次郎講述『教育学原理』東京専門学校講義録、刊年不明。	季新益	『訳書経眼録』に収録(熊月之編前掲書、278頁)/北京師範大学図書館に所蔵あり。
	社会学提綱	1903.2	(米) ギッテングス著、市川源三訳『社会学提綱』普及舎、1901年。	吳建常 重訳	『訳書経眼録』に収録(熊月之編前掲書、329頁)。
普通経済学教科書		1903.3		王宰善 輯著	『訳書経眼録』に収録(熊月之編前掲書、360頁)。

第三章 訳書彙編社と教科書訳輯社

中学地文教科書	1903. 3	神谷市郎『中等地文教科書』三省堂、1902 年。	汪郁年 訳補	北京師範大学図書館に所蔵あり。
中学地理教科書	1903. 4 ?		夏清貽	「新書予告」『江蘇』第 1 期、
中学幾何教科書	1903. 4 ?		周家彦	1903 年 4 月/『訳書経眼録』に
中学代数教科書 ^(注3)	1903. 4 ?	不明	陳梹	収録（熊月之編前掲書、363、365 頁）。
中学化学教科書	1904. 5	吉田彦六郎『中等化学教科書』上/下、金港堂、1893 年。	何矯時	『民国時期総書目中小学教材 清末中小学教材』、351 頁。
新編外国地理教科書	1904. 3		沈綿編	「出版予告」『政法學報』癸卯 年第 6 期、1904 年 3 月。
国民必読教育唱歌集	1904. 5		曾志恣 編	「出版広告」『政法學報』癸卯 年第 7、8 期合刊、1904 年 5 月。
初等代数学	1905	(英) チャールス・スミス著、実 吉益美抄訳『初等代数学教科書』 上/下、三省堂、1899 年。 ^(注4)	陳梹	北京師範大学図書館に所蔵あり。

出典：「教科書訳輯社出書広告」『訳書彙編』第 2 年第 7 期、1902 年 9 月 22 日に基づいて、「教科書訳輯社刊行書目」(『江蘇』第 1 期、1903 年 4 月 27 日)、海後宗臣等編『日本教科書大系』近代編第 23 卷理科第 3 (講談社、1966 年)、譚汝謙主編『中国訳日本書総合目録』(香港中文大学出版社、1980 年)、北京図書館・人民教育出版社図書館合編『民国時期総書目中小学教材 清末中小学教材』(書目文獻出版社、1995 年)、王有朋主編『中国近代中小学教科書総目』(上海辞書出版社、2010 年)、熊月之編『晚清新學書目提要』(上海書店出版社、2014 年)などの資料を参照して筆者が作成。

注 1：1904 年 1 月、上海文明書局は王季烈が訳述した版本を出版した。前掲『民国時期総書目中小学教材 清末中小学教材』、339 頁。

注 2：1903 年 3 月 13 日、『訳書彙編』第 2 年第 12 期に掲載された教科書訳輯社の広告によれば、4 編の教育志叢が出版され、つまり『青年教育』、『国家教育』、『教育学原理』、『社会学提綱』である。そのうち、『教育学原理』、『社会学提綱』の出版が確認できるが、『青年教育』、『国家教育』のところに「近刊」と書かれ、その出版が確認できないことで、翻訳の底本と翻訳者もわからない。

注 3：1903 年 4 月 27 日、『江蘇』第 1 期に掲載された教科書訳輯社の「新書予告」によれば、『中学地理教科書』、『中学幾何教科書』、『中学代数教科書』の三つの教科書が出版される予定であったが、『中学代数教科書』の出版が

確認できない。一方、1904 年 10 月、陳槐の『中等算術教科書』（上/下）が教科書訳輯社により出版された。この算術教科書が『中学代数教科書』との間、どのような関係があるのか、同じものなのか、または関係ない 2 種類の教科書なのか、まだ明らかにできていない。

注 4：チャールス・スミス著書の日本語訳はまた 1890 年の佐久間文太郎訳、上野清閑『初等代数学』（上/下）がある。

表 3-5 が示すように、教科書訳輯社は、合計 17 種の中等学校用の教科書を刊行したとすると目録を確認することができるが、そのうち『中学物理教科書』、『中学生理教科書』、『中学化学教科書』、『教育学原理』、『社会学提綱』などは現物を確認できるものの、『青年教育』、『国家教育』の出版は、現物がまだ確認できない。

そして、出版時期が確認できる教科書の多くは、1902 年から 1905 年までの 3 年の間に上梓されたもので、教科書訳輯社が活発な活動を展開した時期と訳書彙編社の活動時期は見事に重複している。これらのことから二つの団体は、名称は異なるものの、実際は同じ団体であった、と推測される。

それでは、なぜ二つの名称が用いられたのか。教科書訳輯社という新しい団体名を作った理由については、社員の役割から見れば、主に政治と法律などの書籍を翻訳している訳書彙編社と比べ、小・中学校の教科書の翻訳と出版に集中するグループを結成し、団体内部の業務の役割分担をすることによって、社員全体の役割や責任が明確になり、協力関係がスムーズに進むようになる。さらに各自が担当すべき業務に集中できるため、業務の質や量が向上することが期待できると思われる。また、教科書の販売の面から見ても、「正当で合理的な名義や理由をもってはじめて、物事が通って正しい方向に進んでいくことができる」³²というように、教科書訳輯社により教科書が翻訳出版されたら、清国の中央政府や新興の教科書の出版業界からの認可を得やすい、と推測される。

同じ団体が二つの名称を用いたとすれば、教科書訳輯社の解散時期も訳書彙編社と同じく 1904 年 5 月頃に特定することは可能であろう。だが、実は、そうとは限らない。表 3-5「教科書訳輯社の刊行書籍」の中に名前が見える査爾斯・史密斯（チャールス・スミス）の『初等代数学』という教科書が 1905 年 6 月に出版されたことによって、教科書訳輯社は、訳書彙編社より遅れて解散した可能性も否定できない。この時期、代表者の陸世芬はすでに帰国したものの³³、活動の中心メンバーであった陳槐と何燭時はまだ東京帝

³² 『論語・子路』。（名不正，則言不順；言不順，則事不成。）

³³ 「記吾浙夏季同郷大会」（『浙江潮』第 6 期、1903 年 8 月 12 日）によれば、1903 年 7 月 5 日、浙江省

国大学に在学中であったため、団体の活動を維持することはできたかもしれない。しかし、1906 年 7 月、陳梶と何煥時が東京帝国大学を卒業したことに伴い、教科書訳輯社も解散を余儀なくされた。

第五節 訳書彙編社社員の日本での学習歴——呉振麟と金邦平を中心に

本章の第二節では、訳書彙編社の社員構成について検討を加えた。ただし、社員の個々人に関連する研究においては³⁴、まだ多くの不明点が残っている。そこで、第五節では日本の外務省記録をより詳細に検討し、勵志会と訳書彙編社に関わった呉振麟と金邦平の留学時代の学習歴を明らかにすることを試みたい。

一、呉振麟

呉振麟は、清末期の日本留学界において、最も活発な留学生生活を送った一人として数えることができる人物で、勵志会の活動、訳書彙編社の翻訳と出版、清国留学生会館の成立と運営などにいずれも関与しており、その関連記録が日本の外務省外交史料館に現存している。

外務省記録中の呉振麟に関連する文書によれば、呉振麟は、浙江省嘉善県附生であり、日本に渡航する前には上海の育材書塾にて 2 年間英語を学んでいた³⁵。そして、浙江省巡撫と日本外務省の交渉を経て、1898 年 10 月 22 日に私費留学生として、日本陸軍大演習を観覧するために派遣された統領の雷芸桂とともに日本に赴き、日華学堂に入り、浙江省の留学生の陸世芬と陳梶等が在籍していたクラスに編入した。

これについて、日華学堂の日誌には、「明治 31 年〔1898〕10 月 29 日、此日孫淦氏より書状を以て、来る一日より清国学生呉振麟当学堂に入舎致したき由、報し来る」³⁶という記述が見える。

同郷会により章宗祥、陸世芬の送別会と湯爾和の歓迎会が開催された。

³⁴ 前掲呂順長『清末中日教育文化交流の研究』は、浙江省派遣の留学生に注目し、富士英、雷奮、楊蔭杭らの日本到着時期を考察し、陸世芬と教科書訳輯社との関連性を明らかにした。范鉄権・孔祥吉「革命党人戡翼輩重要史実述考」（『歴史研究』2013 年第 3 期）は、外務省記録を利用し、戡翼輩の経歴（生年月日、留学時期、経済状況、学生組織、雑誌出版など）を検討し上で、戡の帰国後の経歴について、清国「軍機処檔案」を利用して、袁世凱と瞿鴻禨との間で派閥の権力闘争に巻き込まれた戡が迫害され亡くなるという経過を明らかにした。

³⁵ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623200（第 45、46 画像）、「浙江省私費留学生一名本邦へ派遣ノ件」、在本邦清国留学生関係雜纂/陸海軍外之部（外務省外交史料館）。これは、つまり訳書彙編社社員の王植善が後に校長を務める学堂である。

³⁶ 『日華学堂日誌第一冊』、1898 年 10 月 29 日。

呉振麟の留学生生活が大きく変わるきっかけになったのは、彼が浙江省の官費留学生に選ばれたことである。中国人留学生史研究において、呉は私費の留学生から官費留学生に選ばれた最初の人物であったため、その過程はより詳細に検討する必要がある。

1899年6月10日、呉振麟は銭承詒、陸世芬、陳榎、汪有齡、何燭時とともに聴講生として、第一高等学校に入学する許可を得た³⁷。ちなみに、同じ時期に入学許可が下りた汪有齡は1898年に蚕業を学ぶために来日しており、日本語の学習歴がすでに約一年半に達し、銭承詒、陸世芬、陳榎、何燭時は1898年7月に日華学堂に入っているから日本語の学習歴が約一年であった。彼らと比べれば、呉は日本語の学習歴が僅か7ヶ月ほどで入学許可を得ていることから、学校から優秀な人材として評価された可能性が高い³⁸。

ところが、高等学校に進学した呉振麟は、「三年では勉強が足りなく、少なくとも五、六年を過ごさなければ学業を成し遂げることができない」³⁹ことに気づき、私費留学生から経済的に安定する官費留学生の定員枠を獲得することを強く希望することになった⁴⁰。

結論を先に言えば、呉振麟は、1901年6月に浙江省の官費留学生に採用されたが、これには、当時の浙江省留学生監督であった孫淦の推薦と、清国政府との間で強い人脈があった汪康年⁴¹の影響が極めて大きかったといえよう。

当時、浙江省の留学生監督を務めた孫淦と日本外務省の書記官三橋信方の往復書簡には、呉振麟の学費問題に関するやりとりが記されている。

1900年2月21日、孫淦より三橋信方あての書簡（図3-7）では、以下のような経緯が述べられている。

³⁷ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623300（第105-107画像）、「清国浙江巡撫ヨリ派遣セラレタル留学生銭承詒外五名第一高等学校ニ聴講生トシテ入学ノ件」、在本邦清国留学生関係雜纂/陸海軍外之部（外務省外交史料館）。『第一高等学校一覧 明治33年至明治34年』、1901年、「生徒姓名」、123頁。ちなみに、呉振麟、何燭時、章宗祥、胡嗣泰の4名が第一高等学校の寮に入居した。「入寮の清国遊学生を迎へ且つ之に告ぐ」『第一高等学校 校友会雑誌』第90号、1899年10月30日、76-77頁。

³⁸ 『日華学堂日誌第一冊』、1898年11月1日付の記述によれば、「11月1日、此日始て呉生に50音単語を教ゆ」と記されている。

³⁹ 「汪有齡 三十四」前掲上海図書館編『汪康年師友書札』第1冊、1104頁。（原意只以三年為期、及入学校後、始知欲求成就非五六年不可。）

⁴⁰ 呉振麟は資金をいくら持って日本に来たのかかわからないが、もし3年分の資金を準備する必要があるとしたら、第一高等学校に入ってから、毎年150-200円が必要であり、資金の問題が厳しくなったであろう。前掲章宗祥『日本遊学指南』、23-27頁。

⁴¹ 汪康年（1860-1911）、字は穰卿、浙江省錢塘（現在の杭州）の人。1889年、己丑科の舉人。1890年、張之洞に招かれ、武昌にて張の孫世代の教育にあたり、間もなく漢口自強書院の編集者および両湖書院史学斎の教師を兼任。1892年、進士。1895年、上海強学会に参加。1896年、『時務報』を創刊し、経理を務める。1898年、曾公銓、汪大鈞らと共に上海に東文学社を設立。『時務報』が官方経営となった後、『昌言報』と改名して発行を続ける。戊戌の変法後、『昌言報』は停刊。1904年、北京にて朝廷を受け、内閣中書に任命される。1907年、北京で『京報』を創刊。1911年、武昌起義の後、天津に移居し、同年死去。著書に『汪穰卿遺著』『汪穰卿筆記』などがある。徐友春主編『民国人物大辞典（増訂本）』河北人民出版社、2007年、723頁。

図 3-7 孫滄より三橋信方あての書簡



出典：JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623300（第 174-178 画像）、孫滄より三橋信方あて、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部（外務省外交史料館）。

実ハ呉振麟ノ親許ハ甚タ不恕〔如の誤力〕意ニシテ、豫テ学資送附申遣シ候得共、爾今送金無之候。御貴台ニ対シ、相済不申ニ付、迂生ヨリ立換通送仕候次第ニシテ、唯タ迂生ハ本人ノ勉強心ニ感シ、如何トシモシテ修学為致度決心ナレバ、同人ノ心情ヲ御憫察、可成的少費ニテ修学ノ術無之哉。尚御一考ヲ煩ハシ度此段御依頼旁。⁴²

つまり、孫滄は日本外務省に対して呉振麟の学費の状況及び彼の勉学に向けた熱心な態度を考慮し、彼の修学が続けられるよう学費減免の願いを提出した。

それに対して三橋信方の返信は、「追テ呉振麟学費省減ノ義ニ付御来之趣ハ、事情如何ニモ気ノ毒ニ候ニ付、尚ホ堪考ハ可仕候得共、差向キ好方便無之ト存候」⁴³と返事した。外務省は、呉振麟の置かれた状況に同情しながらも、彼の学費問題に便宜を図る具体的な解決方法などについては何にも言及していない状況であった。

孫滄は、呉振麟が学業を継続できるように日本外務省に学費減免を適用してほしいという望みを伝えたほか、同年 5 月には、浙江省の官費の定員枠に呉振麟を取り入れるよう求める書信を汪康年に送っている。

以学問論，無論其早歳蜚声庠序，游学于楚、于蘇、于汜，即在此間与東土士大夫詩文往還，亦頗負其名。至于外洋語言、文字之学，亦嘗争勝于各省游学秀髦济济之中。

⁴² JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623300（第 174-178 画像）、孫滄より三橋信方あて、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部（外務省外交史料館）。句読点と傍点は筆者による。

⁴³ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623300（第 180、181 画像）、三橋信方より孫滄あて、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部（外務省外交史料館）。句読点は筆者による。

以年歳論，浙中来者渠固最幼，左右較量，无不合格。〔中略〕將該生一名，亦歸入官費，俾其安心肄習，始終其習。⁴⁴

〔学問教養の面では、むしろ彼は以前から国内の学生の間においても有名であり、両湖、江蘇、上海にも遊学した。そして、このところ、日本の知識人との詩文の往来についても、見事に対応した。西洋の言語と文字の学問については、各省の留学生の間でも突出して優秀である。年齢から見れば、彼は確かに浙江省留学生の最年少者だが、優劣を量り、全てに合格した。〔中略〕呉振麟一名を浙江省の官費留学生に編入し、学業に専念させ、卒業できるようにしていただきたい。〕

浙江省の官費留学生であった汪有齡も、

前聞浙省有統派十人送往日本肄業之説，具見中丞公為國培才，不遺余力，可否請閣下轉達帥座，俯念吳生苦志力学，貲斧不繼，准將以後學費照新派諸生例，一律由官籌派，俾得竟其所学。⁴⁵

〔先ごろ、浙江省が十人を日本に続けて派遣するという噂を聞き、中丞公（浙江巡撫廖寿豊）が国家のために人材を養成することに全力を傾注していることがわかる。閣下（汪康年）は廖巡撫にお伝えくださるでしょうか。呉振麟は志を立てて一生懸命勉強している。経費不足の状況を考慮し、彼の学費が新たに派遣される留学生と同じく、政府によって出されるのなら、彼も学業に専念できると思う。〕

という望みを汪康年あての書簡に書き記している。

このほか、湖北省の留学生監督であった銭恂は、「呉振麟の件について浙江巡撫に手紙を出すことになっているが、私はこの件を引き継いでいないため、経費をどこから支出するのかまだわからない」⁴⁶と言及した。もっとも、呉振麟の経費問題はこのような多方の交渉を経ても、解決方法がまだ見当たらなかった。

では、呉振麟の官費資格はいつの時点で確定したのだろうか。これについては、外務省記録が有力な手がかりを提供してくれている。すなわち、1901年6月20日に外務省総務長官内田康哉より杭州の大河平隆則副領事あての公文書では、

⁴⁴ 「孫淦 三十」前掲上海図書館編『汪康年師友書札』第2冊、1467頁。

⁴⁵ 「汪有齡 三十四」前掲上海図書館編『汪康年師友書札』第1冊、1104頁。

⁴⁶ 「銭恂 二十六」前掲上海図書館編『汪康年師友書札』第3冊、3008頁。（呉振麟事，当函請浙撫。然事未接手，尚不知經費在何処也。）

官費留学生汪有齡ナル者学生ヲ辞シテ帰国候ニ付。吳生〔振麟〕ニ於テ其缺ヲ襲ヒ編入可相成ヲ以テ、汪生ノ学資ハ吳生ニ振向シテ支拂〔中略〕前頭ノ事情詳細其筋ヘ申進シ、右吳生ヲ汪有齡ノ補缺トシ、遡テ官費ニ編入相成様。御取計ノ上、吳生ニ対スル、客年七月以後本年六月ニ至ル一ケ年分学資月手当金、本年七月以後吳生ヲ加ヘ八名ノ学生ニ対スル、壹ケ年分学資月手当共併テ申請ケラシ至急回送相成候様。⁴⁷

という書き込みが見える。それに、同年 8 月大河平副領事の報告によれば、浙江省留学生の学費をすでに横浜正金銀行の上海支店を通して振り込んだ⁴⁸、ということがわかる。

総じていえば、浙江省留学生の汪有齡と譚興沛の帰国をきっかけに、吳振麟に対する経費の引継ぎが議論され、最終的には 1901 年 6 月に吳振麟の浙江省官費生としての資格が確定したことが推測される。これらのことから、吳振麟は 1901 年 9 月から官費留学生の資格を持って東京帝国大学法科大学に入ることができた、と思われる。

以上、私費留学生の吳振麟が浙江省の官費留学生として採用される過程を紹介したが、彼は官費留学生の資格を獲得したことで経済的な問題を解決し、学業に専念し、東京帝国大学で順調に勉強しながら、『訳書彙編』の編集や清国留学生会館の活動などに積極的に関与することになった、といえよう。

二、金邦平

金邦平は、政治と法律を勉強するために、1899 年 3 月北洋大臣から派遣された官費留学生であった。これより前に到着している浙江省、及び南洋留学生と同じく日華学堂にて普通科を学習し、後に早稲田大学にて修学したことが知られるが、彼が早稲田大学の他に東京帝国大学農科大学に在籍した事実は看過されがちである。

金邦平が日華学堂に在籍していた時の日本外務省の記録によれば、日華学堂の学生は、日本語の会話や作文など一般的な内容を勉学するのみで⁴⁹、専門知識の授業が十分ではないことに強い不満を持っていた、という記述が見える。1899 年 4 月、黎科、張煜全、王

⁴⁷ JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B12081617300 (第 241-243 画像)、外務省総務長官内田康哉より杭州の大河平陸副領事あて、在本邦清国留学生関係雑纂/陸軍学生之部第一巻 (外務省外交史料館)。

⁴⁸ JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. B12081617300 (第 255-257 画像)、「浙江派遣留学生学資金回送ノ件」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸軍学生之部第一巻 (外務省外交史料館)。

⁴⁹ 日華学堂の予備教育について、本論文の第一章第一節「日華学堂の留学生とその予備教育」に詳しく論じられたので参照されたい。

建祖、張奎、金邦平、周祖培の 6 名は日華学堂に入ってもない時期に、東京帝国大学にて政治や工学などの専門科目を聴講することを希望する願書を日本外務省に提出していた⁵⁰。

しかし、東京帝国大学の学期はすでに始まっており、その途中に授業を聴講することは許されなかったため、彼らの希望は実現しなかった。ただし、彼らの東京帝国大学への聴講希望の申請後、日華学堂で勉強していた他の留学生も相次いで東京帝国大学、またはその他の学校への聴講を請願することになった⁵¹。なお、これについて、南洋公学総辦の何嗣焜は在上海日本総領事館に書簡を送り、南洋学生が北洋学生と同様に、東京帝国大学の授業を聴講入学できるようにしたい、と繰り返し交渉を行った⁵²。

その結果、1899 年 9 月 13 日、南洋と北洋留学生の数名は聴講生として、東京帝国大学、第一高等学校、東京専門学校への入学が許可されるようになった。しかしながら、同年 6 月の申込とは異なり、王建祖、周祖培は東京帝国大学ではなく、東京専門学校（早稲田大学の前身）に入学することが決まり、黎科、張奎、張煜全の 3 名は、東京帝国大学土木工学科、応用化学科、政治科への入学がそれぞれ許可されることとなった。

1899 年の『東京帝国大学一覧』に記載された学生の名簿においても、黎科、鄭葆丞、高淑琦、蔡成煜、張奎、張瑛緒、沈琨、張煜全、安慶瀾の名前が確認され⁵³、そのうち黎科、張奎、張煜全の 3 名は聴講生として名前が記されている。ところが、同資料では、東京帝国大学の農科大学への聴講を希望した金邦平の名前だけは確認することができない。

それでは、金邦平が東京帝国大学の農科大学に在籍したことを確認するその他の根拠はないのであろうか。当時の金邦平の留学活動を記録した日華学堂の資料によれば、彼が東京帝国大学の農科大学に在籍したという説を裏付ける記述が見える。

表 3-6 金邦平に関する日華学堂日誌の中の記述

年	月日	要項
1899	8. 16	張煜全、金邦平両生須巻温泉根本樓ニテ開ケル東京帝国大学関係者懇親会ニ出席ス。

⁵⁰ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623200（第 92-93 画像）、外務大臣青木周蔵より文部大臣樺山資紀あて、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部（外務省外交史料館）。

⁵¹ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081623300（第 141-149 画像）、在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部（外務省外交史料館）。

⁵² JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081617200（第 165 画像）、「南洋公学総辦何嗣焜来信写」、在本邦清国留学生関係雑纂/陸軍学生之部 第一巻（B-3-10-5-3_1_001）（外務省外交史料館）。

⁵³ 『東京帝国大学一覧 明治 32 年至明治 33 年』、1899 年 12 月、407、429-430 頁。

	9. 24	金生ヨリ農科大学寄宿舎へ入舎許可セラレタル旨ニ通シ来ル。
	10. 1	金生来堂。書籍費ヲ徴ス。
	10. 8	金生来泊。寄宿食料雑費ヲ給与ス。
	10. 28	金生来堂。月費ヲ支給ス。
	12. 3	此日金生ニ学資ヲ給ス。
1900	6. 3	金生来テ来学年ヨリ実科生タランコトヲ求ム。
	6. 7	金生之志望ヲ農科大学長ヘ伝ヘラレンコトヲ請フ。
	6. 18	金生来テ、暑中休業中農科大学寄宿舎ヲ去ルニ付キ、舎監宛之御書ト総監之印ヲ押サンコトヲ求ム。
	6. 19	金生、日華学堂ニ移転ス。
	9. 23	金生ヨリ専門学校ヘ転学ノ件を願ヒ出ス。
	9. 29	金生学堂ヲ辞シ、牛込区喜久井町二十番地ニ転居シ、専門学校ニ通学スルコトナレリ。

出典：『明治三十二年学堂日誌』、1899 年—1900 年より作成。

表 3-6 によると、いくつかの従来知られていない事実を指摘することができる。

まず、金邦平が東京帝国大学関係者の懇親会に出席し、農科大学の寄宿舎への入舎を許可されたという記述から、金邦平は東京帝国大学農科大学に入学し、凡そ一年間農科大学の寄宿舎で生活したことがわかる。ところが、原因は不明だが、彼の名前は『東京帝国大学一覧』から抜け落ちている。ただし、「農科大学府県別人員表 明治 32 年 9 月末調」の最後に付された「備考」の記述によれば、「清国人 1 名、台湾人 2 名アルモ、右ハ聴講生及仮入学生ナルニ付本表ニ算入セズ」⁵⁴と記されるように、1899 年 9 月末、1 名の清国留学生が東京帝国大学農科大学に在籍していることが確認できるが、その名前が明記されていない。以上の複数の記述から、この清国留学生が金邦平である可能性は極めて高いと言える。

また、金邦平は東京帝国大学の農科大学で教育を受けたが、彼の学費は日本外務省が農科大学に直接振り込むのではなく、依然として日華学堂が支出したことになる。この点を見ると、金邦平は相変わらず日華学堂に在籍していたのではないかと、思われる。当時、多くの中国人留学生が在籍していた日華学堂は、留学生への授業の他に、学

⁵⁴ 『文部省往復 明治 32 年』、東京大学文書館：S0001/Mo113。

費の受け取り、支払いなどを中継していた可能性があり、この点について、さらなる検討が必要であるが、いまは、これ以上のことを述べることはできない⁵⁵。

このほか、1900年9月29日の記述において、金邦平は日華学堂を辞し、牛込区喜久井町20番地に転居し、東京専門学校に通学していたとされる⁵⁶。実は、この住所は『訳書彙編』の発行所としてその第1期から第8期までの奥付に記載された住所と同一の住所である。金邦平は、励志会の会員であったため、雑誌の発行所が同一住所に置かれていたことは不思議ではない。やむを得ない状況下で、一時的に牛込区の住所を発行所にしたのではないかと考えられ、金邦平はこの後、『訳書彙編』の編集を引き継ぎ訳書彙編社の社員になったことから、金邦平は最初から『訳書彙編』を編集する主な人物であったとも推測される。

むすび

本章では、訳書彙編社と教科書訳輯社の成立時期、社員構成、及び団体の担当者などを検討した。そこで、新たに確認できたことを次のようにまとめてみる。

第一、『訳書彙編』の奥付の変化に対する分析の結果によって、訳書彙編社は1900年ではなく、1901年末に結成され、励志会から『訳書彙編』の編集出版を引き継いできた翻訳団体であることを確認できた。同社は1904年5月の廃刊まで、活発な翻訳活動を行い、多くの政治、法律、外交などに関連する多くの著作を翻訳した。

第二、訳書彙編社の社員は、その構成の面から励志会の特徴を継承し、政治的立場の分岐が存在したものの、その違いが雑誌の編集と出版にまで影響を及ぼすことはなかった。なお、「出版確認書」などの記述によって、訳書彙編社の実務に関わったのは戢翼翬、王植善、陸世芬ではなく、呉振麟であることを確認した。

第三、励志会の後継者の一つである教科書訳輯社は、励志会の教科書出版の計画を実行に移し、日本の中小学校の教科書を多く翻訳出版し、中国国内の知識人や新式学堂に提供した。教科書訳輯社の社員名簿は現存していないが、少なくとも陸世芬、陳槐、何燭時の3名がこの団体の活動を支援していたことがわかった。

⁵⁵ 日華学堂学生の経費問題については、胡穎「日華学堂の経営及び経費管理」（龔殿武・柴田幹夫編著『日華学堂とその時代——中国人留学生研究の新しい地平』武蔵野大学出版会、2022年）を参照。また、胡穎『清末の中国人日本留学——派遣と経費を中心に』（学術研究出版、2021年）は、清末中国人留学生の経費問題を検討する著作として参照されたい。

⁵⁶ 「明治三十三年九月東京専門学校政学部学費舍費月俸領収簿」、早稲田大学大学三号館旧蔵資料、id60-0185（早稲田大学大学史センター）。

第四、呉振麟と金邦平の日本での学習歴を外務省記録などの史料に依拠して明らかにした。呉振麟は私費留学生として日華学堂に入り、後に第一高等学校を経て東京帝国大学に進学したが、この間、孫淦などの支援によって浙江省の官費留学生に選抜された。また、金邦平は東京専門学校（早稲田大学の前身）に入学する前に、実は 1 年間、東京帝国大学の農科大学に在籍した経歴があることを日華学堂の日誌と東京大学文書館の資料によって確認することができた。

励志会、訳書彙編社、教科書訳輯社などの学生団体は、実は多くの中国人留学生を翻訳の道に導き、留学生界において日本の先進的な知識を中国国内に紹介する一大の「翻訳ブーム」を巻き起こしただけでなく、明治日本を経由して西洋と日本の新知識や理論を中国に輸入し、民衆の啓蒙に尽力した、という大きな役割を果たした。

次章では、励志会、訳書彙編社、教科書訳輯社と密接なつながりのある清国留学生会館の成立及びその役割について検討する。

第四章 清国留学生会館の設立から終焉まで

はじめに

清国留学生会館は1902年3月、東京の清国留学生によって設立された組織であり、設立当初は「連絡情誼、交換智識」（留学生同士の情誼を繋ぎ、知識を交換する）を趣旨に掲げていた¹。しかし、清国留学生会館は、最初の清国留学生組織ではなく、これに先立つ1899年、勵志会が留学生の親睦団体として活動を始め、次いでこの勵志会から訳書彙編社が独立する形で活動を始め、『訳書彙編』を編集するなどして留学生界において活動していた。ちょうど、中国人留学生の活動が活発になり始めた20世紀の初頭に清国留学生会館が誕生したことになる。

清末期、清国留学生会館は、留学生の集会、講習、演説会の会場、雑誌の発行所、さらに図書館などの多様な機能を担い、留学生の活動の拠点として、留学生の生活と学業を支援する一方、「拒俄運動」や「清国留学生取締規則事件」などの留学生の愛国運動において、留学生を支援、または調整する役割をも果たした、と言える。

従来の清国留学生会館（以下、会館と略す）に関する先行研究としては、以下の論考を挙げることができる。

一つ目の論考は、実藤恵秀の『明治日支文化交渉』と『中国留学生史談』である²。彼は『訳書彙編』、『遊学訳編』などの留学生雑誌の一部を取り上げ、これらの雑誌と会館

¹ 清国留学生会館のほか、「江戸留学生会館」、「支那留学生会館」、「中国留学生会館」、または略称の「留学生会館」、「遊学生会館」など様々な呼称が用いられた（寧金苑「清国留学生会館研究」武漢大学修士論文、2018年）。寧の所論を補足すると、「江戸留学生会館」は、「亜細音楽会之歴史」（『新民叢報』第51号、1904年9月10日、101頁）という記事に現れた呼称であり、また「清国留学生総会館」や「中国留学生総会館」といった呼称もあった（JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081629100（第407、420画像）、「清国留学生総会館ニ関スル件」「留日中国国民会草綱」、在本邦清国留学生関係雑誌／雑之部 第一巻（B-3-10-5-3_6_001）（外務省外交史料館））。このほか、孫志曾編『雲南』第12—14号、1908年2—4月に掲載される「雲南雜誌週年紀念特別大贈彩定購全年票發行廣告」において、「中国会館」という略称も現れた。

² 実藤恵秀「清国留学生会館ものがたり」（『明治日支文化交渉』光風館、1943年）、「清国留学生会館」（『中国留学生史談』第一書房、1981年）。

との関係を分析した上で、会館設立の経緯を考察しつつ、会館は勵志会との関係が深く、訳書彙編社が発展した組織であると推論した³。ただし、同氏の分析は『清国留学生会館報告』という最も重要かつ一次的な史料を利用しておらず、前述の結論はあくまでも推論にとどまっている。

次に、北岡正子は『清国留学生会館第一次報告』を利用し、「会館大事記」という記事を解説しつつ、会館設立の経緯と業務内容について概説した⁴。その後、孫安石は会館の組織構成と運営実態を考察しており、特に会館の招待〔案内〕業務を高く評価した上、会館報告に掲載された留学生の言説を分析し、清国留学生の近代的な「愛国」精神の発露を指摘した⁵。しかし、上記北岡と孫の研究は会館の組織や運営に研究の関心が置かれ、会館の設立前後に活躍した留学生の団体とその役割については詳細を触れていない。

他方、寧金苑「清国留学生会館研究」は、中国国内の論文としては、初めて会館を中心に上げた修士論文で、会館の設立と解散、組織の構成と運営、そして、当時の留学生運動の中で果たした会館の役割などについて分析しており、いままで発表された会館に対する考察としては最も詳しいものであると評価することができる⁶。しかし、寧金苑の研究は主に中国語の資料に依拠しており、日本側の資料（外務省記録、新聞記事、大学の公文書など）を利用しておらず、会館設立の経緯については不明なところを多く残している。

そこで、本章では、以上のような先行研究の成果と課題を踏まえ、清国留学生会館が設立される過程を改めて考察しながら、文献調査とフィールドワークを結びつけ、会館の場所の変化と解散の時期などについて究明することとしたい。特に勵志会、訳書彙編社が会館とともに存在していた時期に注目し、勵志会、訳書彙編社が会館の組織構成や活動内容などに果たした役割をも明らかにしたい。

³ 前掲実藤恵秀『明治日支文化交渉』、255-262頁。

⁴ 北岡正子『魯迅 日本という異文化のなかで——弘文学院入学から「退学」事件まで』関西大学出版部、2001年。

⁵ 孫安石「清国留学生会館研究初探——「国家」と「愛国」のはざま」孫安石・大里浩秋編著『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』東方書店、2019年3月。

⁶ 前掲寧金苑「清国留学生会館研究」。

第一節 清国留学生会館の設立交渉——清国駐日公使と留学生、そして、日本の動き

『清国留学生会館第一次報告』によれば、1898 年以後、清国留学生の人数が増加するにつれて清国留学生の間では会館を作るべきという構想が数回議論されていた。しかし、資金調達の問題で実現できずにいたが、1901 年末に安徽省から派遣された遊歴官の李宗棠が東京を遊歴したのをきっかけにその設立計画が具体化し⁷、1902 年 3 月 30 日になって清国留学生会館の開館式が行われ、その運営が正式に始まった⁸。

この設立経緯について、以下では、李宗棠が当時、日本に滞在した際に記述した『東游記念第一考察学務日記』、及び『清国留学生会館第一次報告』、日本の外務省記録を参照しながら、李宗棠、駐日公使蔡鈞、清国留学生のそれぞれの役割について紹介していく。

表 4-1 は、李宗棠『東游記念第一考察学務日記』の会館に関わる記述と『清国留学生会館第一次報告』の「会館大事記」の関連記述を加えてまとめたものである。

表 4-1 清国留学生会館の設立に関する記述

年	月日	東游記念第一考察学務日記	会館大事記【1902 年 3 月 30 日の開館式まで】
1901	12. 24	蔡公使に会い、留学生会館の設立について相談。	
	12. 25	午前、公使館に赴き留学生会館の設立について促す。蔡公使の決心はなお揺れ動く。	
1902	1. 10	午初、蔡公使に会い、再び留学生会館の設立について述べる。	
	1. 21	晩、留学生の章宗祥ら 19 人が来て、寄付によって会館を設立することを協議。	
	1. 25	午前、蔡公使に会い、会館のことを談ずる。	
	1. 26	晩、留学生会館のことを協議。	

⁷ 李宗棠、字は蔭柏、安徽省阜陽県の人。戸部郎中。清末、北海公学監督、安徽教育会長を歴任。1901 年 11 月、湖北候補道だった李は安徽巡撫王之春によって派遣され、学務関連の調査のために訪日していた。息子の李潤官が同行し、東京同文書院に入学した。それ以来、1908 年までに、李は合計 9 回訪日し、『東遊記念』9 巻を残した（東京都立中央図書館実藤文庫蔵、または標点排印本として李興武が校訂した『東遊記念』（黄山書社、2016 年）もある）。田原天南編『清末民初中国官紳人名録』（中国研究会、1918 年、167 頁）、前掲李宗棠『東游記念第一考察学務日記』（1-2 丁）を参照。

⁸ 清国留学生会館幹事『清国留学生会館第一次報告』東京並木活版所、1902 年 10 月、「会館之成立」、「開館式記事」、9、19 頁。

第四章 清国留学生会館の設立から終焉まで

1. 30	留学生洪竹蓀 ^(注1) らが来て、会館のことを問う。	
2. 2	書簡を蔡公使に送り、会館のことを促す。	
2. 10		蔡公使が留学生を集めて借行社で宴会を開き、会館創設のことを協議。〔中略〕呉禄貞は留学生会館を創設することを首唱し、皆が賛成した。 〔中略〕金邦平は会館章程の起草委員として范源濂 ^{ママ} 、呉振麟、呉禄貞、章宗祥、曹汝霖、程家樞（病気のため陸世芬が代理）、高逸らを推挙し、皆が賛成した。皆はさらに金邦平を推挙し、合計8名となる。
2. 16	清国留学生は神田区錦町の錦輝館を借りて新年会を開き、会館章程について議論。李宗棠自身は別の用事で出席できなかった ^(注2) 。	
2. 17		起草委員が上野の三宜亭に集まり、会館章程について議論。
3. 14	黄伯愚 ^(注3) に留学生会館の寄付金を託し、彼が東京に行った際、蔡公使に渡す。	
3. 16	辰初〔午前8時頃〕、〔福岡県〕門司に到着。	錦輝館で留学生大会を開き会館章程について討論。〔中略〕会館幹事を選挙し、呉振麟、銭承詒、范源濂 ^{ママ} 、陸世芬、王璟芳、曹汝霖、張紹曾、呉禄貞、高逸、金邦平、章宗祥等の12名が当選した。この日の来賓は李宗棠等の数人であった ^(注4) 。
3. 19		幹事が上野の三宜亭に集まり、会館の館内規則について議論。
3. 30		開館式を行う。

出典：李宗棠『東游記念第一考察学務日記』（1901年、1-72丁、東京都立中央図書館実藤文庫蔵）、清国留学生会館幹事『清国留学生会館第一次報告』（東京並木活版所、1902年10月、「会館大事記」、21-22頁）より作成。

注1：洪銘、字は竹蓀、安徽省出身、私費留学生。当時、東京高等工業学校に在籍。

注2：新年会に出席していない李宗棠は、この日の記事を他人（留学生や官吏）から聞いて記したと思われる。

注3：黄以霖、字は伯愚。元湖北候補知府、当時、清国の神戸領事を務める。

注4：3月16日には李宗棠はすでに帰国の途にあり、福岡県門司港に到着していた。そのため、同日に錦輝館で開催された留学生大会に出席できなかったことは明らかである。したがって、李宗棠が来賓として出席したという「会館大事記」中のこの日の記載には誤りがあると思われる。

表 4-1 の記述によって、以下のことが読み取れる。

まず、李宗棠の日記によると、彼は留学生の強い要望に応え、少なくとも 4 回にわたり会館の設立について蔡公使を説得していることである⁹。それだけでなく、彼は留学生の代表に状況を伝えながら、最終決定を下すように公使に書簡を送ることも提案している。李宗棠が駐日公使と留学生の間に入り、両者の意思疎通を手伝うという努力がなければ、わずか 4 ヶ月という短期間で会館の設立が実現することはなかっただろう。

会館の設立に熱心であった留学生は、特に勵志会の会員が中心であった。1902 年 2 月 10 日、偕行社で行われた清国留学生の大会には 240 余人の留学生が参加したが、「会館章程」という最も重要な規約を作成した起草委員には、范源廉¹⁰、吳振麟、吳祿貞、章宗祥、曹汝霖、程家樞（陸世芬代理）、高逸、金邦平の 8 名が挙げられている。ところが、驚くことに高逸以外は（代理起草委員の陸世芬を含め）、全員が勵志会の会員であった¹¹。

さらに、のちに詳しく触れるが、1 ヶ月後に開催された錦輝館での留学生大会で選出された会館の初代幹事は「会館章程」を起草した委員らによって推薦されたことから、勵志会という留学生団体が会館の設立において中心的役割を担っていたことがわかる。

以上、李宗棠と留学生の役割を述べたが、実際、会館が設立するためには、駐日公使蔡鈞の賛否こそが会館設立の要であったと思われる。留学生が特に駐日公使に求めたものは、会館の開設のために必要な資金の調達であった。

結論を先に言えば、蔡鈞は会館の設立に賛成し、会館の開設に必要な資金 300 円を寄付し、それだけでなく、留学生が期待したもう一つの役割を果たした。つまり、それは公使をはじめとして公使館の職員、各省の遊歴官、そして清国国内の開明的な官僚などが会館の設立と運営を支援するきっかけを作ったことである¹²。

ただし、上記の李宗棠日記 1901 年 12 月 25 日の条に書かれているように、当初、蔡鈞は会館という組織が結成されることに賛成することを躊躇していた¹³。その理由は康有為、梁啓超の活動と深く関わっていたことが、以下の事件の経緯から明らかである。

⁹ 李宗棠と蔡鈞の関係については、訪日前の往来については不明であるが、1901 年 11 月 16 日に、李宗棠は新任駐日公使蔡鈞の一行とともに、西京丸に搭乗して上海を出発していることから、船上で会っていたと思われる。前掲李宗棠『東游紀念第一考察學務日記』、2 丁。

¹⁰ 范源廉の姓名は「廉」と「瀋」の二つの表記があり、本論文は范源廉の表記を使用している。歐陽哲生等編『范源廉集』湖南教育出版社、2010 年。

¹¹ 第二章の表 2-1「勵志会の会員名簿」を参照されたい。また、高逸（字は曠生）は安徽省合肥出身、1901 年に私費留学生として来日。当時、第一高等学校に在籍していた。前掲『清国留学生会館第一次報告』、『同瀛録』、3 頁。『第一高等学校一覽 明治 34 年至明治 35 年』、1901 年、「生徒姓名」、124 頁。

¹² 前掲『清国留学生会館第一次報告』、「会計一覽」、39-42 頁。

¹³ 従来の研究の中では、嚴安生『日本留学精神史』（岩波書店、1991 年）がこの事件における蔡鈞の対

1902 年 1 月上旬、駐日公使蔡鈞は、清国留学生の現状と彼らの管理に関する意見を大
学士の榮禄と两江総督劉坤一に送付し¹⁴、さらに同年 2 月 8 日には、蔡鈞は同趣旨の文書
を清国外務部にも密かに呈していた¹⁵。しかし、どういうわけか、約 1 ヶ月後の 3 月 14
日には、この秘密の文書は日本の駐清領事館に漏洩し、日本の外務省記録には「本邦派
遣清国留学生見合方ノ義ニ付蔡公使報告ニ関スル件（別紙乙号）」（以下、「別紙乙号」）
として保存されている¹⁶。それは以下のような内容であった。

康梁毒炎銷息以来。其遁逃潜匿日邦者。指不勝屈。類皆窃其餘唾。巧肆簧鼓。借合
群之誼。而自由之說益橫。醉民主之風。而革命之議愈肆。各省聰俊子弟。來茲肄業。
一聞邪說。誤入迷途。竟有流蕩忘返之勢〔中略〕現計諸生來者。數已逾四五百人。總
核所費巨款。即各省自設学堂。亦必敷用。但能延聘東西著名教習。主講学堂。慎選清
白子弟。分門肄業。再由使臣多訳東西有用書籍。謄送貴衙門。核印頒行。各省学堂。
亦足資借鏡從長之益〔中略〕若各省更能暫停添派遊学。俾卒業者有去無來。則流毒有
時而尽。¹⁷

〔康有為、梁啓超の毒炎が消滅して以来、日本に逃げ隠れる者は数えきれないほど
多い。彼らは大抵その康、梁の言葉を盗み取り、言葉巧みに人心を惑わせている。合

応について触れている。厳は清国官僚の保守主義が留学政策に影響を与えたことは指摘しているが、蔡
と会館設立の関連性については論じていない。また、孔祥吉「留日学生的派遣与清王朝命運的終結」
（『驚雷十年夢未醒——檔案中的晚清史事与人物』廣東人民出版社、2017 年）は、この文書の漏洩経緯
を分析した上で、蔡の行為が彼の愚かさによるものであると論じている。最近では、王柯「從「永停遊
学」到「鼓勵遊学」」（『亦師亦友亦敵——民族主義與近代中日關係』香港中文大学出版社、2020 年）も、
この事件について「清国留学生取締規則事件」の前史として触れているが、蔡が留学生の派遣に反対し
た理由、及び蔡と会館の関係については論じていない。

¹⁴ 蔡鈞より劉坤一あての書簡については関連資料や外務省記録には見当たらなかったが、1902 年 3 月の
蔡鈞より榮禄あての書簡では、「〔蔡〕鈞は遊学の弊害について、宮太保中堂〔榮禄〕、及び外務部と南
北洋大臣に密かに報告したが、遊学を阻止することは日本の嫌うことであるので、この書簡の内容も秘
密にするように外務部と南北洋に求める」と書き込んでいることから、蔡鈞が两江総督・南洋大臣劉坤
一に留学生管理に関する秘密の書簡を送付したことは確実である。杜春和・耿来金・張綉清編『榮禄存
札』齊魯書社、1986 年、「蔡鈞札 第四通」、371 頁。

¹⁵ 「乙号写 節録蔡星使致外務部原函」によれば、蔡鈞が外務部に文書を送付したのは正月初一（1902
年 2 月 8 日）のことである。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081626200（第 90 画像）、「乙号
写 節録蔡星使致外務部原函」、在本邦清国留学生関係雜纂/雜之部 第一卷（B-3-10-5-3_6_001）（外務
省外交史料館）。

¹⁶ 「本邦派遣清国留学生見合方ノ義ニ付蔡公使報告ニ関スル件」によれば、3 月 14 日、日本領事館在南
京分館の主任天野恭太郎は南京陸師学堂總辦俞明震の友人から、清国外務部の文書を手に入れ、その要
点を摘録し、外務部からの劉坤一あての訓令とともに、日本上海總領事館を経て外務大臣小村寿太郎に
報告している。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081626200（第 81-86 画像）、「本邦派遣清国
留学生見合方ノ義ニ付蔡公使報告ニ関スル件」、在本邦清国留学生関係雜纂/雜之部 第一卷（B-3-10-5-
3_6_001）（外務省外交史料館）。

¹⁷ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081626200（第 85、86 画像）、「本邦派遣清国留学生見合方
ノ義ニ付蔡公使報告ニ関スル件（別紙乙号）」、在本邦清国留学生関係雜纂/雜之部 第一卷（B-3-10-5-
3_6_001）（外務省外交史料館）。原文は漢文であり、訳文は筆者による翻訳。

群（団結）の誼を通じて自由の説が益々溢れ出した。民主の風に惑溺されて革命の議論が益々放恣になった。各省の聡明な子弟が日本に来て学習し、邪説を聞き、道を踏み外し、ついには放蕩な道に流れ、離れがたくなってしまうている。〔中略〕現在の清国留学生を計算すると、その数はすでに四、五百人を超えている。それに費やす資金を計算すると、各省が自ら学堂を設けても充分に足りるほどである。日本や西洋の有名な教師を招聘し、学堂で講義をさせて、無垢な子弟を慎重に選んでそれぞれの科目を学習させる。さらに外交使臣に日本や西洋の有用な書籍をより多く翻訳させ、貴衙門（外務部）に送り、検定・印刷して各省の学堂に頒布すれば、また参考の益に資することできる。〔中略〕もしその上に各省が更なる留学生の派遣をしばらく停止し、卒業した者は日本を離れるようにし、二度と日本に来させないようにすれば、康、梁の害毒はいつかなくなるだろう。〕

この「別紙乙号」の報告で注目すべき点は、まず蔡公使は、康有為と梁啓超の影響をすこぶる強調し、中国人留学生がすでに彼らの「自由」、「民主」、「革命」などの「邪説」に毒されている、と考えている点である¹⁸。そして、蔡公使は、このような放蕩な考えを持つ留学生が増加する現状を打破するために、留学生派遣の政策を一時中止し、さらに多くの外国人の教習を招聘し、中国国内で人材を育成する方法しかない、と主張している。したがって、蔡は留学生派遣の政策を否定し、今後の派遣を中止することを主張し、留学経費を国内の新式学堂の設立に投入すべきだと提案している。

一方、この蔡鈞の意見に対する日本側の反応は極めて激しいものであった。特に4月1日に天津総領事の伊集院彦吉より外務大臣小村寿太郎にあてた電報に付されていた「乙号写 節録蔡星使致外務部原函」（以下、「乙号写」）の内容が問題視された。「乙号写」の内容は「別紙乙号」と比べ、基本的に留学生派遣を阻止する趣旨は変わらないものの天皇に対する否定的な話までが言及されていたのである。

日邦民徳久衰。風俗淫乱。政府腐壊。天皇徒擁虚名於上〔中略〕日本之号称維新者。有名無実。其政府多樹党援。各分門戸。不顧公義。¹⁹

¹⁸ 1902年初の蔡鈞より榮禄あての書簡では、康有為、梁啓超に対しても、留学生管理に対しても、ほぼ同じ意見が表明されている（前掲『榮禄存札』、『蔡鈞札 第三通』、370頁）。

¹⁹ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081626200（第90-92画像）、「乙号写 節録蔡星使致外務部原函」、在本邦清国留学生関係雑纂/雑之部 第一巻(B-3-10-5-3.6_001)（外務省外交史料館）。ただし、「別紙乙号」と「乙号写」が参考にした元の文書が同一のものであるかどうかは、現在確認できる史料からはわからない。

〔日本国民の道徳は長く衰えており、風俗が淫乱である。政府は腐敗し、天皇はただ虚名の上に擁立されているだけである。〔中略〕日本の維新を称するものもいるが、その中身は有名無実である。また、政党が林立し、門戸が細かく分かれ、公義を顧みない。〕

日本の風俗が淫乱であり、政府は腐敗し、天皇は虚名に過ぎないという言辞は、日本の外務省はもちろん、日本政府を全否定することであるかのようにさえ受け取れる厳しいものであった。これに対して、天津総領事の伊集院彦吉は、「無根の事実」を書き並べることは、「親睦の阻害」になると厳しく批判すると同時に、劉坤一の幕僚であった江蘇候補道の陶森甲がこの情報を漏らした経緯についても、「其本文上申書ノ写ヲ陶森甲氏ヨリ窃ニ我日日新聞社へ密報」²⁰、と言及していた。

このような清国の内部で具申された秘密の報告書が日本側の外交筋に漏洩したのも、問題であるが、この漏洩は政府レベルにとどまらず、日本国内の新聞にも暴露され、問題はさらに深刻になっていく。

すなわち、『大阪朝日新聞』、『東京朝日新聞』、『読売新聞』、『万朝報』など日本の大手の新聞各社は、この外交上の秘密の文書を暴露し、日本社会でも大いに論争が巻き起こったのである。表 4-2 はこの時期、日本の各新聞に掲載された「密書事件」に関する記事をまとめたものである。

表 4-2 「密書事件」に関する日本の新聞紙に掲載された記事

新聞 日付	大阪朝日新聞	東京朝日新聞	読売新聞	万朝報	東京日日 新聞	二六 新報	時事新報
3. 26	蔡公使の密書（遊						
3. 27	学生の本邦派遣を 阻止す）						
3. 28			清国公使の留学生 阻止密書				

²⁰ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081626200（第 87、88 画像）、「本邦駐清清国公使ノ清国留学生ニ関シ外務部ニ致シタル上申ノ件」、在本邦清国留学生関係雑纂／雑之部 第一巻（B-3-10-5-3_6_001）（外務省外交史料館）。陶森甲に関しては、戴海斌が「陶森甲——近代中日関係史上的“双面人”」（『晚清人物叢考・二編』生活・読書・新知三聯書店、2018 年）の中で詳しく論じている。

第四章 清国留学生会館の設立から終焉まで

3. 29		蔡公使の密書（遊 学生の本邦派遣を 阻止す）				本邦駐節 清国公使 蔡鈞氏	
3. 30			【社説】清国留学 生派遣見合わせ事 件				
3. 31	蔡公使の密函に就 て						
4. 1	清国留学生	清国留学生又来る					所謂蔡公使の密 書と留学生の取 締
4. 3	清国公使館の辯疏	密書事件と蔡公使	清国公使館の辯疏	清 公 使 の 密 書 本文	清公使の密書 問題（蔡公使 の談話）		
4. 5	蔡公使の密函に就 て（再び）		清国留学生阻止事 件				
4. 7	清国留学生の辯妄		〔転載『大阪朝日 新聞』〕蔡公使の密 函に就て 清国留学生と密書 事件	蔡 事 件 に 関 す る怪聞		清国留学 生の団結 力	
4. 8	蔡公使の辯疏	密書事件、清国公 使の答辯		密 書 事 件 の 顛 末		青年国民 党と清公 使	
4. 9	袁世凱渡来に就て				清国留学生		
4. 10			密書事件（某消息 家の談）				
4. 11	蔡公使の密函に就 いて						

第四章 清国留学生会館の設立から終焉まで

4.12					清国の留学生派遣		
4.13						【北京近信】袁世凱は蔡公使の密書……	
4.14	蔡公使の密函に就て	公使の密書事件					
4.15	栄禄の辯疏		栄禄の辯疏			密書事件と栄禄の辯解	
4.20			袁世凱の対密書意見				
4.30		蔡公使の意見					
5.1	蔡公使召還の風説		蔡公使帰国の風説				
5.2	【北京電報】(1日 発) 蔡公使の辞表提出	【北清特電】(1日 北京発) 蔡鈞氏辞職					
	清国守旧派の増進						
5.3		【北清特電】(2日 天津発) 駐日公使更迭の説					
		清国公使蔡鈞氏の直話					
5.4	蔡鈞公使と転任説						
	蔡氏召還の風説						
5.5				清国公使更迭の説			
5.8	駐日公使の人選						

第四章 清国留学生会館の設立から終焉まで

5.9				蔡 鈞 公 使 の 安 全			
5.10	駐日公使	蔡鈞氏の地位危ら んとす					
5.16		【社説】変法自強 の塗抹	派遣見合は事実か				
6.1			清国の近況				

出典：『大阪朝日新聞』、『東京朝日新聞』、『読売新聞』、『万朝報』、『時事新報』、『二六新報』、『東京日日新聞』などの新聞により作成。

表 4-2 が示すように、1902 年 3 月 26 日から 5 月 16 日にかけて、「密書事件」に関してほぼ毎日報道され、まさに社会的関心事となった。これらの記事から、以下のように読み取れる。

まず 1902 年 3 月 26 日と 27 日に『大阪朝日新聞』が最初に「別紙乙号」を翻訳して公開したことで、口火を切った報道合戦であるが、この最初の報道には早くも清国外務部からの劉坤一あてた訓令を同時に掲載していることから、その情報はおそらく日本政府からもたらされたものであろう²¹。

そして、3 月 28 日になると、この文書は『東京朝日新聞』と『読売新聞』にも転載され、さらに 4 月 3 日には『万朝報』と『東京日日新聞』が「乙号写」をそのまま掲載し、その影響は、日本社会全体を巻き込み一気に拡大した²²。その後 5 月 16 日に至るまで、この事件に関する多くの風説や情報、または社説が新聞各紙をにぎわしたが、その論調は様々であった。

日本の新聞各紙は、それぞれの立場からこの事件を評価していたが、それは主に三つに分けられる。そのうち、蔡鈞を批判する立場を取るものが明らかに多く²³、たとえば、3 月 31 日の『大阪朝日新聞』は、

²¹ 「蔡公使の密書（遊学生の本邦派遣を阻止す）」『大阪朝日新聞』1902 年 3 月 26、27 日。「別紙乙号」と「蔡公使の密書」を比較してみると、内容としては全体的にほぼそのまま翻訳されており、『大阪朝日新聞』の記事が「別紙乙号」を参考に行っていることがわかる。

²² 「清公使の密書本文」『万朝報』1902 年 4 月 3 日。「清公使の密書問題（蔡公使の談話）」『東京日日新聞』1902 年 4 月 3 日。

²³ 日本の各紙の中で、『時事新報』は蔡鈞寄りの分析を行っている（「所謂蔡公使の密書と留学生の取締」『時事新報』1902 年 4 月 1 日）。『東京日日新聞』は清国の留学生政策に助言を述べる中立の立場を取っているほか（「清国留学生」『東京日日新聞』1902 年 4 月 9 日）、『大阪朝日新聞』、『東京朝日新聞』、『読

清国における新文明輸入の風気を妨礙し、延て日清の邦交を傷損するの患なしとせず〔中略〕設備完全なる学校を各省に設立せんには、其費用の浩大なること、三四百留学生派遣の比にあらず。〔中略〕若し清廷にして中心より其の創鉅痛深に感憤して一大決心を以て改革に従ふに意あらんには、留学生の派遣に関して、多少思想上の革命を招き来らんことは、固より之を予期するの勇なかるべからず〔中略〕吾輩は蔡氏が自ら顛末を表白して、其の罪を謝するの意を明らかにするに非ずんば、果たして遂に能く出使大臣として、邦交を輯睦し、特に最も好意ある隣国の事情を本国に疏通する任に堪ふるや否やを疑ふ。²⁴

蔡鈞が駐日公使に適任なのかを疑わざるを得ない、と批判している。さらに4月10日の『読売新聞』は、

清国留学生抑止事件は十分喧い事ですが、事は甚だ小に似て而も其影響は決して等閑に附すべからざる事で一は我邦の信用にも関し、他は清国の文明を阻害するもので、容易に看過すべからざる事と思ひます。〔中略〕私費生中にても僅数名に過ぎるに、此数名の為に幾多の留学者を犠牲に供し、剩へ文明の輸入を防止せんとするは実に愚な極である。²⁵

と厳しく批判した。

ところが、このような日本の新聞報道に対して、梁啓超らによって発行されていた『新民叢報』は、1902年4月8日に第5号の記事「行人失辞」で、「乙号写」を報じた『万朝報』を転載しながら、次のように強く反駁した。

外交官為一国之代表。其自辱而国体即与之俱辱。中国方当荆天棘地之時。更何堪復蒙此奇醜耶〔中略〕要之中国他日之存亡絶続。皆将惟日本留学生是頼。多得一人。即

売新聞』、『二六新報』、『万朝報』はすべて留学生側に同情的だったり、清国政府を批判する立場を取っている（「本邦駐劄清国公使蔡鈞氏」『二六新報』1902年3月29日。「変法自強の塗抹」『東京朝日新聞』1902年5月16日）。

²⁴ 「蔡公使の密函に就て」『大阪朝日新聞』1902年3月31日。

²⁵ 「密書事件（某消息家の談）」『読売新聞』1902年4月10日。

多収一人之益。中国今日大事。未有過於是者。吾敢昌言曰。阻止派留学生之人。即我国文明之公敵也。²⁶

〔外交官は一国の代表であり、それが自ら侮辱を招くと「国体」は彼とともに侮られる。中国がいま山積みの苦境に落ちている最中に、どうしてこのような醜聞を蒙ることにさらに耐えられようか。〔中略〕要するに、中国の将来の生死存亡のすべては、ただ日本に留学している学生こそが頼りである。一人が増えれば、一人の利益を多く収めることができる。今日の中国の大事の中で、このことより重要なものはない。私はあえて言う、「留学生派遣を阻止する人は、即ち我が国の文明の共通の敵だ」と。〕

この『新民叢報』の記事で注目すべきことは、留学生の派遣中止を「両国の親睦を阻害」し、「文明の輸入を防止」するものであるという批判が、実は蔡公使に向けられていたことであろう。梁啓超は、蔡鈞を名指して批判はしないものの留学生派遣に反対する人は、中国の「文明の共通の敵だ」と激しく糾弾したのである。

駐日公使蔡鈞も秘密の文書が日本の外交筋に漏洩し、一般の新聞にも報道され、中国と日本の言論を巻き込む大きな問題に発展することに強い危機感を感じたのだろう。

3月26日、27日の秘密の文書が新聞に報道された後、蔡鈞は2通の書簡を榮禄に送付し、南洋大臣、北洋大臣、そして、外務部に秘密に送付した文書が陶森甲によって改ざんされ、思いがけず日本の新聞各紙にばらまかれ、自分が誹謗中傷を受ける不利な状況に追い込まれている、という現状を説明し、榮禄の支持を求めた²⁷。

一方、日本側には、3月28日午後には東亜同文会会長を務めていた公爵の近衛篤磨が清国公使館を訪れた際に、蔡鈞は「日本に来る留学生を阻止するの考毛頭無之、此書面は同氏を中傷せんとするものの手になりしとて、陶森甲と公使の地位を競争したる事」²⁸であったように、事情の経緯を説明した。

結局、留学生派遣の中止を求めた蔡の意見は、劉坤一、張之洞、袁世凱らの地方の実力派官僚にも、中央の榮禄と外務部にも採用されず、留学生の派遣が続くことになった

²⁶ 「行人失辞」『新民叢報』第5号、1902年4月8日、85-92頁。

²⁷ 前掲『榮禄存札』、「蔡鈞札 第四・五通」、371-375頁。また、「乙号写」の真偽については、1902年4月19日の神奈川県警察の調査では、「其趣旨ニ一層ノ激烈ナル文字ヲ加ヘ、支那全国及日本留学生間へ通報セシモノハ如シ。由來其出所判明ナラズト雖トモ、北京ヨリ発信センハ事実ナルカ如シ」という結論が出されている。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081626200（第96、97画像）、「蔡公使密書ニ就テ」、在本邦清国留学生関係雑纂/雑之部 第一巻(B-3-10-5-3_6_001)（外務省外交史料館）。

²⁸ 近衛篤磨日記刊行会編『近衛篤磨日記』第5巻、鹿島研究所出版会、1968年、66頁。

が、留学生の派遣政策をめぐる異なる意見があったことが理解できる事例として注目したい。

結局、1901 年 6 月に外国留学を推進する「奨励遊学」の政策が公布された後のわずか半年後という時期に、駐日公使の蔡鈞が留学政策に反対する意見を表明したのは、果たして、蔡の考え方が保守的であったからなのか、または、保身のためであったのか、あるいは出世をねらったものであったのか、まだ検討の余地がある。

蔡鈞は長い間、広東、福建、江蘇などの地方で対外交渉を担い、現実的に問題を捉える視点と外交の才能があると高く評価された人物である²⁹。そうだとすれば、蔡は康有為、梁啓超らが留学生に清国に反対するという悪い影響を与えることを避けるために、清国側に留学生派遣の中止を求める一方で、留学生会館を利用して留学生を管理しようという現実的な対策を打ち出すという目論見があったかもしれない。

以上で紹介した蔡鈞の秘密の文書が巻き起こした外交上の問題や日本の新聞への報道事件などは、いずれも会館の設立が検討されていた時期に出されていることから、蔡が同時期に留学生派遣の中止を求めたのは、偶然とはいえない。ところが、蔡は、清国外務部に文書を送付した 2 月 8 日の 2 日後の 2 月 10 日には、偕行社で清国留学生を宴席に招待し、演説しているが、その内容は、留学生派遣の中止という意見とは正反対の、次のような発言であった。

公使展覽一過，諸嗟嘆賞曰：“我必竭力贊成之。”諸生同声応曰：“是必請極力提倡。”公使旋發辭曰：“〔中略〕諸君離鄉別井，万里負笈，未嘗不苦。但必耐苦，然後能成學。學成則公足以報國，私足以榮身。中國需材孔殷，予不能不為諸君日企望之。

〔中略〕惟望諸君做學生時。常以忠君愛國四字存于心。則他日必為有用之材也。又重語曰。會館事甚善。我必竭力贊成。”³⁰

〔蔡公使は（会館設立の意見書）を一通り読んだ後、「私が必ず全力で支援したい」とため息をついて賞賛している。諸生は「ぜひこれを支持してください」と声を揃え

²⁹ 張曉川「前言」蔡鈞撰、張曉川整理『外交辯難』上海古籍出版社、2020 年。蔡鈞『外交辯難』は 1905 年に出版されたが、その内容が駐日公使に着任する前の対外交渉にとどまり、日本官僚との往来、または中国人留学生との関係については触れられていない。

³⁰ 前掲『清国留学生会館第一次報告』、『偕行社之記事』、6 頁。また、「別紙乙号」の最後には「曉以忠君愛上之忱、与以上進出身之路」という表現が用いられ、強調されていることから、蔡は会館の設立に対する態度は大きく変わるが、一方で留学生政策に対する主張は一貫していたと言つてよい。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081626200（第 86 画像）、「本邦派遣清国留学生見合方ノ義ニ付蔡公使報告ニ關スル件（別紙乙号）」、在本邦清国留学生関係雜纂/雜之部 第一卷（B-3-10-5-3_6_001）（外務省外交史料館）。

て呼応した。蔡公使はすぐ次のように発言した。「〔中略〕諸君は故郷を離れ、遠いところへ留学し、みな苦しんできている。しかし、苦しみに耐えれば、学問を修めることができる。皆さんは学問を修めれば、公においては国に報いることができ、私においては榮譽に浴することができる。中国は大量の人材を必要としている。私は諸君の将来のことを考えなければならない。〔中略〕ただ諸君らには学生の時に、忠君愛国の四字を常に心に留めることを私は望む。そうすれば、将来には必ず有用な人材になれる。また、重ねて述べるが、会館のことは非常に素晴らしく、私が必ず全力で支援したい。〔後略〕」

つまり、蔡は留学生を取り締まることができないのであれば、留学生らによる会館の設立に反対せず、逆に会館という組織を利用し、留学生を管理するという、一種の折衷的な手段を編み出したと言えるかもしれない。具体的には、会館を通じて留学生の情報を把握するとともに、個々人の活動を厳重に管理し、「忠君愛国」という儒教思想の下、彼らを清国の官僚として育て上げることに大いに期待を寄せていたといえよう。

ただし、蔡の会館設立に対する支持や、寄付金を出すなどの行為は、間違いなく会館の設立を推し進める結果となった。さらに、皮肉なことに、会館が設立されてまもない時期に起きた「成城学校入学事件」により、蔡は会館幹事の働きかけにより解職されてしまったのである³¹。

このように留学生は会館の設立を自発的に提唱したが、その設立は、駐日公使蔡鈞、留学生監督銭恂、その他、李宗棠などの清国官僚の後援を得ていることから、留学生だけの力による自主的な組織であると評価することは難しい。したがって、会館は上からの官僚の支援と下からの留学生の自発性という二面性を持つと言えるが、こうした構造ゆえに、会館は清国政府と留学生の狭間にあつて、双方から非難されやすい状況に置かれることになった³²。

³¹ 「成城学校入学事件」に関する研究成果は豊富にあるが、特にさねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』（くろしお出版、1970 年）所収の「成城学校入学事件」は、この事件の経緯を複数の立場からの史料により考察している。また、前掲北岡正子『鲁迅 日本という異文化のなかで——弘文学院入学から「退学」事件まで』、208-263 頁も参照。

³² なお、蔡鈞と彼の後任の駐日公使は、会館を直接管轄下に置こうとしたが、その意図は失敗に終わっている。その一方で、1906 年 12 月、清国の学部は公使館内に遊学生監督処を設置し、留学生を厳重に管理する施策を採った。「(5152) 学部酌擬遊学日本章程請設専員管理摺」「附件一 管理遊学日本学生章程」北平故宫博物院編『清光緒朝中日交渉史料』第 70 卷、1932 年、1-5 丁。

第二節 清国留学生会館の所在地とその構造

次は、会館の所在地について見ていく。『清国留学生会館第一次報告』によれば、会館は、「神田区駿河台鈴木町十八番地にある一部屋を賃貸し、会館として日常事務を処理し、集会場所となる」³³と記されており、さらに会館の場所は、「その地勢が高朗であり、神田駿河台の中央の位置を占め、昔から江戸の名所として名高い。各地からの人々はここに来る距離が同じであったため、江戸の中心地と称されている」³⁴、と地理的特徴を描いている。

この「神田区駿河台鈴木町 18 番地」は当時の町名であったが、現在の町名は「千代田区神田駿河台 2 丁目 3 番地」になっており、水道橋駅と御茶ノ水駅の間、神田川の南岸に位置していた。実藤恵秀は、1942 年と 1950 年の二回にわたり、会館の跡地を探す現地調査を行っているが、その目的地はいずれも駿河台鈴木町 18 番地であった³⁵。

しかし、最初に会館が開設された場所が神田区駿河台鈴木町 18 番地の借家であるという説にはまだ疑問の余地が残っている。

「会館大事記」壬寅五月廿三日（1902 年 6 月 28 日）の条において、「幹事が会館遷移のことを報告した」³⁶という内容を見れば、会館が移転したことがあるということがわかる。つまり、最初に会館があった場所は駿河台鈴木町 18 番地ではない。その移転の経緯を明らかにするために、関連資料を再検討することとする。

1902 年 4 月 3 日、『訳書彙編』第 2 年第 1 期に掲載された「清国留学生会館告白」（図 4-1）という会館成立の広告には、会館の所在地は「神田区駿河台鈴木町 19 番地」と記されており、なお同誌の第 2 年第 2 期と第 3 期の「本編代派所」の箇所では、『訳書彙編』の代理販売所としての会館の場所が鈴木町 19 番地と書き記されている³⁷。ほぼ同時期に、上海の『選報』に掲載された会館成立の記事においても、会館の所在地は「神田駿河台鈴木町 19 番地」³⁸とあるように明記されている。

³³ 前掲『清国留学生会館第一次報告』、「章程」、12 頁。

³⁴ 前掲『清国留学生会館第一次報告』、「会館之成立」、9 頁。駿河台鈴木町の位置について、『風俗画報』第 195 号（東陽堂、1899 年 8 月 25 日、26 頁）に、「袋町の北隣に在りて。水道橋より壕水に沿ひ。御茶の水橋畔に至る間を名け。廿四番地に分てり。〔中略〕当地は駿河台中。最とも高阜なるところにして」と紹介される。

³⁵ 前掲実藤恵秀『明治日支文化交渉』（249-255 頁）、『中国留学生史談』（147-149 頁）はそれぞれ 1942 年と 1950 年の調査を紹介している。

³⁶ 前掲『清国留学生会館第一次報告』、「会館大事記」、22 頁。（幹事報告会館遷移事。）

³⁷ 「本編代派所」『訳書彙編』第 2 年第 2 期、1902 年 5 月 13 日。「本編代派所」『訳書彙編』第 2 年第 3 期、1902 年 6 月 23 日。

³⁸ 「学生会館」『選報』第 17 期、1902 年 5 月 28 日、21-22 頁。

图 4-1 清国留学生会馆告白



図 4-2 明治末期駿河台鈴木町第 18、19 番地の地図

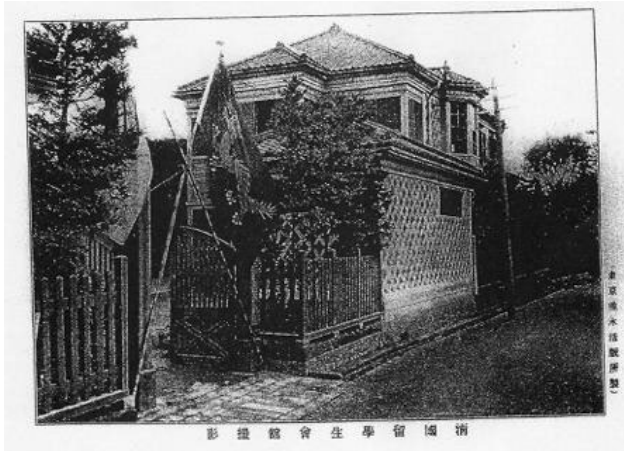


出典：「神田区全図」飯田錦之助『東京十五区分地図』博益社、1904 年（人文社編集部『明治東京区分地図 日本地図選集』人文社、1968 年）により、筆者作成。

次に、会館の外観とその内部構造を見ておこう。『第一次報告』では、「清国留学生会館撮影」（図 4-3）が掲載され、その様子については、「洋式の住宅一棟を賃貸し、二階建ての住宅の各階ごとに八室がある。家の西には二軒の和式の部屋があり、閹人〔門番〕と巡査〔警備〕がそこに住んでいる。周りは赤い柵を用いて囲んでおり、赤い柵と庭先の木が互いに引き立てている」³⁹と紹介されている。なお、会館の写真からは、会館の入り口は、日本国旗と清国の黄龍旗が互い違いに建てられており、その隣の柵に清国留学生会館という看板があった、と見える。

³⁹ 前掲『清国留学生会館第一次報告』、「会館之成立」、9 頁。（貸洋式住宅一所。宅楼一楹。上下八室。楼西和室二軒。閹人及巡査居之。四囲環以紅欄。与庭前緑樹相掩映。）

図 4-3 清国留学生会館撮影



出典：清国留学生会館幹事『清国留学生会館第一次報告』東京並木活版所、1902年9月。

実藤恵秀の1940年代の調査によれば、関東大震災後、その場所にあった建物は「トタン屋根二階建の文化住宅風の家」⁴⁰と記されていたが、2019年11月と2023年1月に、筆者も2回の現地調査を行い、駿河台スカイビル（図4-4、現今の千代田区神田駿河台2丁目3-16）という建物がかつての「神田駿河台鈴木町19番地」に建てられたことを確認している。建物は幾多の移り変わりを経て、現在は7階の建物になっていたが、その周りの地勢は大きく変わらなかったため、百年前、魯迅、宋教仁などの留学生が会館に通った情景を想像できた。

⁴⁰ 前掲実藤恵秀『明治日支文化交渉』、251頁。

図 4-4 かつての神田駿河台鈴木町 19 番地にある駿河台スカイビル



出典：2023 年 6 月 19 日、筆者撮影。図の中、右の黄色の 7 階の建物は駿河台スカイビルである。

中国人留学生が集まる集会、講習、演説会の会場であり、雑誌の発行所、留学生の生活や学業の支援の場、など多様な機能を担っていた会館の内部構造について、中国人留学生の教育者として有名な松本亀次郎が以下のように述べている。

瓦屋根の二階建て、すくなくとも間口五間、奥行八間から十間はあったとおもひます。まんなかを廊下がとほつていて、応接間、会議室、事務室などいろいろな部屋がありました。二階は教室になっていました。

この建物と別に、門番の小さな家があつて、細川といふ男がいて、受付を兼ねて、ここで出す本の売りさばきをして裕福にくらしていました。

家主のことですか？よくわかりませんが、あらたにたてたものとはおもはれませんでしたね。⁴¹

当時、松本亀次郎は、会館内に開設された日本語講習会の教員として中国人留学生に日本語を教えていたため、会館を訪れる機会が極めて多かった。松本亀次郎の回顧と会館の「館内規則」を合わせてみれば、会館の構造については、「館内に事務室、応接室、閲覧室、食堂が設置され、そのほかの部屋は全て談話室として使われる」⁴²というものであり、日本語講習会の開催に伴い、その 2 階の部屋が教室になっていたと思われる。

以上、会館が立地した場所とその内部構造を考察したが、次はその組織構成を検討する。

⁴¹ 前掲実藤恵秀『明治日支文化交渉』、254-255 頁。これは実藤恵秀が松本亀次郎にインタビューした記録であった。

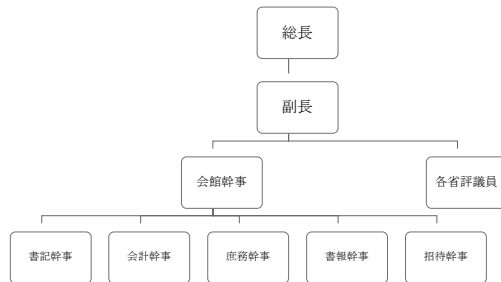
⁴² 前掲『清国留学生会館第一次報告』、「館内規則」、15 頁。（第二条 館内設事務室、応接室、閲覧室、食堂各一、餘均為談話室。）

第三節 清国留学生会館の組織構成と励志会の役割

1902年3月30日に、4ヶ月の努力を経て、清国留学生会館の運営がようやく始まった。多様な機能を担う会館は、「会館章程」にその組織構成、選挙と運営方法、経費などを詳細に定めていた。

会館は総長、副長、幹事、評議員、及び招待員などの部門を設け、各々その職務を定め、それに半年ごとに幹事改選を行った。図4-5「清国留学生会館の組織図」は「会館章程」によって組織の構成を図で表したものである。

図 4-5 清国留学生会館の組織図



以下、清国留学生会館の組織構成を確認しながら、励志会会員（または訳書彙編社社員）が会館の運営を支える重要な役割を演じたことを明らかにする。

一、清国留学生会館の総長と副長

会館の総長と副長は、「選挙辦法」によって推挙されると定められた。表4-3は『清国留学生会館報告』の第1次から第5次までに掲載された「職員表」をまとめたものである。

表 4-3 清国留学生会館の歴任総長と副長

任期	期間	総長	副長	選挙規定
第一期	1902.3—10	蔡 鈞	錢 恂 ^(注1)	総長：駐日公使 副長：留学生監督

第四章 清国留学生会館の設立から終焉まで

第二期	1902. 10—1903. 4	汪大燮	錢 恂	総長：留学生総監督 副長：留学生監督
第三期	1903. 4—11	楊 枢	錢 恂 (ロシア公使参事官)	
第四期	1903. 11—1904. 5	楊 枢	錢 恂 (ロシア公使参事官)	総長：駐日公使兼留学生総監督/留 学生総監督
第五期	1904. 5—12	楊 枢	廃 止	

出典：清国留学生会館幹事『清国留学生会館報告』第1次—第5次、東京並木活版所、1902—1904年、「職員表」に基づいて、佚名『清季中外使領年表』（沈雲龍主編『近代中国史料叢刊三編』第16輯、文海出版社、1985年）、高木理久夫編・呉格訂「錢恂年譜（増補改訂版）」（『早稲田大学図書館紀要』第60号、2013年3月）、錢卓士厘『癸卯旅行記・帰潜記』（湖南人民出版社、1981年）を参照して作成。

注1：1902年5月、錢恂が一時に帰国し、錢恂の代わりに夏借復が会館副長を代理する。『清国留学生会館第一次報告』、「職員表」、34頁。

表4-3によれば、会館の総長は基本的に駐日公使が、そして副長は留学生監督がそれぞれ兼任していたことがわかる。

会館の設立を支援した駐日公使蔡鈞は初代の総長を務めたが、1902年に起きた「成城学校入学事件」によって解職された。その後、1902年10月、公使館と留学生との間での対立を和らげるため、清国政府は留学生総監督という新たな管理職を設け、官費と私費を問わず、留学生に関する全ての事務を留学生総監督の管轄下に置くことになった。

1903年1月4日、員外郎の汪大燮が初代の留学生総監督として派遣され⁴³、東京に着任してまもなく、「成城学校入学事件」の善後処理に当たり⁴⁴、1月13日、錦輝館で開かれた留学生大会にて、会館の総長に就任している⁴⁵。

しかし、実は、留学生総監督の職位もなかなか定着せず、1903年4月には会館幹事の交代に伴い、駐日公使楊枢が総長と副長を兼任する時期もあった⁴⁶。この後、駐日公使が留学生総監督を兼任し、会館の総長を務めることが慣例になった。

⁴³ 「(4826) 外務部請派員外郎汪大燮為赴日本遊学生監督摺」前掲『清光緒朝中日交渉史料』巻66、37—38丁。

⁴⁴ 「(4857) 日本遊学生総監督汪大燮奏報行抵東京視事日期摺」前掲『清光緒朝中日交渉史料』巻67、1丁。

⁴⁵ 清国留学生会館幹事『清国留学生会館第二次報告』東京並木活版所、1903年3月、「学界記事」、11頁。

⁴⁶ 「(4909) 軍機処電寄楊枢諭旨」(前掲『清光緒朝中日交渉史料』巻67、15丁)によれば、汪大燮がすでに外務部左参議に補って授けられたため、「日本遊学生総監督」は駐日公使楊枢が兼任している。

総長は頻繁に交代されるものの、留学生監督の銭恂は、会館の副長を 4 回にわたって連任している。しかし、1903 年 2 月、第 3 期の任期の最中に、銭は二等参事官に選ばれ、駐露公使の胡惟徳に従いロシアへの赴任することが決まった⁴⁷。つまり、1903 年 2 月から 1904 年 5 月にかけての会館の副長は空席となり、さらに銭恂の離任とともに副長の職は廃止されてしまった。

総長と副長は、会館の日常運営について基本的に介入せず、重大な式典の際に出席するだけの名誉職に近かった。

二、清国留学生会館幹事と評議員

会館の総長と副長は駐日公使や留学生監督が名誉職として当てられていたことは以上で述べたが、会館の日常的な運営は、選挙規定により選出された 12 名の学生幹事により分担されていた。

1902 年 3 月 16 日、錦輝館で行われた留学生大会で初代幹事が選出された。初代幹事の名簿については、寧金苑「清国留学生会館研究」の附録で整理されているが、幹事の名前や在籍学校の部分で訂正を要する箇所があるため、筆者は『清国留学生会館第一次報告』の「職員表」により、改めて表 4-4「清国留学生会館の初代幹事表」を作成した。

表 4-4 清国留学生会館の初代幹事 (1902 年 3 月 16 日—10 月 8 日)

職名	職務内容	姓名	出身	在籍学校	留学 費用	備考
書記 幹事	手紙、記事、及び すべての 文章に関 わるもの	范源廉	湖南 湘陰	東京高等師範学校	私費	励志会会員/夏季休暇中の帰国時は李賓四 (李穆、湖南) が代理
		蔡 鐸	湖南 邵陽	成城学校陸軍	私費	励志会会員/夏季休暇中の帰国時は王守善 (江蘇) が代理
		銭承詒	浙江 仁和	東京帝国大学法科	浙江 官費	励志会会員/訳書彙編社幹事/夏季休暇中の 帰国時は呉敬恒 (江蘇) が代理
		呉振麟	浙江 嘉興	東京帝国大学法科	浙江 官費	励志会会員/訳書彙編社幹事
会計	資金の支	陸世芬	浙江	東京高等商業学校	浙江	励志会会員/訳書彙編社幹事

⁴⁷ 高木理久夫編、呉格訂「銭恂年譜 (増補改訂版)」『早稲田大学図書館紀要』第 60 号、2013 年 3 月、156-159 頁。

第四章 清国留学生会館の設立から終焉まで

幹事	出と収入		仁和		官費	
	の管理	王環芳	湖北 恩施	東京高等商業学校	湖北 官費	勵志会会員/夏季休暇中の帰国時は夏循環 (浙江) が代理
庶務 幹事	庶務	章宗祥	浙江 烏程	東京帝国大学法科	南洋 官費	勵志会会員/訳書彙編社幹事
		金邦平	安徽 黟県	東京専門学校、早 稲田大学 (注1)	北洋 官費	勵志会会員/訳書彙編社幹事/夏季休暇中の 帰国時は張奎 (江蘇) が代理
書報 幹事	図書と雑 誌、新聞	曹汝霖	江蘇 上海	東京法学院大学	私費	勵志会会員/訳書彙編社幹事
	の管理	張紹曾	直隸 大城	近衛野戦砲兵聯隊 見習士官	北洋 官費	卒業帰国後は藍天蔚 (湖北) が代理
招待 幹事	留学生の 案内	高 逸	安徽 合肥	東京第一高等学校	私費	会館の設立に関与
		吳祿貞 雲夢	湖北	近衛騎兵聯隊見習 士官	湖北 官費	勵志会会員/卒業帰国後は馮閔模 (江蘇) が 代理

出典：清国留学生会館幹事『清国留学生会館第一次報告』東京並木活版所、1902 年 10 月、「職員表」により作成。

注 1：1902 年 9 月 2 日、東京専門学校は正式に早稲田大学と改称した。『早稲田学報』第 74 号、1902 年 9 月 25 日、「本校名称変更」、463 頁。

表 4-4 によれば、会館幹事は書記、会計、庶務、書報、招待等の五つの役割に分かれ、会館の日常的な運営を分担し、その職務内容も明確に定められていた。ただし、各職の幹事の定員は固定しておらず、常に調整がなされたようである⁴⁸。

この初代幹事の構成から見れば、代理幹事を含め、19 人の中、浙江省 4 人、江蘇省 4 人、湖南省 3 人、湖北省 2 人、安徽省と直隸省が各 1 人であり、彼らの出身省は主として長江沿岸部に集中する地域であったことがわかる。

また、会館幹事の構成に大きな影響を与えたのは、既存の留学生団体だったことを指摘しなければならない。すなわち初代幹事の中、范源廉、蔡鐸、錢承誌、吳振麟、陸世芬、王環芳、章宗祥、金邦平、曹汝霖、吳祿貞の 10 名が勵志会に属し、さらに代理幹事

⁴⁸ 第三代会館幹事は庶務、書記、招待幹事についてそれぞれ 3 人が配されたが、書報幹事は 1 人しか配置されなかった。清国留学生会館幹事『清国留学生会館第三次報告』東京並木活版所、1903 年 11 月、「職員表」、15-16 頁。

の夏循塏、張奎、馮閻模の3名を加えれば、13名が勵志会の会員であることが確認でき、全体の70%に及んでいる⁴⁹。この数字からも勵志会会員が会館の設立はもちろん、初期の運営においても役割を果たしたことが裏付けられる。

1902年12月、勵志会会員の戢翼翬が上海で発行した雑誌『大陸』第1号に、「清国留学生」(図4-6)という写真が掲載されている。この写真は、1902年、陸軍士官学校の一期生である呉禄貞と張紹曾が陸軍士官学校を卒業し、帰国する前に撮影した記念写真である、という。彼らは、すでに旧時代の象徴である「辮髪」を切り落とし、新しい時代を象徴する軍服や洋服を着ており、新しい気風が表れている。この写真中の13名の留学生全員が会館の初代幹事、または初代幹事の代理を務める人物である⁵⁰。

図4-6 中国人留学生の集合写真(1902年)



(後列) 蔡鐸、呉振麟、馮閻模、高逸、章宗祥、曹汝霖

(前列) 金邦平、陸世芬、王璟芳、呉禄貞、張紹曾、錢承詒、范源廉

出典:『清国留学生』『大陸』第1号、1902年12月。

実は、1904年の第四回幹事交代に至るまでは、多くの勵志会の会員が幹事に選ばれ、会館業務の担い手として働いていた。すなわち第二期の張奎、沈琨、夏循塏、張鎡緒、

⁴⁹ 実は、初代幹事のうち章宗祥、錢承詒、呉振麟、陸世芬、曹汝霖、金邦平の6名は、勵志会の会員だっただけでなく、訳書彙編社の社員でもあった。

⁵⁰ 実藤惠秀『近代日支文化論』(大東出版社、1941年、203-204頁)は、写真の学生を、前列の左から、金邦平、陸世芬、王璟芳、呉禄貞、張紹曾、錢承詒、范源廉、後列の左から、蔡鐸、呉振麟、馮閻模、高逸、章宗祥、曹汝霖であると判断している。しかし、筆者の考察によれば、ここで馮閻模とされている人物は、実は馮閻模である。郭夢奎『『崇明県志』から見る清末における江蘇省崇明県の留日学生——馮閻模と馮閻模を事例に』(『駿台史学』第174号、2022年2月)を参照。

王宰善、第三期の王璟芳、及び第四期の曹汝霖、吳振麟、錢承詒の4名は、幹事として2回当選した⁵¹。

また、1903年3月、『清国留学生会館第二次報告』によれば、修正後の「会館章程」に、新たに設置された評議員制度について、下記「第四節 評議員」と「第七節 幹事会及評議員会」の二節が見える。

第四節 評議員

一 評議員由各省同郷会選出。

二 遇重要事宜、評議員与幹事協議。

第七節 幹事会及評議員会

一 幹事及評議員於毎月各開会一次、分別集議、互可入席傍聴。

二 由各評議員公推一評議員長。如幹事遇重要事宜、可通知評議員長開評議員会集議。

三 除常費外、五十元以上者、須得評議員認可、幹事始得動用。

四 凡遇重要事件、幹事与評議員均得開臨時会。

五 会館細則及各項細章、由幹事協定之。

六 章程如有更改、由幹事及評議員先擬草稿、經衆公認、報告總長副長。

七 調查全体學生姓名、由各省評議員担任代辦。⁵²

〔第四節、評議員。一、評議員は各省の同郷会により選出される。二、重要な問題は評議員と幹事が共同して協議する。第七節、幹事会及評議員会。一、幹事と評議員が毎月各一度会議を行い、それぞれの集議には、互いに参加して傍聴できる。二、各評議員が評議員長1名を推選し、重要な問題は幹事が評議員長に伝え、評議員会を開催することができる。三、經常費以外、50元以上を支出する場合、評議員の認可を得た後、幹事がそれを運用することができる。四、重要な問題があれば、幹事と評議員はいずれも臨時会を開催することができる。五、会館細則及各項細章は、幹事によって協定される。六、章程に改訂がある場合、幹事と評議員が先に修正稿を起草し、評

⁵¹ 本論文の資料編「清国留学生会館歴代幹事表」を参照。また第一回の幹事交代に関して、章宗祥は初代幹事と留学生の間に仕事上の軋轢が生じたため、被選の資格が奪われたと述べたが、実際にはそうではなかった。章宗祥「任開齋主人自述」中国人民政治協商会議全国委員会文史資料委員会編『文史資料存稿選編・教育』中国文史出版社、2002年、930頁。

⁵² 前掲『清国留学生会館第二次報告』、「章程」、4-5頁。句読点が筆者による。

議員の公認を経てから、総長と副長に報告する。七、全ての学生の姓名を調査することとは、各省の評議員が代行する。]

上記条文から、評議員制度の特徴が読み取れる。

まず、各省の同郷会から評議員が選ばれることは、評議員が各省の利益を代表することを表明している。次に、評議員は会館の具体的な職務を担当しないものの、幹事の業務を監督し、制限することができるため、組織内の権力の平衡を保つ役割を果たすことが期待された。また、上記第七節第三条の内容が示すように、評議員は幹事の資金運用を監督する機能が与えられたが、これは幹事の汚職行為を防止するためのものであったと思われる。

会館の運営において評議員制度が導入された理由は、1903 年を前後したこの時期に、中国人留学生の間では、各省の出身者による同郷会が相次いで成立し、会館がこれらの同郷会を既存の会館組織に統合する必要があったことが挙げられよう。そして、1904 年に入ると、会館設立の中心的な役割を演じた留学生が相次いで卒業し、中国に帰国したことで、従来の会館の活動は各地の同郷会団体に引き継がれていくことになった。

三、清国留学生会館の招待業務と各地の連絡処

前述の通り、1900 年頃、勵志会がすでに中国から日本に来る留学生の案内活動を行っていたが、1902 年の会館の成立とともに、中国人留学生を受け入れる招待業務の制度は一層、完備されることとなった。

「招待規則」によれば、会館は招待幹事を設置し、新橋や横浜に着いた留学生を所属の学校に案内した⁵³。たとえば、神戸に上陸した留学生が汽車で新橋に着けば、招待幹事が新橋の駅で待ち受け、目的の学校や宿舎まで案内し、一方、横浜に上陸した留学生を出迎えるために、招待幹事が汽車で横浜まで往復する必要であった。

招待幹事のほか、会館は、清国各地から東京までの中間地点や交通の要所に招待連絡処を設け、情報の伝達や留学生の出国前準備の支援を担当する「賛成員」を配置していた。

表 4-5 は『清国留学生会館第一次報告』から『清国留学生会館第五次報告』までの「招待規則」から招待連絡処に関連する事項をまとめたものである。

⁵³ 前掲『清国留学生会館第一次報告』、「招待規則」、17 頁。また、図 4-8「清国留学生会館招待規則」を参照。

表 4-5 清国留学生会館の招待連絡処

賛成員姓名	字	所 在 地		備 考
第一段階（1902 年 3 月—1903 年 11 月）				
馮閻模	悦甫	神戸	山下町 清国領事館	神戸領事館の東文翻訳（日本語通訳）
孫 淦	実甫	神戸	海岸仲通 清商益源号	大阪の華商/元浙江省の留学生監督
駱翼翬	元丞	上海	新馬路 作新訳書局	勵志会会員/訳書彙編社社員
王植善	培孫	上海	大東門内 育材学堂	上海育材学堂校長/訳書彙編社社員
張 頤	亦湘	天津	玉皇閣前 日日新聞社	元『国聞報』編集者/『天津日日新聞』編集者
第二段階（1903 年 11 月—1904 年 12 月）				
		神戸	山下町 清国領事館	
王植善	培孫	上海	大東門内 育材学堂	
楊 辰	星北	天津	北馬路 名賢書畫局	『直説』総發行所/『江蘇』代派所

出典：清国留学生会館幹事『清国留学生会館報告』第 1 次—第 5 次、東京並木活版所、1902 年—1904 年、「招待規則」のほか、日本の外務省記録、台湾中央研究院近代史研究所檔案館蔵外務部檔案、『直説』（第 2 期、1903 年 3 月 13 日）、『江蘇』（第 1 期、1903 年 4 月 27 日）などの資料を参照して作成。

注：益源号は益源号、楊星北は楊星北、楊星伯などの表記もある。

表 4-5 によると、会館の連絡処は『第一次報告』から『第三次報告』まで（1902 年 3 月—1903 年 11 月）、続いて『第四次報告』から『第五次報告』まで（1903 年 11 月—1904 年 12 月）の二つの時期に分けられる。

第一段階では、会館は日本の神戸、中国の上海と天津に連絡処を設け、それぞれに留学生を支援する賛成員を配置した。神戸は特に留学生の重要な中継点であることから二つの連絡処が設けられていた。神戸の賛成員を務めた孫淦は、以前浙江省の留学生監督を務めていた大阪の華商であり、留学生の活動に支援を惜しまなかった人物である⁵⁴。神戸のもう一人の賛成員は、1896 年に清国から日本に初めて派遣された 13 名の留学生の一人として嘉納治五郎の塾で学び、のちに神戸の清国領事館で東文翻訳（日本語通訳）を務めた馮閻模である⁵⁵。馮閻模は清国から日本に派遣される遊歴官の通訳を数多く担当し、

⁵⁴ 呂順長「清末の留日学生監督——浙江留日学生監督孫淦の事跡を中心に」浙江大學日本文化研究所編集『江戸・明治期の日中文化交流』農山漁村文化協会、2000 年。

⁵⁵ 外務部檔案、「具奏請獎留差期滿各員造送履歷清冊呈核並請伝咨吏部由」、中央研究院近代史研究所檔案館蔵、館蔵号 02-12-039-02-059。

東京の留学生界にも人脈を持っていた⁵⁶。そして、馮閻模の親類である馮閻模が会館の代理招待幹事を務めていたことから見ても、馮閻模は留学生を案内する業務を担うのに最もふさわしい人物であったと言える⁵⁷。

一方、この時期、浙江、江蘇、湖北、湖南などの省から出発する留学生の数も多かったことから、その中継点となる上海にも二つの連絡処が設けられ、会館の賛成員により運営されていた。賛成員の一人の耿翼翬は、勵志会和訳書彙編社の一員として留学生界において名望を得ていた人物であり、帰国後、上海で作新社を作り、翻訳と出版活動をしながら留学生の活動を支援し続けた⁵⁸。もう一人の王植善は、上海育材学堂を管理しながら、訳書彙編社に参加し、雑誌『訳書彙編』の清国国内の代理販売の業務を引き受けた人物である⁵⁹。

賛成員を務めたこれらの人々が会館とどのような関係を持っていたのかについては、詳細は不明であるが、当時は、留学生と知識人との関係は、新たな知識を受け入れる窓口として円満な関係を維持していた、とされる⁶⁰。しかし、賛成員が会館の連絡業務を担った理由については、会館関係者との私的な交流があったことがおそらく最も重要な要因であったのであろう。

第二段階に入ると、会館の連絡処は 3 ヶ所に減少することになる。その原因は、留学生の人数が増加するにつれて 1902 年末からは、各省の同郷会和清国国内の留学支援団体が相次いで成立し、これらの同郷会や団体が留学生の保証、渡航、入学などの様々な過程で支援を行ったためであり⁶¹、これ以後、留学生が頼るルートは 1902 年以前よりも増え、会館が唯一のルートではなくなった。

⁵⁶ 1900 年 7 月、張之洞の長子張樞が日本に調査に来た際、馮閻模は張樞と近衛篤麿との間で連絡人の役割を担った。前掲近衛篤麿日記刊行会編『近衛篤麿日記』第 3 巻、239-240 頁。

⁵⁷ 馮閻模と馮閻模の関係、及び二人の留学時代の経歴に関しては、前掲郭夢奎『『崇明県志』から見る清末における江蘇省崇明県の留日学生——馮閻模と馮閻模を事例に』（『駿台史学』第 174 号、2022 年 2 月）は詳細的に考察したので参照されたい。

⁵⁸ 范鉄樞・孔祥吉「革命党人耿翼翬重要史実述考」『歴史研究』2013 年第 3 期。また『下田歌子先生伝』（故下田校長先生伝記編纂所、1943 年、426-428 頁）には、耿翼翬が作新社を設立した経緯が記された。

⁵⁹ 上海育材学堂は育材書塾、王氏育才書塾とも呼ばれ、1896 年に王維泰により設立され、その後、息子の王植善が長期にわたり管理し、1905 年に南洋中学と改名された。その設立、沿革、学堂章程、カリキュラムなどについては、「上海育才書塾（後易名南洋中学）」（朱有贇主編『中国近代学制史料』第 1 輯下冊、華東師範大学出版社、1986 年）で詳しく整理されている。

⁶⁰ 『時務報』、『清議報』、『新民叢報』などの雑誌は汪康年と梁啓超の人脈によってその販売網が広げられた。張朋園『梁啓超と清季革命』（中央研究院近代史研究所、1964 年）、廖梅『汪康年——民権論到文化保守主義』（上海古籍出版社、2001 年）、李仁淵『晚清的新式傳播媒体与知識分子——以報刊出版為中心的討論』（稻鄉出版社、2005 年）、潘光哲『『時務報』和它的讀者』（『歴史研究』2005 年第 5 期）などを参照。

⁶¹ 1902 年、上海では「出洋遊学生招待会」という中国人留学生の支援団体が「留学生の遊学を案内する」ことを趣旨として成立した。そして、招待事務を呉敬恒に統括させ、清国留学生会館内に幹事を配した。その章程は『選報』第 19 期（1902 年 6 月 16 日）に掲載された。また、各地の留学生は東京の本省の同

以上、会館の運営において勵志会会員が重要な役割を果たしたことについて、人的な関係から論じてきた。演説会を開催し、翻訳を行い、清国留学生を支援するという勵志会の主な活動は、ほぼそのまま清国留学生会館に引き継がれたが、これは勵志会会員が会館の運営に積極的に参加したことから考えれば当然の結果でもあった。

第四節 清国留学生会館と訳書彙編社

第三節では、清国留学生会館の組織構成と勵志会の役割について述べた。ここでは、訳書彙編社の寄付金、広告、図書雑誌の寄贈の 3 点について、さらに日記、回顧録、雑誌などの資料も参照しながら訳書彙編社と清国留学生会館との深いつながりを明らかにする。

一、訳書彙編社と清国留学生会館への寄付金

清国留学生会館の設立のために多くの学生が寄付金を出したことが知られるが、その中には訳書彙編社の社員が含まれている。表 4-6 は訳書彙編社社員の寄付金額をまとめたものである。

表 4-6 訳書彙編社社員の寄付金額 (1902 年 10 月)

姓名	所在地	留学費用	寄付金	備考
戢翼翬	上海	公使館官費	100 円	勵志会会員/作新社理事/『清国留学生会館第二次報告』(1903 年 3 月)に「払い込み」と記載
王植善	上海		30 円	上海育材学堂校長/『清国留学生会館第三次報告』(1903 年 11 月)に、「払い込み」と記載
訳書彙編社	東京		20 円	『清国留学生会館第五次報告』(1904 年 12 月)に、「払い込みなし」と記載あり
吳振麟	東京	浙江官費	10 円	勵志会会員
雷 奮	上海	南洋官費	5 円	勵志会会員
楊蔭杭	上海	南洋官費	5 円	勵志会会員

郷会に支援を求めることができた。(「浙江同郷会簡章」『浙江潮』第 1 期、1903 年 2 月 17 日。「附録湖北同郷会章程」『湖北学生界』第 1 期、1903 年 1 月 29 日)。

第四章 清国留学生会館の設立から終焉まで

楊廷棟	上海	南洋官費	5 円	勵志会会員
陸世芬	東京	浙江官費	5 円	勵志会会員
金邦平	東京	北洋官費	5 円	勵志会会員
富士英	東京	南洋官費	5 円	勵志会会員
章宗祥	東京	南洋官費	5 円	勵志会会員
汪榮宝	東京	私 費	5 円	勵志会会員
曹汝霖	東京	私 費	5 円	勵志会会員
錢承詒	東京	浙江官費	2 円	勵志会会員
周祖培	不明	北洋官費	0 円	不明

出典：清国留学生会館幹事『清国留学生会館第一次報告』東京並木活版所、1902 年 10 月、「会計一覧」、43-45、50 頁より作成。

表 4-6 によって以下の点が指摘できる。

まず、詳しい状況が不明な周祖培を除けば、当時、上海にいた戢翼翬、王植善、雷奮、楊蔭杭、楊廷棟を含む 13 名が寄付をしているが、その金額を見れば、官費生や私費生の間で寄付金額が強制的に割り当てられていたわけではなかったことがわかる。たとえば、浙江省の官費生であった呉振麟は 10 円を寄付したが、同じ浙江省の官費生である錢承詒は 2 円を支払い、私費留学生の汪榮宝と曹汝霖の 5 円よりも少ない⁶²。

一方、戢翼翬は合計 41 名の賛成員の中で、留学生監督と会館副長を兼ねた錢恂と同じく、100 円を寄付している。会館の賛成員は主に清国の宗室、官僚、領事館職員、留学生監督など社会的地位も高く収入も多い人々であったが⁶³、戢翼翬は、早稲田大学を中退してまもなく上海に戻って起業し、わずか半年が経過したのみであるから社会的地位や収入の面で裕福な部類には入らないものの巨額の 100 円を出したことになる。

また、注目しておきたいのは**表 4-6** の三番目に記されている団体の寄付者である訳書彙編社である。訳書彙編社の各社員は、留学生の一員として寄付していたが、そのほかに団体の名義でも寄付しているのは、会館の設立に対する訳書彙編社の貢献を明確に示

⁶² 前掲章宗祥『日本遊学指南』、23-27 頁によれば、当時、多くの清国留学生は授業料、旅費、家賃、雑費などを含め、年額 150 円から 200 円、つまり 1 ヶ月 15 円程度で学業と生活を維持できた。よって、呉振麟はほぼ 1 ヶ月の生活費を寄付したことになる。

⁶³ たとえば、寄付金として、貝子・出使英国専使載振は 500 円、駐日公使蔡鈞と安徽遊歴官李宗棠は 300 円、出使英国専使参贊官梁誠は 200 円、出使英国専使参贊官汪大燮は 140 円、湖南遊歴官黃忠績と周渤は 100 円、留学生監督錢恂は 100 円等があげられる。前掲『清国留学生会館第一次報告』、「賛成員捐数」、39-42 頁。

したいという意図があったように思われる。ただし、1904年12月の『清国留学生会館第五次報告』によると、訳書彙編社の20円の寄付金はいまだ支払われていない状態であることが記入されている⁶⁴。おそらく、訳書彙編社はこれより前の1904年5月前後にすでに解散していたため、この20円の寄付金は結局、支払われないままになったのであろう。

二、『訳書彙編』の広告と清国留学生会館

会館は多くの留学生を会員として受け入れたが、当時、交通や通信はまだ整っていないことから、会館の情報を清国国内の学生に伝えることはなかなか難しかった。そのため、会館は活動を留学生同士の伝言や家族への手紙などを通じて清国との連絡を図ることしかできなかった。たとえば、1902年9月25日付の『周作人日記』に、「『清国留学生会館第一次報告』一冊（全、九月初四日新出）を受け取る」という内容が記されている⁶⁵。

または、清国国内の新聞に広告を掲載するとともに⁶⁶、訳書彙編社が編集した『訳書彙編』を利用し、会館の活動や招待活動などを中国と海外に伝えることができた。

1902年4月の『訳書彙編』第2年第1期には、会館の設立を知らせる次の広告（図4-1）が掲載されている。

清国留学生会館告白

本会館由留学同人公設。凡内地有志東遊者。本会館均可代為招呼。並紹介学校。一切另有招待細則。不日登報聲明。先此布告。日本東京神田区駿河台鈴木町十九番地 清国留学生会館啓。⁶⁷

〔清国留学生会館布告。本会館は留学生同志により公設された。すべての日本留学生を志す国内の者に、本会館は等しく対応し、並びに学校を紹介する。詳細については別に招待細則がある。近日、声明を新聞に掲載するが、それに先んじて布告する。日本東京神田区駿河台鈴木町十九番地 清国留学生会館啓。〕

⁶⁴ 清国留学生会館幹事『清国留学生会館第五次報告』東京並木活版所、1904年12月、「会計一覧」、40頁。

⁶⁵ 魯迅博物館蔵『周作人日記（影印本）』上冊、大象出版社、1996年、356頁。また江瀚著、鄭園整理『江瀚日記』（鳳凰出版社、2017年、197頁）の1902年11月9日付では、「息子の江庸が『留学生会館章程』一冊を送ってくれた」と書かれている。

⁶⁶ 「学生会館」『選報』第17期、1902年5月28日。

⁶⁷ 「清国留学生会館告白」『訳書彙編』第2年第1期、1902年4月3日。

続いて、『訳書彙編』第2年第2期(1902年5月)から第2年第12期(1903年3月)までの10期(第2年第8期を除く)にわたって「清国留学生会館招待規則」(図4-7)が掲載された。

図4-7 清国留学生会館招待規則



出典：『清国留学生会館招待規則』『訳書彙編』第2年第2期、1902年5月13日。

こうして会館設立の情報と「招待規則」は、『訳書彙編』の販売網を通じて日本、清国、さらに東南アジアに至るまで流布していった。

会館はこうした活動を通じて日本と中国に同会館の宣伝を広げると同時に、東京の留学生のために様々な図書や雑誌などの印刷物を購入して閲覧室を設けていた。そのうち、訳書彙編社は『訳書彙編』や自ら翻訳・出版した書籍を会館に寄贈し、その他の新聞雑誌とともに配架された。

三、『訳書彙編』と清国留学生会館図書室の蔵書

『清国留学生会館報告』には、「会館章程」、「学界記事」、「会計一覧」、「図書録存」、「同学姓名調査録」などの欄に分けて、会館や留学生界の様々な活動が記載されている。その中には、会館図書室の所蔵図書に関する記事もあり、会館幹事や留学生の関心、または留学生の動向などを蔵書内容から垣間見ることができることから注目に値する。

表4-7は『清国留学生会館第一次報告』に掲載された「図書録存」により、会館が受け入れた印刷物のうち、新聞雑誌についてまとめたものである。

表 4-7 清国留学生会館所蔵の新聞雑誌 (1902 年 10 月まで)

タイトル	所蔵巻号	創刊	発行 頻度	発行 地	発行所/ 編集者	備考
国際法雑誌	6 号止	1902. 2	月刊	東京	国際法学会	1912 年 10 月、『国際法外交雑誌』と改題 /現存
法律経済	11 号止	1901. 7	月刊	大阪	木曜会	
太平洋	35 号止	1900. 1	週刊	東京	太平洋社	主筆は江見水蔭/博文館発売/1903 年 1 月、『実業世界・太平洋』と改題・改号
教育界	10 号止	1901. 11	月刊	東京	金港堂	1911 年 9 月から明治教育社より発行
太 陽	10 号止	1895. 1	月刊	東京	博文館/坪 谷善四郎等	1896 年 1 月-1899 年 12 月は月 2 回刊 /1928 年 2 月の第 34 巻第 2 号で終刊
女学〔世〕界	11 号止	1901. 1	月刊	東京	博文館	知・徳・情を合わせ持つ家庭婦人の育成 を目指した教育雑誌/1925 年 6 月廃刊
外交時報	54 号止	1898. 2	月刊	東京	外交時報社	主筆は有賀長雄/政治、外交、外報雑誌 /1998 年 9 月終刊
経済世界	8 号止	1902. 3	月刊	東京	同文館経済 世界社	
軍事新報	271 号止	1897. 6	週刊	東京	軍事教育会	
社会学雑誌	8 号止	1899. 2	月刊	東京	社会学雑誌 社	
教育学講義	4 号止	不明	不明	不明	不明	
文芸界	5 号止	1902. 3	月刊	東京	金港堂/佐 々醒雪	1907 年 1 月、『家庭文芸』と改題・改号
中学世界	11 号止	1898. 9	月 2 回	東京	博文館	受験雑誌/教科の記事と読物を掲載/1900 年 1 月から月刊/1928 年 5 月の第 31 巻第 5 号で廃刊
訳書彙編 (寄贈)	7 号止	1900. 12	月刊	東京	訳書彙編社	留学生雑誌/1903 年 4 月、『政法学報』と 改題/1904 年 5 月廃刊
新民叢報	16 号止	1902. 2	月 2 回	横浜	新民叢報館 /梁啓超等	1907 年 11 月廃刊

第四章 清国留学生会館の設立から終焉まで

選 報	19 号止	1901. 11	旬刊	上海	選報館/蔣智由等	第 42 号から月 4 回刊
字林西報	記載なし	1864. 7	日刊	上海	字林洋行	英語新聞 North China Daily News/1951 年 3 月廃刊
中外日報	記載なし	1898. 5	日刊	上海	中外日報社	汪康年主宰/1898 年 8 月、『時務日報』から改題
新聞報	記載なし	1893. 2	日刊	上海	新聞報社	1949 年 6 月、『新聞日報』と改題
申 報	記載なし	1872. 4	日刊	上海	申報館	1949 年 5 月廃刊
国民新聞	記載なし	1890. 2	日刊	東京	民友社→国民新聞社	徳富蘇峰主宰/1942 年 10 月、『都新聞』と合併して『東京新聞』となる
日 本	記載なし	1889. 2	日刊	東京	日本新聞社	陸羯南主宰/1887 年 4 月、『東京電報』から改題・改号
大阪朝日新聞	記載なし	1879. 1	日刊	大阪	朝日新聞社	1889 年 1 月 3 日、『朝日新聞』から『大阪朝日新聞』に改題

出典：清国留学生会館幹事『清国留学生会館第一次報告』（東京並木活版所、1902 年 10 月）掲載の「図書録存」に基づいて、前田千賀良編『最近全国新聞紙雑誌総目録』（警眼社、1907 年）、『デジタル版日本出版百年史年表』（日本雑誌協会(JMPA)/日本書籍出版協会(JBPA)）、戈公振『中国報学史』（上海商務印書館、1926 年）、張静盧輯注『中国近代出版史料初編』（群聯出版社、1954 年）、史和等編『中国近代報刊名録』（福建人民出版社、1991 年）などの資料を参照して作成。注：「所蔵巻号」の項目の中、「止」の意味はその号まで所蔵された。例えば、「6 号止」はこの雑誌の第 6 号まで所蔵された。

表 4-7 からは、以下のような特徴が見てとれる。

まず、この図書室の規模は大きいとは言えないものの、中国語、日本語、英語の新聞雑誌を購入しており、内訳は新聞 7 種、雑誌 16 種の計 23 種で⁶⁸、特に 16 種の雑誌は法律、経済、外交、軍事、教育、文芸、女子など様々な分野にわたっており、『太陽』、『太平洋』、『文芸界』など当時の日本の代表的な雑誌も受け入れていたことがわかる。

これらの雑誌をさらに分類すれば、工学、医学、農学などの実学の分野よりも、特に政治や社会科学、時事評論（時論）などに比重が置かれていたようである。当時、多く

⁶⁸ 会館の常年支出 807 円 27 銭と臨時支出 741 円 77 銭のうち、新聞雑誌の支出はそれぞれに 71 円 84 銭と 10 円 30 銭となり、およそ 8.7%と 1.3%を占めている。この数字を見れば、図書室の蔵書の規模を推測することができるだろう。前掲『清国留学生会館第一次報告』、「会計一覧」、48-49 頁。

の留学生は、清国国内の政治改革や西洋の新しい知識に関心を持ったことから、政治と法律の専門が特に好まれ、東京帝国大学、東京専門学校、東京法学院大学などの学校の政治科や法律科に多くの学生が籍を置いており、その人数は工学、医学、農学などの理系の分野より多数を占めていた。つまり、会館が購入した新聞雑誌は 1900 年代初頭の中国人留学生の関心とも一致していると言える。

続いて、これらの新聞雑誌の政治的な立場を論じる必要がある。たとえば、『新民叢報』と『選報』は梁啓超の影響が強い雑誌である。特に、梁啓超が主筆を務めた『新民叢報』は西洋と日本の新たな知識を宣伝しながら、封建的な王朝体制ではなく、新たな立憲政治を提唱し、清国政府には目の敵にされていた。それだけでなく、『清国留学生会館第二次報告』掲載の「承贈図書雑誌録存」によると、1902 年 11 月以降、陳少白が主宰した『中国日報』（香港）と章士釗が主筆を務めた『蘇報』の所蔵を始めている⁶⁹。『蘇報』はいうまでもなく、1903 年の「蘇報案（事件）」によって清国政府の取締を受けた新聞で、『中国日報』（香港）はこの時期と相前後して興中会と同盟会の機関紙となり、革命主義を提唱する『蘇報』よりも激しい主張を展開した新聞であった⁷⁰。

以上の新聞と雑誌の購読状況を見れば、会館が清国政府の影響を受けたとしても、新聞と雑誌の受け入れにおいては、その情報や知識面を重視する傾向が強く、特に中国語の雑誌については、立憲を主張する『新民叢報』はもちろん、革命を提唱する『蘇報』や『中国日報』（香港）などを受け入れており、清国政府に近い『北洋官報』も、購読していたことがわかる。

また、会館に附設された図書室には日本に留学した留学生自らの編集、発行した多数の雑誌も配架されていた。

表 4-8 清国留学生会館所蔵の中国人留学生雑誌（1904 年 12 月まで）

雑誌名	創刊時期	省別	発行 頻度	発行所/編集	収集 手段	備考 1	備考 2（会館 報告の記載）
-----	------	----	----------	--------	----------	------	-------------------

⁶⁹ 前掲『清国留学生会館第二次報告』、「承贈図書雑誌録存」、47 頁。

⁷⁰ 「蘇報案（事件）」に関する研究は多い。遊海華「新中国 60 年来的「蘇報案」研究」（『福建論壇（人文社会科学版）』2014 年第 6 期）、王敏『蘇報案研究』（上海人民出版社、2010 年）などを参照。また、『中国日報』（香港）については、馮自由「陳少白時代之中国日報」（『革命逸史』初集、中華書局、1981 年）、呉倫霓霞「香港反清革命宣傳報刊及其与南洋的聯繫」（『中国文化研究所學報（香港中文大学）』第 19 卷第 28 期、1988 年）、余偉雄「辛亥革命時期港澳地区之宣伝及影響」（『能仁學報』第 3 期、1994 年）、李谷城『香港『中国旬報』研究』（文史哲出版社、2010 年）などの研究がある。

第四章 清国留学生会館の設立から終焉まで

訳書彙編	1900. 12		月刊	訳書彙編社/ 呉振麟、章宗祥等	寄贈	1903 年 4 月、『政法学報』と改題	一、二、三
政法学報	1903. 4		月刊	訳書彙編社/呉振麟 等	寄贈	1904 年 5 月廃刊/ 計 8 期	四、五
遊学訳編	1902. 11	湖南	月刊	湖南編訳社/ 楊守仁等	寄贈	1903 年 11 月廃刊/ 計 12 期	二、三、四、 五
湖北学生界	1903. 1	湖北	月刊	湖北学生界社/ 王璟芳、尹援一等	寄贈	1903 年 5 月、『漢声』と改題	二、三
漢声	1903. 5	湖北	月刊	漢声雑誌社/ 王璟芳、尹援一等	寄贈	革命を主張/計 3 期	四、五
浙江潮	1903. 2	浙江	月刊	浙江同郷会雑誌部/ 浙江同郷会幹事	寄贈	現存するものは 10 期分	二、三、四、 五
直説	1903. 2	直隸	月刊	直説編輯社/ 直隸留学生	寄贈	現存するものは 2 期分	二、三、四、 五
江蘇	1903. 4	江蘇	月刊	江蘇同郷会出版部/ 江蘇同郷会幹事	寄贈	計 12 期	四、五

出典：清国留学生会館幹事『清国留学生会館報告』第 1 次—第 5 次（東京並木活版所、1902 年 10 月—1904 年 12 月）

掲載の「図書録存」と「承贈図書雑誌録存」より作成。

表 4-8 は会館が所蔵する新聞雑誌のうち、留学生が発行した雑誌のみを取り上げて整理したものであるが、それによると、1902 年 3 月の時点で、発刊された留学生雑誌は『訳書彙編』の一つだけである。そして、1902 年 10 月、会館の『第一次報告』が刊行される時期になって、湖南省の留学生が主宰した雑誌『遊学訳編』がようやく出版されたことがわかる⁷¹。つまり、会館設立の際にその情報を宣伝できる留学生雑誌は『訳書彙編』しかなかったのである⁷²。当然ながら、訳書彙編社社員の多くが会館幹事を兼ね、会館の日常的な運営に取り組んでおり、自ら編集した雑誌を活用することは極めて妥当で経済的な選択であったと言える。

⁷¹ 『遊学訳編』第 1 期、1902 年 11 月 14 日。

⁷² 1903 年 2 月に刊行された『浙江潮』第 1 期には、「清国留学生会館招待規則」が掲載された。

以上述べたように、訳書彙編社と清国留学生会館とが密接な関係にあったことについては、組織構成、寄付金、広告と宣伝、発行所、図書雑誌など様々な側面において根拠を見出すことができる。

第五節 清国留学生会館の終焉

清国留学生会館は設立初期には、多くの留学生と本国からの遊歴官が訪問するなどで賑わいを見せ、中国人留学生の一大拠点となる役割を確実に果たしており、その活発な活動ぶりは中国からの遊歴官が記した日記からも窺うことができる。

たとえば、1902年に日本に農業関連の調査のため訪日していた黄璟は、8月22日付の日記に「秦輝祖と一緒に支那留学生会館に行き、章宗祥、曹汝霖、范源廉、陸世芬、沈琨、何厚偶等と知り合いになる。食事後、『同瀛録』、『会館章程』、『政法叢書』、『訳書彙編』をもらった」⁷³と書き記している。

また、一年後に訪日していた遊歴官の胡景桂は、1903年6月28日付の日記に「清国留学生会館に行った。蔡公使が着任後、設立した。休日のたびに、皆が会館に来て新聞を読んでいる。視察にきた中国の官僚はみな寄付していたが、最近、学生運動によって寄付者が次第に減ってきた」と会館の日常を描く一方、「成城学校入学事件」などの学生運動が会館にもたらした影響についても触れている⁷⁴。

1904年の後半、励志会と訳書彙編社の社員が相次いで卒業し帰路についた（図 4-8）⁷⁵。その結果、二つの団体は有力な動力を失い解散を迎えることとなり、これを転換点として会館の動きも新しい時代を迎え、「清国留学生取締規則事件」を経て、その活動は徐々に1905年に成立した中国留学生総会に引き継がれることになった。

⁷³ 黄璟『考察農務日記』鍾叔河編『走向世界叢書』岳麓書社、2016年、57頁。1902年7月、黄璟は北洋大臣袁世凱によって派遣され、農務関連の調査のために訪日していた。（同秦輝祖至支那留学生会館。識章宗祥、曹汝霖、范源廉、陸士〔世〕芬、沈琨、何厚偶等、留飯并貽『同瀛録』、『会館章程』、『政法叢書』、『訳書彙編』。）

⁷⁴ 胡景桂『東瀛紀行』学校司排印局、1903年（呂順長編著『教育考察記』下冊、杭州大学出版社、1999年、605頁）。1903年6月、胡景桂は北洋大臣袁世凱によって派遣され、学務関連の調査のために訪日していた。（至清国留学生会館。蔡公使蒞任後設立。毎週休息日。同人到此聞報。中国官來遊歴者均有捐助。後因学生屢起風潮。助者亦寡。）

⁷⁵ 励志会と訳書彙編社のメンバーの多くは帰国後、清国中央政府が主催した留学生試験に受験し、進士・挙人の資格が授けられ、官吏に登用された。「考試游学畢業生案（一）」、教育部、国史館蔵、數位典藏号：019-010402-0001。『教育雑誌（直隸）』第9期、光緒三十一年七月初一日（1905年8月1日）。

図 4-8 清国政府に採用された中国人日本留学生



（後列）唐宝鏐氏、張瑛緒氏、戢翼翬氏、陸宗輿氏、章宗祥氏、張奎氏、沈錕氏

（前列）錢承鈺氏、王善善氏、陸世芬氏、服部夫人、服部博士、金邦平氏、高淑瑞氏、胡宗瀛氏

出典：『太陽』第11巻第13号、1905年10月1日。

注：これは、13名の留学生と服部字之吉夫婦との記念写真。図中には、唐宝鏐、陸宗輿、胡宗瀛を除けば、残り全員が同志会の会員、そのうち5名が訳書堂編社の社員である。

1907年に両江総督端方が派遣した楊芾は、6月30日付の日記に「鈴木町の清国留学生会館を訪れると、建物一棟があつて、少数の図書が置かれている」⁷⁶のみだったという会館の物寂しい状況を伝えている。

それにもかかわらず、この時期の会館は、留学生の集会所としてその役目を果たしている⁷⁷。1910年1月15日に至って、貸貸期限が満期を迎えたことに伴い駿河台鈴木町にあった清国留学生会館は閉鎖されることになった⁷⁸。

この後、会館は牛込区西五軒町52番地に移転して再開し、1911年1月3日に会館幹事の改選が行われていた（図4-9）⁷⁹。

⁷⁶ 楊芾等著、楊早整理『扶桑十旬記（外三種）』鳳凰出版社、2014年、41-42頁。（到鈴木町清国留学生会館、有樓一重、略具書籍。）

⁷⁷ 1909年8月、一部の留学生は清国留学生会館で集會し、「安奉線鉄道問題」をめぐる対策を協議している。JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081629100（第375-392画像）、「清国留学生会合ノ件」、在本邦清国留学生関係雑纂/雑之部 第一巻（B-3-10-5-3_6_001）（外務省外交史料館）。

⁷⁸ 「留学生会館の閉鎖」『東京朝日新聞』1910年1月4日。

⁷⁹ JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081629100（第407、408画像）、「清国留学生總會館ニ関スル

図 4-9 清国留学生總會館ニ関スル件



出典：JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081629100 (第 407 画像)、「清国留学生總會館ニ関スル件」、在本邦

清国留学生関係雑纂/雑之部 第一巻(B-3-10-5-3_6_001)(外務省外交史料館)。

注：この文書の最初に、「本月三日、牛込区西五軒町、清国留学生總會館ニ於テ、委員ノ改選ヲ举行シ、幹事・庶務・会計、及書記等ハ、其選定ヲ了ヘタルモ」と書かれている。

管見の限り、牛込区の清国留学生会館の閉鎖に関する資料は見当たらないが、日本の外務省記録によれば、少なくとも 1911 年 10 月まで存在していたことが確認できる⁸⁰。

1912 年 11 月、辛亥革命後、清国留学生会館は中華民国留学生總會館に転身して再開されていた⁸¹。

件」、在本邦清国留学生関係雑纂/雑之部 第一巻(B-3-10-5-3_6_001)(外務省外交史料館)。

⁸⁰ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081629200 (第 500 画像)、「清国留学生ニ関スル件」、在本邦清国留学生関係雑纂/雑之部 第一巻(B-3-10-5-3_6_001)(外務省外交史料館)。

⁸¹ JACAR(アジア歴史資料センター)Ref. B12081629200 (第 530-534 画像)、「支那人会合ノ件」、在本邦清国留学生関係雑纂/雑之部 第一巻(B-3-10-5-3_6_001)(外務省外交史料館)。

むすび

本章では、清国留学生会館の設立を前後した時期の歴史を考察し、そして勵志会、訳書彙編社と清国留学生会館との密接なつながりについて、その組織構成、寄付金、図書雑誌の寄贈、発行所など様々な角度から検討を加えた。そこで確認できた事項は、以下のようにまとめることができる。

第一に、本章では、李宗棠の東遊日記の記述によって、勵志会の会員が清国留学生会館の設立に中心的な役割を果たしたことを明らかにした。さらに留学生と清国駐日公使との交渉過程を取り上げ、会館設立に対する清国駐日公使の蔡鈞の相反する態度について分析を行った。蔡は留学生派遣を中止させることを清国政府に具申し、また、その秘密の文書が日本側の外務省と新聞などに報道され、大きな問題を引き起こした。しかし、結局、蔡鈞の清国留学生会館の設立支持という意見表明と寄付金によって清国留学生会館は設立後ろ盾を得ることをできた。

第二に、清国留学生会館の組織は総長と副長、そして 12 名の幹事により構成され、多くの勵志会会員が幹事を務め、会館の日常運営に積極的に参加していることを明らかにすることができた。また、清国留学生会館は招待幹事のほか、会館は上海、天津、神戸などの地域に賛成員を配備し、留学生と会館の間の情報伝達の役割を担った。

第三に、勵志会以外に訳書彙編社も清国留学生会館と深い関わりがあることが確認された。訳書彙編社は会館の運営に寄付金を出しただけでなく、『訳書彙編』などに会館の設立と「招待規則」などの広告を掲載し、清国留学生会館の活動を国内に宣伝している。

第四に、『清国留学生会館報告』に掲載された「図書録存」の項目などから、清国留学生会館の図書室が所蔵する新聞と雑誌を考察し、留学生の読書の範囲は、政治、社会科学、そして、時事評論の類が多かったことを指摘した。特に各雑誌の政治的立場を検討した上で、清国留学生会館が購入していた新聞雑誌は、いわゆる保守派、革命派などの特定の派閥や政治的な意見に偏ったものではなかったことも確認できた。

清国留学生会館は、清末の日本留学ブームを経て約 8 年の間存続しており、中国以外の海外に設立された留学生の初めての組織として大きな役割を果たしたことを忘れてはならない。実藤恵秀が指摘しているように清国留学生会館は、中国人留学生「大本営」として、清末の留学生界を束ねる重要な組織であったが、これまでの歴史研究、日中関係史研究、そして、留学生史研究においてその重大な意義が正しく評価されてこなかった、と言える。

第Ⅱ部 『訳書彙編』について

第五章 『訳書彙編』の発行——創刊と財政、販売を中心に

はじめに

1895年、日清戦争の敗戦は清国国内に波瀾を巻き起こした。「変法」をめぐる議論が広がり、知識人の視線は一斉に西洋から日本に向けられるようになった。

1896年8月、梁啓超は『時務報』に「変法通議」を連載し始め、変法改革を提唱した。また「論訳書」では「明治維新以後、日本は西学を鋭意求め、翻訳した洋書の中には重要なものが概ね揃っている。日本の新著の中にも読む価値があるものが多い。今、日本語を習い、和書を翻訳すれば、わずかな労力で非常に多くのものを得ることができる」¹と、日本語の訳書を通して西洋の近代思想を翻訳する必要性を説いた。

1897年、梁啓超は「今日の中国における自強の第一策として、翻訳をその第一義とすべきである」²と再び強調している。翌年、洋務派の領袖である張之洞は『勸学篇』で「日本はすでに西学のうち重要なものを訳している。我々が日本から学び、少ない労力ではやく効果を得るうえで、日本語は大いに役立つ」³という見解を主張した。二人は翻訳の重要性をともに認識し、日本を経由して欧米の思想を翻訳することを主張した点で一致している。これ以降、日本語の訳書を漢訳する風潮が中国国内で広まった。

一方、中国人留学生による翻訳活動も本格的に始まった。1900年12月、「留学生雑誌の元祖」と称される雑誌『訳書彙編』が創刊された⁴。

¹ 梁啓超「論学校七：変法通議三之七・訳書」続第二十七冊『時務報』第33冊、1897年7月20日。（日本自維新以後。鋭意西学。所翻彼中之書。要者略備。其本国新著之書。亦多可觀。今誠能習日文以訳日書。用力甚少而獲益甚鉅。）

² 梁啓超「読日本書目志後」『時務報』第45冊、1897年11月15日。（今日中国欲為自強第一策。当以訳書為第一義矣。）

³ 張之洞『勸学篇・広訳第五』苑書義等主編『張之洞全集』第12冊著述・詩文・書札・附録、河北人民出版社、1998年、9744頁。（至各種西学之要者、日本皆已訳之、我取徑于東洋、力省效速、則東文之用多。）

⁴ 馮自由「勵志会と訳書彙編」『革命逸史』初集、中華書局、1981年、99頁。

従来の研究では、実藤恵秀と黄福慶はいずれも『訳書彙編』の概要について紹介した⁵。実藤恵秀は雑誌創刊以降の展開を概説したほか⁶、『訳書彙編』が雑誌の装丁形態を旧装から洋装へ導いたことを評価している⁷。黄福慶は『訳書彙編』第2年第9期から誌面の内容が変化したことを発見し、雑誌の内容が翻訳から論説へ転換したことを指摘した⁸。また、丁守和と符致興は『訳書彙編』の創刊、編集人員、体裁、販売などの方面に触れながら、誌面の内容分析を通して当時の留学生の思想的傾向を考察している⁹。しかし、以上の研究はあくまでも概説的な紹介にとどまっており、雑誌の趣旨、編集方針と誌面の構成、販売方法などについて議論の余地が残っている。

近年、『訳書彙編』の研究は飛躍的に進展したが¹⁰、その研究視点はおおよそ次の三つに分けることができる。

第一に、言語学の観点から日中両言語の語彙を比較する研究である。朱京偉は『訳書彙編』の出版、内容の改善、訳書の底本を整理しつつ、雑誌で使われた日本語からの借用語についての研究を行った¹¹。

第二に、西洋思想（主に政治学と法学）の受容について誌面の分析を通して考察する研究である¹²。孫宏雲は『訳書彙編』に関する一連の研究を発表し、同誌に掲載された政治学の関連文章を分析し、同誌が日本の政治学の著作を中国に導入する際に重要な役割

⁵ このほか、王奇生『中国留学生的歴史軌跡 1872—1949』（湖北教育出版社、1992年、253-257、282-287頁）は「取徑東洋、軌道入内」と「留日学生と西書転販」の箇所、日本語に翻訳された洋書の漢訳ブームについて論じながら留学生の役割を評価している。

⁶ さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』くろしお出版、1970年、259-264頁。

⁷ 前掲さねとうけいしゅう『増補 中国人日本留学史』、297-302頁。

⁸ 黄福慶『清末留日学生』中央研究院近代史研究所、1975年初版、164-165頁。

⁹ 丁守和・符致興『訳書彙編』丁守和主編『辛亥革命時期期刊介紹』第1集、人民出版社、1982年、55-68頁。なお、『訳書彙編』を紹介している新聞史や出版史の著作には次のようなものがある。1926年、戈公振『中国報学史』は「留学界之出版物」において、『訳書彙編』を紹介している。張静盧輯注『清季重要報刊目録・折り込』（『中国近代出版史料初編』群聯出版社、1953年、92頁後）、方漢奇『中国近代報刊史』上冊（山西人民出版社、1981年、204頁）、史和等編『中国近代報刊名録』（福建人民出版社、1991年、197-198頁）はいずれも『訳書彙編』について言及している。

¹⁰ 概説的論考は少なくない。莊馳原「近代中国最早の法政翻訳期刊『訳書彙編』探微」（『翻訳論壇』2018年第3期）は「訳者群像」、「訳本考辨」、「伝播網絡」、「翻訳賛助」の四つの方面から『訳書彙編』の編集人員、編集体裁、販売、影響などを考察している。

¹¹ 朱京偉『近代中日詞彙交流的軌跡——清末報紙中の日語借詞』商務印書館、2020年。また王彩芹「法律関係新語の形成において赴日留學生が果たした役割——『訳書彙編』を中心に」（天津外国語学院修士論文、2009年2月）は法律に関する新語の輸入とその言語の起源について分析した。王曉鑫『「西学東漸」における清末留日学生の翻訳活動——訳書彙編社への考察を中心に』（北京外国語大学修士論文、2019年5月）はルソー『社会契約論』と楊廷棟『民約論』、及び加藤弘之『強者の権利の競争』と楊蔭杭『物競論』の二つの例を取り上げ、それぞれ語彙の特徴を分析した。

¹² この研究視点の中では、留学生の意識や認識をめぐる論考もある。孫瑛鞠「清末、中国人日本留學生の近代国民意識形成に関する一考察——1896年から1901年までの留學生界に着目して」（『中国研究月報』第849号、2018年）は『清議報』、『訳書彙編』、『開智録』に載せられた留學生の言論から、留學生の「国民意識」を分析している。王曉雨・陳其松「清國人日本留學生の見た「世界」とその言説」（『北東アジア研究』第30号、2019年3月）は『訳書彙編』をはじめとして留學生の出版活動から留學生の「世界」に対する認識を考察した。

を果たしたことを評価した¹³。陳靈海は『訳書彙編』や『浙江潮』などの留学生雑誌で活躍していた「攻法子」という筆名の人物が『訳書彙編』編集陣の一人であった呉振麟と推論した上で、中国国内における近代「法系」概念導入に攻法子/呉振麟が果たした役割を再評価する必要性を指摘している¹⁴。それに対して、楊瑞は「法族」、「法系」概念の創成と伝播を考察し、特に「法系」概念を中国に紹介した「攻法子」が呉振麟ではなく、章宗祥であることを確認した上に、彼が果たした役割を評価した¹⁵。

第三に、編集者と翻訳団体に関する研究である。筆者は励志会による『訳書彙編』出版事業が訳書彙編社に引き継がれた経緯を解明しつつ、同誌創刊の経緯にも触れた¹⁶。

本章では、『訳書彙編』の創刊趣旨、誌面構成の変化、及び資金問題、販売網の特徴を明らかにする。

第一節 『訳書彙編』の創刊趣旨——「開民智」

1900年12月6日、励志会が編集した『訳書彙編』の創刊号が出版された。しかし、この雑誌の出版計画は半年前に遡ることができる。1900年7月、励志会増補『和文漢読法』の最後に「訳書彙編敘例」（以下、「敘例」と「簡明章程」が付され、『訳書彙編』に関する多くの重要情報を記載している。この「敘例」は1900年5—6月頃に励志会の会員が起草したものである。少し長文になるが、その重要性に鑑みて以下に引用する。これに基づいて、改めて『訳書彙編』の創刊趣旨を分析する。

今日の中国を救うために、民智を開くことはその第一義である。民智を開くために凡そ三つの方法がある。それは学校、新聞雑誌、翻訳である。〔中略〕新聞雑誌と翻訳

¹³ 孫宏雲「學術連鎖——高田早苗と歐美政治学在近代日本与中国之傳播」（『中山大學學報（社會科學版）』2013年第5期）、「楊廷棟訳『原政』の底本源流考」（『政治思想史』2016年第1期）。また、苗禕琦「『西政』祖東——『訳書彙編』と晚清政治学傳播的「日本渠道」」（中国人民大學修士論文、2020年6月）は同誌の編集人員、体裁、傳播などを概説した上で、近代中国の政治学の受容をめぐって、同誌に掲載された『政治学』を取り上げ、その概念を分析している。このほか、宋曉煜「清末における加藤弘之の著作の翻訳および受容状況——『強者の權利の競争』とその中国語訳を中心に」（『ICCS 現代中国学ジャーナル』第10巻第1号、2017年6月）がある。

¹⁴ 陳靈海「攻法子と「法系」概念輸入中国——近代法學史上的里程碑事件」（『清華法學』2017年第6期）。

¹⁵ 楊瑞「清季民初法系知識の東學背景及其衍行」（『近代史研究』2022年第2期）。

¹⁶ 郭夢堯「清末中国人日本留學生の初期活動について——励志会と訳書彙編社を中心に」（孫安石・大里浩秋編『中国人留學生と「國家」・「愛國」・「近代」』東方書店、2019年、25—62頁。呂順長『清末浙江与日本』（上海古籍出版社、2001年、34—36頁）は編集者のうち浙江省出身の人物について考察した。また鄭振環「辛亥前楊蔭杭著訳活動述略」（『蘇州大學學報』1993年第1期）がある。

は、費用が少なく、遠方の人々にも届き、少ない労力ではやく効果を得ることができる。辺鄙の地にいる人々でもその一冊を購入できれば、近隣の形勢をひろく知ることができ、専門的な学問を研究することができ、志のある人々はこれを自らの任務とすることができる。欧米諸国が刊行する新聞雑誌は、各国ともに千や百を数え、著述と翻訳の図書は年に数千万種に達する。これは欧米諸国が早い段階で文明化し、国勢が富強になった要因である。中国の報館〔新聞雑誌社〕はだいたい百社にすぎず、このうち半分以上は取るに足らない。二千万平方里の大国であるにもかかわらず、新聞雑誌は数えるほどしかない。これは不思議なことである。

中国は三十余年にわたり翻訳に取り組んできた。しかし、江南製造局の翻訳はだいたい軍事に関する内容であり、他の分野を翻訳することは稀であった。政治に関する翻訳に至っては聞いたことがない。そのため、学者は日々洋書を読んで西洋の治国の策や富国の術に対して非常に驚くばかりで、その本質について語ることができない。これもまた不思議なことである。日本は西洋にならい、凡そ千数百種の洋書を翻訳した。精髓を選び、要点を掴み、政治や学術の本質を深堀り下げることができた。これによって早くも民智が開かれ、国勢は富強になった。

我等は日本へ留学して隣国の勃興を体感し、吾人の愚かさを痛感した。微力を顧みず同志を集め、団体を作って翻訳に携わり、我が国民に提供する。その適切かつ有用なものを選んで彙編を刊行し、一刻も早くお目にかけるため、毎月一冊を出す。辺鄙の地の志のある人々は、その一冊を手にとれば、世界の情勢や専門的な学問の一端をうかがうことができる。このことによって、我が国の新学が開拓され、文明が進歩し、民智が開かれ、国勢がひろげられ、才徳のある人々も見捨てないかもしれない。¹⁷

この「敘例」は、『訳書彙編』の創刊趣旨を大体三つの部分に分けて説明している。

まず、文章の冒頭で「民智を開く」という雑誌の趣旨を説明している。「民智を開く」という目的を果たす上で学校の重要性を指摘する一方で、新聞雑誌の出版と翻訳がより大きな効果をもたらすと主張している。

¹⁷ 沈翔雲編、勵志会増補『和文漢読法 附訳書彙編叙例』勵志会訳書処、1900年7月、「訳書彙編叙例」、53-54頁（李長波編集・解説『近代日本語教科書選集』第7巻、クロスカルチャー出版、2010年初版）。「訳書彙編叙例」の中国語原文は資料編を参照。句読点は筆者による。この時期、新聞と雑誌はまだはっきりと区別できたため、原文に用いられる「報章」は新聞のみを指すわけではなく、新聞と雑誌、または新聞と雑誌中の記事などを指す場合もある。それで、本章では、以下「新聞雑誌」という訳語を用いる。李玲「從刊報未分到刊報兩分——以晚清報刊名詞考弁為中心」『近代史研究』2014年第3期。

この時期、張之洞、劉坤一をはじめとする洋務派官僚は旧式の学堂と学院を改造していたほか、積極的に新式学堂の設立を推し進めていたが、清国中央政府の支援も地方官の協力も不足していた。一方、梁啓超は「学校総論」で、「世界の命運は、混乱から平穩に向かう。勝敗の決め手は、力から智に向かう。そのため、今日において自強といえは民智を開くことが第一義である」¹⁸と説いている。

清国留学生は、学堂の設立を確かに重視していたが、そのための資金も実力も不足していた。彼らは実現の可能性を考慮し、学堂の設立に情熱を傾注することよりも、新聞雑誌の出版と翻訳に集中することで「民智を開く」という目標を成し遂げようとした。

次に、「叙例」は欧米、中国、日本の新聞雑誌の出版と翻訳の現状を比べながら、各地域の特徴を分析している。中国において30年ほど新聞雑誌の出版と翻訳が行われてきたが、その内容は軍事に集中し、政治にはほとんど触れておらず¹⁹、欧米諸国はもちろん新興国の日本にもはるかに及ばないと結論づけた。

これについて、1902年3—4月頃には、顧燮光は清国国内の新聞発行の状況を以下のよう

自戊戌以還有報館之禁，各埠報章為之一衰，其海外流伝者類多偏激謬妄之譚，不足以貽學者，然欲知五洲時事，開內地風氣，非此不為功，故旬報之設尤急於日報，苟有人踵昔日時務各報之例，采輯務求精審，吾知其功大矣。²⁰

〔戊戌以来、報館の禁令が頒布され、各開港場の新聞出版が衰退しつつある。海外で報道されている中国国内のニュースは過激かつてらめな言論ばかりであり、後学に残すものにはならない。一方、世界の時事を知り、内地の氣風を開きたければ、新聞を発行しなければならない。そのため、旬報は日報より急いで作らなければならない。もし誰かが昔の『時務報』などの新聞雑誌を引き継ぐことができれば、取材と記事の編集に慎重さを求め、吾はその功績の大きさを知ることができる。〕

¹⁸ 梁啓超「論学校：变法通議三之一 総論」『時務報』第5冊、1896年9月17日。（世界之運。由乱而進於平。勝敗之原。由力而趨於智。故言自強於今日。以開民智為第一義。）

¹⁹ 江南製造局翻訳館は、史志、政治、交渉、教育、兵制、兵学、船政、学務、工程、農学、鉱学、工芸、商学、格致、電学、声学、光学、算学、化学、天学、地学、医学、図学などの様々な分野にわたり、合計176種の書籍を翻訳した。しかし、各分野の翻訳数から見れば、軍事が重視されているのは間違いない。翻訳館編『江南製造局訳書提要』2巻、江南製造局、宣統元年七月。また、2021年7月、全40冊の『江南製造局訳書全編』は上海科学技术文献出版社により出版されている。

²⁰ 「叙例」徐維則輯、顧燮光補『增版東西学書録』石印本、1902年（熊月之編『晚清新学書目提要』上海書店出版社、2014年、8頁）。

当時の顧燮光は「新学に心酔し、日々訳書を読」みながら、新聞をめぐる窮屈な状況を実感し、『時務報』のような「旬報」の発行を提唱した。顧はその一方で、海外の新聞雑誌における言論に対しては強い不快感を示した²¹。

『訳書彙編』の編集者たちはこのような状況を十分に理解していたからこそ、留学生の言論や見解を發表することよりも欧米と日本の新知識の翻訳を重視した。その目的は、「政治をはじめとして政治学、理財学、法律学、哲学、史学」²²に注目し、欧米の政治の本質を中国国内の知識人に理解させることであった。

そして「叙例」は最後に、雑誌の発行が広範囲にわたって良い影響を与えることを強調している。清国留学生が日本語の訳本を中国語に翻訳する理由については、「新学を開拓し、文明の進歩を図り、民智を開き、国勢をひろげる」という目標を達成するためと説明している。

1896年8月、『時務報』第1冊に掲載された梁啓超「論報館有益於国事」に以下のような論説がある。

博搜交涉要案。則閱者知国体不立。受人嫚辱。律法不講。為人愚弄。可以奮厲新学。思洗前恥矣。旁載政治学芸要書。則閱者知一切实学源流門徑。与其日新月異之跡。而不至抱八股八韻考拠詞章之学。枵然而自大矣。準此行之。待以歲月。風氣漸開。百廢漸舉。国体漸立。人材漸出。十年以後。而報館之規模。亦可以漸備矣。²³

〔広く外交の重要事案を探し求めれば、読むものは国の体制が確立しなければ人に侮辱され、法律を重視しなければ人に愚弄されることを知り、奮起して新学に励み、これまでの恥辱を雪ごうと考えるようになる。あわせて政治学芸の重要な書を掲載すれば、読むものはあらゆる実学の起源と手法、その日進月歩の跡を知り、科挙の受験勉強や考証詩文の旧学問をやるだけでいたずらに尊大になってしまうこともない。このようにしてしばらく経てば、風氣は徐々に開け、廃れていたものが次第に復興され、国の体制は次第に整い、人材が次第に現れ、十年もすれば、報館のしくみも備わるだろう。〕²⁴

²¹ 「自序」顧燮光『訳書経眼録』杭州金佳石好楼石印本、1934年（前掲『晚清新学書目提要』、220頁）。

²² 前掲『和文漢読法 附訳書彙編叙例』、「簡明章程」、54頁。

²³ 梁啓超「論報館有益於国事」『時務報』第1冊、1896年8月9日。

²⁴ 訳文は岡本隆司、石川禎浩・高嶋航編訳『梁啓超文集』（岩波書店、2020年、44頁）による。

梁啓超は「閉塞を取り除き開通を求める方法はいろいろあるが、報館はその端緒である」²⁵とも述べている。彼は新聞雑誌の重要性を強調し、新聞雑誌社を設立しなければ、風気と民智を開くことは期待できないと考えていた。上述の「敘例」が、梁啓超の影響を強く受けていたことを指摘しなければならない。清国留学生は、国内の知識人よりも日本の勃興を身に染みて体験していたほか、義和団事件における清国政府の状況に刺激を受けた。彼らは、「民智を開く」ことができれば国家も復興できると考え、『清議報』とは異なる文明への道を模索した。

第二節 『訳書彙編』の発行と誌面構成

1900年12月、『訳書彙編』創刊号が刊行された。同誌はほぼ毎月一回発行され、1903年3月に第2年第12期で停刊し、21期分が現存している。『訳書彙編』は1903年4月に『政法学報』と誌名を変え、一年前後刊行を継続したあと、1904年5月に第7・8期の合併号を最後に廃刊した。

1900年6月頃に起草された「簡明章程」において、『訳書彙編』の編集、出版、定価、発売などに関する全9条の規定が定められた²⁶。同年12月、『訳書彙編』創刊号では、この章程を改めて三つに分け、表紙の裏に掲載している（図5-1）。

図5-1 『訳書彙編』の簡明章程



出典：『訳書彙編』第1期、訳書彙編発行所、1900年12月6日。

²⁵ 前掲岡本隆司・石川禎浩・高嶋航編訳『梁啓超文集』、38頁。（去塞求通。厥道非一。而報館其導端也。）

²⁶ 前掲『和文漢読法 附訳書彙編叙例』、「簡明章程」、54-55頁。

図 5-1 が示すように、「簡明章程」は「簡要章程」、「定価」、「購閱略則」の三つの項目に分けられるが、その内容にほとんど変わりはない。「簡要章程」の内容は以下の通りである。

「簡要章程」

- 一 是編所刊政治一門為主，如政治、行政、法律、經濟、政史、政理各門，每期所出或四類或五類，間附雜錄。
- 一 政治諸書乃東西各邦強國之本原，故本編亟先刊行此類，至兵農工商各專門之書，亦有訳出者，以後当陸續採要刊行。
- 一 是編之外，尚須刊刻訳成全部之書，目錄均附於後。
- 一 是編由同人捐資創辦，尚祈同志之士慨与資助，当酌量贈書以酬高誼。²⁷

〔簡要章程。一 本誌は政治、行政、法律、經濟、政史、政理など政治關係を主とする。每期には四類、または五類を選んで刊行し、雜録を付す。一 政治に関する書籍は東西各国の富強の本源である。そのため本誌は急ぎまずこの分野について刊行する。兵、農、工、商の分野に関する書籍については、今後その重要なものを選んで順次刊行する。一 本誌のほか、完訳出版された書籍の目錄を後ろに付す。一 本誌は同人の寄付により創刊された。同志の更なる支援を期待し、支援を受けた際には書籍を贈り高誼に報いる。〕

第一条と第二条は『訳書彙編』の内容を説明している。政治分野を重視したほか、兵、農、工、商などの分野にも言及しているものの、結局これらに関連する内容が掲載されることはなかった。また第三条は『訳書彙編』の編集方針を紹介している。一作品の翻訳を数期にわたって連載し、全訳を掲載した後に単行本として出版することを表明している。

表 5-1 は『訳書彙編』第 1 期から第 9 期までの目次をまとめたものである。

表 5-1 『訳書彙編』に掲載された著作と翻訳箇所（一部）

タイトル	掲載期数	原著者	日本語訳者	翻訳箇所
------	------	-----	-------	------

²⁷ 『訳書彙編』第 1 期、1900 年 12 月 6 日。句読点は筆者による。

第五章 『訳書彙編』の発行一創刊と財政、販売を中心に

政治学	1、2、6、8	(米) 伯蓋司 (ジョン・ウィリアム・パージェス)	高田早苗訳	第1巻—第2巻
国法汎論	1、2、3	(独) 伯倫知理 (ヨハン・カスパー・ブルンチュリ)	加藤弘之訳	緒言/第1巻 (未完)
政治学提綱	1、2、7、9 (第7期から 重刊)	(日) 鳥谷部銃太郎		緒論/第1章—第3 章第3節 (未完)
社会行政法論	1	(独) 海爾司烈 (ヘルマン・ロエスレル)	江木衷訳述	第1章 (未完)
方法精理	1、2、3	(仏) 孟德斯鳩 (シャルル・ド・モンテスキュー)	何礼之訳	第2巻—第4巻
近世政治史	1、2、3、6、8	(日) 有賀長雄		第1部
近時外交史	1、3、5、6、9	(日) 有賀長雄		第1章—第7章
十九世紀欧州 政治史論	1、2	(日) 酒井雄三郎		第1章—第2章 (未完)
民約論	1、2、4、9	(仏) 盧騷 (ジャック・ルソー)	原田潜訳述	第1編—第2編
権利競争論	1、4	(独) 伊耶陵 (ルドルフ・フォン・イエーリング)	宇都宮五郎重 訳	第1章 (未完)
政法哲学	2	(英) 斯賓塞爾 (ハーバート・スペンサー)	浜野定四郎・ 渡辺治訳	第1巻
理財学 (原名 経済論)	2、3、4、8	(独) 李士德 (フリードリッヒ・リスト)	大島貞益重訳	沿革第一/第1章— 第4章 (未完)
物競論	4、5、8	(日) 加藤弘之		完訳/附目録
現行法制大意	5、6、7、9	(日) 樋山広業		完訳/附目録
各国国民公私 権考	8	(日) 井上毅		完訳

出典：「目録」、『訳書彙編』第1期—第9期、1900年12月6日—1901年12月15日により作成。

注：「翻訳箇所」の項目では、章の途中までしか訳していない場合は「未完」、書籍全体を訳し終えた場合は「完訳」としている。

表 5-1 から、『訳書彙編』創刊号から第 9 期まで、ルソー、ブルンチュリー、加藤弘之、モンテスキュー、スペンサーなどの有名な政治学者の著作が掲載されていることがわかる。しかしながら、そのうち完訳が掲載された著作は『物競論』、『現行法制大意』、『各国国民公私権考』だけで、ほかは途中までしか掲載されなかった。たとえば、有賀長雄の著作のうち、『近世政治史』は第 1 部の翻訳が第 1 期、第 2 期、第 3 期、第 6 期、第 8 期に掲載され²⁸、『近時外交史』は第 7 章までの翻訳が第 1 期、第 3 期、第 5 期、第 6 期、第 9 期に掲載されている。

『訳書彙編』第 2 年第 1 期に掲載された「本編改良告白」は、

本社は昨年全 12 期を発行した。だが選択する書籍の種類も分量も多いため、『現行法制大意』、『近世政治史』、『各国国民公私権考』、『物競論』しか出版できなかった。そのほかの『近時外交史』、『政治学』、『理財学』、『十九世紀欧州政治史論』、『政治学提綱』などの作品については、早急に翻訳を完成し、印刷する計画である。²⁹

と説明している³⁰。しかしながら、実際には多くの作品が完訳されず、単行本としても出版されなかったと考えられる。

1902 年 8 月に、『訳書彙編』第 2 年第 4 期に掲載された「訳書彙編社発行書目（已刊）」から出版された書籍について検討を加えていこう。表 5-2 は出版された書籍の広告をまとめたものである。

表 5-2 訳書彙編社の発行書目（既刊）

NO.	書 名	原著者	編訳者	出典/備考
1	再版和文漢読法	梁啓超	憂亜子増広	「印刷中」と明記
2	再版増広東語正規	唐宝鏐・戡翼輩共著		

²⁸ 『訳書彙編』に掲載された「近世政治史」は実は、有賀長雄の『近時政治史』により翻訳されたものである。翻訳の時に書名が誤訳されたのか、あるいはただの「近時」と「近世」の書き間違いなのか、判然としない。有賀長雄講述『近時政治史』東京専門学校蔵版、年代不明。

²⁹ 「本編改良告白」『訳書彙編』第 2 年第 1 期、1902 年 4 月 3 日。（本社去年所出十二期。因書類太多而厚。故僅出完現行法制大意。近時〔世〕政治史。各国国民公私権考。物競論等。其他已刻未竣之近時外交史。政治学。理財学。十九世紀欧州政治史論。政治学提綱等書。務須趕緊訳畢付印。）

³⁰ また興味深いことに、『新民叢報』第 6 号（1902 年 4 月 22 日）の「紹介新著」に掲載された『訳書彙編』の内容において、『訳書彙編』は辛丑年の春に初号を発行してから、すでに 9 冊を出版した〔自辛丑春間、初号発行、已印九冊〕と書かれ、二つの記載には齟齬があることから見れば、訳書彙編社による記述の信憑性に疑いの余地があると思われる。つまり、もし 9 冊のみが発行されたら、「21 期現存している」のではなく、全て現存していることであろう。

第五章 『訳書彙編』の発行一創刊と財政、販売を中心に

3	政治小説累卵東洋	大橋乙羽	憂亜子訳	『累卵の東洋：政治小説』東京堂、1898 年
4	物競論	加藤弘之	楊蔭杭訳	『強者の権利の競争』哲学書院、1893 年
5	日本遊学指南	章宗祥		
6	波蘭衰亡戦史	洪江保	本社同人訳	『波蘭衰亡戦史』博文館、1895 年
7	国家学原理	高田 早 苗 講述	稽鏡訳	『国家学原理』東京専門学校講義録、刊年 不明
8	女子教育論	成瀬仁蔵	周祖培・楊廷 棟共訳	
9	日本制度提要	不明	本社同人訳	
10	和文奇字解	本社同人編輯		単行本の奥付によれば、陶珉が編集
11	名学	不明	楊蔭杭訳編	
12	国法学	岸 崎 昌 ・ 中村孝	章宗祥訳	「第二版出書」と明記/『国法学』博文館、 1900 年
13	各国国民公私権考	井上毅	章宗祥訳	『内外臣民公私権考』哲学書院、1889 年
14	財政四綱	錢太守輯		「印刷中」と明記/錢太守は即錢恂
15	最近支那論	不明	本社訳	
16	欧美日本政体通覧	上野貞正	巖涯生編輯	『欧米政体通覧』王道雜誌社、1901 年
17	法律学論綱	戸水寛人	巖涯生訳	『法律学綱領』有斐閣、1901 年
18	外国国勢一覽	不明	巖涯生編	「印刷中」と明記
19	欧美各国最近財政及組織	不明	本社訳	

出典：「訳書彙編社発行書目（已刊）」『訳書彙編』第2年第4期、1902年8月31日に基づいて、熊月之編『晚清新学書目提要』（上海書店出版社、2014年）、付建舟編『晚清民營書局發行書目』（黒竜江教育出版社、2016年）などの資料を参照しながら作成。

表 5-2 によると、合計 19 種の書籍が訳書彙編社より発行されたことが確認できる³¹。そのうち翻訳が多数を占め、著述（編著も含む）は 7 種だけだった。ところで、『物競論』、『各国国民公私権考』の出版は確認できるが、『政治学提綱』、『万法精理』、『近時外交史』、『近世政治史』など原著の一部しか翻訳掲載されなかった作品の出版は確認でき

³¹ 「訳書彙編社発行書目（已刊）」『訳書彙編』第2年第4期、1902年8月31日。

ないのは³²、これらの作品は計画通り出版されなかったか、そもそもこれらの作品の翻訳が完成しなかったからと考えられる³³。

また、単行本として出されたのは、必ずしも『訳書彙編』に掲載されたものとは限らず、たとえば、周祖培・楊廷棟が共訳した『女子教育論』（図 5-2）は単行本のみが出版された。

図 5-2 『女子教育論』の表紙



出典：周祖培・楊廷棟共訳『女子教育論』作新社訳書局、1902年7月再版（初版1901年11月）。

このような問題に対処するために、『訳書彙編』は第2年第1期から、全般的な内容の改革に乗り出した。扱う分野を政治だけでなく財政、教育、軍事、警察などにも拡大したほか、諸学問の学理的な紹介にも力を入れることを強調した³⁴。これに伴い、誌面構成が変化した。表 5-3 は『訳書彙編』の発行時期をその内容と誌面構成の変化に基づいて区分したものである³⁵。

³² 1903年1月29日、開明書店より出版された『日本維新百傑伝』の中に掲載された訳書彙編社の出版書目に『政治学提綱』（上巻）、『近世外交史』を確認することができるが、同じ作品であるかどうかは資料の制約のため判然としない。「訳書彙編社出版及発行書目」『日本維新百傑伝』上海開明書店、1903年（付建舟編『晚清民営書局発行書目』上冊、黒竜江教育出版社、2016年、319-321頁）。

³³ 前掲苗禱琦「『西政』徂東——『訳書彙編』与晚清政治学伝播的「日本渠道」」、36-41頁は「著作編訳状況」の箇所、単行本として出版された著作を整理した上で、留学生の学業が多忙であるため、作品の翻訳が完成しなかったという結論を出した。

³⁴ 「訳書彙編発行之趣意」『訳書彙編』第2年第1期、1頁。

³⁵ 前掲苗禱琦「『西政』徂東——『訳書彙編』与晚清政治学伝播的「日本渠道」、王晓鑫「『西学東漸』における清末留日学生の翻訳活動——訳書彙編社への考察を中心に」において、『訳書彙編』の時期区分について言及された。

表 5-3 『訳書彙編』の発行時期の区分

区分	時期	雑誌期数	特徴
第一段階	1900 年 12 月— 1901 年 12 月	第 1 期—第 9 期	形式：冊子本など伝統的な装丁を使用せず、初めて西洋式の装丁で製本。両面印刷。 内容：翻訳中心。論説なし。「雑報」、「雑録」の設置。
第二段階	1902 年 4 月— 11 月	第 2 年第 1 期—第 8 期	形式：「巻頭」に銅板写真に掲載。頁数が増加。 内容：財政、教育、軍政、警察関連の内容が充実。「政法片片録」の設置。
第三段階	1902 年 12 月— 1903 年 3 月	第 2 年第 9 期—第 12 期	形式：項目の再編。 内容：翻訳の減少。論説の増加。「留学界」の設置。

出典：『訳書彙編』第 1 期—第 2 年第 12 期（1900 年 12 月 6 日—1903 年 3 月 13 日）により作成。なお『訳書彙編』の第 10—12 期の発行状況は不明。鳥谷部純太郎『政治学提綱』、海爾司烈『社会行政法論』、李士徳『理財学』、酒井雄三郎『十九世紀欧州政治史論』の翻訳はいずれも第 9 期の途中までしか確認できない。

第一段階の特徴として、編集を務めた留学生たちの論説が掲載されなかったことが挙げられる。また、「雑報」、「雑録」の中では、海外のニュースが紹介されたが、中国人留学生界の情報もほとんど掲載されなかった。

第二段階では、『訳書彙編』第 2 年第 1 期に「本編改良告白」が掲載されたほか、「時事漫論五則」、「勸演野人士遊学日本啓」のような時事問題が登場した。また、中国人留学生の動向に関する記事が次第に掲載されるようになった。さらに、「政法片片録」が設置され、「あるいは事実を記し、あるいは理論を記録し、あるいは師説を記述し、あるいは自分の意見を交える」³⁶と、翻訳だけでなく論説も掲載することを宣言している。

第三段階では、『訳書彙編』第 2 年第 8 期の「訳書彙編第 9 期改正体例告白」（図 5-3）が示すように、次の第 2 年第 9 期から誌面構成が大きく変化した。たとえば、政治、法律、経済、歴史、哲学などの小項目が立てられ、分類がより明確になった。また、「留学界」の項目が設けられ、「各省留学生総数」、「浙江同郷会記事」、「帝国婦人協会之主旨」、「記歓迎会」（留学生総監督汪大燮）、「励志会章程」など、留学生界の動静についても頻繁に紹介した。

³⁶ 「政法片片録」『訳書彙編』第 2 年第 1 期、137 頁。

図 5-3 訳書彙編第9期改正体例告白



出典：『訳書彙編』第2年第8期、1902年11月15日。（全国報刊索引より）

このような変化を示す典型例が、学問独立時代について述べた次の文章である。

欲脱訳書時代、而進於学問独立時代、此固程度限之、不能驟及。然取他人之思想、而以吾之思想融会貫通之、參酌甄別引申發明、實為二時代過渡之要着。〔中略〕故訳事在今日固為不可緩之舉。〔中略〕以同人數年研究之心得、借本編以發表之。專主実学、不事空談。取政法必要之問題、以与吾国留心斯学者、互相商榷。³⁷

〔訳書時代を脱し、学問独立時代に進むことを望んでも、もともとの状況がこれを制限し、直ちに辿り着くことはできない。しかし、他人の思想を取り上げ、自分の思想によってこれを理解し、斟酌して見分け、意味を広げて新しく解釈することが過渡期における要である。〔中略〕そのため、翻訳はもとより一刻もゆるがせにできないことである。〔中略〕同人が数年の研究から得た成果を本誌において発表する。もっぱら

³⁷ 『訳書彙編第9期改正体例告白』『訳書彙編』第2年第8期、1902年11月15日。

実学を主とし、空談はしない。政法に関する必要な問題を取り上げ、我が国でこの問題に注目する者とともに検討する。]

第三段階の『訳書彙編』は、日本の書籍などを翻訳することから新しい学問を著述する方向への転換を試みた。たとえば、汪榮宝による論考として「史学概論」、「抜都別伝」が、攻法子の署名で「論研究政法為今日之急務」、「論国家」、「对外観念之適當程度論」が掲載された。また、馬君武は「社会主義与進化主義比較」、「社会主義之鼻祖德摩司摩児之華嚴界観」を寄稿したが、これはマルクス主義と社会主義に関する書籍を翻訳し、紹介した初期の作品である。これらの作品はただ翻訳のものではなく、自分の理解も含まれる著述である。

以上、『訳書彙編』の誌面構成と編集方針の変化に注目し、各段階の特徴を整理した。

第三節 『訳書彙編』の財政状況と販路

一、雑誌の定価と財政状況

『訳書彙編』が中国人留学生によって発刊された初めての雑誌であることはすでに多くの論考が指摘しているところである。では、雑誌の運営資金はどのように調達されたのだろうか。その販売と運営の実態はどのようなものであったのだろうか。『訳書彙編』が後続の留学生雑誌に大きな影響を与えたことを考えれば、これらの点は看過することのできない問題である。

結論から先に言えば、『訳書彙編』の出版を支えたのは、清国の政府や官僚による寄付や支援ではなく、主に編集者による資金調達と雑誌や単行本の売り上げであった。清末の『時務報』、『経世報』、『清議報』などの雑誌は、その創立期において、政府の補助ではなく友人や華僑の寄付金によって支えられていたことがすでに判明している³⁸。また、『訳書彙編』とほぼ同時期に発行された清国留学生による雑誌『開智録』も、横浜の華僑や編集者の友人などから寄付金を受けていた³⁹。

³⁸ 『「時務報」の財務』廖梅『汪康年——民権論到文化保守主義』上海古籍出版社、2001年、58-66頁。「時務報」「清議報」張朋園『梁啟超与清季革命』中央研究院近代史研究所、1999年第2版、186-189、199-200頁。徐佳貴「維新、経世与士人辦報——以杭州『経世報』(1897—1898)為箇案再論維新報刊史」『新史学』第27巻第2期、2016年6月。また桑兵「清末民初傳播的民間化与社会変遷」『近代史研究』1991年第6期)は、このような資金調達についても論じている。

³⁹ 「捐款芳名臚列」『開智録』第1期、1900年12月21日。

これに対して、『訳書彙編』の関連記録を見てみると、第2年第1期に元湖北留学生監督銭恂が銀60元、第2年第11期に候補道李哲濬が銀246元を寄付したことが確認できるが⁴⁰、そのほかには政府や官僚、あるいは商人、華僑が寄付したという記録は見当たらない⁴¹。そのため、『訳書彙編』は、『時務報』、『清議報』、『開智録』などの新聞雑誌と異なり、社外の寄付金に頼らず勵志会会員と『訳書彙編』編集者が自力で資金を調達することで運営を維持し、後に雑誌と単行本の売り上げによって雑誌の発行を続けたことが推測される⁴²。

以下は、1900年12月、『訳書彙編』創刊号に掲載された同誌の「定価」と「購閱略則」である。

「定価」一月一冊洋兩角，半年六冊洋一元一角，全年十二冊洋兩元，郵税在內。

「購閱略則」

- 一 定閱本編可函向訳書彙編發行所挂号，每期当按址寄送，外埠可就近向各代派処購取。
- 一 价銀必須先付，挂号後若不付銀，及已送滿所付之价，均一律停止不送，外埠同。
- 一 代派処照定价提二成作為酬勞。⁴³

〔「定価」一月一冊、洋二角。半年六冊、洋一元一角。一年一二冊、洋二元。郵送料を含む。〕「購閱略則」一 本誌を購読する場合は訳書彙編發行所に郵便を送って手続きを行う。毎期を指定の住所に郵送する。他都市の場合は最寄りの各「代派所」〔以下、代理販売所〕で購入することができる。一 代金は先払いである。購読手続き後に代金を支払わない場合や、支払われた代金分の雑誌を全て送付した場合、一律に発送を停止する。他都市も同様である。一 代理販売所は定価の二割を報酬として受け取る。〕

⁴⁰ 「壬寅年本編賛助員芳名録」『訳書彙編』第2年第1期、1902年4月3日。「本編賛成員台銜統登」『訳書彙編』第2年第11期、1903年2月16日、4頁。銭恂について、戴海斌「銭恂——晚清外交史上的「異才」」「銭恂事跡補説」『晚清人物叢考・初編』生活・読書・新知三聯書店、2018年を参照。

⁴¹ この後、1903年11月の『政法學報』第4期に、また「本社名譽賛成員寄附報告（癸卯四月）」が掲載されたが、それによれば、寄付金は、「那桐 洋100元、誠璋 洋10元、揚昭來 洋5元、張允言 洋5元、瑞豐 洋5元、章士奎 洋5元、程大徵 洋5元、李経楚 洋50元」と記され、合計185元である。

⁴² 前掲莊馳原「近代中国最早的法政翻訳期刊『訳書彙編』探微」は、清国の官員による寄付金が『訳書彙編』の出版を支えたと指摘した。しかし、本章で検討するように、2人の寄付時期と金額から見れば、『訳書彙編』の出版を支えているのは寄付金ではないと思われる。

⁴³ 「目次」『訳書彙編』第1期、1900年12月6日。句点は筆者による。また、同誌には「代派処」と「代派所」の二つの表記が見えるが、意味には同じである。

「定価」と「購閱略則」によると、定価は1冊で洋2角、半年6冊で洋1元1角、一年12冊で洋2元と定められ、この定価には郵送料も含まれていた。旬刊『清議報』の場合、1冊で洋1角5分、1ヶ月分(3冊)で洋4角だったが、この定価には郵送料が含まれていなかった⁴⁴。創刊号から第9期の『訳書彙編』は每期平均百頁であったので、同誌の定価は必ずしも高額というわけではなかった⁴⁵。

『訳書彙編』の売上について、1901年7月の第5期に掲載された「謹告閱報諸公」によれば、同誌は第1期から第4期まで全て売り切れたため再版が促されている状態で、毎月の販売部数が一千部を超えたとある⁴⁶。ただし、この告知は販売を促す諷刺文句の一種であり、販売部数が誇張された可能性は十分にありうる。そのため、販売部数が本当に一千部以上に達したかどうかをこの文言だけから確定することはできないが、少なくとも数百部は売れていただろう。

しかし、『訳書彙編』は依然として様々な資金問題に直面していた。これについて、同誌は早くも1901年5月の第4期が言及し、主に販売代金と郵送料の二つの方面から解決を図った。1901年5月の『訳書彙編』第4期「本編告白」には、以下のような内容が掲載されている。

本編出書以来、承海内外同志提携推广，无任銘感，惟本編毎月出書，同人綿力，向无存款，全仗收回書价，以資接济，尚望同志及各代派处早日将款收齐，見付俾得源源不絕，是為至禱。⁴⁷

〔本誌の出版以来、国内外の同志が提携して販路を拡大しており、感謝の念に堪えない。ただ本誌を毎月出版できるのは同人が微力を尽くしているためで、運営のための貯金は殆どなく、雑誌の販売代金の回収に頼って発行を支えている。雑誌の発行を継続するために、同志と各代理販売所が販売代金を速やかに揃え、支払いが滞ることのないことを切に願う。〕

以上の記述から、販売代金の回収の遅延が雑誌の発行に対して深刻な影響を及ぼしていたことが窺える。この問題は当時の新聞雑誌の販売方法と深く関わっていた。

⁴⁴ 「本館告白」『清議報』第1冊、1898年12月23日。

⁴⁵ 『清議報』は1冊で65頁程度、1ヶ月分は3冊で合計200頁、4角であり、『訳書彙編』の定価とほぼ同じである。

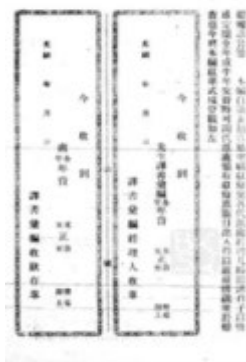
⁴⁶ 「謹告閱報諸公」『訳書彙編』第5期、1901年7月14日。

⁴⁷ 「本編告白」『訳書彙編』第4期、1901年5月27日。

包天笑は『訳書彙編』の蘇州の代理販売所である東来書荘の経営者の一人として、「雑誌はいずれも委託販売品であり、売れた後に販売代金を雑誌側に支払う。売れ残った場合でも原価の 8 割で雑誌側に返品できるため、我々が巨額の資本を持たなくても問題はない」⁴⁸と回想している。つまり、雑誌側はまず各代理販売所に契約部数を発送し、各代理販売所がこれを販売した。代理販売所は売った後に販売代金を雑誌側に支払う一方で、売れなかった場合のリスクは全て雑誌側が負担する仕組みであった。

この「本編告白」によって資金問題がすぐに解決したわけではない。2 ヶ月後、『訳書彙編』第 5 期において次のような措置が取られた。まず、より読者の注目を引くために、第 4 期の「本編告白」が第 5 期の裏表紙に掲載された。また、一頁全体に「謹告閱報諸公」を掲載し、「毎月の販売部数はすでに一千部を超えたが、販売代金の回収はその十分の一、十分の二にも及んでいない。寄付金も受けず、全て資金を工面して立て替えている」⁴⁹と、資金的に苦しい状況であることを訴えている。さらに、「販売略則」に「本誌は半年の定期購読が必要である。一期分だけを販売することはしない」⁵⁰という一条が追加され、『訳書彙編』は 1901 年 7 月以降、一期分だけを購入することができなくなった。同時に、新たな代金計算の規則に基づいて領収書（図 5-4）も運用され始めた。

図 5-4 雑誌販売の領収書



出典：『訳書彙編』第 5 期、1901 年 7 月 14 日。（全国報刊索引より）

⁴⁸ 包天笑『鉤影樓回憶錄』香港大華出版社、1971 年、163 頁。（雑誌都是寄售性質，售出還錢，銷不完還可以退還，以八折帛帳，因此我們可以無需要多少資本。）

⁴⁹ 「謹告閱報諸公」『訳書彙編』第 5 期、1901 年 7 月 14 日。（現計毎月銷數已在一千分以外、而收回報費者、未及十之一二、亦未收其他捐項、悉係籌墊。）

⁵⁰ 「販売略則」『訳書彙編』第 5 期、1901 年 7 月 14 日。

内容：関報諸公鑑 本編自第五期為始、増刷収條、交各代派処經理。凡賜閱諸君子、以後或定閱全年或半年、交費時可問代派処領取收條。庶賬目出入得以羅羅清疎、便於稽查也。今將本編收單式樣登載如左。

郵送料の規則も新しく定められた。当初『訳書彙編』の定価には郵送料が含まれていたが、清国国内への郵送には想像以上の料金がかかるようになり、やむをえず郵送料を別に徴収することになった⁵¹。

以上のように、『訳書彙編』第5期は販売の転換点として、雑誌側は多くの新たな措置を打ち出し、資金問題を解決することに努めた。だが結果から見れば、その努力は良い結果につながらなかった。第9期の「本社告白」の記事からわかるように、第1期から第8期まで、各代理販売所のうち「王氏育才書塾、中外日報館、杭州訳林、養正書塾、蘇州中西小学堂、湯宅馮先生、及び嘉興無錫等以外」、販売料を支払っていなかった。そのため、雑誌側は各代理販売所からの送金を受け取ってから第9期と第10期を郵送することに決めた⁵²。だが、何度督促しても六つの代理販売所しか（第9期には27ヶ所の代理販売所の名前が記されている）期限内に販売代金を支払わなかった。雑誌の発行が依然として苦境に陥っていたことは間違いないだろう。

1902年4月の『訳書彙編』第2年第1期では誌面構成の改良に伴い、1冊で洋2角6分、半年6冊で洋1元3角、1年12冊で洋2元6角と定価を若干引き上げた。また、広告料が明確に定められた⁵³。その後、新民叢報館、開明書店、泰東同文局などの新聞雑誌社と出版社のほか、清淨軒旅館、増見屋、東京並木活版所、科学儀器專售公司、原鉄出張店など様々な業種の広告が掲載された。それだけではなく、同誌では『浙江潮』、『湖北学生界』、『遊学訳編』、『直説』などの留学生雑誌の広告も見られる⁵⁴。しかし、これらの広告料は公開されなかったため、雑誌側に利益がもたらされたかどうかは判然と

⁵¹ 「本社告白」『訳書彙編』第5期、1901年7月14日。

⁵² 「本社告白」『訳書彙編』第9期、1901年12月15日。

⁵³ 「本編価目表」「広告価目表」『訳書彙編』第2年第1期、1902年4月3日。広告料は1頁で7元、半頁で4元、1行で2角である。次の第2年第2期から若干安くなり、1頁で5元、半頁で3元になるが、1行は2角のままである。

⁵⁴ 「浙江潮広告」「湖北学生界広告」「遊学訳編」『訳書彙編』第2年第11期、1903年2月16日。「湖北学生界広告」「直説」『訳書彙編』第2年第12期、1903年3月13日。

しない⁵⁵。ただし、興味深いことに、この第2年第1期以降、代理販売所への督促状が出されることはなかった⁵⁶。

清末、新聞雑誌の資金問題をめぐって編集者や経営者が頭を悩ます例は少なくない。たとえば、『時務報』は膨大な読者を擁していたが、販売料と購読料の延納が汪康年の予想を超えるようになった⁵⁷。『訳書彙編』は様々な方面で後続の留学生雑誌の編集者から参照されたが、『遊学訳編』、『湖北学生界』、『浙江潮』などの代表的な留学生雑誌はいずれも『訳書彙編』よりも長続きしなかった。これらの雑誌はそれぞれの問題（編集人員の変化、留学生運動、政府の圧力）を抱えていたものの、資金の確保は各留学生雑誌にとって避けられない共通の課題だった。

二、販売状況

『訳書彙編』は主に直販や代理販売で雑誌の販売し、販売網を構築した⁵⁸。

一つ目は、東京の本部から購読する機関や個人に直接送付する販売形態がある。たとえば、清国の地方政府からの注文も確認できる。1902年4月の『訳書彙編』第2年第1期に、両江総督劉坤一が部下に『訳書彙編』の購入を命じた文章が掲載された。すなわち、光緒二十七年十二月初五日（1902年1月14日）、江蘇候補道陶森甲と総理両江營務処杜鈞が劉坤一の命令を受け、「民智を広く開くために、『訳書彙編』の購読を各衙門に詳しく伝達した。さらに江寧と江蘇布政使司に雑誌を購読するよう命令した」⁵⁹。ただし、この記録は『訳書彙編』の購入部数については明記していない。

⁵⁵ 広告料の収入について、雑誌側の帳簿が残っていないため、各期の掲載広告を数えて計算するしかない。なお、訳書彙編社と広告主との関係についても考えなければならない。たとえば、教科書訳輯社、清国留学生会館は訳書彙編社と密接な関係を有し、広告主と媒体が実際に同じ団体であることで、その広告料を支払う必要はないと思われる。また、後述のように、開明書店は同誌の清国総代理販売所と総発行所として、同誌に広告を掲載し、広告料をどのように支払っていたのか不明である。以上の状況を考えながら、第2年第1期から第12期の掲載広告を合わせて計算してみると、雑誌側はおおよそ269元8角の広告料を受け取ったと推測している。雑誌発行の資金問題をある程度緩和させただろう。

⁵⁶ 1903年11月の『政法學報』の癸卯年第4期に至っては、販売料の延納がまだ問題になり、訳書彙編社は「本社緊要広告」という販売料の督促状を再び出している。

⁵⁷ 前掲廖梅『汪康年——民権論到文化保守主義』、58-66頁。

⁵⁸ 清末における新聞雑誌の発行と販売については、『時務報』の影響を考慮せずに論じることではできない。『訳書彙編』は日本で発行された留学生雑誌であるが、『時務報』の販売法と販売網を参考にしたことが考えられる。廖梅『汪康年——民権論到文化保守主義』は汪康年の人生を考察しながら、『時務報』についての人員構成、財務、発行、影響などの方面から全面的に分析した。また李仁淵『晚清的新式傳播媒体与知識分子——以報刊出版為中心的討論』（稻郷出版社、2005年）は新聞雑誌の傳播と知識の受容について論じ、留学生雑誌の影響を高く評価している。

⁵⁹ 「総理両江營務処軍務処存『訳書彙編』第2年第1期、1902年4月3日。（詳請飭属購閱、以期広開民智等情候、札飭寧蘇兩藩司、轉飭所署一体購閱可也。）

『時務報』が当時の湖広総督張之洞、兩江総督劉坤一、湖南巡撫陳宝箴、貴州学政嚴修などの開明派官僚を含む 17 ヶ所の地方政府から注文を受けていたことと比べると⁶⁰、劉坤一の例しか確認できない『訳書彙編』は、地方政府を主な販売対象としていたとは言い難い。ただし、兩江総督の注文は、『訳書彙編』が地方の重臣の認可を得たほか、雑誌にお墨付きを与えて、販路を広げた役割も果たしている。

もう一つは、清国国内と海外の各代理販売所が代理販売する形態である。1900 年 12 月、『訳書彙編』創刊号出版時の代理販売所は、上海大東門内の王氏育才書塾、北市拋球場の広学会、蘇州玄妙觀前の文経（瑞）樓書坊⁶¹、香港九如坊南の張存德堂、横浜山下町の清議報館の 5 ヶ所のみであり⁶²、全て開港場にあった。その後、第 2 期から、代理販売所の数が増えるとともに地域も拡大し、第 2 年第 12 期までに 44 ヶ所に達した⁶³。

表 5-4 は『訳書彙編』全 21 期（第 1 期—第 2 年第 12 期）の代理販売所をまとめたものである⁶⁴。

表 5-4 『訳書彙編』代理販売所一覧

地域	代理販売所
江蘇	上海 王氏育才書塾、広学会、中西書室、中外日報館、繩正学堂、開明書店、広智書局、普通学書室、掃葉山房、理文軒、千頃堂、会文堂、蘇報館、選報館、金粟齋、商務印書館、新中国圖書社
	蘇州 文経（瑞）樓書坊、東来書莊、開智書室、中西小学堂、湯宅、知新書室
	無錫 三等学堂
	南京 沈叔美先生、明達書莊
	鎮江 徐喟雲
	揚州 許公館、王毓仁先生、阜成衣莊、華瀛公社
	常州 修学堂

⁶⁰ 前掲廖梅『汪康年——民権論到文化保守主義』、67-69 頁。

⁶¹ 包天笑らが編集した『励学訳編』第 4—12 期の本城（蘇州）代理販売所に「文瑞樓書坊」がある。前掲包天笑『劄影樓回憶錄』、162 頁では、蘇州の書店が言及された時、「觀前街文瑞樓」と述べられている。また 1901 年 4 月、『訳林』第 2 期の蘇州代理販売所は「觀前文瑞樓書坊」と記されており、『訳書彙編』の蘇州代理販売所は「文経樓書坊」ではなく、「文瑞樓書坊」であろう。

⁶² 「本編代派処」『訳書彙編』第 1 期、1900 年 12 月 6 日。

⁶³ 「本編代派所」『訳書彙編』第 2 年第 12 期、1903 年 3 月 13 日。

⁶⁴ 前掲苗禪琦「『西政』徂東——『訳書彙編』と晚清政治学伝播的「日本渠道」、32-35 頁は『訳書彙編』の代理販売所（「附表『訳書彙編』各期代派所信息表」、90-112 頁）を整理し、数の増加と地域の拡大を気づいたが、代理販売所の特徴に対する分析がまだ不十分である。

第五章 『訳書彙編』の発行一創刊と財政、販売を中心に

浙江	杭州	訳林、求是書院、養正書塾、浙江大学堂、史学斎、中学堂、杭州総派報処、瓜錫侯先生、(杭州) 白話報館、安定学堂、東文学社
	寧波	洪鞠蒙先生
	湖州	開智書室、恒有東典
	嘉興	秀水県学堂
江西	南昌	賦梅山房主人、広智書室/荘、南昌派報処、嘉惠書荘
直隸	天津	日日新聞社、信遠洋行
	北京	日日新聞分社、溥宅、有正書荘、有正書局
	保定	籍亮儔先生、直隸官書局
安徽	蕪湖	晋康煤炭公司
	安慶	前和州正堂姚公館、藏書樓
湖北	武昌	広陵蔣寓、文明書室、李玉山先生
広東	汕頭	李道南先生
	広州	林裕和堂、萃盧閣報処、聖教書樓
広西	潯州	潯陽図書局
河南	開封	時中書荘
四川	成都	成都図書局
山西	太原	機器印書局
香港		張存德堂、聚文閣、文裕堂、和昌隆、中国報館
台湾	台北	良德行
シンガポール		天南新報館
日本	横浜	清議報館、新民叢報社
	東京	東京堂、博愛堂、清国留学生会館
	大阪	鑑源号
	神戸	中外合衆保険公司
合計		清国国内：11 省、26 市（香港、台湾を含む）。海外：5 市。

出典：『訳書彙編』第1 期から第2 年第12 期（1900 年12 月6 日—1903 年3 月13 日）までに掲載された代理販売所に基づいて作成。

表 5-4 から、以下の点が指摘できる。

1900年12月から1903年3月にかけての2年半において、合計87ヶ所の代理販売所は相前後して存在していたが、その種類を見ると、書店・書局に限らず、図書館、閱報処、出版社、新聞社、雑誌社、学堂、個人など様々な機関や個人が確認できる。

まず、各代理販売所の地域分布からその特徴を見る。清国国内において、江蘇省には最多の32ヶ所の代理販売所が設けられた。省内の上海、蘇州、南京を含む最多の7都市で販売され、そのうち上海に最多の17ヶ所の代理販売所が置かれていた。ここから、開港場の上海が近現代中国の出版業の中心地として、新聞雑誌の販売において重要な地位を占めていたことが窺える⁶⁵。

代理販売所の数は、浙江省15ヶ所、直隸省8ヶ所、江西省4ヶ所、広東省4ヶ所、安徽省3ヶ所であるが、この地理的分布から幾つの特徴が読み取れる。つまり、南京、鎮江、蘇州、上海などの長江下流の都市、または広州、杭州、天津などの開港場に代理販売所が集中している。これに対して、内陸の河南、四川、山西などの地方は代理販売所が少ないだけでなく、1903年2月の『訳書彙編』第2年第11期から該地域に代理販売所が設置されたように、設置時期も遅れている。そして、もう一つ注目したいことは、積極的に留学生を派遣した両湖地方では、意外に代理販売所が少ないことである。湖北省内の代理販売所は3ヶ所のみで、湖南省に至っては1ヶ所も置かれなかった⁶⁶。

また、公式的な代理販売所が設置されていないものの、『訳書彙編』を販売する地域も確認できる。『張桐日記』1901年10月28日条によると、学計館内、『申滬日報』、『清議報』のほか、また『匯報』、『南洋七日報』、『訳書彙編』、『課林』等の数種を購入することができる⁶⁷とあるように、浙江温州の瑞安学計館は、『訳書彙編』が代理販売される。

以上、清国国内の代理販売所の地域分布について考察したが、『訳書彙編』の販売網を図5-5のように示すことができる。つまり、上海を中心に販売網を構築し、江蘇省南部と浙江省北部の都市を主な販売地としつつ、北京、天津の政治の中心地や、西の四川省成都、南の広西省潯州（現在の桂平市）、広東省広州、汕頭にまで代理販売所が放射状に配置されている。

⁶⁵ 鄒振環「晚清書業空間転移与中国近代的『出版革命』」『河北学刊』第40卷第3期、2020年5月。

⁶⁶ その理由について、『訳書彙編』の編集者に両湖地方出身の留学生が少なかったことや、両湖地方の閉鎖的な社会と人間関係によって販路開拓が困難であったことなどが考えられる。1902年11月、1903年1月、湖南省と湖北省の留学生はそれぞれ、『遊学訳編』と『湖北学生界』を相次いで創刊し、その地方性をアピールしている。

⁶⁷ 張桐撰、俞雄選編『張桐日記』上海社会科学院出版社、2003年。『課林』は『訳林』の誤りだと思われる。

図 5-5 清国国内の代理販売所の図



次に、海外の代理販売所の地域分布については、最多の 7 ヶ所が日本に設けられたほか、香港、台湾、シンガポールにも代理販売所が設置されている。その代理販売所の名称を見ると、華僑が最も重要な役割を果たしたと考えられる⁶⁸。たとえば、天南新報館は『訳書彙編』第 2 期（1901 年 1 月）から第 2 年第 1 期（1902 年 4 月）まで、シンガポールでの販売を代理し、1901 年 6 月 1 日の『天南新報』の「新書出售」の項目で『訳書彙編』の販売を宣伝し始めた⁶⁹。『天南新報』は、1898 年 5 月に有名な南洋華僑である邱菽園をはじめとする多くのシンガポール華僑によって設立された天南新報館が発行した日刊新聞である⁷⁰。

さらに注目すべきことは、シンガポールの天南新報館、香港の聚文閣、文裕堂、和昌隆などの『訳書彙編』の代理販売所が『清議報』の代理販売所（上海の広智書局、横浜の清議報館と新民叢報館を含め）でもあったことである⁷¹。当時、『訳書彙編』が『清議

⁶⁸ 松本武彦「清末留日学生刊行諸雑誌の流通ルートにみえる在日華僑について」『研究紀要（大分県立芸術文化短期大学）』第 25 卷、1987 年 12 月。

⁶⁹ 『天南新報』1901 年 6 月 1 日。

⁷⁰ 李海濤『「天南新報」研究』東北師範大学博士論文、2017 年 5 月。

⁷¹ 「本館各地代派処」『清議報』第 17 冊、1899 年 6 月 8 日。また、内田慶市「香港「文裕堂」およびその周辺」（『文化交渉学と言語接触——中国言語学における周縁からのアプローチ』関西大学出版部、2010 年、179-188 頁）は、香港文裕堂について、王韜『循環日報』を発行する「中華印務總局」と密接な関係を持つ印刷出版組織として論じている。

報』と深い関わりを持ち、広告を通じた宣伝と代理販売所を活用して影響をひろげていったことが考えられる。

代理販売所は特定の地域ないし都市に集中する傾向が強いだけでなく、互いに密接なつながりを有していた。たとえば、『時務報』の編集者と経営者は、同誌の創刊以来、販路を拡大するために、同郷、同門、親戚、友人など私的な関係を積極的に活用し、新聞雑誌の宣伝と販売を推し進めていた⁷²。

『訳書彙編』は清国に二つの総代理販売所を置いたことがあるが、いずれも訳書彙編社社員の王植善と深い関係を持っていた。王植善が主宰する上海育才書塾⁷³は第1期と第2期に代理販売所として掲載されたあと、第3期から第8期まで代理業務を中止したが、第9期から清国の総代理販売所となり⁷⁴、第2年第1期で誌面構成が変わると同時に清国の総発行所になった⁷⁵。さらに、新たに設立された上海開明書店は育才書塾の業務を継承し、『訳書彙編』第2年第9期から同誌の清国における総代理販売所と総発行所になった⁷⁶。これについて、章宗祥の「王植善は開明書店を創設し、『訳書彙編』及び他の訳著の代理販売を実施した。印刷は東京で行っていた」⁷⁷という回想が残っている。なお、この開明書店は1902年に夏清貽、王維泰、王植善らが設立した書店であり⁷⁸、1926年に章錫琛兄弟が創設した「開明書店」とは無関係である⁷⁹。

また、包天笑らが楊廷棟、楊蔭杭、周祖培ら雑誌編集者と知り合ったことをきっかけに、彼らが開業した東來書荘は、『訳書彙編』第2期から文経樓書坊に代わって同誌の蘇州代理販売所としての業務を引き受けることになった⁸⁰。東來書荘は留学生雑誌を販売し

⁷² 前掲李仁淵『晚清的新式傳播媒体と知識分子——以報刊出版為中心的討論』、180-188頁。また、章清『清季民国時期的「思想界」』（社会科学文献出版社、2014年）は「報章銷售網絡的建立」において、雑誌の販売網の構築に対して『時務報』が中心的な役割を果たしたことを論じている。

⁷³ 上海王氏育才書塾はまた「育材書塾」、「育材学堂」とも呼ばれ、1896年に王維泰によって設立された。その後、息子の王植善が長期にわたり主宰し、1905年に南洋中学と改名された。その設立、沿革、学堂章程、カリキュラムなどについては、「上海育才書塾（後易名南洋中学）」（朱有獻主編『中国近代学制史料』第1輯下冊、華東師範大学出版社、1986年、598-621頁）に詳しく整理されている。

⁷⁴ 「訳書彙編社告白」『訳書彙編』第9期、1901年12月15日。

⁷⁵ 『訳書彙編』第2年第1期、1902年4月3日。

⁷⁶ 『訳書彙編』第2年第9期、1902年12月10日。また1902年9月、『訳書彙編』第2年第7期に「創設開明書店啓」が掲載された。

⁷⁷ 章宗祥「任闕齋主人自述」中国人民政治協商會議全國委員會文史資料委員會編『文史資料存稿選編・教育』中国文史出版社、2002年、930頁。（培蔴創設開明書店、『訳書彙編』及其他訳著皆由開明經售。印刷則在東京。）

⁷⁸ 1907年、席豫福は集成図書局、点石齋石印局、申昌書局、開明書店を合併し、集成図書公司を設立している。「1843—1949年上海主要出版機構状況表」上海通志編纂委員會編『上海通志』第41卷第2章「出版」、上海人民出版社、2005年、5903、5911-5912頁。

⁷⁹ 「開明書店与文化生活出版社」王余光・吳永貴著『中国出版通史・民国卷』中国書籍出版社、2008年、107-111頁。邱雪松「開明書店、「開明人」と「開明風」——中国現代知識分子与出版の一種關係」華東師範大学博士論文、2010年4月。

⁸⁰ 前掲包天笑『鉅影樓回憶錄』、156-165頁。

ながら『励学彙編』という雑誌も自ら編集・発行し、『訳書彙編』第4期に『励学彙編』の広告を載せている⁸¹。東来書荘と訳書彙編発行所はお互いに相手の代理販売所となり、協力して販路の拡大に努めた⁸²。

このほか、東京堂、博愛堂の書物流通に携わる日本の書店や、掃葉山房、商務印書館、有正書局などの中国の新旧書店、中外日報館、日日新聞社、蘇報館、選報館などの新聞雑誌社、保定蓮池書院、無錫三等学堂、浙江大学堂（前身は求是書院）などの新旧学堂や、天南新報館、鎔源号⁸³などの華僑関係、あるいは編集者の私的な関係によって設置された多くの『訳書彙編』の代理販売所によって海外と清国国内が結ばれ、販売網と流通網が構築された。

このように『訳書彙編』は幅広い販売網を持っていた一方、雑誌の販売は、実際には各地の読者の知識や興味関心、または入手できる雑誌の種類などの要素によって大きな格差があった。1902年10月、『金陵売書記』では以下のような見聞が述べられている。

報章一門，内地大可行銷。此次所銷，以『訳書彙編』為最多。然統全市計之，則又不逮『新民叢報』。⁸⁴

〔新聞雑誌は、清国の内陸で大いに売り捌くことができる。今回は『訳書彙編』の販売部数が最も多かったが、全市の売上をまとめると『新民叢報』には及ばない。〕

公奴⁸⁵という署名の知識人は、南京で行われる科挙試験の際に書籍を売りに行き、その販売中に得た情報を上述のように記した。この記述から、当時の南京において『訳書彙編』が『新民叢報』に次ぐ売れ行きであったことがわかる⁸⁶。

なお、1903年5月30日の『蘇報』に掲載された「來函述江西報界發達之現状」では、江西省における新聞雑誌の販売状況が紹介されている。そこには、『新民叢報』250部、

⁸¹ 「代售各書告白」『訳書彙編』第4期、1901年5月27日。実は、1901年4月の『訳書彙編』第3期には、「東来書荘」の広告が既に掲載された。

⁸² このような関係は『訳林』と『励学彙編』との間にも存在している。詳細については、次章を参照。

⁸³ 大阪華商である孫淦の鎔源号は『訳書彙編』第2期から代理販売を実施している。「本編代派処」『訳書彙編』第2期、1901年1月28日。なお、孫淦は鎔源号を経営しながら浙江省留学生監督を務めた経験があったため、『訳書彙編』の編集者と往来があった。彼は留学生の活動に支援を惜しまなかった人物である。呂順長「清末の留日学生監督——浙江留日学生監督孫淦の事跡を中心に」『浙江大学日本文化研究所編集『江戸・明治期の日中文化交流』農山漁村文化協会、2000年、128-145頁。

⁸⁴ 公奴『金陵売書記』開明書店、1902年（張静廬輯注『中国現代出版史料・甲編』中華書局、1954年初版、391頁）。

⁸⁵ 陳乃乾は公奴が開明書店の出資者の一人であった夏清貽と判断している。前掲張静廬輯注『中国現代出版史料・甲編』、402頁。

⁸⁶ ただし、当時南京の代理販売を実施していた沈叔美の販売状況については資料不足のため不明である。

『訳書彙編』120部、『浙江潮』80部、『遊学訳編』50部、『新小説』40部、『湖北学生界』30部とあり、全省の販売状況が記されている⁸⁷。ただし、『訳書彙編』の江西省の代理販売所が全て南昌にあったことを考えれば、この数字が南昌市の販売状況をある程度反映していると考えてもよいだろう。

また、1903年9月30日、『国民日日報』が実施した浙江省揚州市の新聞雑誌に対する調査によると、揚州市において、『政法学報』43部、『新民叢報』30部、『浙江潮』30部、『湖北学生界』20部、『江蘇』10数部、『遊学訳編』5部が販売された⁸⁸。この『政法学報』は『訳書彙編』から改名した雑誌であり、当時の揚州市では同誌の販売部数が『新民叢報』をも超えていたことになる。『政法学報』の販売部数がある日突然一位になることは考えにくいので、この数字が改名前の『訳書彙編』の販売規模を引き継いでいることは間違いないだろう。

興味深いことに、同年10月7日の『国民日日報』に載せられた「滙県派報処最近之調査」によると、山東省滙県（現在の濰坊市）において、『新民叢報』8部、『浙江潮』4部、『直説』3部、『政法学報』1部、『湖北学生界』1部、『江蘇』1部という販売状況だった⁸⁹。滙県に代理販売所は置かれていなかったが、『政法学報』が販売される地域ではほかの留学生雑誌も買うことができる。言い換えれば、滙県のような小さな県においても『政法学報』などの留学生雑誌を入手できる状況になっていたことになる。まさに『訳書彙編』の創刊趣旨が実現していたと言える。

清末に、『訳書彙編』は海外の留学生雑誌の先駆として販路を拡大し、代理販売所の増設によって販売網を構築することで新しい道を切り開いた。その後、『遊学訳編』、『湖北学生界』、『浙江潮』、『江蘇』などの留学生雑誌は『訳書彙編』の販売方法を学びながら、各自の特色を活かしていった⁹⁰。しかしながら、これらの留学生雑誌は、代理販売所数においても、販売網の広さにおいても『訳書彙編』を追い抜くことはなかった。

⁸⁷ 「來函述江西報界發達之現状」『蘇報』1903年5月30日。

⁸⁸ 「揚州報界之調査」『国民日日報』1903年9月30日。

⁸⁹ 「滙県派報処最近之調査」『国民日日報』1903年10月7日。

⁹⁰ たとえば、上海の開明書店と蘇州の東来書荘は『浙江潮』と『江蘇』の代理販売を実施した。杭州白話報館は浙江省における『浙江潮』の総代理販売所でありながら『湖北学生界』の代理販売も実施した。このほか、北京琉璃廠の有正書局は『浙江潮』と『湖北学生界』の代理販売所だった。「本誌代派所」『浙江潮』第1期、1903年2月17日。「分售処」『江蘇』第1期、1903年4月27日。「各代派処」『湖北学生界』第3期、1903年3月29日。

むすび

最後に、『訳書彙編』の創刊趣旨、誌面構成の変化、資金問題、販売網の構築についてもう一度確認する。

一、『訳書彙編』は、もともと1900年9月に創刊する予定だったが、様々な理由によって同年12月ようやく創刊した。創刊当初の『訳書彙編』は「民智を開く」ことを掲げ、政治学を中心とした新知識の翻訳を重視する留学生雑誌であった。同誌は時代の流れに伴う留学生界の変化に対応するため、二度にわたって誌面構成を変えたとともに、編集方針も次第に翻訳から論説に変化していった。そして、欧米と日本由来の新知識、思想、理論を受容しただけではなく、中国の現実と結びつけながら近代化を目指した。

二、1901年5月、『訳書彙編』第4期の発行後、財政問題が表面化した。購読者と各代理販売所からの代金延納と膨大な郵便料が雑誌の存続を脅かした。そのため雑誌側は罰則を強化し、支払いの催促と代金の徴収に注力する一方、雑誌の定価を引き上げるとともに郵送料を定価に含めず別途請求する策を打ち出した。また地方政府の認可を求めて雑誌の宣伝にも力を入れた。以上のような対策によって、『訳書彙編』は廃刊の危機を乗り越えた。

三、『訳書彙編』は2年半の刊行期間に海外と中国国内に販売網を構築した。国内では上海が雑誌の発行と販売の拠点となり、江蘇省南部と浙江省北部を含めた長江河口の三角州の地域を主な販売地としたほか、販売網は北の直隸省、西の四川省、南の広西省や広東省にまで拡大した。一方、海外では東京の本部が直接日本の横浜、神戸、大阪、植民地の台北、香港、南洋のシンガポールにある代理販売所を繋いだ。

次章では、『訳書彙編』と同時期に創刊された『開智録』、『訳林』、『励学訳編』などの雑誌について、それぞれの創刊と趣旨を検討し、さらに各雑誌の関連性を詳細に解明することを試みる。

第六章 20 世紀初中国人留学生界における雑誌の発行と「開民智」の風潮

はじめに

日清戦争後、中国の政治制度の変更を求める変法維新思想の拡散に伴い、「講西学」（西学を講じる）、「開民智」（民智を開く）、「興学堂」（学堂を興す）などの主張が次第に流行語と化し、中国の社会では制度や思想面の変化を求める雰囲気はますます強くなった。

知識人の間に、いかに「民智」の開通を実現するのかという問題をめぐって多くの意見が提出されたのみならず、学堂の開設、新聞の発行、洋書の翻訳などの事業を通して、実践の中で現状を変える解決策を探っている人も増えることになった。そこで、『時務報』をはじめとして、『湘報』、『蒙学报』、『農学报』、『経世報』などの新聞雑誌が相次いで刊行され、新しい思想と理論を宣伝し、国民を啓蒙する責任を闡明するに至った。

1900 年の義和団事件は中国内外の情勢を一変させ、一種の「愛国の精神」が若者の間に萌芽した¹。中国国内の各開港場と海外、特に日本において、いくつかの重要な雑誌が創刊されたが、そのうち横浜の『開智録』、東京の『訳書彙編』、『国民報』、杭州の『訳林』、蘇州の『励学訳編』が代表的なものとして挙げられている。伝統的知識人が主宰した『時務報』のような雑誌と異なり、日本を媒介とする新しい知識の移植を試みたこの波は、中国人留学生と各地の新式の学堂、特に東文学堂で日本語や英語の教育を受けた学生によるものであることは極めて重要である。そして、これらの雑誌は、清末中国の言論と思想界に新しい風を吹き込んだ。

『開智録』の先行研究については、金沖及は、『清議報全編』の中に収録された『開智録』中の二つの論説に基づいて、この雑誌の特徴について排満革命を主張するものと推測した²。しかし、この検討は『開智録』の原本によるものではないという限界が

¹ 清国留学生会館幹事『清国留学生会館第一次報告』東京並木活版所、1902 年 10 月、「留学生会館之起源」、2 頁。

² 金沖及「開智録」丁守和主編『辛亥革命時期期刊紹介』第 1 集、人民出版社、1982 年。沈渭濱『孫中山与辛亥革命』（上海人民出版社、2016 年、172-174 頁）は、『開智録』の概況に触れながら、金沖及と

ある。また、陳匡時と寧樹藩は、『開智録』の所蔵が発見された経緯を述べながら、同誌の発刊、廃刊、そして体裁などを紹介した上、その内容に含まれる革命思想に注目し、康有为と梁啓超の改良主義と清議報館との関係について触れている³。

『訳林』については、劉仁達は『訳林』の発行経緯と内容構成を概説し⁴、章小麗は杭州日文学堂と林長民に関する一連の論稿を発表し、『訳林』の編集において林長民が果たした役割を検討し、彼の日本語能力を高く評価している⁵。また、劉建雲は杭州東文学堂の設立と発展、衰退を考察しながら、『訳林』の創刊にも触れた⁶。

以上の『開智録』と『訳林』の研究と比べると、蘇州励学訳社と『励学訳編』に関連する先行研究は非常に少ない。たとえば、清末の翻訳小説の研究において、または鲁迅の研究において、『励学訳編』に掲載された楊学斌・包天笑が共訳した『迦因小伝』と林紓が翻訳した『迦茵小伝』が比較される時に、『励学訳編』の一部が注目されるが、蘇州励学訳社、『励学訳編』の他の内容、そして雑誌の特徴などについてはほとんど触れられていない⁷。

このような先行研究の蓄積において近年発表された最も注目すべき研究は、胡夢穎「20 世紀初杭州『訳林』雑誌の伝播網絡及編訳群体」である。胡は、この論文の中で、『訳林』の編集に関わった人物や団体、そして雑誌の販売や流通などにも考察を加え、『訳林』と『訳書彙編』、『励学訳編』の相互関係に着目し、訳林社を中心とする知識人と中国人留学生の交流について注目している⁸。しかし、胡の論稿は、励志会と訳書彙編社などの編集と翻訳などにおいて重要な役割を果たした中国人留学生とその団体について十分な分析を加えることができず、『訳林』と訳林社の影響に対する評価が高すぎると思われる。

似たような説を踏襲している。

³ 陳匡時・寧樹藩「評『開智録』」『復旦學報』1984 年第 3 期。

⁴ 劉仁達「訳林」前掲丁守和主編『辛亥革命時期期刊介紹』第 1 集。

⁵ 章小麗「杭州日文学堂学生之研究——以林長民与林文潜為例」(『浙江外国語学院學報』2013 年第 1 期)、「林長民的訳作及其翻訳特点」(『浙江樹人大学學報』第 14 卷第 4 期、2014 年 7 月)。

⁶ 劉建雲『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』学術出版社、2005 年。

⁷ 阿英「初期的翻訳雑誌」「翻訳史話」「小説四談」上海古籍出版社、1981 年。「初期的翻訳雑誌」において、『訳書公会報』、『訳書彙編』、『訳林』、『励学訳編』、『遊学訳編』の 5 種の翻訳雑誌が紹介される。また、鄒振環「接受環境對翻譯原本選択的影響——林訳哈葛德小説的一個分析」(『復旦學報』1991 年第 3 期)、毛策「包天笑文学活動側影——編輯生涯述略」(『清末小説』第 15 号、1992 年 12 月)、樽本照雄「『迦因小伝』に関する鲁迅の誤解」上/下(清末小説研究会『清末小説から』第 78、79 号、2005 年 7、10 月)、沈慶会「包天笑及其小説研究」(華東師範大学博士論文、2006 年)などの研究が挙げられる。

⁸ 胡夢穎「20 世紀初杭州『訳林』雑誌の伝播網絡及編訳群体」『浙江學刊』2016 年第 1 期。

本章では、『訳書彙編』とほぼ同時期に発刊される『開智録』、『訳林』、『励学訳編』の原本に依拠し、それぞれの雑誌の特徴を分析した上で、雑誌の創刊、趣旨内容、販売、流通などの方面から各雑誌の相互関係について検討を試みる。

第一節 横浜の開智会と『開智録』

1900 年末、唐才常を中心とする自立軍蜂起の失敗に大いに刺激を受け、鄭貫一をはじめとする横浜高等大同学校の学生たちは、横浜で開智会を結成することになった。この団体の成立については、「開智会序」（著者は蔡鏐）に以下のように紹介されている。

故吾国之淪亡。淪亡于民之智不開。智既開而与夢夢者等。是仍謂之未開也。近世人之言曰。国民有一分之智。即能握一分之權。智未開而雖有權。亦不為我所握矣。〔中略〕然智力孱弱。則人得而奪之。是以爭權之道。必在充足吾国民智力也。智力既充。則雖一時瓜分。不能絕吾国民之華盛頓也。片時受兩層奴隸之辱。不能使吾民之自由鐘息聲也。一言以蔽之曰。中国之亡。非随今日政府以亡。乃国民之智未拓。則一亡之後。無建新政府之日耳。〔中略〕〔鄭貫一〕近於横浜創一開智会。属余叙之。⁹

〔ゆえに、わが国の滅亡は、民智の未開によるのである。民智が開かれたが、まだ蒙々としている者は、まだ未開と言われる。近世〔現在〕の人はこういう。国民に一分の智があれば、即ち一分の権を持つことができる。民智が未開でありながら、権があっても、その権は我々のものにはならない。〔中略〕しかし、智力が孱弱ならば、その権を他の人に奪われてしまう。ゆえに、権利を争う道において、わが国民の智力を上げさせなければならない。智力が高くなれば、国家が一時期において分割されたとしても、わが国民からワシントンのような人物の誕生することが絶えることはない。一時期、奴隸として二重の屈辱〔欧米列強と満洲族が主宰する清国政府〕を被ったとしても、わが国民の自由の鐘の音を止めることはできない。一言でいえば、中国の滅亡は、今日の政府の滅亡ではなく、すなわち国民の民智の未開に由来するものである。一旦滅びた後は、新しい政府を成立する日は来ない。〔中略〕近頃、鄭貫一は横浜に開智会を結成し、余が頼まれてその成立の経緯を書き記した。〕

⁹ 蔡鏐「開智会序」『開智録』改良第 1 期、1900 年 12 月 22 日。奮翺生は蔡鏐の筆名。

蔡鐸は、序文の中で、義和団事件後、中国は欧米列強に分割され、植民地化する危機に直面しているという時代認識のもとで、国民の自立、そして国家の建設を如何に実現するのか、という問いに対して、「民智」を開き、国民を呼び覚ますことを主張している。蔡は、「民智」と「民権」を区別すべきであると考え、「民智」の開通は「民権」を獲得する前提であるといい、その重要性を強調しているように見える。彼によれば、「民智」が開かないと、たとえ「民権」を獲得するとしても、容易に統治者に奪われるだろう、とも述べている。

ここで蔡鐸は、「民権」の定義を解釈していないが、前後の文脈から梁啓超の「民権」論に影響されている可能性が極めて高い¹⁰。彼は、光緒帝を「聖主」と称し、「朝廷には国賊がいっぱいいる」せいで、国家が間違った方向に向いているとし、君主制を支持する立場に立っていると思われる。したがって、蔡のいう「民権」は、明らかに「天賦人権」の自然権によって自ずと与えられるものではなく、「民智」を開くことを通して、後天的に獲得される権利である。これはこの時期、梁啓超が「民権」を擁護して「民主」を批判する立場と一致している¹¹。

蔡鐸は、さらに「民智」が開かれたのちに形成される国民の思想の動向についても、「不能絶吾国民之华盛顿也」と「不能使吾民之自由鐘息声也」という表現を使い、アメリカの独立を象徴するジョージ・ワシントンと自由の鐘¹²にたとえ、「独立」と「自由」の思いが重要であることを読者に伝えようとしている。

特に注目したいのは、アメリカ初代大統領の「ジョージ・ワシントン」の人物像が借用されているということである。ジョージ・ワシントンのことについては最初に、徐継畚『瀛環志略』(1848年)の中に事実と想像が絡み合いながら、紹介された¹³。その後、ワシントン(あるいは想像されていたワシントンの人物像)は次第に「独立」と「民主」の象徴となり、中国の知識人に認識されていた。19世紀末、『時務報』創刊号(1896年8月9日)から第11冊(1896年11月15日)までに黎汝謙が翻訳した『华盛顿伝』が掲載

¹⁰ 清末の民権論について、佐藤慎一「一八九〇年代『民権』論——張之洞と何啓の『論争』を中心に」(金谷治編『中国における人間性の探究』創文社、1983年)、川尻文彦「第十二章 近代中国におけるデモクラシーの運命——『民主』と『共和』」(『清末思想研究——東西文明が交錯する思想空間』汲古書院、2022年)などを参照。

¹¹ 梁啓超「愛國論三・論民権」『清議報』第22冊、1899年7月28日。

¹² 自由の鐘(Liberty Bell)は、1751年にフィラデルフィアに位置するペンシルベニア州議事堂での使用を目的として、ペンシルベニア州議会により鑄造を委託された。アメリカの独立を象徴するシンボルの一つである。<https://www.ushistory.org/libertybell/> 2023年10月1日閲覧。

¹³ 清・徐継畚著、宋大川校註『瀛環志略』文物出版社、2007年、300-301頁。

されていた。遅くもこの時期から、ジョージ・ワシントンの人物像が新しいメディア媒体を借りて、より広い範囲に伝わるようになった¹⁴。

一方、東京高等大同学校で教材として使われた図書を見ると、「ルソー『民約論』、『法国大革命史』、モーセ『出エジプト記』、『ワシントン伝』、『英国革命史』などの諸書」¹⁵が挙げられている。おそらく蔡鏐は、東京高等大同学校でワシントンのストーリー、及び「自由の鐘」の存在を知り、すでに多くの中国知識人が知られているワシントンの人物像を借用した、と推測される。

もう一つ興味深いことに、蔡鏐の言論には、満族と漢族が対立している〔即ち満漢対立〕という思想も読み取れる。蔡は満族に制圧・束縛されることを奴隷になることであると考え、「満洲政府」の復興に反対するとともに、排満革命の性格をも有する「庚子漢口之役」（自立軍蜂起）を賛美し、犠牲者を「義士」と称賛していることから、彼自身が君主と政府、そして国家の三者を区別して論じていることである。

横浜の開智会は、この後、中国人留学生と華僑向けの講演活動を展開しながら、会誌『開智録』の発行を通して、「民智」の啓蒙と排満思想の拡大を目指したが¹⁶、以下の『開智録』の内容についてより詳細に見ていくことにしたい。

1900 年 12 月 22 日、『開智録』改良第 1 期（図 6-1）が刊行され¹⁷、その表紙には「THE WISDOM GUIDE」という英文名が添えられた。創刊者の鄭貫一¹⁸は、『清議報』の助理編集を担当していた職権を利用し、『開智録』の発行所を清議報館の館内に設置し、『清議報』とともに発売している。鄭貫一を含め、主な編集者である馮自由と馮斯樂の 3 名はともに広東省の出身で横浜高等大同学校に在籍し、日本に亡命していた梁啓超の教え子であった。

¹⁴ 中国におけるワシントンの人物像の変化と伝播について、潘光哲『華盛頓在中国——製作「国父」』（三民書局、2006 年）は詳しく考察したので参照されたい。また、森岡優紀「西洋偉人伝の始まり——日本と中国のワシントン伝」『近代伝記の形成と東アジア——清末・明治の思想交流』京都大学学術出版会、2022 年）はワシントン伝の日本語版と中国語版の翻訳について触れている。

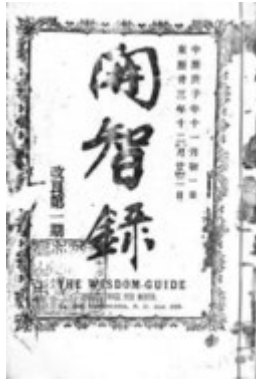
¹⁵ 馮自由「記東京大同学校及余更名自由経過」『革命逸史』第 4 集、中華書局、1981 年、97 頁。（所収教材有盧梭民約論、法国大革命史、摩西出埃及記、華盛頓伝、英国革命史諸書。）

¹⁶ 横浜の開智会に関する研究は極めて少ない。この団体の活動について、講演会と『開智録』のほか、資料不足のため、まだ不明なところが多い。

¹⁷ 『開智録』の創刊については諸説あるが、馮自由『中国革命運動二十六年組織史』（上海商務印書館、1912 年）の中、1900 年冬創刊、謄写刷りで規模が小さかったと記された。また、『開智録』改良第 1 期の「本会進支数」の中、「第 2、3 期の旧版雑誌が 40 冊売れた」とあるように、1900 年 11 月頃創刊された、と推測される。また、改良後の『開智録』は、発行頻度が月 2 回で、毎冊 1 角 5 分で販売される。

¹⁸ 鄭貫公（1880～1906）、本名は鄭道・鄭哲、字は貫一、後に貫公と改める。別号は自立、筆名は仍旧。広東香山（現在の中山）の人。清末の宣伝家、ジャーナリスト。『清議報』、『開智録』、『中国日報』、『世界公益報』、『広東日報』などの創刊や編集に携わる。1906 年、病に倒れ死去。享年 26 歳。

図 6-1 『開智録』改良第 1 期の表紙



出典：『開智録』改良第 1 期、1900 年 12 月 22 日。

『開智録』創刊の趣旨については、「開智会録縁起」に、次のように記されている。

故代表国民之智慧，以企增人類之幸福，此新聞紙之大目的歟！〔中略〕僕等久懷慨憤，故于瀛海一隅，合衆志士，興起倡論，以爭自由發言之權，及輸進新思想以鼓盈國民獨立之精神為第一主義。¹⁹

〔ゆえに、国民の知恵を代表し、人類の幸福を高めることは、新聞紙の一大目的である！〔中略〕我等は、久しく憤慨を抱き、海の一隅〔日本〕において衆志士を集め、議論を交わし、言論を自由に発表する権利を主張しつつ、新思想を輸入し、国民の独立の精神を奮起させるのを第一主義としている。〕

鄭貫一は、『開智録』の創刊の意義を、「言論の自由な発表」、「新思想の輸入」、「国民の独立」という三つの方面から説明し、雑誌の英文誌名を「THE WISDOM GUIDE」（「知恵指南」という意味）にすることによって、「民智」を開くという目標を明確的に表明している。

『開智録』の体裁は、「本会論説」、「言論自由録」、「雑文」、「訳書」、「偉人小説」、「詞林」、「時事笑談」、「粵謳解心」という八つの項目によって構成されている²⁰。表 6-1 は

¹⁹ 「開智会録縁起」『開智録』改良第 1 期、1900 年 12 月 22 日。

²⁰ 『開智録』の目次は本論文の資料編を参照。

『開智録』の中、「本会論説」、「言論自由録」、「雑文」、「訳書」、「偉人小説」の部分の記事の題名と著訳者をまとめたものである。

表 6-1 『開智録』の目次

項 目	題 名	著 訳 者 ^(注1)	掲載期数
本会論説	開智会序	奮翮生〔蔡鏐〕	1
	開智会縁起	〔署名なし〕	
	論演説之源流及其与国民之關係	馮懋龍自由氏	
	論帝國主義之發達及廿世紀世界之前途	自強	2
	論基督天主二教伝道中国之利害及其改良之法		
	真少年説	自強	3
	論閥新聞紙之益	貫庵	
	平等説	熟庵	4
	振興女学説（一名女子吐氣編）	貫公 一名自立	5
	義和団有功于中国説	貫公	6
言論自由録	勢吞地球	自由	1
	革命之劍、義和団、成敗之英雄	自強	
	憤哉廿紀、廿紀之新戲台、阻力歟抑助力歟	貫庵	2
	偉人之中国	霹靂生	
	国民不可缺之性質	貫庵	3
	演説学之精神鍛鍊	自由	
	希望	自強	4
	老大国少年民、輿論之世界	貫庵	
	新年、新支那歟旧支那歟、所謂英雄	自立	5
	国民之特性可改造、創造中国、国安可逃耶	自強	
	不死之箇人、奴隸耶抑英雄耶	貫公	6
	自由、專制毒	自立	
	群義	嚴腕	
雑 文	論教写信	新会陳子褒来稿	1
	呉奇人伝	仁和葉景范来稿〔葉瀚〕	2

	説大同之理	覚顛冥真人稿	3
	縦論二十世紀	訳日本報	
	戦務妨害于商務説	福州来稿	
	吾人之責任	会員演説	4
	大同説	上海来稿	
	祭剛毅文	江東旧酒徒稿	
	論俄国於英徳協商之關係	訳外交時報	
	論俄国於英徳協商之關係（接前冊）	訳外交時報	5
	論支那真元氣	横浜有情人来稿	
	説賭	香港中国報稿	
	東邦青年会之責任	朝鮮金伴演来稿	6
	体制解頤篇	隠名氏来稿	
訳書	自由略論	日本大井憲太郎著/馮懋龍自由氏訳述	1—3、5
	法国革命戦史	日本洪江保原著/馮懋龍自由氏訳	1—4、6
	人民論	貫庵訳著	4—6
	十九世紀外交之通観	日本有賀長雄著/中国抱器旧主訳	6
偉人小説	摩西伝（教家之偉人）	貫庵編著	1—3
	貞徳伝（一名女子救国美談）	自由編著	3—6

出典：『開智録』改良第1期—第6期、1900年12月21日—1901年3月20日。□ は筆者による補足。

注1：著訳者の記名において、鄭貫一は貫庵、自立、貫公などの号を、馮懋龍は自由、中国自由齋主の号を、馮斯樂は自強の号を用いていた。また、鄭貫一の号の中、「広」は「庵」の異体字であり、「貫広」と表記される場合もある。当時、この三人は「三自」と呼ばれた。

表 6-1 からは、以下のような特徴を伺うことができる。

まず、『開智録』の特徴は、厳密な意味から言えば翻訳雑誌ではなく、政論を中心とした雑誌である点がある。『開智録』は、表でもわかるように「訳書」と「偉人小説」の部分を除けば、ほとんどの記事は、評論に類似する文章を掲載していることがわかる。特

に、その主義主張が「民智」の開通を目指し、時には極めて急進的な内容を含み、清国政府の転覆と排満の革命を主張する場合も少なくなく、「独立」、「自由」、「革命」などの欧米から輸入された近代的な概念が頻繁に取り上げられていることは注目に値する。

たとえば、鄭貫一が訳編した『人民論』、馮自由が翻訳した『自由略論』（大井憲太郎）、『法国革命史』（洪江保）、及び中国抱器旧主が翻訳した『十九世紀外交之通観』（有賀長雄）は²¹、いずれも「人民」、「自由」、「革命」などの近代的な概念を紹介する内容である。また、馮斯樂は記事「義和団」の中で、義和団の精神を称賛すべきであると主張し、「革命之剣」の中では、清国政府を転覆させる革命の剣を鑄造することを打ち出した²²。また、鄭貫一は「義和団有功於中国説」のでは、「我が国民は、外国人の奴隷になる恥と日々言うが、満洲人の奴隷になる恥とは知らない。外国人を排斥すると日々言うが、満洲人を排斥することは知らない。満洲賊〔蔑称〕は我が中華を盗んでから、もう二百八十年になる」²³と指摘しており、鄭自身は、欧米列強だけではなく、排満革命を引き起こすことを意識していたことがわかる。

ただ、『開智録』の掲載文章の多くは、著訳者の本名が明記されておらず、筆名のみが記されており、著訳者の時代認識と思想の変容について詳細を後追いすることができないのは残念である。現時点で判明した著訳者は、葉瀚、蔣智由（因明子）、陳子褒、邱菽園（星洲寓公）、金祥演（朝鮮出身）の 5 名である。なお、表 6-1 には含めなかったが「詞林」に寄稿している奮翮生（蔡鏐）、因明子（蔣智由）、星洲寓公（邱菽園）、母暇、振素庵主、遯公、旧庵などの筆名が『清議報』の「詩文辭隨録」の項目にも見えることから、『開智録』は雑誌の販売を『清議報』の販売網に依頼していただけてだけでなく、寄稿者もある程度重複していたことも確認できることから、『清議報』に付属する雑誌として見てもよいだろう。

²¹ 李谷城『香港『中国旬報』研究』（文史哲出版社、2010 年）に掲載された「『中国旬報』三十七期終目録」によれば、中国抱器旧主が翻訳した六つの文章は確認できる。すなわち、浮田和民「二十世紀政治問題」（『中国旬報』第 1 期、1900 年 1 月 25 日）、添田寿一「中国与世界安危論」（『中国旬報』第 2 期と第 3 期、1900 年 2 月 14 日、2 月 24 日）、有賀長雄「第十九世紀外交之通観」（『中国旬報』第 4 期と第 5 期、1900 年 3 月 5 日、3 月 15 日）、有賀長雄「於杜国之戦外交上之秘事」（『中国旬報』第 6 期、1900 年 3 月 25 日）。しかし、李谷城は中国抱器旧主という筆名を用いる著者の本名が解明できない。興味深いことに、約 1 年後の『開智録』第 6 期（1901 年 3 月 20 日）において、中国抱器旧主が翻訳した有賀長雄「第十九世紀外交之通観」という文章も確認できる。同じ筆名、そして同じ文章が二つの雑誌に確認されたことから見れば、この時期、『開智録』と『中国旬報』との間に何か関係があるのではないかと疑わざるを得ない。ちなみに、1901 年、鄭貫公は清議報館から解職されてまもなく、香港中国報の記者になった。この中国報は陳少白が主宰した『中国日報』と『中国旬報』の略称である。

²² 「革命之剣」「義和団」『開智録』改良第 1 期、1900 年 12 月 22 日。

²³ 「義和団有功於中国説」『開智録』第 6 期、1901 年 3 月 20 日。（我国人日言為外人奴隸之恥、而不知為滿洲奴隸之恥。日言排外種、而不知排滿洲人之外種。滿洲賊之盜我中華也、二百八十年於茲矣。）

『開智録』は、1901年3月20日に発行された第6期まで現存しているが、その廃刊時期は判然としない²⁴。梁啓超は10期に達していないと紹介したが²⁵、馮自由は10余期発行したと言っている²⁶。ただし、梁啓超と馮自由のいずれも創刊と廃刊時期に詳しく言及しておらず、『訳書彙編』に載せられた『開智録』の広告によって1901年8月頃に廃刊された²⁷、と推定される。『開智録』が廃刊した理由であるが、これまた推測の域を超えないが、その編集と販売など多くの面において康有為と梁啓超の影響を強く受ける横浜の『清議報』と密接なつながりをもつ『開智録』の排満思想は、康有為とその弟子の徐勤・麦孟華から見れば、許されない考えであり、その過激な主張から『開智録』は排除された、と考えられる。

以上、横浜で発行された『開智録』の序文と目次の分析を通じて、同誌は梁啓超に強く影響され、『清議報』との密接なつながりがあったことを明らかにして、その鮮明な排満の立場は、当時の中国人留学生界においても急進的な存在であったことを指摘した。

次に、視線を日本から中国国内へ転じ、中国国内の杭州で発行された雑誌『訳林』に注目を集める。

第二節 杭州日文学堂と『訳林』

1901年3月5日に月刊の雑誌『訳林』（図6-2）が杭州で創刊された。その発行所は最初に、杭州の銀洞橋にあったが、1901年9月の第7期からは万安橋林氏家塾²⁸に移り、翌年の1902年12月頃の第13期からは杭州白話報館が『訳林』の編集を引き継ぎ、そのあとまもなく廃刊になった。

²⁴ 現存の『開智録』は合計6期であり、原物のほか、陳匡時と寧樹藩により整理され、『中国文化研究集刊』第4・5輯（復旦大学、1987年）に掲載された標点排印本もある。

²⁵ 梁啓超「本館第一百冊祝辞」『清議報』第100冊、1901年12月。

²⁶ 馮自由「横浜開智録」『革命逸史』初集、中華書局、1981年、95頁。

²⁷ 『訳書彙編』第7期、1901年8月21日。

²⁸ 林氏家塾とは、林長民の父林孝恂が設立した家塾である。

図 6-2 『訳林』の表紙



出典：『訳林』第1期、1901年3月5日。（全国報刊索引より）

『訳林』の創刊趣旨について、林紓²⁹が作成した「訳林序」の中では、以下のように述べられている。

吾謂欲開民智，必立學堂。學堂功緩，不如立會演說。演說又不易舉，終之，唯有訳書。顧訳書之難，余知之最深。〔中略〕近者，及門林生長民，盛稱其友褚君，及林徐陳金數君，咸有志於此。廣訳東西之書，以餉士林。³⁰

〔吾謂えらく、民智を開くためには、學堂を開設しなければならない。だが、學堂の効果は緩やかで、団体を作り演説を行うことに及ばない。しかし、演説もまた簡単に行うことはできず、最終的には、ただ書籍を翻訳することに尽きることになる。そして、書籍を翻訳する困難さは、余が最も深く知るところである。〔中略〕近ごろ、門弟の林長民君はその友の褚君、及び林、徐、陳、金君の数名は、皆この事業〔翻訳〕に志があるととても称賛している。東西の書籍を広く翻訳し、我が士人に提供したい。〕

『訳林』は1901年3月に正式に刊行されたが、この序文は、庚子年の冬至（1900年12月22日）を前後した時点で作成されていることから、同誌の発行の構想は1900年12月

²⁹ 林紓（1852—1924）、字は畏廬、また琴南、冷紅生と号す、もとの名は群玉。福建省閩県の人。京師大学堂、福建閩學堂教師に歴任、王寿昌と「茶花女」を共訳し世評を博し、又英文学者の魏易の口頭翻訳に基づき、英米の小説を翻訳した。『茶花女遺事』、『黒奴吁天録』などの訳著がある。橋川時雄編『中国文化界人物総鑑』中華法令編印館、1940年、246-247頁。

³⁰ 林紓「訳林序」『訳林』第1期、1901年3月5日。

にまで遡ることができるが、その発行の時期が『開智録』と『訳書彙編』の創刊とほぼ重なる点、注目したい。

まず、序文の冒頭で「民智」の開通を求めるという雑誌の趣旨が提示されている。続いて、林紓は「民智」を開く方法を紹介しながら、実現の可能性と効果から見れば、「学堂」を立てることと「演説」を実施することはそれぞれ不便なところがあり、書籍を「翻訳」することが最も良い選択であると述べている。林紓は、『訳林』の発行の前にすでに英文の翻訳に関わった経験を有しており、翻訳の困難さを熟知していたが、優秀な弟子の林長民³¹らの活躍に大いに期待していたようである。この序文と『訳林』の第 13 期に掲載された「本所広告」を合わせて見れば、「今年（1902 年）、林長民は日本に遊学するため、『訳林』の事務を杭州白話報館に引き継いだ」³²とあるように、林長民は、同誌の編集事務を実際に取り仕切ったことがわかる。

それでは、『訳林』の翻訳作業に具体的に携わっていたのは誰であろうか。表 6-2 は『訳林』の第 1 期から第 5 期までの「題名録」に基づいて『訳林』の訳者をまとめたものである。

表 6-2 『訳林』の訳者名簿

役 目	掲載 期数	姓 名	字	出 身	学 歴	備 考
監 訳	1	林 紓	畏廬	福建閩県		
		伊藤賢道		日本三重県	杭州日文学堂堂長	
訳 員	1	林 霽	少泉	福建侯官	1903. 2、私費留学（注 1）。	別称は林万里/白水
		褚 垣	不明	浙江海寧	杭州日文学堂（1899—?）。	
		林志昭	蔚生	福建侯官	杭州日文学堂（1899—?）。	

³¹ 林長民（1876—1925）、字が宗孟、また苕蓼子、桂林一枝室主と号す。福建省閩侯県の人。早稲田大学政治科卒業。1909 年卒業後帰国、福建省諮議局書記長兼法政学堂教習。1912 年、南京臨時政府が成立し、法典編纂委員に任ずる。1913 年、国会衆議院議員、秘書長兼憲法起草委員。1914 年以降、政事堂参議、國務院参議を歴任。1916 年、法制局局長、国会衆議院議員兼進歩党政務部長を歴任。1917 年、司法部総長に就任。1919 年、国連同志会理事に推選される。1924 年、私立福建大学校長に任ずる。1925 年、郭松齡の秘書長となり、張作霖との作戦中、亡くなる。徐友春主編『民国人物大辞典（増訂本）』河北人民出版社、2007 年、815 頁。

³² 「本所広告」『訳林』第 13 期、1902 年、日付不明。（今年林君宗孟須赴日本遊学。特將訳林事務移交白話報館辦理。）

第六章 20 世紀初中国人留学生界における雑誌の発行と「開民智」の風潮

		林長民	宗孟	福建閩県	杭州日文学堂（1899—？）。1902. 9、私費留学。正則英語学校→早稲田大学高等予科→同大学専門部政経科（1906. 4—1909. 6 卒）	
		金保康	九如	浙江仁和	杭州日文学堂（1899—？）。1903. 9 頃、浙江官費で留学。清華学校（東京）→早稲田大学専門部政経科（1908 卒）	
		徐 超	不明	浙江仁和		第 2 期除名
		徐 鼎	不明	浙江仁和	杭州日文学堂（1899—？）	
		陳福民 (身)	哲侯	江蘇呉県	杭州日文学堂（1899—？）。1901. 3 頃、浙江官費で留学。高等日語学校→法政大学専門部法科（1907. 8—1910. 7 卒）	
		陳超立	不明	江蘇呉県		
		朱佐清	不明	江蘇震沢		
	2	劉永齡	不明	浙江仁和		
		王兆枏	樸峰	福建侯官	杭州日文学堂（1899—？）。1902. 9、私費留学。正則英語学校→物理学校。	
	3	陸康華	不明	福建閩県		
	4	魏 易	冲叔/ 聡叔	浙江仁和	上海聖ヨハネ大学（中退）	1901 年頃、 杭州養正書 塾の教習
		薩 端	韻坡	福建侯官	上海東文学社（1898—1901）。1901. 8、私費留学。早稲田大学邦語政治科（1901. 9—？）	
	5	林文潜	左隴/ 洲隴	浙江瑞安	浙江瑞安学計館→杭州日文学堂（1901. 3—1902. 2）/ 上海南洋公学特班（1901. 5）。1902. 2、瑞安に戻る。1903. 3 頃、私費留学。	1903. 10 頃、 30 歳で急逝

出典：「題名録」『訳林』第 1 期—第 5 期（1901 年 3 月—1901 年 7 月）に基づいて、台湾国史館藏教育部檔案、高西賢正編『東本願寺上海開教六十年史』（東本願寺上海別院、1937 年）、清国留学生会館幹事『清国留学生会館報告』

第1次—第5次（東京並木活版所、1902—1904年）、「浙江同郷留学東京題名」（『浙江潮』第3期、1903年4月17日）、孫廷鈺撰、徐和雍等整理『孫衣言孫詒讓父子年譜』（上海社会科学院出版社、2003年）などを参照して作成。

注1：1903年、林紓は「拒俄運動」に参加し、「拒俄義勇隊」丙区二分隊の隊長に選ばれた。しかし、その後、留学生の一斉帰国運動に加わり、帰国した後、上海の愛国女学校の教師となる。

以下、表6-2を通して、訳林社の社員構成の特徴について説明してゆく。

『訳林』の翻訳陣は、合計18名が確認できるが、第2期から脱退した徐超を除けば³³、実際は17名により構成され、その出身は主として浙江省、江蘇省、福建省である。

まず最も目立ったのは、訳林社と杭州日文学堂との関係である。杭州日文学堂は1899年1月に日本東本願寺の僧侶により杭州の忠清巷に設立された中国人向けの新式学堂であり、主に日本語と普通学を教授したことが知られている³⁴。

林紓と杭州日文学堂堂長の伊藤賢道は、『訳林』の監訳として名を並べているが、その具体的な翻訳と編集事務にはほぼ干渉していない³⁵。日文学堂の学生である林長民、褚垣、林志昭、金保康、徐鼎、陳福民、王兆枏、林文潜の7名が訳林社の翻訳を担当した実働部隊の訳員で彼らが翻訳した文章が同社の全体の記事の4割以上を占めていることが確認できる。彼らは東本願寺の僧侶の下で、日本語を学びながら、『訳林』の翻訳事業に従事している。それに上海東文学社の薩端を加えた8名が、『訳林』の翻訳に携わる中心メンバーであったと思われる。なお、この中の林紓、林長民、金保康、陳福民、王兆枏、薩端、林文潜は相次いで日本留学に赴き、後に留学生界において著しい活躍ぶりを見せることとなる。

もう一つ『訳林』の発行に大きな後押しを与えていたのは、当地の官吏と郷紳であったことも特筆すべきことである。たとえば、『訳林』に掲載された「慨捐諸君姓名」（寄付者名簿）を丁寧に見ていけば、杭州の地方官である洪述祖、張其昌、葛慕川などの名前を確認することができて、その中の許豫生は、洋10元を寄付した上に、1901年4月には『訳林』の購入を各州県の衙門に命令する公文を下した³⁶、という。

³³ 『訳林』第2期の目録頁において、「経理員中の徐君超は既に別事につくことで、『訳林』と関わらない」という事情が報じられ、徐超は『訳林』創刊号刊行後、この団体から脱退したであろう。『訳林』第2期、1901年4月18日。

³⁴ 杭州日文学堂の設立と発展については、高西賢正編『東本願寺上海開教六十年史』（東本願寺上海別院、1937年）の中、「杭州日文学堂の創設」、「杭州日文学堂の発展」などの箇所で紹介される。また前掲劉建雲『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』の「附表1 杭州日文学堂課程表」に学堂のカリキュラムが整理された。

³⁵ 周知の通り、林紓は外国語がわからなくて、英文学者の魏易の口訳により中国語の訳文を作成している形式で小説翻訳を行うことにする。

³⁶ 「置潮泉許廉訪飭通省購閱訳林札」『訳林』第4期、1901年6月15日。

それでは、訳林社はどのような底本に基づき、どの分野の学問を翻訳したのだろうか。
以下、『訳林』に掲載された文章を素材にさらに検討していきたい。

表 6-3 『訳林』の掲載文章

タイトル	著 者	掲載期数	原 著	翻訳箇所 ^(注1)
訳林序	林 紓	1		
理財学	笹川潔	1—6、 8—11	『財政学』帝国百科全書・第31編、 博文館、1899年	第2編第3章第2節 「租税」第3款「家 屋税」（未完）
国債論	織田一	1—9	『国債論』政治経済法律三科講習全 書、博文館、1890年	完訳
印度蚕食戦史	渋江保	1	『印度蚕食戦史』万国戦史・第12 編、博文館、1895年	第1編第1章（二） 印度ノ門地（未 完）
明治法制史	清浦奎吾	1—6、 8—10、12	『明治法制史』明法堂、1899年	第2編第2章第3節 官吏ノ懲戒（未完）
日本近代名人事 略	干河岸貫一/ 小宮山綏介	1—10、 12、13	干河岸貫一編『近世百傑伝』博文 館、1900年/小宮山綏介著『洋学大 家列伝』少年叢書・第7編、博文 館、1897年	選訳
日用製造品	高橋橋樹編	1	『日用品製造篇』通俗日用化学全 書・第10編、博文館、1895年	選訳
欧米漫遊記	鎌田栄吉	1、3—8、 10、12	『欧米漫遊記雑記』博文館、1899年	第三章英国附蘇格蘭 教育資金の義捐（未 完）
維多利亞大事記	不明	2—6、 9—11	不明/「訳者識」によれば、この文 章の底本はイギリス人の著作	不明
世界商業史	六条隆吉・近 藤千吉	2—11	『中等教育 世界商業史』博文館、 1893年	第二篇第二章 以太 利市府（未完）
統計一豹録 ^(注2)		3—12		

軍国論	(独) フォー ン・デル・ゴ ルツ著/ 桜井精重訳	9、10、12	『軍国新論：近世軍制及大戦術 一 名・国民は兵』陸軍文庫、1887 年	第二章 戦法並一國 ノ軍制ハ開化ノ度ニ 關係スル事○沿革略 (未完)
日本監獄則		13	勅令第 93 号「監獄則」内務省令「監 獄則施行細則ヲ定ム」、1889 年 7 月	完訳

出典：『訳林』第 1 期—第 13 期、1901 年 3 月—1902 年 12 月に基ついて、国立国会図書館の蔵書、熊月之編『晚清新
学書目提要』（上海書店出版社、2014 年）などの資料を参照しながら作成。

注 1：「翻訳箇所」の項目では、章の途中までしか訳していない場合は「未完」、書籍全体を訳し終えた場合は「完訳」としている。

注 2：統計表については、第 1 期「旅居支那之各国人数表」、「日本全国徴兵核数表」、第 2 期「日本現今歳計表」、第 3 期から各表が「統計一覧録」にまとめられている。

表 6-3 は、全 13 期の『訳林』の掲載文章をまとめたものであるが、それによると、『訳林』の編集方針は、『訳書彙編』や『開智録』と比べれば、明確であったとは言い難い。その理由は、誌面内容が、財政、商業、法制、軍事、伝記、紀行などのあらゆる分野にわたっており、翻訳の重点が明確ではないことから類推できる。それに加え、『訳林』では、原著者の名前は明記されるものの、翻訳者の名前が記されていないため、翻訳者や翻訳の方法についても判然としない。

表 6-3 の 11 種の作品の中、『国債論』（織田一）、『日本監獄則』、及び統計表などの僅かな作品のみがその全訳を掲載し、他の作品は原典の全部を翻訳できず、一部のみ載せている。

たとえば、『印度蚕食戦史』と『日用製造品』の二つの文章は、同誌の第 1 期に掲載されたのみで、翻訳が完了していないが、その理由は、『印度蚕食戦史』の場合、蘇州励学訳社（後述）がすでに同名の書籍を翻訳し、単行本として出版していたことが訳林社に伝えられたからであろう。一方、『日用製造品』の場合は、多くの医薬品と化学薬品を紹介しているものの、その訳名が統一されないと内容を理解できないことから、訳林社は訳名表を作成した後、連載を再開したい、という声明を出している³⁷。しかし、結局、

³⁷ 「告白」『訳林』第 2 期、1901 年 4 月 18 日。

『日用製造品』の訳名表は、掲載されないのみならず、翻訳の連載も再開できなくなった。

また、注目しておきたいのは、『訳林』に掲載された文章の由来、つまり翻訳の底本のことである。『訳林』の訳者群が杭州日文学堂の学生であったため、多くの書籍の底本は、日本語の書籍または洋書の日本語訳本から選ばれたのは不思議ではないが、そのうち博文館の出版物が非常に多いことは指摘しておきたい。以下、博文館の出版物を出版年代順に並べてみた³⁸。

- ①織田一『国債論』政治経済法律三科講習全書、博文館、1890 年。
- ②六条隆吉・近藤千吉『中等教育 世界商業史』博文館、1893 年。
- ③渋江保『印度蚕食戦史』万国戦史・第 12 編、博文館、1895 年。
- ④高橋橘樹編『日用品製造篇』通俗日用化学全書・第 10 編、博文館、1895 年。
- ⑤小宮山綏介『洋学大家列伝』少年叢書・第 7 編、博文館、1897 年。
- ⑥鎌田栄吉『欧米漫遊記雑記』博文館、1899 年。
- ⑦笹川潔『財政学』帝国百科全書・第 31 編、博文館、1899 年。
- ⑧干河岸貫一編『近世百傑伝』博文館、1900 年。

この中で『訳林』に掲載された「日本近代名人事略」という文章は、干河岸貫一編『近世百傑伝』に基づいて、小宮山綏介『洋学大家列伝』中の「高野長英」、「小関三英」、「佐久間象山」、「高嶋茂敦」の数名を取り入れたものである。こうしてみると驚くことに『訳林』の表 6-3 に掲載された 7 種の作品は、そのすべてが博文館の出版物を底本にしていたことがわかる。

しかし、この時期、博文館はまだ中国に進出しておらず、訳林社がどのような流通ルートでその出版物を手に入れたのかについては定めではない。伊藤賢道の東本願寺関係を経由して入手したのか、または中国人留学生や遊歴官員を通じて書籍を入手したのか、今後明らかにしていく必要がある。なお、あくまで推測の域を出ないが、『訳林』の翻訳の重点が明確ではない理由は、入手できる書籍によって限定されたのではないか。

³⁸ 以下の 8 種の著作は、「博文館出版年表」坪谷善四郎編『博文館五十年史』（博文館、1937 年）に確認される。なお、日本国立国会図書館のデジタルコレクションにも確認できる。

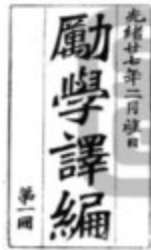
以上、杭州で発行された『訳林』の創刊の趣旨、編集の特徴を分析した上で、掲載文章の特徴から、雑誌の編集方針を検討した。次に、『訳林』とほぼ同時期に刊行された蘇州の『励学訳編』の状況を見ていきたい。

第三節 蘇州励学訳社と『励学訳編』

「上に天堂あり、下に蘇州、杭州あり」という諺が古くから伝えられているが、清末の蘇州と杭州の両地の知識人の間ではお互いの交流と競争が絶えずに繰り広げられ、近代的な学問を輸入するにおいても同じ傾向が見られた³⁹。杭州で『訳林』が創刊されてからわずか1ヶ月のあとの1901年4月3日、蘇州の励学訳社⁴⁰によって『励学訳編』（図6-3）が刊行され、1902年2月の第12期刊行後、廃刊になった。

『訳林』と同じく翻訳雑誌であった『励学訳編』は、上海ではなく蘇州で木版印刷された。『励学訳編』の奥付と関連資料から同誌の発行所は東来書荘に設けられ、最初は胥門内養育巷北女冠子橋にあったが、1901年12月の第10期からは東来書荘が移転するにつれて、元妙観前西首施相公衛口にその拠点を移した⁴¹。

図6-3 『励学訳編』第1冊の表紙



出典：『励学訳編』第1期、1901年4月3日、中国国家図書館普通古籍館蔵。

³⁹ 包天笑は「木刻雑誌」（『鉅影樓回憶錄』香港大華出版社、1971年、166、168頁）において、蘇州と杭州の印刷状況を比べて述べ、「杭州がすでに印刷所を設けている〔活版印刷ができる〕。しかし、蘇州はまだ持っていないので、蘇州と杭州がこれまで同等に見られることを考えたら、心中どうしても切なくなる」。それだけでなく、この後、『杭州白話報』の発行に対して、包天笑等は蘇州と杭州が並び称されるという理由で、蘇州にも『蘇州白話報』を刊行したことになる。

⁴⁰ 包天笑らは翻訳団体である励学訳社を結成すると同時に、上海と海外の翻訳書籍や雑誌を代理販売する東来書荘も設立している。また、励学訳社は励学会、励学社、励学訳編社、励学会とも呼ばれるが、本論文は「励学訳社」を用いる。

⁴¹ 『励学訳編』第10期、1901年12月25日。また、包天笑の回顧録によると、女冠子橋にある時代の東来書荘が非常に狭かった、という。「東来書荘」前掲包天笑『鉅影樓回憶錄』、161-165頁。

励学訳社の社員構成については、『励学訳編』の「励学訳社題名」の箇所にて記されており、表 6-4 はこの「励学訳社題名」と包天笑『鉤影楼回憶録』などの資料に基づいてまとめた社員名簿である。

表 6-4 励学訳社の社員名簿

NO.	姓 名	字	出 身	掲載期数	備 考
1	包公毅	朗孫/朗齋	江蘇呉県	不明	原名は清柱/筆名は天笑等/『訳林』賛成員
2	楊学斌	崇麟	江蘇呉県	不明	包天笑の義兄弟
3	戴昌熙	夢鶴	江蘇長洲	不明	包天笑の義兄弟
4	汪郁年	棟卿	江蘇呉県	不明	
5	李志仁	叔良	江蘇呉県	不明	包天笑の義兄弟
6	祝〇〇	伯蔭	江蘇?	不明	
7	馬〇〇	仰禹	江蘇?	不明	
8	包〇〇	叔勤	江蘇?	不明	
9	周先振	不明	江蘇呉県	不明	
10	顧培基	不明	不明	不明	
11	楊廷棟	翼之	江蘇呉県	不明	訳書彙編社社員
12	楊蔭杭	補塘	江蘇無錫	不明	訳書彙編社社員
13	楊錫驥	千里	江蘇呉江	第 4 期	銀 5 圓を寄付
14	尤志選	子青	江蘇呉県	第 4 期	包天笑の従兄
15	汪榮宝	衰父/衰甫	江蘇元和	第 4 期	訳書彙編社社員
16	周祖培	仲蔭	江蘇呉県	第 5 期	訳書彙編社社員
17	袁 浩	炳之	江蘇呉県	第 7 期	洋 3 圓を寄付
18	施景崧	節宇	福州長楽	第 7 期	『日本史綱』などの翻訳作品を寄贈
19	魯兆麟	以誠	浙江餘姚	第 9 期	銀 2 圓を寄付
20	陶 恭	不明	浙江会稽	第 9 期	
21	翁之潤	沢芝	江蘇常熟	第 11 期	

出典：『励学訳社題名』『励学訳編』第 4—12 期（1901 年 6 月—1902 年 2 月）に基づいて、包天笑『鉅影樓回憶録』

（香港大華出版社、1971 年）、清国留学生会館幹事編『清国留学生会館報告』第 1 次—第 5 次（東京並木活版所、

1902—1904 年）、阿英『初期の翻訳雑誌』『小説四談』上海古籍出版社、1981 年）などの資料を参照して作成。

注：『励学訳編』第 1—3 期の「題名」がわからないことから、名簿中の第 1 名から第 12 名までは、『励学訳編』の掲載文章の署名、及び包天笑『鉅影樓回憶録』に言及される姓名によって補ったが、掲載期数を明らかにすることはできない。今後、資料の発見によってその人数は増減する可能性がある。

表 6-4 によれば、励学訳社は総数 21 名の社員が数えられるものの、その中の多くは名誉職であり、日常的に励学訳社の運営に関わっていた社員は包清柱（以下、包天笑を用いる）、楊学斌、汪郁年、戴昌熙、李志仁、祝伯蔭、馬仰禹、包叔勤の 8 名で、それに翻訳に携わっている周先振、顧培基を加えた総数 10 名が励学訳社の中心メンバーであったと思われる。一つ重要なことは、励学訳社の社員のほとんどの出身が江蘇省の呉県であることから⁴²、同誌の創刊が江蘇省呉県の共同体意識から出来上がったかもしれないが、まだ確定できるものではない。

他の社員といえば、楊廷棟、楊蔭杭、周祖培、汪榮宝の 4 名は日本留学中であり⁴³、残り 7 名は、雑誌に掲載された記事や関連の記録などから編集に関わった様子が見られず、たとえば、福州にいる施景菰は『励学訳編』を代理販売しながら、自分の訳作『日本史綱』を励学訳社に代理販売を任せることで、社員に名を連なった⁴⁴、と推定される。

社員個々人の経歴については資料不足のため、詳細を解明しにくいだが、そのうち楊学斌は上海の中西書院に英語を学んでおり⁴⁵、なお日本留学組以外の人で日本語の学習歴を持っているのは汪郁年⁴⁶と李志仁、包天笑、馬仰禹の 3 名（蘇州東文学堂で日本語を学習する）しかおらず⁴⁷、包と馬は日本語学習を 3 ヶ月ほどで止めていたから、その日本語能

⁴² 包天笑の回顧によると、祝伯蔭、馬仰禹、包叔勤の 3 名の出身は明確に記されないが、江蘇省呉県、元和県、長洲県の三県に限定することができる、と考えられる。

⁴³ この 4 名の留学履歴について、第二章の表 2-1「励志会の会員名簿」を参照。

⁴⁴ 「惠稿誌謝」『励学訳編』第 8、9 期、1901 年 10 月 26 日、11 月 25 日。なお、施景菰（また崧）は光緒三十年七月（1904 年 8—9 月）、官費留学生として日本に派遣され、1 年間、速成師範を勉強していた。「福建省留学日本官費生調査表」『学部官報』第 6 期、1906 年 11 月 6 日。

⁴⁵ 「訳小説の開始」、前掲包天笑『鉅影樓回憶録』、171 頁。

⁴⁶ 『励学訳編』廃刊後、汪郁年は日本留学にやってきた。彼は東京同文書院（1902.6—1903）と早稲田大学（1903）を中退した経験があり、ついに明治大学の専門部法律科（1906.9—1909.6）を卒業し、帰国後、留学生試験を受けて挙人を授けられた。「江蘇省留日学生存根」、教育部、国史館蔵、數位典藏号：019-010401-0002-009。

⁴⁷ 包天笑は「外国文的放棄」（『鉅影樓回憶録』、158 頁）の箇所、李志仁が蘇州東文学堂で日本語を学んで、後で日本に留学していたことを述べている。しかし、李志仁の留学時代に関する資料が見当たらないため、不明なことが多い。

力はほぼ評価できないと言える⁴⁸。また、蘇州の東文学堂は、杭州の東文学堂と同じく日本東本願寺によって開設され、中国人に日本語を教育する学校であったが、ただ一年ほど運営されていたので、その学堂の規模（学堂の広さ、教師と学生の数）、及び教育成果などにおいては、はるかに杭州東文学堂に及ばなかった、という⁴⁹。以上のことから、励学訳社の社員は、基本的に家塾や書院で伝統的な教育を受け、科挙のための知識を蓄積している知識人であった、とみる方が妥当だと思われる。また、訳林社と大いに異なる点では、彼らは地方官からの政策的、物質的、金銭的な支援を得ていないことである。

『励学訳編』の内容について、顧燮光は「政治、輿地〔地理〕、格致〔物理化学〕、歴史などに関する東西の書籍を翻訳した」⁵⁰と紹介しているが、それでは具体的にどのような内容を翻訳したのであろうか。表 6-5 は『励学訳編』に掲載された文章をまとめたものである。

表 6-5 『励学訳編』の掲載文章

タイトル	掲載 期数	著 者	原 著	翻訳者	翻訳箇所（注1）
欧州近世史	1—8、 10、11	（英） 顧蟠師	不明	顧培基訳述	16 世紀巻終
印度蚕食戦史	1—12	（日） 洪江保	『印度蚕食戦史』、万国戦史・第 12 編、博文館、1895 年	汪郁年訳述、戴昌熙校定	第 1 巻—第 4 巻 （未完）
日本政体史	5—12	（日） 秦政治郎	『日本政体史』、政治経済法律三科講習全書、博文館、1890 年	李志仁訳述、包清柱校定	第 3 編第 2 目 （未完）
化学原質論/ 化学初稿	1—11	（？） 李姆孫	不明	楊学斌訳述、戴昌熙参校	下巻（完訳）

⁴⁸ 「外国文的放棄」前掲包天笑『鉅影樓回憶録』、157-158 頁。汪郁年は洪江保の『印度蚕食戦史』を翻訳したため、彼の日本語がどこで習得したのか、包天笑らと一緒に蘇州東文学堂で教育されるのか、または別の学堂であろうか、まだ判然としない。

⁴⁹ 前掲高西賢正編『東本願寺上海開教六十年史』、85-86 頁。また前掲劉建雲『中国人の日本語学習史—清末の東文学堂』、177-178 頁。

⁵⁰ 「励学訳編」徐維則輯、顧燮光補『増版東西学書録』石印本、1902 年（熊月之編『晚清新学書目提要』上海書店出版社、2014 年、150 頁）。（訳東西各書有關政治、輿地、格致、歴史者。）

普通地理学	1—4、 6—11	(米) 福来	不明	周先振訳、戴昌 熙校	第 49 章 (未 完)
迦因小伝	1—12	(英) ヘンリー・ ライダー・ハガー ド (哈密德)	『Joan Haste』(出版 情報は不明)	蟠溪子訳述、天 笑生筆記 ^(注2)	下 半 部 (未 完)

出典：中国国家図書館古籍館に所蔵される『励学訳編』第 1 期から第 3 期の目次、及び全国報刊索引に公開される『励学訳編』第 4—12 期 (1901 年 6 月—1902 年 2 月)、包天笑『銅影樓回憶錄』(香港大華出版社、1971 年)、熊月之編『晚清新學書目提要』(上海書店出版社、2014 年)などの資料を参照して筆者が作成。

注 1：「翻訳箇所」の項目では、章の途中までしか訳していない場合は「未完」、書籍全体を訳し終えた場合は「完訳」と記した。

注 2：蟠溪子は楊学斌、天笑生は包天笑。

表 6-5 が示すように、12 期の雑誌目録を合わせてみれば、6 種の翻訳作品が掲載されたことが確認できる。そのほかに、『励学訳編』第 1 期の「目録」によると、「社章」、「励学訳社序」(尤志選)、「励学訳社縁起」(秋心子)が掲載され⁵¹、また第 4 期に尤志選が作成した「設立吳中公書樓啓附録」も見えるが、励学訳社の成立と『励学訳編』の創刊についての経緯を述べた記事であり、論説は載せていない。

この 6 種の作品において、『印度蚕食戦史』と『日本政体史』の 2 種が日本語から翻訳されたもので、残り 4 種の底本は英語である。その掲載文章から見れば、顧燮光が指摘したように、翻訳は歴史、戦史、化学、地理、小説などの様々な分野に広がっている印象が強く感じられる。

『迦因小伝』の翻訳と掲載の経緯に関する包天笑の記述によれば、楊学斌(筆名は蟠溪子)が上海の古書店で『迦因小伝』の欠本(下半部だけ)を購入し、包天笑の提案によって二人が協力して中国語に訳出している⁵²。その後、励学訳社の内部での検討を経て、『励学訳編』に連載することが正式に決定した、という。

つまり、『励学訳編』は、『訳書彙編』のように、編集方針を決めた後に翻訳する底本を探し求めるという進め方と異なり、先に翻訳作品ができていたため、励学訳社が最初から明確な方針と分野を決定したわけではなかった、といえよう。

⁵¹ 「初期的翻訳雑誌」前掲阿英『小説四談』、225 頁。

⁵² 楊学斌、包天笑の小説翻訳は林紘、魏易の翻訳方法と同じように、まず楊学斌が英語を中国語に翻訳し、包天笑がその訳文を流暢な中国語に直している。

励学訳社の『励学訳編』は、木版印刷という制限があるため、いくつかの書籍を単行本として、直接刊行している。蔡元培日記の 1901 年 3 月 6 日付の後に、「蘇州励学訳会書目」という記録が付され（表 6-6 を参照）、それによると、励学訳社はすでに各 9 種の洋書と日本語の書籍を完訳し、7 種を翻訳していたことがわかる⁵³。

表 6-6 蘇州励学訳会書目

已訳西文〔翻訳された西洋の書籍〕	已訳東文〔翻訳された日本の書籍〕	訳未竣各書〔翻訳未完成〕
十六紀至十九紀史	世界文明史	各国国力比較
英国史	経済学研究法	俠客伝
拿破侖伝〔ナポレオン・ボナパルト伝〕	新条約論	漢尼拔伝〔ハンニバル伝〕
二傑伝	波蘭衰亡戦史	俾思麦伝〔ビスマルク伝〕
東西八十傑事略	※印度蚕食戦史	寧爾遜伝〔ネルソン伝〕
※化学原質論〔即化学初枕〕	欧米独立戦史	農業経済論
※普通地理学	戎氏農業化学	海軍一
彭章明自伝	初等生理学教科書	
列列潑脱遊記（即小人島）〔リリパット脱	農業階梯	
出記＝ガリヴァー旅行記〕		

出典：「蘇州励学訳会書目」中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第 15 巻「日記」、浙江教育出版社、1998 年、316-317 頁。※は『励学訳編』に掲載された文章を表す。[] の中は筆者が加えたものである。

注：すでに翻訳された日本の書籍の中、『波蘭衰亡戦史』と『印度蚕食戦史』は博文館の万国戦史叢書に属することが確認できるが、その叢書には『欧米独立戦史』という書名の本がないため、『米国独立戦史』の書名を変えたのか、または万国戦史叢書と関係がない書籍から翻訳されたのか、現物が確認できない現段階では、まだ不明である。

しかし、この表 6-5 の「書目」はあくまでも広告の一種であり、時には他の翻訳団体が同じ書籍を翻訳しないように前もって宣伝することを目的にした場合もしばしばあったようで、実際にはその中の一部しか出版されていなかったことが確認できる⁵⁴。たとえ

⁵³ 蔡元培は日本語を勉強したことがあり、この時期、紹興の中西書院の総理を務めており、日本の政治、教育などの様々な分野に興味を持っていた。

⁵⁴ 「欧米独立戦史」顧燮光『訳書経眼録』杭州金佳石好楼石印本、1934 年（前掲熊月之編『晚清新学書目提要』、249 頁）

ば、渋江保『波蘭衰亡戦史』は訳書彙編社により翻訳出版され⁵⁵、もう一つの『世界文明史』は、実際に刊行されなかった⁵⁶。

一方、表 6-5 の「書目」には紹介されていないが、同誌の刊行に伴い、翻訳後に出版された書籍もいくつかある。『励学訳編』の第 6 期に掲載された「新書出版」では、馬汝賢が訳した北村紫山『日本維新三傑伝』⁵⁷、及び『万国地理統計要覧』の全訳が出版され、また第 11 期の「本社成書訳行広告」に、顧培基が訳述した闕蟠師『欧州十六世紀史』（即欧州近世史）と、楊学斌が訳した泰西李姆孫『化学初栞』の 2 種も完訳され、上梓されたことがわかる。

以上、励学訳社の構成と『励学訳編』の掲載文章の特徴を考察したが、以下、これらの雑誌の相互間の影響について比較検討していきたい。

第四節 「開民智」の風潮と雑誌間の相互関係

前述のように、1900 年 11 月から 1901 年 4 月にかけて、『開智録』と『訳書彙編』の創刊をはじめ、『訳林』、『励学訳編』などの中国人留学生が関わった雑誌が相次いで発行された。

表 6-7 は、この四つの雑誌の出版情報をまとめたものであるが、それによれば、創刊の趣旨、編集人員の関係、広告、代理販売所のつながりなどの様々な方面から、興味深い点をいくつか指摘することができる。

表 6-7 『開智録』、『訳書彙編』、『訳林』、『励学訳編』の刊行状況

雑 誌	創刊/廃刊 時間	発行 頻度	定 価	発行 地	発 行 所	編集者	備 考
-----	-------------	----------	-----	---------	-------	-----	-----

⁵⁵ 訳書彙編社同人『波蘭衰亡戦史』訳書彙編社、1901 年 11 月 30 日初版、東京都立中央図書館実藤文庫蔵。なお、1902 年 1 月、『励学訳編』第 11 期の「寄售書報」欄に、訳書彙編社により翻訳出版された『波蘭衰亡戦史』と『女子教育論』が見られる。

⁵⁶ 「世界文明史」顧燮光『訳書経眼録』杭州金佳石好楼石印本、1934 年（前掲熊月之編『晚清新学書目提要』、225 頁）。

⁵⁷ 「日本維新三傑伝三卷 蘇州励学訳社本」徐維則輯、顧燮光補『増版東西学書録』石印本、1902 年（前掲熊月之編『晚清新学書目提要』、27 頁）。北村紫山「維新三傑」大橋新太郎編『少年文学』第 4 編、博文館、1891 年 6 月。

開智録	1900 冬— 約 1901. 8	月 2 回	1 角 5 分	横浜	清義報館	鄭貫一等	1900. 12、改良 第 1 期出版/現 存 6 期
訳書彙編	1900. 12— 1903. 4	月刊	2 角→2 角 6 分	東京	訳書彙編発行所 →訳書彙編社	戢翼輩等	1903. 4、『政法 学報』と改題/ 現存 21 期
訳 林	1901. 3— 約 1902. 12	月刊	1 角 2 分	杭州	訳林編印所（銀洞橋 →万安橋林氏家塾→ 万安橋白話報館）	林長民等	計 13 期
励学訳編	1901. 4—1 902. 2	月刊	1 角 5 分	蘇州	励学訳社/東来書荘 （胥門内養育巷北女 冠子橋→元妙観前西 首施相公街口）	包天笑等	計 12 期

出典：『開智録』、『訳書彙編』、『訳林』、『励学訳編』の出版情報より筆者が作成。

一、各雑誌の創刊趣旨の比較

1897 年末の『時務報』第 43 冊に、「中国宜亟開民智論」という記事が英字新聞の『字林西報』から翻訳、掲載されている。その中では以下のような内容がある。

今夫国之富强，非徒恃铁路之表延也，非徒恃进出口货之充也，要在民智之开而已。未闻民智不开，而国能富强者也。况乎中国之筑铁路也，为势所驱，力所迫耳，非中心悦服而为之也。非中心悦服而为之，其功用已逊。今之策中国者，亦胡不曰民智宜开哉。民智开，而功效速且久矣。⁵⁸

〔今、凡そ国家の富强は、ただ鉄道線路の拡大によるものでもなく、ただ輸出入の商品の充実によるものでもなく、その要点は民智の開通にある。民智が開かないまま、国家が富强になるということは未だに聞いたことがない。さらに、中国の鉄道建設は時勢に迫られたもので、中国が心から納得して実施したものでもない。心から願ったものではないとすると、その効用も少ない。今、中国に献策する者で、どうして民智

⁵⁸ 孫超・王史訳、李維格勘定「中国宜亟開民智論」『時務報』第 43 冊、1897 年 10 月 26 日。同年、『湘報』第 20 期はこの記事を転載した。

を開こうと言わずにいられようか。民智が開かれれば、その効用は早く現れ、かつ長続きするだろう。]

この『時務報』の記事は、日清戦争の敗北後、洋務運動の中心をなす「中体西用」論では中国の富強をもたらすことができないことが時代の流れとなり、国民の見聞を広めなければならないという認識が広く提唱されていたことをうかがわせてくれる。

特に、本論文が注目している「民智を開く」という考え方が『時務報』にも同じく登場することは注目に値するが、それでは、ほぼ同時期に刊行されたこの四つの雑誌の創刊の趣旨の異同は何だろうか。

結論から言えば、『開智録』は明らかに他の雑誌と違い、当時の清国政府の転覆を図る急進的な排満主義を主張する雑誌であったと見なすことができる。

『開智録』が実現を目指した第一主義は、「自由な発言の権利を争う」こと、「新思想を輸入」すること、「国民独立の精神を激励」することであった。そして、この「第一主義」の考えのもとで、「革命」と「自由」などを主張する急進的な思想を展開する言論が重視され、人民をリードして権力に抵抗した「摩西伝」（モーセ伝）、「貞徳伝」（ジャンヌ・ダルク伝）のような偉人の業績を紹介する作品も翻訳掲載している。

一方、『訳書彙編』、『訳林』、『励学訳編』の場合は、革命または政治的な主義主張を論じる雑誌ではなく、新しい知識の翻訳を通して「民智」を啓発し、新たな見聞を広めることを目指す翻訳雑誌の性格が強かったといえよう。言い換えれば、『開智録』が求めたものは過激な革命運動であったとすれば、これら 3 種の雑誌は、現状改善を求める漸進主義を採用していたと言ってもよい。『訳書彙編』と『訳林』の創刊趣旨には、「民智」を開くという表現が明確に書き込まれたのみならず、「訳書彙編叙例」と林紘の「訳林序」には、今の中国を救うために、「民智」を開く必要があり、「民智」を開くための手段として新式の学堂を開設する必要があるが、その方法では時間がかかるため欧米のまたは日本の先進的な学問を翻訳することが最も重要であるとする。

19 世紀のアヘン戦争以来、西洋の優れた武器や船舶の導入を主張した洋務運動を経て、日清戦争の敗北を経験した中国の知識人は、いよいよ「民智」を開くことこそが、強い中国を建設する要点であることに気づいたが、その中心をなす新聞と雑誌などの出版活動に中国人留学生が重要な役割を果たしたことは注目されてよい。

二、広告の比較分析

次は、『訳書彙編』の誌面広告から各雑誌の相互関係を見ておこう。『訳書彙編』の第1期から第7期までの誌面に『開智録』を宣伝する広告（図6-4）は、7期連続して掲載されている。

図6-4 『開智録』の広告

開智録
此書為橫濱開智會之會報
文筆明顯議論精新士商皆
宜閱看誠開民智慧之書也每月兩期零售
每冊一角五分定一月者二角五分外埠郵
費另計價銀先付欲購者請向橫濱清議報
館及清議報代派處購取

開智會告白

出典：『訳書彙編』第1期、1900年12月6日。

広告内容：開智録 此書為橫濱開智會之會報。文筆明顯、議論精新、士商皆宜閱看、誠開民智慧之書也。每月兩期、零售每冊一角五分、定一月者二角五分、外埠郵費另計、價銀先付。欲購者請向橫濱清議報館代派處購取。

この広告は、『開智録』の内容上の特徴、発行頻度、定価などを紹介しているが、それによれば、『開智録』は「横浜清議報館、及び清議報の代理販売所に購入してください」とあるように、訳書彙編発行所は、『開智録』の代理販売という業務を引き受けてはなかったことがわかる。この二つの雑誌は、お互いの雑誌の発行を知らせる広告を載せながら、なぜ販売を相互が引き受けるという営業方式を採用していなかったのだろうか。それは、おそらく『開智録』の販売方法と関連があるように思われる。

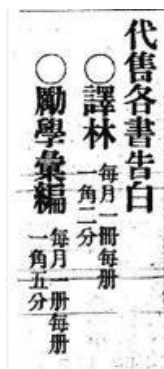
『開智録』は、『清議報』の別冊のような形として販売され、独自の販売網を持っておらず、雑誌の販売を『清議報』の代理販売所に全面的に依頼していたことは前述した通りであるが、これは、一方において、『清議報』がもつ広い人脈と整った販売網という資源を、『開智録』が最大限活用できることを意味し、また、海外の華僑社会においてすでに知名度の名高い『清議報』の影響力を借りて、同誌の販売を拡大することができることを意味するものである。

しかし、『開智録』が独立した販売網を持たないことは、同誌にとっては致命的な弱点であったことも、また事実である。排満思想と革命を主張する『開智録』がほぼ 1 年間という短い期間で廃刊せざるを得なかった最大の理由は、同誌が康有為とその弟子徐勤らの保皇派が主導する清議報の反感を買ってしまったことに求めることができるからである。

一方、『開智録』の第 5 期、第 6 期には、「訳書彙編告白」という『訳書彙編』の広告が 2 回見えるものの、『清議報』には第 63 冊、第 66 冊、第 68 冊、第 69 冊、第 70 冊、第 80 冊にそれぞれ「訳書彙編告白」が掲載される点からすると、『開智録』は『清議報』の影響にはるかに及ばないと思われる。

『訳林』と『励学訳編』の広告（図 6-5）は、『訳書彙編』の第 4 期から第 9 期まで掲載されているが⁵⁹、その内容は非常に簡単なもので、雑誌発行の頻度と定価しか載せられていない。

図 6-5 代售各書告白



出典：『訳書彙編』第 4 期、1901 年 5 月 27 日。

『訳書彙編』発行の第一段階（第 1—9 期）では、『国民報』、『開智録』、『訳林』、『励学訳編』の雑誌広告が載せられており、図 6-4 の示すように、『国民報』（『訳書彙編』第 1—8 期）、『開智録』（『訳書彙編』第 1—7 期）の特徴や内容を紹介するものがあり、もう一つは、ただ『訳林』と『励学訳編』（『訳書彙編』第 4—9 期）の代理販売を表明する広

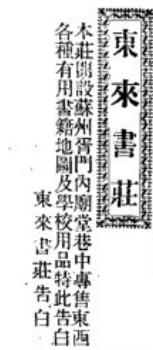
⁵⁹ 第五章で述べたように、『訳書彙編』の第 10—12 期の発行状況は不明なので、『訳林』と『励学訳編』の広告は少なくとも、『訳書彙編』の第 9 期までに掲載されたことが確認できる。

告で、同じ形式の広告は、『訳林』の「代售各種書目」と『励学訳編』の「寄售各書」の項目にも見える。このような広告の取り扱いの違いから、『訳書彙編』とそのほかの雑誌が代理販売の業務提携を行ったことを類推することが可能である。

また興味深いことに、東来書荘は『励学訳編』の発行所として、『励学訳編』が創刊される前に、すでに『訳書彙編』に広告（図 6-6）を出しているだけでなく、その広告が『訳書彙編』第2年第1期に至るまで掲載されており、同時期の『励学訳編』と『訳林』の広告より掲載の期間が長い。これは、東来書荘の設立と管理を担う励学訳社が訳林社より、励志会との関係が近いことを意味するかもしれない。

従来の清末時期の雑誌研究においては、まだ奥付の住所地や広告などを丁寧に読み込む研究手法は多くなく、本論文が試みた雑誌掲載の広告の相互比較も初歩的な段階のものに過ぎないが、今後の清末時期の雑誌研究の新たな可能性を秘めた分野であることは指摘しておきたい。

図 6-6 東来書荘の広告



出典：『訳書彙編』第2期、1901年1月28日。

広告内容：「東来書荘」本荘開設蘇州胥門內廟堂巷中、專售東西各種有用書籍、地圖及び學校用品。特此告白。

三、販売と流通

以上、『訳書彙編』と他の雑誌の広告を見てみたが、そのほかに各雑誌の代理販売所も密接な相互関係がある。以下、代理販売所の分布を考察する。

表 6-8 1902 年初、『訳林』と『励学訳編』の代理販売所

地域		『訳林』第 11 期（1902 年 1 月 9 日発行）	『励学訳編』第 11 期（1902 年 1 月 24 日発行）
江蘇	上海	* 金粟齋訳局	* 金粟齋
		* 中外日報館	* 中外日報館
		同文滙報館	蒙学報館
			広学会
			千頃堂書坊
			普通学書室
	蘇州	* 東来書荘	* 東来書荘〔發行所〕
			開智書室
			文瑞樓書坊
			蘇州白話報館
	無錫	* 務実学堂	* 務実精舎〔学堂〕
	常熟	内閣張	開設なし
	呉江	開設なし	仁和泰煙号
	常州		均益齋閱報処
	紹興		〔空白〕
	鎮江		救生公所陳漱六先生
浙江	杭州	* 訳林編印所〔發行所〕	* 訳林編印所
		徳記書坊	求是書院汪曼鋒先生〔汪嶽〕
	南潯	開設なし	明理学堂祝心澗先生
	温州	林左牆家〔杭州日文学堂学生林文潜の家〕	開設なし
		中西学堂石宗素	
	嘉興	魯公館	
	寧波	楊正和筆店	
	安慶	開設なし	蔵書樓
江西	南昌	* 陶君節家	* 陶君節先生
			広智書荘
直隸	天津	日日新聞社	開設なし
		劉宅〔劉榕生〕	

広東	汕頭	開設なし	李道南先生
	広州	萃盧閣報処	* 嶺海報館
		* 嶺海報館	
福建	福州	回春薬舗	施節字先生
		英華書院内開智会	
日本	東京	* 訳書彙編局〔即訳書彙編発行所〕	* 訳書彙編発行所
	横浜	清議報館	開設なし
合計		21	25

出典：『訳林』第 11 期、1902 年 1 月 9 日と『励学訳編』第 11 期、1902 年 1 月 24 日の「代售処」の情報によって作成。共通の代理販売所は*で表記する。

表 6-8 は、1902 年 1 月、『訳林』と『励学訳編』の第 11 期に記録される代理販売所をまとめたものであるが⁶⁰、その地域分布を比較すれば、さまざまな特徴や共通点をううことが与えられるだろう。

1902 年初の『訳林』の代理販売所は 21 ヶ所があり、そのうち浙江省と江蘇省に各 6 ヶ所が設置されるという地理的分布を確認することができる。一方、『励学訳編』の場合、その代理販売所は 25 ヶ所が数えられ、江蘇省に 15 ヶ所（蘇州 4 ヶ所）の販売所があり、販売地域が江蘇省に集中している特性を示していると言えよう。

また、『訳林』と『励学訳編』において共同の代理販売所は、上海の金粟齋と中外日報館、蘇州の東来書荘、無錫の務実学堂⁶¹、杭州の訳林編印所、南昌の陶君節家、広州の嶺海報館、及び東京の訳書彙編発行所の合計 8 ヶ所であり、そのうち東来書荘、訳林編印所、訳書彙編発行所が各雑誌の発行所として、相互に雑誌を代理販売していることがわかる。

このような雑誌の代理販売網は、すでに前述したように各雑誌の編集者の相互関係、または人脈との相互関係に影響を受けたものと見るべきである。

⁶⁰ 『訳林』と『励学訳編』は 10 期の刊行を経て、その代理販売所はあまり変化がない。たとえば、『励学訳編』第 9—12 期の代理販売所が全く変わらない。一方、『訳林』第 7—10 期の代理販売所も同じだが、第 11 期になって、広州に萃盧閣報処と嶺海報館の 2 ヶ所が増えた同時に、蘇州の文瑞樓書坊がなくなり、ごくわずかであるが変化が生じていた。

⁶¹ 無錫の務実学堂（精舎）とは、1901 年、尤幹臣が設立した学校である。また学校名が似ているが、務実学堂より 3 年前の 1898 年に設立された娑実学堂があり、華人楊模が創立した無錫の最初の新式学堂と言われ、連元街に置かれた。侯鴻鑑「無錫教育沿革大略」『無錫教育雑誌』第 1 期、無錫県教育会、1913 年 1 月。

四、編集者と経営者の人脈のつながり

『訳書彙編』の編集を担った励志会は、個人または団体の形で他の雑誌の編集者らと人的なつながりをもっていた。たとえば、蔡鏗は、励志会の会員で『訳書彙編』の編集はもちろん、『清議報』の編集にも携わり、また『開智録』にも序文を寄稿している。なお、『開智録』改良第 1 期の「捐款芳名臚列」（寄付者名簿）によれば、励志会は団体の名義で銀 4 元を開智会に寄付した記録が見えることから⁶²、二つの団体が相互交流をもっていたことがわかる。

それでは、『訳書彙編』と『訳林』、『励学訳編』は、どのような人脈のつながりがあるのだろうか。

訳書彙編発行所は、『訳林』と『励学訳編』を代理販売し、特に『励学訳編』の海外における唯一の代理販売所として雑誌の売上と影響力の拡大に大きな役割を果たした。それだけでなく、楊廷棟、楊蔭杭、周祖培、汪榮宝が『励学訳編』の編集に関わり、そのうち汪榮宝の出身校である江陰の南菁書院が『励学訳編』の第 1 期から第 8 期までの代理販売を引き受けていたのは偶然とは言えない。

一方、励志会会員の中、浙江省出身者が 11 名であり、また杭州の学堂の出身者として杭州蚕学館の嵇侃、求是書院の陸世芬、陳榎、錢承詒の名前が見えることも注目しておきたい。彼らは杭州において学堂が設立されてまもなく、日本留学に派遣されたので、求是書院での学習と生活経験がほとんどなかった。しかし、そうであっても、彼らは浙江省の官費留学生として派遣されたことで、杭州府と求是書院の監督を受け、杭州の地域社会との関係を維持し続けた。

特に、求是書院が一つの連絡拠点として大きな役割を担っていたと思われる。たとえば、1901 年 4 月から 10 月までの半年の間、『訳書彙編』の杭州代理販売所は、訳林（即訳林社）の 1 ヶ所だけであったが、同年 12 月の第 9 期からは「求是書院」と「養正書塾」が新たに登録されることになった。『励学訳編』の杭州代理販売所は「訳林編印所」と「求是書院汪曼鋒先生」⁶³である。

⁶² 「捐款芳名臚列」『開智録』改良第 1 期、1900 年 12 月 22 日。

⁶³ 汪巖（1881—1921）、字は曼鋒。浙江省錢塘の人。杭州の宗文義塾、求是書院卒業。求是書院の教師となり、1902 年 9 月、崇文書院から改められた錢塘崇文書院の初代の堂長に就任。後に、中国同盟会に加。1912 年、中華民国成立後、杭県の知事（初代県長）となり、その後、浙江都督府諮議官、浙江官産処処長を歴任。林呂建主編『浙江民国人物大辞典』浙江大学出版社、2013 年、244 頁。田原天南編『清末民初中国官紳人名録』中国研究会、1918 年、180 頁。

なお、『訳書彙編』、『訳林』、『励学訳編』の間で活躍した包天笑がいる。包は民国時期に活躍した有名な新聞人、出版人であるが、清末期に中国人留学生と関係を持つ新聞雑誌の編集の仕事に従事していたことは注目されてよい。

東来書荘は、『訳林』第 2 期から蘇州の販売を代理することになるが、東来書荘の代表を務めていた包天笑も『訳林』の賛成員として登録しているため⁶⁴、彼が励学訳社と訳林社を結ぶ架け橋の役割を果たしたと評価できる。ほぼ同時に、包天笑は蒯光典⁶⁵の指示を受けて汪允中とともに上海で金粟齋を設立し、翻訳と出版事業を行いながら、上海の新聞出版業界において頭角を表すこととなる⁶⁶。この金粟齋は、『訳林』と『励学訳編』の上海代理販売所として設置されるのみならず、もう一つの上海代理販売所である中外日報館とも深い関係をもっている。

金粟齋は、新しい書籍を出版する際に必ず『中外日報』に広告（図 6-7）を載せているが、この広告によれば、中外日報館、広学会、東来書荘、訳林編印所が金粟齋の発行支所として登録されていることがわかる⁶⁷。また『訳林』と『励学訳編』においても、金粟齋の出版物が紹介され、代理販売の広告も掲載され、たとえば志賀重昂『地理学講義』、伊藤博文『日本憲法皇室典範義解』などの販売広告が掲載されている⁶⁸。これらのことから金粟齋、中外日報館などの五つの出版機構は互いが密接なつながりを持っていることがわかる。

⁶⁴ 「賛成諸君姓名」『訳林』第 2 期、1901 年 4 月 18 日。

⁶⁵ 蒯光典（1857—1910）、字が礼卿、季述と号す、また金粟道人と号す。安徽合肥の人。1883 年、同進士出身、検討が授けられる。尊經書院講師、兩湖書院監督などを経て、1898 年、江寧高等学堂を創立。その後、兩淮塩務を整備。1906 年、按淮揚海道。1908 年、欧州留学生監督に赴任し、年内辞任帰国。1910 年、江寧で逝去。著作『金粟齋遺集』8 巻がある。趙爾巽等『清史稿』第 41 冊第 452 卷、中華書局、1977 年、12580—12581 頁。

⁶⁶ 「金粟齋訳書処」「金粟齋時代的朋友」前掲包天笑『鉤影樓回憶録』、218—231 頁。

⁶⁷ 「金粟齋新書出版」『中外日報』1901 年 5 月 19 日。ちなみに、金粟齋広告の隣に、「新出訳書彙編」という『訳書彙編』の広告も見える。

⁶⁸ 「代售各種書目」『訳林』第 6—12 期。「寄售各書」『励学訳編』第 4—12 期。また、包天笑は業務上の連絡で常に中外日報館に訪れ、その場で、葉瀚と知り合い、葉が翻訳した志賀重昂『地理学講義』、伊藤博文『日本憲法皇室典範義解』の 2 種の翻訳書を金粟齋によって出版されることになった。

図 6-7 金粟齋新書出版の広告



出典：『中外日報』1901年5月19日。()

広告内容：「金粟齋新書出版」新訳日本志賀重昂『地理学講義』、大洋四角。日本伊藤博文『憲法義解皇室典範義解』、大洋三角、続出者続登報。発行総所、上海新馬路登賢里金粟齋。発行分所、望平街中外日報館、老巡捕房西首広学会、蘇州胥門内女冠子橋東来書莊、杭州下城銀洞橋訳林編印所。外埠有願代售者、以二成酬勞先繳價值、爾後發書。如價值未能一次繳清、須有在滬股實保人、始能寄發。其應繳之価、仍於每月終寄繳（凡來發行總所購書者十部以外九折、二十部以外八折、郵力自給。

むすび

本章では、『開智録』、『訳林』、『励学訳編』の雑誌の分析を通して、創刊の趣旨と内容分析からわかる各雑誌の特徴を検討しながら、『訳書彙編』を含めて各雑誌と編集者間の相互関係を考察してみた。ここで、各節の考察をまとめてみると、

一、『開智録』は、1900年末に鄭貫一らが結成した開智会によって横浜で発行され、中国人留学生界において、排満革命を主義とする初めて掲げた雑誌として、そこに掲載さ

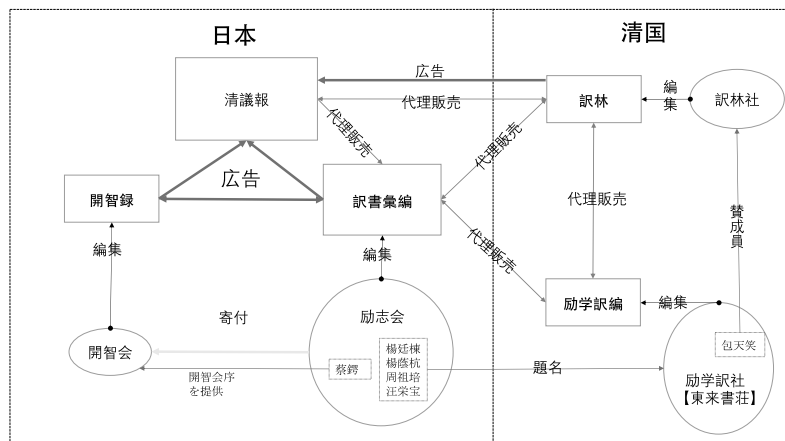
れた文章には、義和団事件を賛美した上に、欧米由来の近代的な概念である「独立」と「自由」などの価値観をすでに声高く主張していた。

二、『訳林』は、林長民らの杭州の東文学堂の学生が中心になり設立された訳林社によって刊行された翻訳を主な目的とした雑誌であり、同雑誌は、「民智」を開くという時代の風潮に強く影響されながら、財政、商業、法制、軍事、伝記、紀行などのさまざまな分野にわたる記事を掲載していたが、そのほとんどは、日本の博文館の出版物を翻訳したものであった。

三、『励学訳編』は、蘇州の包天笑らが組織した励学訳社によって出版された翻訳を中心とした雑誌であるが、励学訳社の日本語の学習者は、訳林社など他の雑誌と比べれば少なかったため、その掲載文章には、日本語の書籍のほかに英語から翻訳されたものも少なくない。なお同誌の発行は蘇州地方に限定される傾向が確認できたが、これは雑誌編集の中心を担った包天笑個人の影響が大きい。

四、『訳書彙編』、『開智録』、『訳林』、『励学訳編』の四つの雑誌は、創刊の趣旨や記事の内容などでそれぞれ異なる特徴があるものの、雑誌の編集を担当した人脈や広告の掲載、及び相互の代理販売などの面からは、上海、杭州、蘇州などの中国国内だけではなく、海外の日本を巻き込む販売網を作り上げていた。図 6-8 はこれらの雑誌の相互関係を図式化したものである。

図 6-8 『開智録』、『訳書彙編』、『訳林』、『励学訳編』の関係図



要するに、この時期の日本では、横浜の清議報館と東京に位置した訳書彙編発行所（訳書彙編社）が中国国内の雑誌の海外流通と販売ルートの拡大に中心的役割を果たし

たのみならず、各編集団体の連絡を取り合い、中国と海外の連絡網の形成に対しても大きく貢献した、と言える。一方、『訳林』と『励学訳編』は、それぞれ杭州と蘇州に拠点を置き、この二つの代理販売所を通じて、日本と中国国内の販売網をつなげることができた。

1902 年に入り、『訳林』と『励学訳編』の廃刊と入れ替わって、日本では中国人留学生によって『浙江潮』、『江蘇』などの雑誌が相次いで創刊されたが、その編集者の中には、かつて『訳林』、『励学訳編』の編集に携わっている人も見られ、また代理販売所が設置された場所においても継承性が認められることから、これらの雑誌の間の強いつながりをうかがい知ることができる。

1900 年代初め、日本と中国国内に刊行された浙江系、江蘇系雑誌の関係は図 6-9 で表している。

図 6-9 1900 年代初の雑誌の関係図

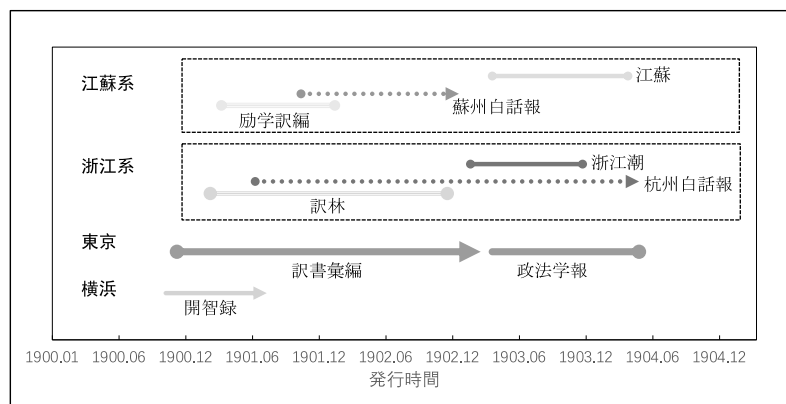


図 6-9 が示すように、「留学生雑誌の元祖」と称された『訳書彙編』は、雑誌の創刊から『政法学報』に誌名を変えながら、廃刊に至るまで凡そ 4 年間ほど続いた。一方、『浙江潮』、『江蘇』などの留学生雑誌は、その誌名からわかるように誌面内容、編集人員の構成などにおいて強い地域意識を現している。

1900 年から 1902 年にかけての留学生界において、欧米と日本の知識と思想の輸入において最も重要な役割を担ったのは『訳書彙編』にほかならない。『訳書彙編』の発行 2 年後から、『遊学訳編』、『湖北学生界』、『浙江潮』、『直説』、『江蘇』、『雲南』などの中国人留学生を中心にした新たな雑誌が次々と創刊された。これらの雑誌は、中国人日本留学生の様々な活動を中国国内に紹介する役割を果たしたのは言うまでもなく、そのほかに

欧米と日本に移植された近代的な知識と思想を中国国内に伝える情報の運び手の役割をも担っていた点、再度指摘しておきたい。

次章では、『訳書彙編』の誌面内容に注目し、同誌に掲載された文章の中で社会主義知識に関する記事を取り上げ、20 世紀初頭の中国人日本留学生界における社会主義知識の理解について検討を試みる。

第七章 20 世紀初中国人留学生界における社会主義知識に関する翻訳活動

はじめに

1907 年頃、東京に滞在していた劉師培、何震、張継らは、幸徳秋水、堺利彦などの日本社会主義者と頻繁に交流しながら、互いに活動を支援していた。そして、幸徳秋水らによる「社会主義金曜講演会」や張継らによって組織された「社会主義講習会」の成立に伴い、アナキズムや社会主義の宣伝はますます活発な活動を展開することとなる。

同年、蜀魂という筆名を使った中国人留学生胡錫璋は、幸徳秋水、堺利彦による日本語訳『共産党宣言』に基づいて¹、初めて中国語訳の『共産党宣言』を出している²。1908 年春、劉師培と何震が編集した『天義』の春季増刊号に、民鳴（筆名）が抄訳した『共産党宣言』が掲載された。これらの事柄からわかるように、日本にいた中国人留学生の間においても徐々に社会主義・共産主義の影響が浸透されつつあった³。

上記の 1907 年は、中国のアナキズムや社会主義に関する翻訳と実践活動が最も活発な時期と言えるが、その活動の根源を中国人留学生の翻訳活動から見てみれば、実は 1900 年代のはじめにまで遡ることができる。すなわち、1900 年代の初期に、『訳書彙編』、『浙江潮』などの中国人留学生が発行した雑誌の中で、すでに社会主義に関する知識を紹介する文章が見える。特に 1903 年、幸徳秋水『社会主義神髓』をはじめとして多くの日本の社会主義関連の書籍が中国語版に翻訳・出版され、中国国内に輸入されている（後述）。

今までの中国の初期社会主義に関連する先行研究では、馬君武が『訳書彙編』と『政法学报』に発表した文章が重視されてきた⁴。また、川尻文彦は清末の中国知識人の社会

¹ 幸徳秋水、堺利彦による『共産党宣言』は 1904 年 11 月『平民新聞』第 53 号に、その初訳が掲載され、1906 年『社会主義研究』第 1 巻第 1 号に、その改訳が収録されている。玉岡敦「『共産党宣言』邦訳史における幸徳秋水/堺利彦訳（1904, 1906 年）の位置」、大村泉「幸徳秋水/堺利彦訳『共産党宣言』の成立・伝承と中国語訳への影響」『大原社会問題研究所雑誌』第 603 号、2009 年 1 月。

² 項旋「『共産党宣言』早期中訳者“蜀魂”考実」『歴史研究』2021 年第 6 期。

³ 民鳴訳「共産党宣言」『天義』第 16・17・18・19 四冊合刊、春季増刊、1908 年。

⁴ 清末期、馬君武の訳述活動について、黃嘉謨「馬君武の早期思想与言論」（『中央研究院近代史研究所集刊』第 10 期、1981 年 7 月）、夏曉虹「從男女平等到女權意識——晚清的婦女思潮」（『北京大學學報（哲學社會科學版）』1995 年第 4 期）、張曉溪「『民約』与『社会契約』究竟有多遠——以馬君武訳介

主義に対する認識の変化を日本の社会主義との関係で検討し、梁啓超と馬君武が初期社会主義思想の受容と伝播に果たした役割を高く評価した⁵。これらはいうまでもなく、馬君武が『社会主義与進化論比較』という一文で表した社会主義思想に対する認識に注目したからである⁶。しかし、これらの先行研究は馬君武の翻訳に注目しすぎて、『訳書彙編』に掲載されたそのほかの社会主義に関連する文章についてほとんど触れていない⁷。

また、中国人留学生によって発行された『浙江潮』に関する研究は豊富であるが⁸、同誌の中の社会主義に関する記事に注目した論考も多くはない。たとえば、狭間直樹『中国社会主義の黎明』は、『浙江潮』に掲載された大我の「新社会之理論」を詳しく分析し、特にその中で提示された「共產主義」と「極端民主主義」の意義と区別も検討しているのが唯一の先行研究といってよい⁹。

そこで、本章では、『訳書彙編』、『浙江潮』などの中国人留学生雑誌の中に掲載された社会主義関連の記事に注目し、1902年、1903年頃の中国人留学生の社会主義に関する知識と翻訳活動、そして社会主義に対する認識について検討しながら、中国達識社訳『社会主義神髓』の翻訳者の問題を解明することを試みる。

『民約論』為例』（『広東社会科学』2012年第4期）などの論考がある。

⁵ 川尻文彦「清末西学与明治日本——早期社会主義再考」黄愛平・黄興濤主編『西学与清代文化』中華書局、2008年。また陳啓源「論馬君武对社会主義學說的初步評介」『広西大学学报（哲学社会科学版）』1995年第2期。

⁶ たとえば、利興民主編『馬克思主義哲学在中国的伝播と発展』（広東高等教育出版社、1988年、34頁）、李其駒・王炯華・張耀先主編『馬克思主義哲学在中国——从清末民初到中華人民共和國成立』（上海人民出版社、1991年、13-14頁）。

⁷ 中国のマルクス主義の受容史に関する通論的な論考では、わずかな内容だが、『訳書彙編』に触れたものがある。たとえば、鍾家棟・王世根主編『20世紀——馬克思主義在中國』（上海人民出版社、1998年、27頁）、李軍林『馬克思主義在中国的早期伝播及其話語体系的初步建構』（学習出版社、2013年、39頁）、孫建昌「社会主義學說在中国的早期訳介与伝播（1900—1908）」（山東大学博士論文、2014年10月、38-40頁）の中で、『訳書彙編』などの留学生雑誌に社会主義関連文章があることが提示されている。

⁸ 戈公振『中国報学史』（上海商務印書館、1926年）、方漢奇『中国近代報刊史』（山西人民出版社、1981年）など新聞史の論考はほとんど留学生雑誌に触れている。そのほか、高橋強「清末中国人留日学生と『人生地理学』——『浙江潮』を通して」（『東洋哲学研究所紀要』第19巻、2003年）、田正平「救亡と啓蒙的二重奏——以留日学生刊物『浙江潮』為個案的考察」（『教育研究』2005年第11期）、劉訓華「近代留日学生的革命性——對『浙江潮』編輯群的歷史考察」（『江西社会科学』2014年第3期）、潘世聖「“近代国家”構想与“民族主義”及“革命”志向——1900年代留日学生雑誌考察之三」（『貴州師範大学学报』2017年第3期）などの論文は、雑誌の編集団体、誌面内容、雑誌の影響などの方面から検討を試みた。

⁹ 狭間直樹『中国社会主義の黎明』岩波書店、1976年。また、歐陽躍峰「20世紀初革命派對馬克思主義的紹介」（『安徽師範大学学报』第35巻第2期、2007年）は20世紀初期、馬君武、鄧英、朱執信などの「革命派」が発表した社会主義に関する文章を取り上げ、中でも大我「新社会之理論」に言及し、これらの文章に反映された作者の社会主義に対する認識を概説した。前掲孫建昌「社会主義學說在中国的早期訳介与伝播（1900—1908）」、42-43頁にも、大我「新社会之理論」の中の「新社会之主義」に言及した。

第一節 19 世紀末日本の社会主義運動

明治初期、socialism と communism の概念が初めて日本に輸入されたが、その受容において重要な役割を担ったのは、加藤弘之と西周などの明六社の思想家たちであった。しかし、彼らは「ソシアリスム」、「コムミュニスム」などの社会主義思想に対して否定的な態度をとっていた。

その後、自由民権運動の勃興に伴い、ルソー、スペンサーなどの数多くの西洋政治家の理論が日本に翻訳され、とりわけロシア虚無党の革命運動が紹介され、日本の社会主義運動を構成する重要な要素となっている。この時期、「社会党」が socialist の対訳として次第に定着するが、socialism の訳語はまだ定着しておらず、「社会党の主義」、「社会党論」、「社会論」、「社会説」、「社会の主義」、「社会主義」などの訳語が散見されていた¹⁰。

日清戦争後、日本社会においても多くの社会問題が顕在化し¹¹、いよいよ日本の社会運動は 1890 年後半から本格化することとなる¹²。

1897 年 3 月に東京で社会問題研究会が成立したが、この研究会は、もっぱら「学理と実際により社会問題を研究する」ことを目指す団体であった。この研究会の構成は、幹事の中村太八郎、樽井藤吉、西村玄道のほか、その主な会員といえば、三宅雪嶺、片山潜、シーガルスト、福本日南、酒井雄三郎、陸羯南、佐久間貞一、中村弥六、鳩山和夫、田口卯吉、田島錦治、松村介石、高橋五郎などが挙げられるが、同時期の参加者は約 200 名ほどであったと言われる¹³。この研究会は、以上の名前からわかるように、民権運動家や国粹主義者やキリスト教徒や社会主義研究者など様々な種類の人々が集まり、その関連性が最初から緊密でなかったため、一年余りで当初の勢いを失い、自然消滅してしまった¹⁴。

¹⁰ 以上、日本の社会主義思想の受容史について、絲屋寿雄『日本社会主義運動思想史 1853—1922』（法政大学出版局、1979 年、10-20 頁）、大田英昭『日本社会主義思想史序説』（日本評論社、2021 年、2-5 頁）を参照。

¹¹ 佐々木敏二『『国民之友』における社会問題論』『キリスト教社会問題研究』第 18 号、1971 年 3 月。佐々木敏二「日本の初期社会主義（3）」『経済資料研究』第 10 号、1976 年 3 月。

¹² 1882 年、樽井藤吉が中心となる「東洋社会党」が結成され、すぐ禁止させられたとしても、これは日本の社会主義運動の開始とみなされる。

¹³ 田中惣五郎編『日本社会運動史・資料』第 1 巻、東西出版社、1947 年、266-267 頁。幸徳秋水は石川安次郎の紹介で社会問題研究会に参加したが、目立った存在ではなかった。絲屋寿雄『幸徳秋水伝』三一書房、1950 年、72-73 頁。

¹⁴ 田中惣五郎の附記によれば、この会の消滅は、幹事の中村は刑事問題に連座し、西村は亡き、樽井は大陸に去ってしまうため、解散した。前掲田中惣五郎編『日本社会運動史・資料』第 1 巻、268 頁。

同年7月、労働組合運動の発展に伴い、日本でも高野房太郎、沢田半之助、片山潜らによって「労働組合期成会」が成立し、さらに12月、片山は機関紙『労働世界』を発刊し、新聞の編集と発行を主宰した¹⁵。

1898年10月、社会主義研究会が発足し、会長に村井知至が就き、高木正義、河上清、豊崎善之介、岸本能武太、新田俊秀、片山潜、佐治実然、神田佐一郎、幸徳秋水、金子喜一、安部磯雄などが主な会員として名前を連ねた¹⁶。この団体は、社会問題研究会から生み出されたもので、膨大な社会問題の一つとして社会主義に焦点を当ててはいるものの、会員が必ずしも社会主義者であるとは限らなかった。社会問題研究会は活発な講演会を行い、1898年10月から1900年1月までの間、10回の集会や講演会を開催したが、1900年1月に入ると、社会主義者ではない会員が脱退し、正式に社会主義協会と改名し、純然たる社会主義者の団体として生まれ変わるようになった¹⁷。

そして、1901年5月になると幸徳秋水、片山潜、安部磯雄、木下尚江、西川光次郎、河上清の6名は、より一歩踏み込んで、「社会主義を取る政党組織を協議」¹⁸した上で、社会民主党を結成し、宣言書を発表したが¹⁹、同月に日本政府の命令で解散させられてしまった²⁰。

以上、19世紀末の日本において、社会問題や社会主義思想に対する研究が盛んになった背景について簡単にまとめたが、このような背景下、先進的な近代文明を学ぶことを目指す中国人留学生が日本で勉学を開始し、日本で社会主義という新たな思想に出会ったのであった。

第二節 20世紀初中国における社会主義に関連する知識の紹介

中国では社会主義に関する知識がはじめて紹介されたのは、19世紀70、80年代の『西国近事彙編』中の記事に遡ることができるが、その記述は断片的な情報でしかなかった。

¹⁵ 隅谷三喜男「解題」労働運動史料刊行委員会編集『労働世界』中央公論事業出版、1960年。以下、『労働世界』を引用する場合、この資料集による。

¹⁶ 前掲田中惣五郎編『日本社会運動史・資料』第1巻、303-304頁。

¹⁷ 鹿野政直「社会問題の発生と初期社会主義」橋川文三・松本三之介編『近代日本政治思想史Ⅰ』有斐閣、1971年、335頁。1904年11月、社会主義協会は社会の安寧秩序に妨害する理由で解散されてしまった。「社会主義協会の解散」『東京朝日新聞』1904年11月20日。

¹⁸ 「社会民主党組織」『東京朝日新聞』1901年4月30日。

¹⁹ 「社会民主党起こらんとす」『労働世界』第77号、1901年5月1日、708頁。

²⁰ 「社会民主党解散せらる」『労働世界』第80号、1901年6月1日、714頁。また、赤松克麿『日本社会運動史』通信教育振興会、1949年、103-105頁。

その後、『万国公報』、『時務報』などの新聞紙に、欧米の社会主義政党の活動や社会主義の知識を紹介する記事がときに現れた。たとえば、古城貞吉訳「社会党開万国大会」は、1896 年に第二インターナショナルがロンドンで開催した大会の概況を初めて中国で紹介している²¹。また、李提摩太訳、蔡爾康撰文「大同学」には、「其以百工領袖著名者。英人馬克思也」（すべての労働者の領袖として有名な人はイギリス人のマルクスである）と述べ、中国で初めてマルクスを紹介した文献として有名である²²。しかし、これらの記事の影響が大きいわけではなかった。

この時期の社会主義に関連する中国語翻訳の特徴は、その記事の情報源が主に英字新聞、または英語の書籍から翻訳されたということと、翻訳者が丁賡良（ウィリアム・マーティン）、李提摩太（ティモシー・リチャード）などの西洋宣教師、及び古城貞吉のような日本人記者によるものであった、という点が明らかであろう。

この後、1900 年代に入ると、中国と海外の日本では、社会主義に関する知識を紹介する記事と翻訳が本格的に開始されている。特に 1902 年から 1903 年の二年間、多くの社会主義関連の書籍が中国語に翻訳され、中国国内に輸入された。なおその数量について、狭間直樹と川尻文彦は合計 11 点、裴植は 10 点前後、劉慶霖は 20 点前後、と数えている²³。

表 7-1 は、これら先行研究の統計と日本の国立国会図書館に所蔵された書籍の原本の情報を参照しながら、1902 年、1903 年に出版された社会主義関連の書籍をまとめたものである。

表 7-1 1902、1903 年に出版された社会主義に関する書籍

出版 年月（注 1）	書 名	原著者	翻訳者	出版社	出 典
1902 頃	十九世紀歐洲 政治史論	酒井雄三郎	不明	作新社	『十九世紀歐洲政治史論』東京専門学校出版部、1900 年 3 月

²¹ 古城貞吉訳「社会党開万国大会」『時務報』第 6 冊、1896 年 9 月 27 日。

²² 李提摩太訳、蔡爾康撰文「大同学第一章」『万国公報』第 121 冊、1899 年 2 月。この「大同学」はイギリスの社会学者ベンジャミン・キッド（中国語訳名は企徳、頡徳）の『社会の進化（Social Evolution）』から翻訳され、1899 年 2—5 月の『万国公報』第 121—124 冊に四章に分けて連載されており、後に広学会によって単行本が出版された。

²³ 狭間直樹『中国社会主義の黎明』（岩波新書、1976 年、81 頁）、川尻文彦「清末西学与明治日本——早期社会主義再考」（黄愛平・黄興濤主編『西学与清代文化』中華書局、2008 年）、劉慶霖「訳者的作用：論及馬克思及其学説的清末漢訳日書」（『中共党史研究』2018 年第 10 期）、裴植「1903 年的漢訳日文社会主義著作及其馬克思主義中国伝播」（『理論學刊』2020 年第 6 期）を参照。

1902. 8	二十世紀之怪物帝國主義	幸徳秋水	趙必振	上海通雅書局	『廿世紀之怪物帝國主義』警醒社、1901 年 4 月
1902. 9	最近俄羅斯政治史	有賀長雄	富士英	訳書彙編社	『近時政治史』東京専門学校講義
1902. 9	社会学	岸本能武太	章炳麟	広智書局	『社会学』大日本図書、1900 年 11 月
1902. 11	長舌	幸徳秋水	国民叢書社	上海商務印書館	『長舌』人文社、1902 年 2 月
1903. 2	社会改良論	島村満都夫	趙必振	広智書局	『社会改良論』静修館、1900 年 8 月
1903. 2	近世社会主義	福井準造	趙必振	広智書局	『近世社会主義』有斐閣、1899 年 7 月
1903. 2	社会党	西川光次郎	周子高	広智書局	『社会党』内外出版協会、1901 年 10 月
1903. 3	新社会	矢野龍溪	不明	作新社	『新社会』大日本図書、1902 年 7 月
1903. 3	社会主義	村井知至	羅大維	広智書局	『社会主義』労働新聞社、1899 年 7 月
1903. 5			侯士館	文明書局	
1903. 5	社会問題	大原祥一	高 種	閨学会	『社会問題』秀英舎、1902 年 11 月
1903. 3	世界之大問題	島田三郎	不明	上海通社	『世界之大問題：社会主義概評』警醒社、1901 年 10 月
1903. 8	社会主義概評		作新社図書局	作新社	
1903. 10	社会主義神髓	幸徳秋水	達識訳社	浙江潮編輯所	『社会主義神髓』朝報社、1903 年 7 月初版、再版、9 月三版
1903. 3 — 1904. 7	最新経済学	田島錦治	不明	作新社	『最近経済論』有斐閣、1897 年 8 月
1903 前	近世露西亞	占部百太郎	廖寿慈	上海通社	『近世露西亞』開拓社、1899 年 1 月
1903 頃	無政府主義	煙山専太郎	張 維	上海刊	有賀長雄校閲、煙山専太郎編著『近世無政府主義』東京専門学校出版部、1902 年 4 月
1902 — 1904	德意志史	河上清	褚嘉猷	上海通雅書局	『通俗独逸歴史』博文館、1901 年 9 月

出典：狭間直樹『中国社会主義の黎明』（岩波新書、1976 年、81 頁）、姜義華編『社会主義學說在中国的初期伝播』

（復旦大学出版社、1984 年）、川尻文彦「清末西学与明治日本——早期社会主義再考」（黄愛平・黄興濤主編『西学与清代文化』中華書局、2008 年）、孫建昌「社会主義學說在中国的早期訳介与伝播（1900—1908）」（山東大学博士論文、2014 年 10 月）、劉慶霖「訳者の作用：論及馬克思及其學說の清末漢訳日書」（『中共党史研究』2018 年第 10 期）、

裴植「1903 年の漢訳日文社会主義著作及其馬克思主義中国伝播」(『理論学刊』2020 年第6期)などの統計に基づいて、張於英「辛亥革命書徴」(張静廬輯注『中国近代出版史料・初編』群聯出版社、1954 年再版)、田伏隆「趙必振伝略」(『常德県文史資料』第3輯、1987 年)、鄒振環『影響中国近代社会の一百種訳作』(中国対外翻訳出版公司、1996 年)、熊月之編『晚清新学書目提要』(上海書店出版社、2014 年)、付建舟編『晚清民営書局発行書目』(黒竜江教育出版社、2016 年)などの資料を参照しながら作成。

注1：顧燮光『訳書経眼録』は1902—1904年間の出版書籍を記録するものであり、現物が確認できない現段階では、「1902—1904」のように表記する。沈兆禎『新学書目提要』の前三巻が1903年出版、第四巻が1904年出版、その内容は1903年前の二三年間の出版書籍を記録・評価するものであるため、「1900—1903」のように表記する。前掲熊月之「序言」『晚清新学書目提要』、7-8頁。

表 7-1 からは、合計 19 点の出版物が確認でき、しかもその多くが 1903 年に集中していることがわかる。以下、**表 7-1** から読み取れるこの時期の社会主義に関する翻訳の特徴を見ていきたい。

まず書名から見れば、西川光次郎『社会党』、福井準造『近世社会主義』、村井知至『社会主義』、幸徳秋水『社会主義神髄』など書名に「社会主義」や「社会党」という表現が多く用いられており、社会主義に関連する学説、思想、及び社会主義政党の活動や歴史などの専門書が翻訳されたことがわかる。

一方、田島錦治『最新経済学』、岸本能武太『社会学』、河上清『徳意志史』のような政治、経済、社会を概説する書籍の中でも、国家社会主義の経済学、社会党の活動、万国労働者同盟、または社会主義を主張した主な指導者の伝記などが紹介された。このほか、『無政府主義』や『近世露西亜』からわかるように、ロシア虚無党の活動についてはすでに翻訳が開始されていることがわかる。

著者という側面から見れば、学者(田島錦治、有賀長雄)、政治家(矢野龍溪)、新聞記者(幸徳秋水、河上清、占部百太郎)、社会運動家(西川光次郎)など様々な分野や職業の人が翻訳に関わり、彼らのほとんどは明治末期の日本の社会運動と関わり、社会主義に関連する思想団体に属していたことも確認できる。たとえば、酒井雄三郎、田島錦治、島田三郎は社会問題研究会の成立に関与し、酒井と田島はその評議員にも務めている²⁴。村井知至、河上清、幸徳秋水、岸本能武太は社会主義研究会の会員であった。幸徳秋水、西川光次郎、河上清は社会民主党の結成に参加した。

²⁴ 前掲田中惣五郎編『日本社会運動史・資料』第1巻、265-266頁。また、田島錦治は山崎覚次郎、桑田熊蔵、織田一、小野塚喜平次、高野岩三郎らが作った社会政策学会の活動にもよく参加した。

また、日本の社会主義関連の書籍を翻訳した中国知識人の構成においても興味深い点を指摘できる。すなわち、清末期の中国人留学生は、西洋の知識と思想を中国に輸入することを目指し、活発な翻訳活動を展開したが、社会主義関連の翻訳においても同じであった。中でも、最も大きな翻訳活動を展開したのは富士英、張継、高種²⁵などで、時には章炳麟、趙必振²⁶などの日本に亡命した一部の急進主義者も日本に滞在している間、社会主義を含めた翻訳の仕事に携わっている。

それでは、1902年と1903年という時期に数多くの社会主義関連の書籍が翻訳された理由はどこにその原因を求めることができるだろうか。

一つ目の要因は、当時の日本社会に求めることができる。すなわち、同時期の日本では、日英同盟と露仏同盟が締結されるにつれて、日本とロシアの対立が次第に表面化した。このように日本国内では、ロシアとの開戦に国民が熱狂的に歓呼するなかで、「日露非戦論」を唱える人々も現れていた²⁷。1903年、『万朝報』の記者である堺利彦と幸徳秋水は、「退社の辞」を発表し、「予等平生社会主義の見地よりして、国際の戦争を目するに貴族、軍人等の私闘を以てし、国民の多数はその為に犠牲に供せらるる者と為すこと」²⁸とあるように、旗幟を鮮明にして戦争に反対する人々も現れた²⁹。当時、わずか10代であった荒畑寒村は、横須賀造船工場の造船工として、この記事を読んで、「たちまち社会主義と非戦論との主張に感奮熱狂して、渾身の血を沸かしたのであった」³⁰、という。

同年、堺と幸徳らは平民社を創立し、それを拠点に活発な非戦活動を推し進めており、さらに11月、『平民新聞』を創刊し、その創刊号に「宣言」を発表し、「吾人は人類をして博愛の道を尽さしめんが為に平和主義を唱道す。故に人種の差別政体の異同を問はず、

²⁵ 高種は、字が子来。福建省侯官の人。1902年4月頃、私費で日本に留学。最初に清華学校（東京）に入った。その後、東京法学院大学に入学して法律を学んだ。帰国後、1908年の留学生試験に参加し、優等に並べられ法政科挙人の資格が得られた。清国留学生会館幹事『清国留学生会館報告』第1次—第5次、東京並木活版所、1902年—1905年。「考試游学畢業生案（一）」、教育部、国史館蔵、數位典藏号：019-010402-0102。

²⁶ 趙必振（1873—1956）字は日生、星庵と号す。湖南省武陵の人。唐才常の自立軍蜂起（庚子漢口之役）に参加し、失敗後、日本亡命。日本で章炳麟、秦力山と知り合いになり、『清議報』、『新民叢報』の編集を担当しながら、翻訳にも従事。民国期、財政部に入り、後辞任して北京民国学院、華北大学の教師を務める。田伏隆「趙必振伝略」『常德県文史資料』第3輯、1987年、1-9頁。また郭漢民主編『湖南辛亥革命人物伝略』（湖南人民出版社、2011年、522頁）の中「趙必振」の項目を参照。

²⁷ 鹿野政直「初期社会主義の展開」前掲『近代日本政治思想史Ⅰ』、344-346頁。絲屋寿雄「日露戦争における平民社の非戦運動」『日本社会主義運動思想史 1853—1922』、98-108頁。

²⁸ 荒畑寒村『新版 寒村自伝』上巻、筑摩書房、1965年、3-4頁。

²⁹ 彼らに次いで内村鑑三も自分のキリストの立場に立って非戦を説いている。絲屋寿雄『日本社会主義運動思想史 1853—1922』、105頁。

³⁰ 前掲『新版 寒村自伝』上巻、4頁。

世界を挙げて軍備を撤去し、戦争を禁絶せんことを期す」³¹とあり、雨露の非戦のみならず、人類が戦争を諦めるべきだと主張している。

一方、中国人留学生界の動向について、1902 年 3 月に清国留学生会館が正式に成立するに伴い、中国人留学生の活動が組織化することとなった。留学生たちは、成城学校入学事件、大阪万国博覧会事件、弘文学院退学事件³²、成城学校黄龍旗事件³³、拒俄運動などの一連の団体運動を経験し、時には日本政府、または学校当局と戦う豊富な闘争経験を蓄積することができた。

とりわけ 1903 年 4 月に入ると中国人留学生は、ロシアの撤兵不履行の行為に対して強く抗議し、「拒俄義勇隊」、「学生軍」、「軍国民教育会」などの一連の抵抗活動、いわゆる「拒俄運動」を行っていた³⁴。この後、留学生たちは近代的な愛国主義の感情に目覚め、さらにナショナリズムも高まることとなる。同年 11 月、『清国留学生会館第三次報告』の「序文」の冒頭に、「死！死！！死！！！！国の為に死ぬ！！！」³⁵と書かれたように、留学生は激しい愛国の感情を吐露している。この運動を機に、「軍国主義」、「社会主義」、「無政府主義」などの主義思想が中国人留学生界に広がっているように思われる。

以上で述べたように、この時期の日本社会と中国人留学生界の世論は、ロシアを共通の敵として想定していた。

ちょうどこの 1903 年を前後した頃に中国人の留学生、そして亡命者たちは、日本の社会主義者の演説会と出版物などを通して社会主義思想に接触した³⁶、と推測される³⁷。

たとえば、1903 年 3 月に幸徳、堺、安部磯雄、西川光次郎などの社会主義者は、神田美土代町の（基督教）青年会館で社会主義演説会を行ったが³⁸、同年にはそのほかにも社

³¹ 「平民新聞宣言」前掲田中惣五郎編『日本社会運動史・資料』第 1 巻、378 頁。

³² 北岡正子『鲁迅 日本という異文化のなかで——弘文学院入学から「退学」事件まで』関西大学出版部、2001 年、327-393 頁。

³³ 「成城学校運動会補懸龍旗事件」『浙江潮』第 4 期、1903 年 5 月 16 日。

³⁴ 楊天石・王学莊編『拒俄運動 1901—1905』中国社会科学出版社、1979 年。黄福慶『清末留日学生』中央研究院近代史研究所、1975 年初版、259-276 頁。また、JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. B12081626300、「4. 在本邦清国留学生挙動報告」、在本邦清国留学生関係雑纂/雑之部 第一巻（B-3-10-5-3_6_001）（外務省外交史料館）には、軍国民教育会と学生軍に関する日本側の記録が収録された。

³⁵ 清国留学生会館幹事『清国留学生会館第三次報告』東京並木活版所、1903 年 11 月、「序文」、1 頁。

³⁶ 前掲田伏隆「趙必振伝略」『常德県文史資料』第 3 輯、2 頁）では、趙必振が日本社会主義者の講演を聞いたことがあると記されているが、趙が滞在している 1901 年頃の東京にて、社会主義研究会により行われた講演だと推測される。

³⁷ 中国の革命者と日本の社会主義者との初めての接触は、1904 年 12 月の『平民新聞』に孫文の「支那問題の真の解決」の部分訳が「革命潮」と題して掲載された記事であるまで待つ必要がある。永井算巳「社会主義講習会と政聞社」『中国近代政治史論叢』汲古書院、1983 年。鄭匡民「社会主義講習会と日本思想の関係」『社会科学研究』2008 年第 3 期。

³⁸ 「本日 社会主義演説会」『読売新聞』1903 年 3 月 6 日。また、中華留日基督教青年会館は当初（1906 年）、ここに間貸していた。渡辺祐子「もうひとつの中国人留学生史——中国人日本留学史における

会主義非戦論大演説会が二回も開催された³⁹。その他にも、社会政策学会、社会問題研究会（矢野文雄発起）などの研究会においてもしばしば社会主義を取り上げた演説会や茶話会が開催された。

なお、日本の社会主義関連の出版物について、田中惣五郎の統計によれば、1902年に合計27種類が確認されるが、1903年に入ると合計47種類に急増しており、そのほかに『平民の友』、『家庭雑誌』、『平民新聞』などの新聞雑誌が刊行されたのも同じ時期である⁴⁰。

おそらくは、これらの講演会や出版物は、中国人留学生が社会主義に関する知識を受け入れる重要なルートの一つであったのだろう。

以上、社会主義に関連する書籍の翻訳について考察したが、実はこの時期に梁啓超が主宰した新聞雑誌においても社会主義に関する知識を紹介する文章がしばしば掲載されている。1902年10月の『新民叢報』第18号において、梁啓超は「進化論革命者頌徳之学説」を発表し、「今のドイツにおいて、二大思想の勢力が強くて、一つは麦喀士〔マルクス〕之社会主義、もう一つは尼志埃〔ニーチェ〕の個人主義」⁴¹とあるように、マルクスとドイツの社会主義について言及している⁴²。

また、村井知至『社会主義』の部分訳が上海の『翻訳世界』に1902年11月から1903年1月までに掲載されている⁴³。ほかに久松義典の『近世社会主義評論』が、杜士珍によって部分訳され、1903年2月から4月まで上海の『新世界学報』に5号に分けて連載されている⁴⁴。

一方、『訳書彙編』、『政法学報』、『浙江潮』、『江蘇』などの中国人留学生の雑誌の中で、社会主義に関する知識を紹介する文章も少なくない。以下、これらの中国人留学生雑誌の視点から、留学生の社会主義に対する認識、または受容を検討する。

中華留日基督教青年会の位置』『明治学院大学教養教育センター紀要：カルチュラル』（第5巻第1号、2011年3月）、高田幸男「中華留日基督教青年会について——同会『会務報告』を中心に」『明大アジア史論集』（第23号、2019年3月）を参照。

³⁹ 前掲田中惣五郎編『日本社会運動史・資料』第1巻、375、377頁。

⁴⁰ 前掲田中惣五郎編『日本社会運動史・資料』第1巻、366-367、390-394頁。

⁴¹ 梁啓超「進化論革命者頌徳之学説」『新民叢報』第18号、1902年10月16日、28頁。（今之德国。有最占勢力之二大思想。一曰麦喀士之社会主義。二曰尼志埃之箇人主義。）

⁴² 梁啓超と社会主義との関係については、石川慎浩「梁啓超と社会主義——1903年訪米時の社会主義者との問答より」『東方学報』第94号、2019年12月を参照。

⁴³ 村井知至「社会学：社会主義」『翻訳世界』第1—3期、1902年11月30日—1903年1月29日。

⁴⁴ 久松義典『近世社会主義評論』文学同志会、1900年10月。杜士珍「近世社会主義評論」『新世界学報』第11—15号、1903年2—4月。姜義華編『社会主義学説在中国的初期伝播』（復旦大学出版社、1984年、237-257頁）は、その記事を節録した。

第三節 『訳書彙編』と『政法学報』における社会主義に関連する知識の翻訳

本論文の第5章、第6章ですでに分析したように、『訳書彙編』は「政治、行政、法律、経済、政史、政理など政治関係を主とする」⁴⁵雑誌であることから、同誌が社会主義関連の文章を早い段階から載せることは不思議ではない。特に同誌は第2年第9期から雑誌の編集体制を整備し、従来の翻訳を掲載する方針から、知識と理論を理解した評論を掲載する方向へと転換を図っており、特に1903年の社会主義思想と学説についても同じ傾向が見られる。

表 7-2 『訳書彙編』と『政法学報』中の社会主義関連文章

雑誌	タイトル	掲載期数	著 者	翻訳者	翻訳箇所	出 典
訳 書 彙編	十九世紀歐洲政治史論	第 1、2 期	酒井雄 三郎	不明	第二章政党的抗争及 政 制 の 変 革 （ 四 ） 1848 年の革命及びそ の 影 響 （ 未 完 ）	『十九世紀歐洲政治史 論』東京専門学校出版 部、1900 年 3 月/博文 館より発売
	近世〔時〕政治史	第 1、2、 3、6、8 期	有賀	富士英	第一部 独逸帝国 (完訳)	『近時政治史』東京専 門学校講義、年代不明
	最近俄羅斯政治史	第 2 年第 5、6 期	長雄		第三部 露西亞之部 (完訳)	
	社会主義与進化主義 比較 附社会党巨子 所著書記	第 2 年第 11 期	君武〔馬君武〕			
	社会主義之鼻祖 德 麻司摩兒之華嚴界觀	第 2 年第	君武〔馬君武〕			
	俄羅斯之国会	12 期	戸水 寛人	本社 社員		
	政法 学報	社会党巨子 加菩提 之意加尼亞旅行	癸卯年第 1 期	君武〔馬君武〕		

⁴⁵ 『訳書彙編』第1期、1900年12月6日。

	日本朝野名士対俄日 開戦之意見	癸卯年第 4 期	瀧川学人	
--	--------------------	-------------	------	--

出典：『訳書彙編』第 1—9 期、第 2 年第 1—12 期の目次（1900 年 12 月—1903 年 3 月）と『政法学報』癸卯年第 1—8 期の目次（1903 年 4 月—1904 年 5 月）により作成。

注：①1902 年 7 月の『訳書彙編』第 2 年第 5 期に、「時事漫論五則」に掲載された短い文章「帝国主義」の中、「日本幸徳秋水氏目此主義為二十世紀之怪物。雖然。怪物既出。与之為敵則受害固無窮。与之合体則獲利亦無窮。是在善駕馭之而已」と書かれるように、幸徳秋水の『二十世紀之怪物帝国主義』が紹介されている。

②1903 年 12 月、『政法学報』第 5 期に、春水という筆名で掲載された「中国国学保存編之一」において、新旧道德の關係や道德進歩を論じる際に、「言自由者。不図政治改革之公事。而特為箇人競争之口実也。言社会主義者。不知平均勞力之公理。而持為均財自逸之口実也」（自由を言う者は、政治改革の公事を図らず、ただ個人競争を行う口実にする。社会主義を言う者は、平均労働力の公理を知らず、ただ財産を均等に分配して私腹を肥やす口実にする）とあり、理性的な判断ができない現象を批判するために、自由と社会主義を例として並列させているが、本論文の社会主義理解とは異なるものなので、表には含めていない。春水「中国国学保存編之一」、『政法学報』癸卯年第 5 期、1903 年 12 月 25 日、19 頁。

表 7-2 は『訳書彙編』と『政法学報』において、社会主義に関する知識を紹介する文章をまとめたものであるが、それによれば、翻訳と著述を含めて七つの文章が確認されている。

これらの文章は如何なる社会主義に関する知識を紹介しているのか、原本と比較しながら検討していきたい。

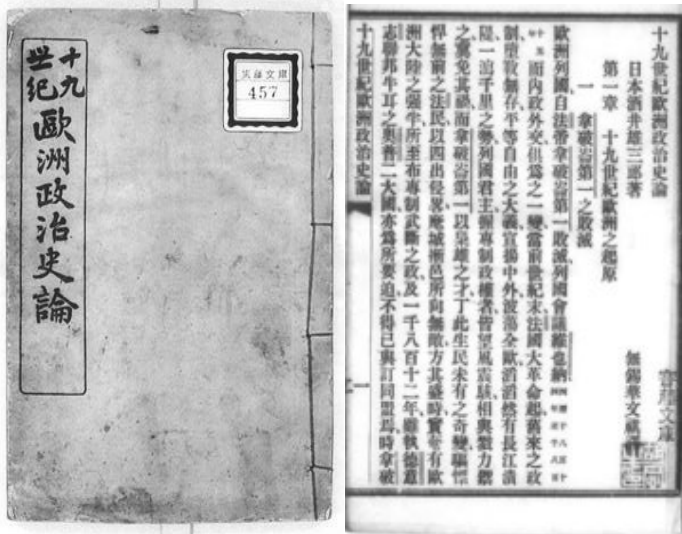
「十九世紀欧洲政治史論」は、酒井雄三郎が著した同名の本が翻訳されたもので、『訳書彙編』第 1 期と第 2 期に掲載されたが、原本の内容に照らしてみると、翻訳は全訳ではなく、「第二章 政党の抗争及政制の変革（四）1848 年の革命及びその影響」の最初の部分までを翻訳していることがわかる（同書の全訳は後に単行本として出版された）。

ところが、沈兆禕『新学書目提要』によれば、酒井雄三郎『十九世紀欧洲政治史論』の中国語版は 2 種類あり、一つは華文祺が翻訳した上海教育世界社本（図 7-1）で、もう一つは作新社本であり、なおそれぞれの紹介文によって同じ原本を翻訳しているが、訳文が全く異なると述べている⁴⁶。励志会と訳書彙編社は、作新社と密接なつながりを持っていたことから、この作新社の全訳が『訳書彙編』上の連載に基づくものである、と推

⁴⁶ 沈兆禕『新学書目提要』上海通雅書局、1903—1904 年（熊月之編『晚清新学書目提要』上海書店出版社、2014 年、428—429 頁）。華文祺と『訳書彙編』の訳本を比較してみると、内容が異なっている。

定される。しかし、作新社本にも、『訳書彙編』の誌面にも、翻訳者の名前が明記されていないため、翻訳を担当した人が励志会の会員であったことのほかは、その人物を特定することはできない。

図 7-1 華文祺訳『十九世紀歐洲政治史論』



出典：酒井雄三郎著、華文祺訳『十九世紀歐洲政治史論』上海教育世界社、1902 年 4 月、東京都立中央図書館実藤文庫蔵。

酒井雄三郎の『十九世紀歐洲政治史論』は、1830 年フランス革命後のヨーロッパの変化を述べる際⁴⁷、社会党の活動を紹介している。下記の日本語原文に照らしてみれば、『訳書彙編』訳と華文祺訳との違いがわかる。

『十九世紀歐洲政治史論』の日本語原文の一部（1900.3）：而して此の間更に国際的性質を帯びたる二大党を現出したり。『社界党』及び『加特力党』〔カトリック党〕則ち是れなり。蓋しこの二党は齊しく従来の政党より分岐したるものなりと雖ども、偕に政治を以て其の本然の目的となさず、唯た政權を利用して、その一は社

⁴⁷ 1830 年革命は即七月革命。1830 年 7 月、フランスにおいてブルボン復古王政が倒された革命をいう。

界旨義を実際に応用し、〔中略〕社界党はその党与を民主党の中に求め、矯激粗暴の言動を事とする都市の職工を糾合して大にその勢力を張り、普通選挙の制を設けて冷く政権を社界の下層に配分せむことを要求すと雖も、その期する所は之れに由りて多く自党の代議士を議会に出だし、以てその社界革命の企図を実行するに在り。⁴⁸

『訳書彙編』の翻訳（1901.1）：当此之時。忽有所謂社会党。与加特力党者。二党雖由從來之政党分岐。而均不能以政治為本然之宗旨。惟利用政權而已。其政綱如左。
一 応以社会主義。見諸施行。〔中略〕社会党則反是。求同党於民主黨中。且糾合矯激粗暴之工人。以大張其勢力。設普通選挙之制。極力要求政權。使普及全国不分上下。而其所希望者。欲使議會之代議士。多為同党。以遂其社会革命之計而已。

49

華文祺の翻訳（1902.4）：而是時更有二大党出、即社界党加特力党是也、此二党雖係由旧來之政党分出者、然不以政治為本旨、唯皆假用政權而一欲实行其社界之旨義、〔中略〕社界党則求其党于民主黨中、糾合矯激粗暴之工人、大張其勢力、要求設普通選挙之制、使政權普及于齊民、意蓋欲藉是使已党多于議會、实行社界革命之志⁵⁰

ここで紹介した部分は、社会党の目的と手段を紹介しているが、社会主義理論や思想については言及されていない。ただし、中国語版の翻訳からいくつかの翻訳の特徴を指摘できる。

華文祺訳では、日本語原文のままに「社界党」、「社界之旨義」と直訳したのに対して、『訳書彙編』は時代を反映したこともあって「社会」を「社界」、「社会主義」を「社界旨義」に対訳している。

1890年代、日本の新聞雑誌には、societyの訳語として「社界」という語はまだ定着せず、「社会」という表現と混せて使われており、たとえば、当時の『教育報知』では、

⁴⁸ 酒井雄三郎『十九世紀欧洲政治史論』東京専門学校出版部、1900年3月、27頁。波線は筆者による、以下同。

⁴⁹ 「十九世紀欧洲政治史論」『訳書彙編』第2期、1901年1月28日、63-64頁。

⁵⁰ 酒井雄三郎著、華文祺訳『十九世紀欧洲政治史論』上海教育世界社、1902年4月、21丁表。

「教育社界」、「社界教育」、「実業社界」などの見出しが見られる⁵¹。1890 年代後半から、「社会政策」や「社会問題」などの言葉が日本社会で流行するにつれて、労働社界、教育社界、経済社界のように、「社界」の表す範囲が次第に限定され、「界」の意味はほぼ一致するに至った。

一方、中国においては、周知の通り、嚴復が society を「群」と訳し、スペンサーの学説を「群学」と名づけたのに対して、梁啓超が「群学 日本では社会学という」⁵²ように日本語の「社会学」を中国語にそのまま取り入れている⁵³。したがって、日本の学術用語や社会に馴染んでいる中国人留学生は、日本語の「社会」、「社会主義」の意味と用法をほぼそのまま受容し、「社界」を意図的に「社会」と訳した、と推定される。

1903 年に中国人留学生の汪栄宝と葉瀾が編纂した語集の『新爾雅』は「釈群」の箇所では、「二人以上の協同生活体。謂之群。亦謂之社会 研究人群理法之學問。謂之群学。亦謂之社会学」⁵⁴とあるように、「群」と「社会」、「群学」と「社会学」を並列させて解釈している。このことから、1903 年頃を境に、中国人留学生が「社会」という用語を受容し、「社会」の意味と用法は次第に定着していたと思われる。

次に、ほかの翻訳記事である「近世政治史」と「最近俄羅斯政治史」を見ておこう。この二つの文章は、いずれも有賀長雄『近時政治史』を部分的に翻訳したものである。原本は「独逸帝国」、「仏蘭西之部」、「露西亞之部」の三部により構成され、有賀長雄の東京専門学校の講義録であるが⁵⁵、「近世政治史」が第一部「独逸帝国」を訳して『訳書彙編』の第 1 期、第 2 期、第 3 期、第 6 期、第 8 期に連載され、「最近俄羅斯政治史」が第三部「露西亞之部」を訳して同誌の第 2 年第 5 期と第 6 期に掲載されている。この文章は、最初に翻訳された時点では翻訳者の名前が記されていないが、『訳書彙編』の第 2 年第 9 期（1902 年 12 月）の「本社新書広告」の中に翻訳者が富士英であること明記されていることから、その訳者はともに富士英だ、と推定される⁵⁶。

⁵¹ ほかに、「日本社界の一大弊源」(『女学雑誌』第 158 号、1889 年 4 月)、「社界と国家」(『愛知学芸雑誌』第 33 号、1894 年 5 月)、「露西亞ノ社界組織」(『国家学会雑誌』第 160 号、1900 年 6 月)などがある。

⁵² 梁啓超「論学日本文之益」『清議報』第 10 冊、1899 年 4 月 1 日。(群学 日本謂之社会学。)訳文は岡本隆司・石川禎浩・高嶋航編訳『梁啓超文集』(岩波書店、2020 年、125 頁)を参照。

⁵³ 金観清・劉青峰「從『群』到『社会』、『社会主義』——中国近代公共領域變遷的思想史研究」『觀念史研究——中国現代重要政治術語の形成』法律出版社、2009 年。

⁵⁴ 汪栄宝・葉瀾編纂『新爾雅』文明書局、1903 年、63 頁。(二人以上の共同生活体はいわゆる「群」であり、また「社会」とも言われる。人群理法を研究する學問はいわゆる「群学」であり、また「社会学」とも言われる。)

⁵⁵ 有賀長雄講述『近時政治史』東京専門学校蔵版、年代不明。そのほか、同氏『近時外交史』早稲田大学出版部、1910 年十版(1898 年初版)と『欧州近時政治史』早稲田大学出版部、1911 年などがある。

⁵⁶ 1902 年 9 月頃、『最近俄羅斯政治史』は訳書彙編社により出版された。一方、『訳書彙編』に連載される「近世政治史」は『最近德意志政治史』(「訳書彙編社出版書目」『訳書彙編』第 2 年第 9 期)と名づ

この文章は内容から見れば、第一部「独逸帝国」ではドイツ社会党の設立の歴史を、第三部「露西亜之部」ではロシアの虚無党の革命活動がそれぞれ紹介している。

まず、第一部「独逸帝国」の翻訳を検討する。「近世政治史」の「第二節政党」では、ドイツ議会の「憲法反対の政党」が紹介され、社会党とその特徴について、以下のよう

に述べられている。

有賀長雄講述『近時政治史』の第一部「独逸帝国」の日本語原文：第四は社会党なり。社会党は元と二派ありしか千八百七十五年以来團結して所謂労働者社会党なるものを為せり。此の党は未だ共和党の名称を用いるとを許されずと雖も、其の実は君主政体に反対し、並に資本家及教会の勢力に反対するものなり。〔中略〕其功空しからず社会党選挙者の数は全国を通して、三十万なりしより通次増進して、百七十万に達したり。社会党代議士は製造事業の盛なる地方より選出せられ、少なきときは二人、多きときは四十四名を算したり。彼等は合併以前に於て、兩派の領袖たりしリープクネヒト及ベーベルを以て指導者とせり。⁵⁷

『訳書彙編』の翻訳：其四社会党是也。社会党本分二派。而自千八百七十五年团併以後。則所謂労働社会党也。労働下等社会之謂也 此党雖未許用共和党之名。而実与君主政体反对。并与資本家及教会之勢力相抗者也。〔中略〕通計全国社会党選挙之数。自三十万通加至百七十万。社会党之代議士。選自製造事業盛処者。少則二人。多至四十四人。⁵⁸

『訳書彙編』の翻訳は、原文に照らしてみれば、ほぼ忠実な翻訳であると言えるが、訳者が意図的に原文を添削した箇所も見られる。一つは、この段落の最後には、「兩派の領袖たりしリープクネヒト及ベーベル」⁵⁹という言葉が削除されるが、その理由がわから

け、単行本として訳書彙編社により出版された。また、作新社は『近世政治史』を出版したが、有賀長雄『近時政治史』とどのような関係があるのかまだ不明である。ただし、一つ指摘できるのは、その出版年月について、付建舟編『晚清民黨書局發行書目』（黒竜江教育出版社、2016年、439-465頁）に収録された1904年7月と1906年の作新社の新書広告を照らしてみれば、少なくとも1904年7月以降に出版されたのは確認できる。

⁵⁷ 有賀長雄講述『近時政治史』東京専門学校、年代不明、4頁。

⁵⁸ 「近世政治史」『訳書彙編』第1期、1900年12月6日、59頁。波線は筆者による。

⁵⁹ 有賀長雄講述『近時政治史』東京専門学校、年代不明、5頁。リープクネヒトはWilhelm Liebknecht（1826-1900）を指し、ドイツの社会主義者。スイス、次いでロンドンに亡命してマルクスに師事。1869年、ベーベル（August Bebel、1840-1913、ドイツの社会主義者）とともに社会民主労働者党を結成。1875年、ラッサール派と合同して社会主義労働者党を結成。

ない。もう一つは、「労働下等社会之謂也」（労働者階級を代表する）というように「社会党」に対する補足的な説明が加えられている。

当時、翻訳者が社会党と社会主義に対してどのように理解するのかについて、下記の訳文から詳しく伺うことができる。

有賀長雄講述『近時政治史』の第一部「独逸帝国」の日本語原文：第三章 社会党鎮圧及社会政策 第一節 社会党の由来 帝国政府は創業の時より社会党の鎮圧に力を用ひ始めは通常の裁判制度に依りその目的を達せむと試みたり。然れども千八百七十三年の不景気の為めに社会党の勢焰は頓に増長せり。元と社会党にはカール、マルクスの派とラスサレの派とありて後に合一す。⁶⁰

『訳書彙編』の翻訳：第三章 社会党鎮圧及社会政策 西国学者。憫貧富之不等。而為傭工者。往往受資本家之压制。遂有倡均貧富制恒産之說者。謂之社会主義。社会云者。蓋謂統籌全局。非為一人一家計也。中国古世有井田之法。即所謂社会主義。 第一節 社会党之由来 帝国政府自創業以来。即用力以鎮圧其社会党。始則用尋常之裁判制度以鎮圧之。而以一千八百七十三年之阻滯。故社会党之勢焰頓増。社会党本分麥克司及拉司来二派〔派の誤力〕。後合為一。⁶¹

まず波線の文に注目しなければならない。すなわち、「西洋の学者は、貧富の懸隔と財産分配の不平等に悲しんで、労働者が資本家に抑圧されてきたため、ついに恒産を制し貧富を均一するという説を提唱したが、これを社会主義という。社会というものは、蓋し全体を計画、案配するもので、一人、または一家を計るものではない。古代中国でも井田制があったが、それが社会主義である」、という。

翻訳者は社会主義に対して二つの定義を示しているが、とりわけ「井田制＝社会主義」という一説について、梁啓超も「古代中国の井田制は、まさに近世の社会主義と同じ立場にある」⁶²、という意見を表明している。実は、井田制と社会主義を同じものと見なす

⁶⁰ 有賀長雄講述『近時政治史』東京専門学校、年代不明、22-23頁。

⁶¹ 「近時政治史」『訳書彙編』第2期、1901年1月28日、51頁。下線は原文通り、波線は筆者による。

⁶² 梁啓超「中国之社会主義」『新民叢報』第46—48合号、1904年2月14日、303頁。（中国古代井田制度。正与近世之社会主義同一立脚点。）

のは、当時の多くの知識人の間にはほぼ一般論として受け入れられ、特に革命を主張する人々は土地政策を宣伝する際に、井田制を借用して人々を説得している⁶³。

また、この文の最後には、社会党の二派の代表者として「麦克斯」と「拉司来」が挙げられるが、二人に関して補足説明がなされていない。実はこの「麦克斯」はカール・マルクスであり、「拉司来」は全ドイツ労働者同盟の創設者であるフェルディナント・ラッサールを指している⁶⁴。これは『訳書彙編』の中で、初めてマルクスの名前が出現した事例として注目したい。

続いての記事「最近俄羅斯政治史」においては、1869 年スイスのバーセル大会で第一インターナショナル内部の対立、及びその対立がロシアの革命運動に与えた影響について詳しく紹介された。特に以下のような内容がある。

有賀長雄講述『近時政治史』の第三部「露西亜之部」の日本語原文：露国国内の事情
此の如くなるを見て外国にありし露西亜人は社会党の主義を輸入し以て下等社会より革命の運動を起さむと試みたり。而して其の流儀に自ら二派あり、即ち仏国ブルードホンの破壊主義を輸入せむとしたるバクニンの一派及独逸マルクスの共產主義を有入せむとしたるラヴロフの一派はれなり。⁶⁵

『訳書彙編』の翻訳：俄国国内之事情如此。其在外之俄人。亦専以輸入社会党之主義為急務。以謀革命之事。起自下等社会。而其中自分二派。一則輸入法国潘特化之破壊主義。所謂白克銀派是也。一則輸入德国馬克司之共產主義。所謂拉維洛夫派是也。⁶⁶

ここでは、ロシアの虚無主義と社会主義の由来について、フランスのブルードン（潘特化と訳す）⁶⁷の破壊主義を受容するバクニン（白克銀と訳す）⁶⁸派とドイツのマルク

⁶³ 孫順順「我国近代社会思潮中对儒家井田制的重構」『当代世界社会主義問題』2019 年第 4 期。

⁶⁴ フェルディナント・ラッサール（1825—1864）はドイツの社会主義者。国家の援助のもとでの生産者協同組合の設立と普通選挙権の獲得を主張。1863 年、全ドイツ労働者同盟を設立。

⁶⁵ 有賀長雄講述『近時政治史』東京専門学校、年代不明、410 頁。

⁶⁶ 「最近俄羅斯政治史」『訳書彙編』第 2 年第 5 期、1902 年 7 月 25 日、37 頁。下線は原文通り、波線は筆者による。

⁶⁷ 潘特化はブルードン（1809—1865）の訳名であり、フランスの社会主義者。民主的な経済制度や相互連帯に基づく自由で平等な社会の実現を主張。経済的自由主義、共產主義、国家を否定した。

⁶⁸ 白克銀はバクニン（1814—1876）の訳名であり、ロシアの革命家。無政府主義者。1840 年代、ヨーロッパ各地の革命に参加したが捕らえられ、シベリアに流刑。1861 年、脱走して日本、アメリカを経て、ロンドンに亡命。第一インターナショナルに参加したが、マルクスと対立して除名された。

ス（馬克司）の共産主義を輸入するラヴロフ（拉維洛夫と訳す）⁶⁹の一派が紹介されながら、ロシアの革命運動が実は「下等社会」（日本語原文のまま）より起こされたものである、という革命路線が提示され、さらにパーセル大会でマルクスと対立したバクーニンが発表した自党の綱領も全文掲載された。しかしこの文章から訳者の態度を読み取りにくく、ただ一種の知識として訳出したもの、と考えられる。

なお、『訳書彙編』第2年第12期に掲載された「俄羅斯之国会」は、戸水寛人『露西亞之国会』⁷⁰を翻訳したもので、同じロシアの政治史あるいはロシア国会の歴史に触れてきた。特に注目したいのは、文章最後に見られる翻訳者の評価の部分である。

今俄国虚無主義殆餘漫全世界。豈於祖国反無形〔影〕響。抑彼邦文明党雖与持虚無主義者異趣。要皆承歐洲諸大家之学説。又激於事態之必然。合流同趨。可断言者。江河滔滔。往而不復返。孰排決是。孰疏導是。⁷¹

〔今、ロシア虚無主義が全世界にむやみに広がってきたが、逆に祖国〔ロシア〕においてどうして何にも影響がないのだろうか。そもそもロシアの文明党は虚無主義者の主張と異なるものの、〔その理論思想が〕ともにヨーロッパ諸大家の学説を受け継ぐものであり、時勢の必然に応じて合流してきたものである。断言できるのは、江河は滔滔として、往きてまた返らず、ということで、その流れを妨げるのが良いのか。その流れを導くのが良いのか。〕

すなわち、訳者は、「所謂虚無党ナルモノノ性質ニ付テハ、世人往々之ヲ誤解スト雖是決シテ真ノ社会党共產党ノ謂ニ非ズシテ、其实ハ改革党ニ外ナラズ」⁷²という戸水の見解に賛同し、ロシアの文明党と虚無党の起源は同一であることから、二つの政党を改革党とみなしている。そして、「文明党ノ輿望ヲ容レテ国会ノ開設スルノ日ハ是露西亞全国大に紛擾シ怒涛激浪囂然トシテ吼フルノ時ナリ」⁷³とあるように、ロシア政府が文明党の「建設国会」（国会設立）の意見を受け入れないと、必ずそれに取って代わる政党が出てくるので、虚無党の主義主張に対する単なる批判の立場を取るべきではない、とする。

⁶⁹ 拉維洛夫はビョートル・ラヴロフ（1823—1900）を指し、ロシアの社会思想家、ナロードニキの理論家。

⁷⁰ 戸水寛人『露西亞之国会』有斐閣、1900年5月。

⁷¹ 本社社員「俄羅斯之国会」『訳書彙編』第2年第12期、1903年3月13日、66-67頁。

⁷² 前掲戸水寛人『露西亞之国会』、18-19頁。

⁷³ 前掲戸水寛人『露西亞之国会』、19頁。

こうしたロシア政府の現実から文明党と虚無党への対策について訳者自身の判断が下された。

以上、『訳書彙編』に掲載された初期の社会主義と共産主義に関連する文章の翻訳を考察した。上記の分析からわかるように、この時期、社会主義政党や思想に対する翻訳の特徴の一つは、翻訳者が社会主義を正確に理解し、意図的に社会主義を翻訳したのではなく、ヨーロッパの政党史、または政治史そのものを翻訳する際に、これらの著作の中で、ちょうどドイツ社会党やロシア虚無党に関する内容が含まれていたのをそれを抽出した、という事実であろう。これは次に論じる馬君武の翻訳の場合とは大きく質を異にしている。

すなわち、『訳書彙編』発行の第三段階に至って馬君武⁷⁴は、いくつかの文章を掲載しているが、その内容には翻訳の他に、馬君武自身の社会主義思想に対する認識と理解が付け加えられている（表 7-2 を参照）。

1902 年初、馬君武は私費で日本留学を実現し、1903 年には京都大学理工科大学に入学して、工芸化学を学んだが⁷⁵、卒業できず、1906 年帰国後、上海の中国公学に務めていた⁷⁶。1902 年から 1903 年にかけて、馬は翻訳と著述活動をしながらか、支那亡国二百四十二年記念会などの活動においても活躍することになるが⁷⁷、特に翻訳において旺盛な活動を展開し、2 年間の間に少なくとも 24 本が発表していることから、彼の著述活動の最盛期と言ってもよい。そのうち、社会主義の関連知識について言及したのは、表 7-2 中の三つの文章以外、また「唯物論二巨子之学説 底得婁 拉梅特里」、「聖西門（一作西士門）之生活及其学説 仏礼兒之学説附」などが挙げられる⁷⁸。

⁷⁴ 馬君武（1880—1940）、旧名が道凝、字が厚山、責公。君武を号す。広西省桂林の人。1899 年、広西体用学堂に入り、1900 年、広州の丕崇学院に入学しフランス語を学んだ。1901 年、日本留学、1903 年、京都大学に入学し、応用化学を学んだ。1905 年、中国同盟会に参加。同年末、帰国し、上海中国公学総教習兼理化教授。1907 年、ドイツ留学、ベルリン工科大学に入学。1912 年、南京臨時政府実業部次長、代理部長に任ず、『中華民国臨時約法』の起草に参加。1913 年、参議院議員。二次革命失敗後、またドイツ留学、ベルリン農科大学に入学。1916 年帰国。1917 年 9 月、広州大元帥府秘書、広東軍政府交通部部長。1921 年、中華民国非常大總統府秘書長。1924 年、私立上海大厦大学校長。1925 年、段祺瑞政府の司法総長。1930 年、私立上海中国公学校長。1931 年、広西大学校長。1938 年 6 月、第一回国民参政会参議員。1939 年、国立広西大学校長。1940 年、桂林で病没。徐友春主編『民国人物大辞典（増訂本）』河北人民出版社、2007 年、1161 頁。

⁷⁵ 『京都帝国大学一覽』明治 37—38 年、1905 年 3 月、81 頁。前掲『清国留学生会館第三次報告』、『同学姓名調査録』、1 頁。

⁷⁶ 馬君武の留学履歴について、馬君武「自序」『馬君武詩稿』序文、1913 年 5 月 28 日。莫世祥編『馬君武集』華中師範大学出版社、1991 年、395 頁）を参照。また、小野和子「京都大学最初の中国人留学生——『女性の権利』の訳者馬君武」（京都橘女子大学女性歴史文化研究所編『京都の女性史』同朋舎、2002 年、121—146 頁）は馬君武の留学時代を詳しく考察したので参照されたい。

⁷⁷ 馬君武は発起人として、革命運動と言われる「支那亡国二百四十二年記念会」に参加した。孔祥吉・村田雄二郎「章炳麟と支那亡国記念会」『清末中国と日本——宮廷・変法・革命』研文出版、2011 年。

⁷⁸ 君武（馬君武）「唯物論二巨子之学説 底得婁 拉梅特里」『大陸』第 2 期、1903 年 1 月 8 日）、「聖

馬君武の文章では、マルクス（馬克司）とその著書⁷⁹が紹介されたが、その主義主張に対して、「マルクスの思想はユートピアの類である。彼が言う理想の世界は、一大革命を経てから、一挙に成し遂げることができる。誠に必要がないことである」⁸⁰とあるから必ずしもマルクス思想に賛同していないように思われる。

一方において、トマス・モア（德摩司摩児）、シャルル・フーリエ（仏礼児）、アンリ・ド・サン＝シモン（聖西門）、エティエンヌ・カペー（加菩提）などの空想的社会主義者の主張をより重視し、「社会主義者とは、社会を改造する新たな模範である。社会党人とは、社会を改造する新たな匠人である」⁸¹と高く評価していることから、馬君武が空想的社会主義に焦点に当て、社会改良の解決策を求めていたという傾向が容易に読み取れる。

馬君武は社会主義者でもなく、社会主義の研究者とも言えないものの、欧米の政治思想の中から、空想的社会主義、またはマルクス主義の価値に気づき、その思想と主張を紹介する活動に尽力した点は、評価しなければならない⁸²。

第四節 『浙江潮』の中の社会主義の関連記事

以上、『訳書彙編』を通して社会主義に関連する記事を見てきた。実は、この時期の留学生雑誌を通観してみると、『訳書彙編』のほかに、『江蘇』、『浙江潮』などの雑誌の中にも社会主義の関連記事も見られる。特に注目すべきことは、浙江省の留学生が主宰した雑誌『浙江潮』の中では、関連記事だけでなく、社会主義に関連する書籍の中国語訳

西門（一作西士門）之生活及其学説 仏礼児之学説附（『新民叢報』第31号、1903年5月10日）。

⁷⁹ 君武（馬君武）「社会主義と進化主義比較 附社会党巨子所著書記」（『訳書彙編』第2年第11期、1903年2月16日、103頁）では、The Condition of the Working Class in England. 1845（イギリスにおける労働者階級の状態）、Misère de la Philosophie. 1847（哲学の貧困）、Manifesto of the Communist Party. 1847（共産党宣言）、Zur Kritik der politischen Oekonomie. 1859（経済学批判）、Das Kapital（資本論）など、マルクスの著書が紹介される。

⁸⁰ 君武（馬君武）「社会主義と進化主義比較 附社会党巨子所著書記」（『訳書彙編』第2年第11期、88頁。（馬克司之思想。華嚴界之類也。彼謂其思想中之世界。經一大革命之後。即可一蹴而致。誠大不可必之事。）また前掲川尻文彦「清末西学と明治日本——早期社会主義再考」、758-760頁はこの文章に注目し、馬の社会主義と進化論との関係に対する認識を検討する。

⁸¹ 君武（馬君武）「社会党巨子 加菩提之意加尼亞旅行」（『政法學報』癸卯年第1期、1903年4月27日。（社会主義者。改造社会之新模範也。社会党人者。改造社会之新匠人也。）

⁸² この時期、馬君武の社会主義に関する知識の翻訳、または社会主義に対する認識について、ただ『訳書彙編』、『政法學報』中の文章に依拠するのではなく、『大陸』、『新民叢報』などの新聞雑誌に掲載された文章や、他の翻訳と著書を合わせて検討される必要がある。今後の課題としたい。

本の広告も掲載されている。ここからは、『浙江潮』の中に掲載された社会主義に関する記事を検討してみたい。

表 7-3 『浙江潮』における社会主義に関する知識を紹介する文章

タイトル	掲載期数	著訳者 ^(注1)	出典
最近三世紀大勢変遷史	3、6、7	大陸之民	
俄国虚無党女傑沙勃羅 克伝	7	任克 ^(注2)	「虚無党の女傑 (二) ソフィア・ペロウスカヤ」、有賀 長雄校閲、煙山専太郎編著『近世無政府主義』東京専門学 校出版部、1902 年 4 月。
新社会之理論	8、9	大我	

出典：『浙江潮』第 1—10 期、1903 年 2 月 17 日—1903 年 12 月 8 日。

注 1：『浙江潮』に掲載された文章の著者はほとんど筆名を使っているため、著者に関して不明点が多い。

注 2：任克「苦英雄逸史：普露士亜皇后路易」は 1903 年 3 月 18 日、『浙江潮』第 2 期の「小説」項目に掲載された。

まず、大陸之民という筆名による「最近三世紀大勢変遷史」であるが、この記事は、社会の不平等や平民主義の勃興を述べながら、ポーランド社会党の闘争を紹介している⁸³。そして、任克「俄国虚無党女傑沙勃羅克伝」は、煙山専太郎編著『近世無政府主義』に紹介されたソフィア・ペロウスカヤの部分を取り上げ、彼女が名門貴族の家庭に生まれ育つも、後には革命運動に加わり、最後はロシアのアレクサンドル 2 世を暗殺し、処刑される波瀾万丈の人生を翻訳・紹介している。

本論文との関係で特に重要な記事は、1903 年 11 月の『浙江潮』第 8 期、第 9 期に大我（筆名）⁸⁴の署名で発表された「新社会之理論」という文章である。同文の第三部「新社会之主義」では、次のような内容が見える。

(甲) 共產主義 是派創於仏人罷勃 Baboeuf 其後勁則猶太人埋哈司也 Karl marx
今之万国労働党。其見象也。

⁸³ 大陸之民「最近三世紀大勢変遷史」（続第 3 期）『浙江潮』第 6 期、1903 年 8 月 12 日、29-31 頁。

⁸⁴ また大我という筆名で発表された記事は、1904 年 1 月、上海で創刊された雑誌『女子世界』に次のものが確認される。大我「奇聞片片」『女子世界』（上海 1904）第 2 年第 1 期、1905 年 7 月頃。大我「飢餓同盟之女囚」『女子世界』（上海 1904）第 2 年第 3 期、1906 年 1 月頃。大我「女魂」『女子世界』（上海 1904）第 2 年第 6 期、1907 年。

〔共産主義 この主義の創始者はフランス人フランソワ・ノエル・バプーフである。その継承者はユダヤ人のマルクスである。今の万国労働党はその現象である。〕

(乙) 極端民主主義 是派創於仏人帕洛吞 Proudhon 而俄人勃寧 Bakounine 司克納爾 Schirnel 其代表也。今俄之虛無党。其見象也。⁸⁵

〔極端民主主義 この主義の創始者はフランス人プルードンであり、ロシア人バクーニンと司克納爾がその代表者である。今のロシアの虚無党はその現象である。〕

この文章は、「社会主義は人間の福祉を図り、その苦難を解消するのである」⁸⁶と述べた上、「社会主義」が「共産主義」と「極端民主主義」に分け、各自の原理を紹介している。しかし、「共産主義」の代表をドイツ社会党とし、「極端民主主義」の代表をロシアの虚無党とする著者の理解は、当時の中国人留学生に一般的にみられた見解であったが、社会主義と共産主義の概念に対する認識がまだ明確ではないという事実をも反映している。

とはいえ、翻訳者は、労働者が圧迫と搾取を被った原因は、資本家により生産手段が占有されたことに原因があると述べ、さらに「その生活費について、平均的な時間で計算すると、労働者は一日平均 6 時間働いたら十分だが、今は 12、13 時間まで働いても、なお生活を維持することができない」⁸⁷とも述べており、剰余価値の概念は言及されないものの、労働時間と給与の関係が説明されている。

そのほかに、1903 年 5 月の『浙江潮』第 4 期の「本誌特別広告」(図 7-2) にも、社会主義の書籍が刊行されたという重要な手が見つけることができる。

⁸⁵ 大我「新社会之理論」『浙江潮』第 8 期、1903 年 11 月 25 日、9、10 頁。

⁸⁶ 大我「新社会之理論」『浙江潮』第 8 期、1903 年 11 月 25 日、8 頁。(社会主義者将以増人間之福祉。而銷除其厄難也。)

⁸⁷ 大我「新社会之理論」『浙江潮』第 8 期、1903 年 11 月 25 日、10 頁。(其生計費。以時勻計之。平均一日六時已足。今労働者至十二時十三時。尚不足贍其生。)

図 7-2 『社会主義活辨』の広告



出典：「本誌特別広告」『浙江潮』第4期、1903年5月16日。

たとえば、高橋五郎の『社会主義活辨』が雄夫という筆名の翻訳者によって翻訳されたが、高橋五郎のこの本は1903年4月1日、大日本図書株式会社により出版されているから⁸⁸、東京で出版されてから、わずか1ヶ月後に雄夫という筆名を用いる人（おそらくは中国人留学生の可能性が高い）によって中国語に翻訳・出版されたことになる。その書籍の内容は日本語の原本によれば、社会主義の変遷の歴史をプラトンの理想の国家から書き起こし、トマス＝モアのユートピア、ジャン・メリエの遺言書、サン＝シモン主義、ピエール・ルールの社会進化論、そして、ブルードンの無政府主義までを含み紹介する内容であった。

また、1903年8月の『浙江潮』第6期の「新書出版」（図7-3）という広告によれば、湯爾和による数種類の訳書が掲載されているが、その2冊が幸徳秋水『社会主義神髓』と安部磯雄『社会主義論』⁸⁹であったことが確認できる。なお、幸徳秋水『社会主義神髓』に関する広告の内容について、以下のような若干、詳細な内容紹介の一文が加えられている。

⁸⁸ 高橋五郎『社会主義活弁』大日本図書、1903年4月。高橋五郎（1856—1935）は明治から昭和初期にかけての評論家、語学者、翻訳家として活躍し、社会問題研究会にも参加していた人物である。

⁸⁹ 安部磯雄（1865—1949）はキリスト教社会主義者として有名であり、1901年社会民主党の結党に参加。

図 7-3 「新書出版」の広告



出典：「新書出版」『浙江潮』第6期、1903年8月12日。

日本哲學家幸徳秋水著『社会主義神髓』月内出版。定価三角。近時社会主義之書。訳行甚多牽偏於独断。失其正鵠。浩瀚者有流於煩冗之弊。短簡者有難得要領之感。是書煩簡得中。悉矯前弊。首論社会貧困之原因。繼論社会主義之主張及其效果。終論社会党之運動。議論痛快透徹。誠可稱為社会主義之神髓也。⁹⁰

〔日本の哲學家である幸徳秋水が著した『社会主義神髓』が本月に出版される予定である。定価 3 角。近ごろ、社会主義の書籍が刊行されているが、その多くは独断に偏り、正鵠を失している。浩瀚な翻訳は煩冗の弊に流れており、短簡な翻訳は要領を得ない感がある。この本は繁簡よろしきを得ており、前作の弊を取り除くに足りている。まず、社会の貧困の原因を述べ、次に社会主義の主張及其効果、最後に社会党の運動を論じている。その議論は痛快で透徹し、誠に社会主義の神髓と称することができよう。〕

ここでは、幸徳秋水『社会主義神髓』の中国語訳本について少し検討を加えていきたい。

⁹⁰ 「新書出版」『浙江潮』第6期、1903年8月12日。句読点が筆者による。

表 7-4 清末『社会主義神髓』の中国語訳本の出版情報^(注1)

翻訳者/団体	出版社	出版地	出版時期	備考
湯爾和	不明	東京	1903 年 8 月以降（推定）	『浙江潮』に出版広告
中国達識訳社	浙江潮編輯所		1903 年 10 月	
中国蜀魂 (胡錫璋の筆名) ^(注2)	社会主義研究社編訳/ 東京楽群編訳社発行		1907 年 2 月	代理販売所は中国留学 生会館
創生 (譚其蒞の筆名) ^(注3)	奎文館書局		1907 年 3 月	

出典：「新書出版」『浙江潮』第 6 期、1903 年 8 月 12 日のほか、姜義華編『社会主義学説在中国的初期伝播』（復旦大学出版社、1984 年）、鄭振環『影響中国近代社会の一百種訳作』（中国对外翻訳出版公司、1996 年）、項旋『『共产党宣言』早期中訳者“蜀魂”考実』（『歴史研究』2021 年第 6 期）などを参照して作成。

注 1：前掲鄭振環「『社会主義神髓』——二十世紀初漢訳社会主義の啓蒙読物」（『影響中国近代社会の一百種訳作』、181-182 頁）では、『社会主義神髓』の張繼訳本（1905 年上海出版）の存在が指摘されている。その後、この指摘を受け入れる論考も少なくない。しかし、陳頤川「1905 年張繼訳『社会主義神髓』献疑」（『中国図書評論』2023 年第 3 期）の考察によれば、張繼訳本が存在しない可能性が極めて高い。本論文は陳頤川の結論を踏襲したい。

注 2：前掲項旋『『共产党宣言』早期中訳者“蜀魂”考実』の考察によれば、蜀魂は中国四川省出身の留学生胡錫璋（早稲田大学清国留学生部、明治大学）である。

注 3：『社会主義神髓』創生訳本編者説明 北京大学『馬蔵』編纂与研究中心編纂『馬蔵』第 1 部第 4 卷（科学出版社、2019 年）によれば、創生は譚其蒞という人物である。譚其蒞（1880—1941）、字が蕓陶、隠名が創生である。四川榮経の人。四川大学堂出身であり、1905 年日本留学に赴き、法政を学んだ。その後、同盟会に参加。譚其蒞事略（『四川文献』第 136 期、1973 年 12 月）を参照。

表 7-4 は、清末の『社会主義神髓』の中国語訳本の関連情報をまとめたものであるが、それによれば、合計 4 種類の中国語訳本が確認できる⁹¹。ただし、そのうち達識訳社、蜀魂、創生は訳本の実物が現存しているが⁹²、湯爾和の訳本は現存していない。

湯爾和は、その晩年に華北臨時政府や汪兆銘政權などの傀儡政權に参加したことによって、中国国内では「漢奸」と呼ばれる人物である⁹³。1902 年末、湯は日本留学に赴

⁹¹ 『社会主義神髓』の中国語訳本に関する研究について、鄭振環『影響中国近代社会の一百種訳作』（中国对外翻訳出版公司、1996 年）、方紅『馬克思主義在中国的早期翻訳与伝播——從 19 世紀晚期至 1920 年』（上海三聯書店、2016 年）などの論考がある。

⁹² 以上の三つの訳本、及び 1912 年高勞（杜亜泉）の訳本は、北京大学『馬蔵』編纂与研究中心編纂『馬蔵』第 1 部第 4 卷（科学出版社、2019 年）に収録されている。

⁹³ 湯爾和（1878—1940）、原名が標、字が調鼎、爾和、通称が湯爾和、浙江杭県の人。1902 年末、日本

き、私費留学生として成城学校に入り⁹⁴、1903年4月からの「拒俄運動」の中に彼の優れた才能が現れ、5月には「拒俄運動」を中国に伝える特派員として中国国内に派遣され、交渉役・連絡役を担い、大いに活躍した⁹⁵。

ちょうど同年の7月5日、幸徳秋水の『社会主義神髓』が東京の朝報社により出版されている。図7-3の広告によれば、湯爾和の訳本は、日本語の同書が刊行されてからわずか1ヶ月後の8月12日前後には完成し、8月のうちに中国語版を出版する予定であった、という。改めて各々出来事を時系列に整理すれば、湯爾和は5月14日に中国に帰国する途に就き、7月の初めには日本に到着し⁹⁶、その後、直ちに『社会主義神髓』の翻訳に取り掛かった、と推定される。

一方、1903年10月、中国達識訳社の訳本（図7-4）は浙江潮編輯所により出版されたが、その翻訳団体である中国達識訳社については、多くのことが不明であり、中国達識訳社が実在した留学生の翻訳団体であったのか、または創生、高芳などの筆名のように浙江省の留学生が単に中国達識訳社を名乗ったのか、資料不足のため、まだはっきりわからないが⁹⁷、個人または団体であった場合において、翻訳の本体を担ったのは、浙江省の留学生と深い関わりを持つ人脈であったことはほぼ間違いない。

留学、成城学校で学んだ。1904年帰国。1907年、二度目日本留学、金沢医学専門学校に入り、1910年卒業帰国、浙江医業専門学校や浙江病院を創立。1911年、浙江省を代表して各省代表会議の議長に推挙。民国期、国立北京医学専門学校校長、王寵惠内閣の教育部次長・総長、顧維鈞内閣の内務総長、財務総長などを歴任。1937年、華北臨時政府の成立に伴い、議政委員会委員長兼教育総長を務め、東亜文化協議会会長、国立北京大学総監督を兼任。その後、汪兆銘政権に入り、華北政務委員会常務委員兼教育総署督辦。『日本留学支那要人録』興亜院政務部、1942年、171-172頁。

⁹⁴ 前掲『清国留学生会館第二次報告』、「同学姓名報告」、14頁。「浙江同郷留学東京題名」『浙江潮』第3期、1903年4月17日。

⁹⁵ 「軍国教育会之成立」『江蘇』第2期、1903年5月27日。1903年4月、錦輝館で留学生大会が開催され、その場、湯爾和は情熱的な演説をして会場の留学生の心を動かした（衆皆憤発涕泣不能仰）。彼の演説の原稿が記事に付された。

⁹⁶ 「特派員之還東」「記吾浙夏季同郷大会」『浙江潮』第6期、1903年8月7日。「特派員之還東」によると、1903年7月3日、特派員が日本の浜松に着いたが、鉄路の問題で7月4日に至ってついに東京に戻った。

⁹⁷ 蒋逸人・戴夢桃『社会主義神髓』の最早中訳本（『歴史研究』1982年第4期）、『社会主義神髓』の中訳問題及其它（『浙江学刊』1983年第1期）、李愛軍編校「社会主義神髓」達識訳社訳本編者説明（前掲『馬藏』第1部第4巻、54-56頁）を参照。

図 7-4 中国達識訳社訳『社会主義神髓』表紙と奥付



出典：北京大学『馬藏』編纂与研究中心編纂『馬藏』第1部第4巻、科学出版社、2019年（本資料は北京師範大学歴史学院教師項旋氏より提供していただいた。ここで感謝の意を表します）。

以上で紹介した二つの訳本の共通点をまとめてみれば、翻訳者が浙江省の留学生であり、出版時期が非常に近いという2点から、二つの訳本は雑誌『浙江潮』と浙江潮の編輯所を構成した浙江省同郷会と密接なつながりがあると思われる。

それでは、湯爾和の訳本と中国達識訳社の訳本は同一のものと言えるだろうか。短い間に2種類の訳本が浙江省の留学生により連続して出されたのは可能であろうか。

1903年10月、上海の『中外日報』に「社会主義神髓出版広告」（図7-5）が掲載され、その広告内容が、以下のように述べられている。

『社会主義神髓』出版。定價兩角五分。社会主義者。十九世紀之新産物。二十世紀之大問題也。其書為近時所訳行者頗多。要皆偏於独断。失其正鵠。浩瀚者有難得要領之感。短簡者有過甚疎略之弊。是書著者日本幸徳秋水氏。大哲学家也。参考衆作。陶鑄真理。繁簡得中。菁華滿幅。名曰神髓。洵不誣矣。而訳者復以淋漓之筆。墨写著者慷慨之意氣。足使秉書以讀。不啻對座而談。唯覺其味無窮。遂不知其卷之將尽。斯社会主義中唯一絶對之佳本也。新學諸子允以先睹為快。書印無多。宜速購取。分售処国

学社。中外日報館。啓文社。開明書店。広雅書局。総發行所上海英大馬路寿康里永記啓。⁹⁸

『社会主義神髓』出版、定価 2 角 5 分。社会主義者というものは 19 世紀の新産物であり、20 世紀の大問題でもある。これらの書籍は、近ごろ、すこぶるよく翻訳出版されているが、みな独断に偏り、その正鵠を失っている。浩瀚な翻訳は要領をつかみにくい感があり、短簡な翻訳は粗略に過ぎる弊がある。この本は日本の大哲学者である幸徳秋水氏が著したもので、多くの著作を参考にし、真理を陶鑄し、内容の繁簡が妥当で、精華が書中に満ち、「神髓」との題名は、全くうそではないものである。訳者もまた生き生きとした筆致を以て、著者の憤慨の意気を書き写している。この本を読んでもらえば、まるで著者と対談しているようで、その味わいは尽きることなく、その最後まで読み終わっても気づかないほどである。この本は社会主義を論じる中で、唯一絶対の良書である。新しい学問を学ぶ諸子は、他の人よりも先に本書を読むという喜びにあいつける。しかし、印刷部数が多くないため、早く購入することをお勧めする。分売所は国学社、中外日報館、啓文社、開明書店、広雅書局であり、総發行所は上海英大馬路寿康里永記、啓。]

図 7-5 『中外日報』に掲載された『社会主義神髓』の出版広告



⁹⁸ 「社会主義神髓出版広告」『中外日報』1903 年 10 月 26 日。

出典：『中外日報』1903年10月26日。（抗日戦争与近代中日関係文献数据平台より）

注：『社会主義神髓』の広告は少なくとも、1903年10月26日から、10月29、30日、11月1—4日の『中外日報』に掲載されている。

この広告の中でも、『社会主義神髓』を翻訳した人物と出版社の情報は明記されていないが、最後に見える総発行所の住所の「上海英大馬路寿康里永記」という地名は、『浙江潮』の上海総代理販売所「永記書報代派所」の略称であることから⁹⁹、この広告が浙江省の同郷会と密接なつながりがあることが推測できる。

なお、**図7-3**と**図7-5**の広告の内容を『社会主義神髓』の「自序」に照らしてみれば、

『社会主義神髓』の「自序」（1903.7）：近時社会主義に関する著訳の公行する者、大抵非社会主義者の手に成り往々独断に流れ正鵠を失す〔中略〕而して浩瀚の者は却って煩冗に過ぎ、短簡なる者、亦要領を得難きの憾みあり。是を以て予は本書に於て、勉めて枝葉を去り、細節に拘せず¹⁰⁰

『浙江潮』第6期の「社会主義神髓」広告（1903.8）：近時社会主義之書。訳行甚多牽偏於独断。失其正鵠。浩瀚者有流於煩冗之弊。短簡者有難得要領之感。是書煩簡得中。悉矯前弊。

『中外日報』の「社会主義神髓出版広告」（1903.10）：其書為近時所訳行者頗多。要皆偏於独断。失其正鵠。浩瀚者有難得要領之感。短簡者有過甚疎略之弊。

この二つの広告は、「偏於独断」、「失其正鵠」、「浩瀚者」、「短簡者」という表現が重複しており、文脈の流れも概ね一致している。このことから、『浙江潮』と『中外日報』の広告は『社会主義神髓』の「自序」に依拠しながら、微妙に表現を異にしたものであると考えられる。

ただし、以上の分析から、湯爾和が中国達識訳社を名乗ったという結論は出せない。なぜかという、これを証明できる直接的な証拠がまだ見当たらないからである。

⁹⁹ 「本誌代派所」『浙江潮』第1期、1903年2月17日。

¹⁰⁰ 幸徳秋水「自序」『社会主義神髓』朝報社、1903年7月初版、1頁。

だが、逆に言えば、『社会主義神髓』の訳者として創生、蜀魂、高勞などの筆名が用いられていることから、湯爾和は日本と中国政府の取締を避けるために、中国達識訳社という筆名を使用し、『社会主義神髓』の中国語訳本を出版した可能性もまだ否定できない。

総じていえば、『浙江潮』の広告で紹介された『社会主義活辨』、『社会主義神髓』、『社会主義論』などの書籍については、その原本が見つからない現段階では、同書が実際に出版されたのかどうか、まだ確定することができない。だが、これらの広告は中国人留學生が発行した雑誌『浙江潮』に掲載されていることから、中国人留學生が20世紀の初期にすでに社会主義に対する関心を持ち始めたことを意味する有力な証拠となっていると言わざるを得ない。

むすび

本章では、1903年頃、中国人留學生の社会主義に関する認識と社会主義に関連する書籍の翻訳活動の一端を、『訳書彙編』と『浙江潮』などの留學生雑誌を手がかりに分析することができた。特に、重要な事柄として注目すべき内容を、以下にもう一度確認してみる。

第一は、日本の社会主義者は1890年代後半から実践を通して社会主義の理論を実証する試みを開始し、社会主義に関連する主張を広げるための講演活動、翻訳と出版活動、そして、政治勢力の結成などに至るまでの活発な活動を展開していた。1900年代に入ると、中国人留學生は日本の社会主義研究者と社会主義思想に接する機会が増える一方、社会主義思想を中国に紹介する意欲も高くなっていた。

第二に、1903年前後の留學生界においては、ロシアの中国侵略の可能性が高まることに対抗するために、「拒俄運動」を引き起こし、欧米からの先進的な思想、理論を導入し、国家を救い出す方法を模索する時期を迎えることとなった。実際、中国人留學生は、日本の社会主義思想に関連する多くの書籍を中国語に翻訳し、中国に紹介するにおいて極めて大きな役割を果たした、と言える。

第三に、『訳書彙編』第1期から社会主義思想や社会党に触れた文章がすでに掲載されており、本論文では、酒井雄三郎『十九世紀欧洲政治史論』や有賀長雄『近時政治史』の日本語の原本と中国語版の翻訳の比較を通して、中国人留學生が社会主義に対して、初歩的な理解の段階で興味を示していたことを確認できた。なお、この時期の中国人留

学生は、まだ「社会主義」、「共產主義」、「無政府主義」、「マルクス主義」などの概念について、明確に区別することができなかったため、それぞれの対訳語が定着していなかった。言い換えれば、この時期の社会主義は、まだ中国人が目指すべき目標としての社会主義ではなく、欧米の哲学、または政治発展に関連する一種の学問として翻訳されていたものであった。

第四に、『浙江潮』の紙面には当時の社会主義に関連する記事だけでなく、『社会主義活辨』、『社会主義神髓』、『社会主義論』など、同時代の日本の社会主義関連書籍の出版を宣伝する広告も掲載されていた。特に、今までの不明な点が多かった中国達識訳社訳の『社会主義神髓』は、湯爾和訳の『社会主義神髓』と、出版社、出版時期、広告などが重複していることから、湯爾和が中国達識訳社を名乗って出版したものではないか、との仮説を提示することができた。

結論

まず、本論文が以上の章で述べてきた内容を整理するとともに、本論文が序論で提起した四つの問題との関連についてまとめてみたい。

一つ目は、中国人留学生を教育する予備学校について再検討することに着目した。第一章で論じたように、日華学堂の教育内容（教科の科目と留学生の成績に対する考察など）の分析を通して、日華学堂の普通学と日本語教育は、当時のその他の中国人の予備学校であった成城学校に比べれば決して優れたものではなく、日本語教育の面においても、その教育の効果は嘉納塾よりも高いものではなかった。しかし、日華学堂の教育方面においての成果を高く評価できないにしても、当時の中国人留学生界において日華学堂が占めた位置や役割は疎かに評価すべきではない。なぜならば、当時、東京を中心とした中国人留学生は、日華学堂を留学生の集まる場所として利用し、また、日華学堂を中心に翻訳や出版など様々な活動を展開できたからである。

二つ目は、初期の中国人留学生が組織した団体及び活動についての再検討という課題であるが、本論文の第二章、第三章、第四章で述べたように、勵志会、訳書彙編社、教科書訳輯社、清国留学生会館などの団体の活動について多くの新たな点を指摘することができた。

例えば、勵志会は 1899 年秋、東京で成立した留学生の親睦団体で、定期的に集会を開き、会員相互の親睦を深めることを目的としていたが、その中心的な役割を果たしたのは、日華学堂と成城学校に在籍した学生であった。会員の政治的立場は、後になるに連れて急進派と穏健派に分けられるが、勵志会が組織される当初から政治の宣伝活動を重視していたとは言い難い。勵志会は、講演会、『訳書彙編』の発行、留学生への支援、中国国内の知識人に書籍を代理で購入し、郵送する活動、及び中小学校の教科書の翻訳出版などの活動を通して、中国人留学生と中国国内の知識人に向けての啓蒙活動を積極的に行っていた。

その後、1901 年末に結成された訳書彙編社が勵志会の活動を引き継ぐ形で活動を継続し、『訳書彙編』の編集出版をも行った。訳書彙編社の人員構成においても、勵志会と同

じように、社員の中の政治的立場は異なるものの、それが雑誌の発行や編集にまでは影響していなかった。この訳書彙編社は、1904年5月『訳書彙編』の廃刊まで、活発な翻訳活動を行い、多くの政治、法律、外交などの著作を翻訳出版している。その一方、教科書訳輯社は、励志会の教科書出版の計画を実行し、主に日本の中小学校の教科書を翻訳出版し、中国国内の知識人と新式学堂に提供していた。訳書彙編社と教科書訳輯社の翻訳活動は、当時の中国人留学生界が果たした重要な役割の一つとして高く評価しなければならない。

1900年の義和団事件以降、留学生人数の増加に伴い、日本の中国人留学生界は刻々と変化していった。そして、励志会は、次第に留学生支援の役割を担うことができなくなった。このころから、励志会の会員たちは、日本に留学している中国人学生の全員を集めることができる新たな団体の結成を求め始めていた。1902年3月、励志会の会員の働きかけを経て清国留学生会館は正式に開館し、この清国留学生会館が励志会の代わりに、留学生の活動拠点となり、留学生の生活と学業を支援し続けていた。

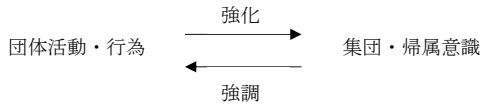
清国留学生会館は、近代以降、海外に組織された初めての統一された中国人留学生団体であり¹、組織の構成、幹事の選挙と任用、公使館との交渉、留学生の支援などの様々な方面において、古い伝統を打破し、新しい組織を切り開いた近代的な組織であったと言える。清国留学生会館の組織構成は、総長・副長と12名の幹事により構成され、多くの励志会会員が幹事を務めたことがあり、会館の日常運営に積極的に参加した。清国留学生会館は上海、天津、神戸などの地域に招待（案内）連絡員を設置し、留学生と会館、中国と日本の間、情報伝達の役割を担った。

清国留学生会館は成立して以来、清末の危機的国际情勢に対して「国家滅亡」、「人種絶滅」、「人種差別」などの様々な表現を使いながら常に危機感を持っており、「成城学校入学事件」、「大阪博覧会事件」（人類館事件）、「弘文学院退学事件」、「拒仏運動」、「拒俄義勇隊」、「成城学校運動会黄龍旗事件」などの一連の運動の中、彼らは清国駐日公使と公使館の館員、または日本政府と交渉するなど留学生の主張を日本社会と中国国内に拡散する積極的な役割を演じていた。

これらの団体活動を経て、日本という異邦で生活する留学生らは同じ価値、信念、感情を共有することができ、「中国人」というアイデンティティ、及び「中国人留学生」に

¹ 1902年末、「全美中国留学生聯合会」(The Chinese Students' Alliance of America) というアメリカの中国人留学生団体が成立した。江勇振『楚材晋育——中国留美学生 1872—1931』聯経出版事業股份有限公司、2022年を参照。

帰属しているという自覚を持つことができた²。このような集団への帰属意識は留学生の団体運動の方向性を決定したとも言える。



従来の革命重視史観の叙述においては、清末の中国人留学生団体といえば、東京青年会、軍国民教育会、中国同盟会などの革命団体が重視された。しかし、むしろ勵志会、訳書彙編社、清国留学生会館、各地域の留学生同郷会、そのほかの翻訳出版団体こそが、中国人留学生団体の主流であったことは必ずしも否定されるべきではない。これらの点で、本論文は、革命を重視する歴史叙述から脱却し、清末の中国人留学生団体を、より歴史に沿った実体として、その特徴を読み解き直すことを試みた。

三つ目は、初期の中国人留学生が発行した雑誌に関する研究の見直しによって明らかにすることができた点について述べる。すなわち、本論文の第五章では、『訳書彙編』の創刊趣旨から運営、財政、及び販売網などの方面を考察し、雑誌の『訳書彙編』が「民智を開く」ことを提唱し、政治学を中心とした新しい知識を重視する翻訳雑誌であったことについて検討した。『訳書彙編』は、約二年半に及ぶ刊行期間において、雑誌発行の財政問題を乗り換え、海外と中国国内に新しい知識を伝播する販売網を構築した。中国国内では上海が雑誌の発行と販売の拠点となり、江蘇省南部と浙江省北部を含めた長江河口の三角州の地域を主な販売地としたほか、販売網は北の直隸省、西の四川省、南の広西省や広東省にまで拡大した。一方、海外では東京の本部が直接日本の横浜、神戸、大阪、植民地の台北、香港、南洋のシンガポールにある代理販売所を繋いだ。

第六章では、『訳書彙編』とほぼ同時期に発行された『開智録』、『訳林』、『励学訳編』など雑誌との比較研究を試みた。この四つの雑誌は、それぞれの特徴があるが、編集者、代理販売所、広告などの方面において互いに深いつながりを持っていることを確認した。また、当時、「民智を開く」ことが求められる時代の背景の下、『訳書彙編』、『訳林』、『励学訳編』は、純粋な翻訳雑誌であり、知識面から「民智を開く」ことを追求した一方、『開智録』は最も早い時期に排満革命の思想を訴えていたことがわかった。

² 当然、「満漢対立」がこの時代の主題の一つとして避けようとしても避けられないが、ここでいう「中国」は、清国という伝統の国家概念を超える意識と筆者が考えている。

『訳書彙編』は、海外の留学生雑誌の先駆として販路を拡大し、代理販売所の増設によって販売網を構築するという新しい道を切り開いた。その後、『遊学訳編』、『湖北学生界』、『浙江潮』、『直説』、『江蘇』、『雲南』などの留学生雑誌が『訳書彙編』の体裁と編集などを倣い次々と創刊された。これらの雑誌は、欧米からの近代知識を日本経由で中国に伝播する情報の運び手として、留学生の様々な活動や主張を中国国内に伝える役割を担ったのである。

四つ目は、清末の中国人留学生の社会主義に関する理解と翻訳活動という課題である。第七章はこの課題について考察し、『訳書彙編』と『浙江潮』をめぐって、留学生界の社会主義思想に対する理解、及びその伝播について検討した。

『訳書彙編』第1期から、社会主義思想や社会党に触れた文章がすでに掲載されたが、酒井雄三郎『十九世紀歐洲政治史論』や有賀長雄『近時政治史』の翻訳の比較を通して、留学生の社会主義に関する知識の翻訳活動は意図的に社会主義思想や政党に関する内容を翻訳したものではなかったことを指摘した。この時期、「社会主義」、「共産主義」、「無政府主義」、「マルクス主義」などの概念について、留学生はまだはっきり区別することができなかったため、それぞれの対訳語も定着していなかった。

『浙江潮』において、社会主義の関連記事だけでなく、『社会主義活辨』、『社会主義神髓』、『社会主義論』などの日本社会主義者の論考の出版広告も目立っている。特に、不明点が多い達識訳社訳の『社会主義神髓』の訳者について、湯爾和訳の『社会主義神髓』の出版社、出版時期、広告などとの比較を通して、湯爾和が達識訳社を名乗り、同書を出版したのではないかと推論を試みた。

本論文で述べた内容から分かるように、『訳書彙編』などの留学生雑誌の刊行と流通は、西洋と日本の新しい知識を次から次へと留学生と中国国内の知識人に広げていた。日本の学校教育から強い影響を受けた中国人留学生は、科举制度を通じて伝統的な出世を遂げるという道が途絶えた時代の大変化に対して、各々「救国」、「救亡」、「立身出世」の策を探ながら、最終的に「教育」、「改革」、「立憲」、「革命」などの道をあゆむにいかわらず、新たな近代思想の導入と国家制度の変革を推し進めていかなければならなかった。

最後に、本論文で得られた成果に基づき、今後の展望を述べたい。

一、清末民国初期における中国人留学生団体についての研究

本論文では、1905年以前に成立した非革命団体である励志会、訳書彙編社、教科書訳輯社、清国留学生会館の関係について考察したが、この流れから考えると、1905年「清国留学生取締規則事件」から辛亥革命に至るまで、革命の空気が流れる中国人留学生界

において、中国留学生総会が次第に清国留学生会館の機能に取って代わる過程、さらに中華民国留学生総会へと変化する過程は、今後、解明を進めるべき重要な課題である。

それだけでなく、海外の中国人留学生団体の連絡ネットワークも注目すべきである。たとえば、清末から中華民国期にかけて、中国留学生総会や中華民国留学生総会と全中国留学生聯合会との間、相互連絡があるかどうか、もし連絡があれば、どのように相互連絡を図ったのかという問題は、今後検討すべき課題であろう。

二、書籍史・読書史のアプローチから新しい知識の受容

『訳書彙編』の刊行当時、欧米と日本の新知識を紹介する記事は、中国国内の知識人にも大いに愛読されていた。1901年3月、孫宝瑄は連日にわたり、『訳書彙編』の読書感想を日記に書き込んでおり、バージェス『政治学』、ブルンチュリ『国法汎論』、シャルル・ド・モンテスキュー『万法精理』などの文章の内容に対して、自分の知識に基づく感想と評価を書いている³。また、同年4月、蔡元培は杭州養正書塾で、一年分の『訳書彙編』の購読契約をしている⁴。

一方、従来の研究は、その大部分が雑誌の編集と流通の面から検証を行っているが、読者が新しい知識と理論をどのように受け入れたのか、それらの知識や理論が読者の理念や観念にどれほど影響を与えたのかなどの問題については、まだ未解明の部分が多い。これらの問題については、知識人の日記など一次資料の発掘を通して、『訳書彙編』だけでなく、それ以外の『遊学訳編』、『湖北学生界』、『浙江潮』、『江蘇』などの留学生雑誌も含めて分析を行い、深く考えていく必要がある。

³ 孫宝瑄『忘山廬日記』下、上海古籍出版社、1983年、328-334頁。孫宝瑄とは、清末民国期の改革派知識人。1900年上海の「中国国会」に参加。清末郵伝部船政司員外郎に拝命。民国元年浙海関監督となり寧波交渉員を兼任。田原天南編『清末民初中国官紳人名録』中国研究会、1918年、356頁を参照。

⁴ 中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第15巻「日記」、浙江教育出版社、1998年、327頁。

本論文に関連する既発表論文

発表論文

- (1) 郭夢垚「清末中国人日本留学生の初期活動について——励志会と訳書彙編社を中心に」
孫安石・大里浩秋編著『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』東京：東方書店、
2019年、25-62頁。〔本論第二章第一、二、三節と第三章第一、二、三、五節に対応。〕
- (2) 郭夢垚「湖廣總督張之洞之孫張厚琨の日本留學」闕正宗等編『佛教・歴史・留學——
交流視角下の近代東亞と日本』新北：博揚文化、2021年、305-314頁。〔本論第一章第三
節に対応。本論文はこれをもとに大幅加筆修正を加えている。〕
- (3) 郭夢垚「清国留学生会館の設立と励志会・訳書彙編社との関係について」『中国研究月
報』第75巻第11号、2021年11月、20-39頁。〔本論第四章第一、三、四節に対応。〕
- (4) 郭夢垚『『崇明県志』から見る清末における江蘇省崇明県の留日学生——馮閻模と馮閻
模を事例に』『駿台史学』第174号、2022年2月、81-102頁。
- (5) 郭夢垚「日華学堂と励志会」「日華学堂と清国留学生の翻訳活動」樊殿武・柴田幹夫編
著『日華学堂とその時代——中国人留学生研究の新しい地平』西東京：武蔵野大学出版
会、2022年、277-320頁。〔本論第一章第一、二節と第二章第四節に対応。本論文はこれ
をもとに大幅加筆修正を加えている。〕
- (6) 郭夢垚「清国留学生と『訳書彙編』の発行——創刊と財務、販売を中心に」孫安石・大
里浩秋編著『明治から昭和の中国人日本留学の諸相』東京：東方書店、2022年、25-57
頁。〔本論第五章に対応。〕

資 料 編

一、「勵志会章程」

「勵志会章程」は、『訳書彙編』第2年第12期（1903年3月13日）に掲載されたものである。句読点は筆者による。原文にある割注は【】で示し、○○の記号は原文にあるものである。

「勵志会章程」（壬寅十二月改正）

第一章 綱領

第一条 研究実学，以為立憲之予備。

第二条 养成公德，以為国民之表率。

第三条 重視責任，以為辨辦之基礎。

第二章 事業

第四条 調査国勢○○凡关乎国家之大問題，本会均当實際調査，列為各部。如左

1、立法部 憲法、民刑法等属焉。

2、理財部 租税、貨幣等属焉。

3、内務部 警察、交通等属焉。

4、外交部 國際法、条約等属焉。

5、教育部 学校、科学等属焉。

6、実業部 農業、商工業属焉。

7、軍政部 海陸兵制等属焉。

附則

1、凡會員至少須任一部，其能兼二部以上者听。

2、凡开会時，每部至少須有一人，將調査所得者演說。

3、凡演說次序，由書記編定。

第五条 主持公益○○凡关乎社会上公共之事，本会均当首先倡議实行。

第六条 巡回講演○○凡对乎会外之各团体，本会均当隨時出張講演。

附則

1、内地各处，本会当隨時派員开演說会、或講習会，以开風气。

2、無論内地外洋，凡同志組織之会，本会当聯絡一气，以期推广。

第三章 職員

第七条 干事四人，掌一切事務。

第八条 書記二人，掌記事及通信之事。

第九条 會計一人，掌收支之事。

附則

- 1、職員由开会時投票公举。
- 2、職員任期以半年為率。

第四章 責任

第十条 職員之責任如左

- 1、干事有維持会中秩序及擴張会務之責。
- 2、書記有編纂会史及聯絡會員之責。
- 3、會計有整頓会費及擴張会中經濟之責。

第十一条 會員全般之責任。如左

- 1、凡會員当确守本会綱領，及發達本会事業。
- 2、凡會員当各就所学分任調查各部。
- 3、凡會員於本会之外与聞他种团体者，当隨時将其成績報告。
- 4、凡會員回国或游歷各地，当隨時以聞見報告。
- 5、凡會員当互表親愛，有過互相規勸。

第五章 會員之權利

第十二条 凡會員皆得享平等之權。

第十三条 凡會員皆有選舉議事之權。

第十四条 凡會員皆有質問会務之權。

第十五条 凡會員急難，皆有享受本会保護救助之權。

第六章 会期及会費

第十六条 每月开会一次，以月之第一日曜日為率，自下午一時起至五時止。遇有要事，可开臨時会，其期由干事協定。

第十七条 会所由干事択定，知照書記，由書記函告同人。

第十八条 会費每月三角，於开会時納之。

第十九条 每半年由會計詳列出入款項，於开会時報告同人，不足臨時公派之。

第七章 入会及退会

第二十条 凡願入会者，須由會員介紹，在开会時提出。将其人来歷申明，經衆公許，方可入会。

第二十一条 凡會員有不得已之事故，可自請退会。

第二十二条 凡會員有損本会之名誉者，可由公衆決議使之退会。

第二十三条 凡會員久不到会、及回国後永无消息者，可由書記提出，報告公衆，作為附屬會員。

第八章 开会規則

第二十四条 开会閉会，由議長宣言。議長由干事掄司之。

- 第二十五条 开会次序，首演說，次提議会中各事。
- 第二十六条 凡演說，於會員之外可隨時由干事囑托名人到会講演。
- 第二十七条 凡演說員，須先將演題函告書記。
- 第二十八条 凡演說員，可將演說大旨留稿交與書記錄存。
- 第二十九条 凡新入会者，應有進会辭向眾演說。
- 第三十条 开会時，各會員到者須有三分之二，方可舉人決事。
- 第三十一条 凡欲議一事，須一人提出，再得一人贊成，方可開議。
- 第三十二条 凡決事用投票舉手之法，以多數為準，如可否之數各半，由議長決定之。
- 第三十三条 凡議一事既有提出及贊成者，或有人於同一問題內另創一議【如改前所提出之議，及以提出之事為不必議之類】有贊成之者，則先議後說眾以為可，前說即作罷。論眾以為否，則再議前說。
- 第三十四条 凡議一事須俟提出者及反駁者互將己意講明，然後公決可否。
- 第三十五条 遇舉人決事時，如有新來會員未知詳細者，臨時盡可說明，不必投票舉手。
- 第三十六条 演說或議事時，遇有反駁者，俟一人說畢，然後起而申說，不可任意摻雜。
- 第三十七条 演說或議事時，不得互相談笑，擾人听聞。
- 第三十八条 議事遇有臨時不能決可否者，應俟提出者將大旨告知眾人，下次定議。或閉会之時已到，尚有應議之事，應由書記記出，下次開議。
- 第三十九条 开会之日，各會員須一律於定時之前齊集会所。
- 第四十条 开会時會員不得故意推脫不到，或真有要故不能到者，須先日函知書記處，开会時由書記報知同人。
- 第四十一条 开会時如有會員親友來觀者，可就旁听席，唯無舉手決事之權。

第九章 附則

- 第四十二条 凡章程既經同人公認，著為定例，無論何人不得擅自更改。
- 第四十三条 凡章程如有修正之處，先由職員協定，再經同人公認。

二、清国留学生会館歴代幹事表

下記表 1 から表 6 までの各表は、全 5 冊の『清国留学生会館報告』と『東京留学界記実』、日本外務省記録などの史料に依拠し、清国留学生会館幹事に関する情報を取り上げてまとめたものである。

- ① 在籍学校について、会館報告の記録に基づいてほかの資料を参照し、会館幹事を務めている時期の情報のみを記入する。
- ② 各評議員についての詳細な情報を略す。

表 1 清国留学生会館の初代幹事（1902 年 3 月 16 日—10 月 8 日）

職名	姓名	出身	在籍学校	留学費用	備 考
書記 幹事	范源廉	湖南湘陰	東京高等師範学校	私 費	勵志会会員/夏季休暇中の帰国時は李賓四（湖南）が代理
	蔡 鐸	湖南邵陽	成城学校陸軍	私 費	勵志会会員/夏季休暇中の帰国時は王守善（江蘇）が代理
	錢承詒	浙江仁和	東京帝国大学法科	浙江官費	勵志会会員/訳書彙編社幹事/夏季休暇中の帰国時は吳敬恒（江蘇）が代理
	吳振麟	浙江嘉興	東京帝国大学法科	浙江官費	勵志会会員/訳書彙編社幹事
会計 幹事	陸世芬	浙江仁和	東京高等商業学校	浙江官費	勵志会会員/訳書彙編社幹事
	王瓊芳	湖北恩施	東京高等商業学校	湖北官費	勵志会会員/夏季休暇中の帰国時は夏循堽（浙江）が代理
庶務 幹事	章宗祥	浙江烏程	東京帝国大学法科	南洋官費	勵志会会員/訳書彙編社幹事
	金邦平	安徽黟縣	東京専門学校・早稲田大学	北洋官費	勵志会会員/訳書彙編社幹事/夏季休暇中の帰国時は張奎（江蘇）が代理
書報 幹事	曹汝霖	江蘇上海	東京法学院大学	私 費	勵志会会員/訳書彙編社幹事
	張紹曾	直隸大城	近衛野戰砲兵聯隊見習士官	北洋官費	卒業帰国後は藍天蔚（湖北）が代理
招待 幹事	高 逸	安徽合肥	東京第一高等学校	私 費	会館の設立に関与
	吳祿貞	湖北雲夢	近衛騎兵聯隊見習士官	湖北官費	勵志会会員/卒業帰国後は馮閻模（江蘇）が代理

出典：清国留学生会館幹事『清国留学生会館第一次報告』東京並木活版所、1902 年 10 月、「職員表」、33-34 頁。

表 2 清国留学生会館第二代幹事（1902.10.8—1903.4.8）

職名	姓名	出身	在籍学校	留学費用	備 考
書記 幹事	周家樹	湖南寧鄉	成城学校陸軍	私 費	『遊学訳編』編集者
	蔣尊簋	浙江諸暨	成城学校陸軍	私 費	父蔣智由。

	劉成禺	湖北江夏	成城学校陸軍	私 費	『湖北学生界』編集者
	王遇甲	湖北武昌	陸軍士官学校	湖北官費	
会計 幹事	張 奎	江蘇上海	東京帝国大学工科	北洋官費	励志会会員/初代庶務幹事代理
	沈 琨	直隸静海	東京帝国大学工科	北洋官費	励志会会員
庶務 幹事	高爾登	浙江仁和	成城学校陸軍	私 費	父高雲麟。
	夏循壇	浙江仁和	東京法学院大学	湖北官費	励志会会員/初代会計幹事代理/帰国中、王宰善（江蘇）が代理
書報 幹事	金華祝	湖北黄陂	弘文学院師範科	湖北官費	
	張鉄緒	直隸天津	東京帝国大学工科	北洋官費	励志会会員/帰国、王榮樹（湖北）が代理
招待 幹事	馬肇暉	広東順德	東京帝国大学農科	湖北官費	
	馮斯樂	広東鶴山	日本法律学校	私 費	即馮自強/『聞智録』創刊者/のちに明治大学専法科に入学
各省評 議員	劉澍弼、長福、張孝移、黃軫、洪鎔、蹇念鎰〔また蹇念益と表記〕、屈德澤、程干青、黎淵、岳開先、章通駿、周崇業、汪樞。	蹇念鎰と汪樞が事情によって蔣鳳梧と呉栄魯を挙げて代理する			

出典：清国留学生会館幹事『清国留学生会館第二次報告』東京並木活版所、1903年3月、「職員表」、19-20頁に。

表3 清国留学生会館第三代幹事（1903.4.8—11.22）

職名	姓名	出身	在籍学校	留学費用	備 考
書記 幹事	林長民	福建閩県	予備入校	私 費	『訳林』編集者/帰国、程明超（湖北）が代理
	湯 樞	浙江錢塘	成城学校陸軍	私 費	即湯爾和/留学生義勇隊の代表に選ばれる/帰国、李祖虞（江蘇）が代理
	張肇桐	江蘇金匱	早稲田大学	私 費	『江蘇』編集者/帰国、劉頌虞（湖南）が代理
会計 幹事	陳福頤	江蘇清河	東京高等商業学校	私 費	1903年5月、弘文学院を退学になった
	李寶四	湖南長沙	清華学校（東京）	私 費	即李穆/初代書記幹事代理/帰国、陳介（湖南）が代理
庶務 幹事	鈕永建	江蘇松江	成城学校陸軍	私 費	留学生義勇隊の代表に選ばれる/帰国、曹騰芳（四川）が代理
	王嘉渠	浙江秀水	早稲田大学	私 費	
	王環芳	湖北恩施	東京高等商業学校	湖北官費	励志会会員/初代会計幹事/帰国、権量（湖北）が代理
書報 幹事	俞大純	浙江山陰	予備入校	私 費	俞明震長子/帰国、張昉（湖北）が代理
招待 幹事	蹇念益	貴州遵義	早稲田大学	私 費	
	黃 軫	湖南善化	弘文学院師範科	湖北官費	即黃興/『遊学訳編』編集者/帰国、陳洪鏞（湖南）が代理

	鄒 容	四川巴県	東京同文書院	私 費	代表作『革命軍』/就任せず帰国/廉隅（江蘇）が代理/廉隅が帰国、屈德澤（湖北）が代理
各省 評議 員	曹汝霖、稽鏡、吳治恭、章宗祥（錢承誌代理）、陳蔚（董鴻禱代理）、周宏業（楊源潛代理）、楊毓麟、張崧雲（馬崙鐘代理）、周家彥（王国樑代理）、李盛衡、林霽（李宜威代理）、沈琨（賀培桐代理）、王章祐、何厚燾、金邦平（洪鎔代理）、路孝植、黎淵（劉子明代理）、權量、胡鈺（張鴻藻代理）、高景樺				

出典：清国留学生会館幹事『清国留学生会館第三次報告』東京並木活版所、1903年11月、「職員表」、15-16頁。

表4 清国留学生会館第四代幹事（1903.11.22—1904.5.29）

職名	姓名	出身	在籍学校	留学費用	備 考
書記 幹事	稽 鏡	江蘇無錫	早稲田大学	私 費	
	陳 介	湖南湘鄉	弘文学院普通科	湖南官費	第三代会計幹事代理/帰国、江庸（福建）が代理
	李 穆	湖南長沙	法政速成科	湖南官費	即李賓四/初代書記幹事代理、第三代会計幹事/法政速成科第一班卒業生
会計 幹事	曹汝霖	江蘇上海	東京法学院大学	私 費	初代書報幹事
	吳振麟	浙江嘉興	東京帝国大学法科	浙江官費	初代書記幹事
庶務 幹事	權 量	湖北江夏	東京高等商業学校	湖北官費	第三代庶務幹事代理
	劉 藩	湖北安陸	法政速成科	私 費	法政速成科第一班卒業生
	錢承誌	浙江仁和	東京帝国大学法科	浙江官費	初代書記幹事
書報 幹事	黎 淵	貴州遵義	東京法学院大学	四川官費	元清国駐日公使黎庶昌の孫/黎邁の兄弟
招待 幹事	屈德澤	湖北東湖	東京帝国大学農科	湖北官費	第三代招待幹事代理
	曹騰芳	四川巴県	早稲田大学	私 費	第三代庶務幹事代理
	陳洪鑄	湖南瀏陽	正則英語学校	湖南官費	第三代招待幹事代理/帰国、黎邁（貴州）が代理
各省 評議 員	直隸/梁志宸、山東/時克蔭、山西/何澄、陝西/路孝植、四川/陳崇功、湖北/張孝孝・王東山、湖南/范源廉・蔡鐸、江西/徐秀鈞、安徽/蒯寿枢、江蘇/蔣鳳梧・任伝榜・李祖虞、浙江/董鴻禱・王嘉渠、福建/劉崇傑、広東/王国樑、雲貴/劉子明				

出典：清国留学生会館幹事『清国留学生会館第四次報告』東京並木活版所、1904年5月、「職員表」、19-20頁。

表5 清国留学生会館第五代幹事（1904.5.29—12.4）

職名	姓名	出身	在籍学校	留学費用	備 考
書記幹事	蔣鳳梧	江蘇常熟	弘文学院理科/卒	私 費	帰国、華振（江蘇）が代理
	王運震	湖北松滋	法政速成科	私 費	法政速成科第一班卒業生
	曾儀進	四川華陽	第一高等学校	京師大学堂官費	
会計幹事	江 庸	福建長汀	早稲田大学	四川官費	第四代書記幹事代理/夏休み中 帰国、梁志宸（直隸）が代理

	嚴智崇	直隸天津	東京高等師範学校	私 費	嚴修長子/病氣のため、李景圻（福建）が代理
庶務幹事	陳福頤	江蘇清河	東京高等商業学校	南洋官費	第三代会計幹事
	鄧孝可	四川奉節	弘文学院師範科	私 費	病気で、任伝榜（江蘇）が代理
	盧 弼	湖北沔陽	早稲田大学	湖北官費	
書報幹事	寇 煜	湖北安陸	法政速成科	私 費	
招待幹事	劉頌虞	湖南善化	法政速成科	湖南官費	第三代書記幹事代理/帰国、林先民（福建）が代理
	王榮樹	湖北宜都	東京帝国大学農科	湖北官費	第二代書報幹事代理
	黎 邁	貴州遵義	東京高等工業学校	四川官費	黎淵の兄弟
各省評議員	直隸/邢之襄・李士偉、山東/王志勳、山西/王蔭藩、江蘇/朱孔文・李祖虞・沈獅、安徽/劉迺弼・廟寿枢、江西/鍾蔭源、四川/程宇春・彭蘭村・劉履皆・劉泌文・趙香畹・周曉波、福建/鄭炳、浙江/陳威・何煥時、湖北/黃恭輔・王瓊芳・王鎮南・黃瑞蘭・李凌・郭斌、雲南/李培元、貴州/蹇念益、広東/王国樑、陝西/康宝忠、湖南/蔡鏐・周家樹・楊度・范源廉・舒和鈞				

出典：清国留学生会館幹事『清国留学生会館第五次報告』東京並木活版所、1904年12月、「職員表」、23-24頁。

表6 清国留学生会館第六代幹事（1904.12.4—1905?）

姓名	出身	在籍学校	留学費用	備 考
欧陽啓勳	湖北漢川	弘文学院普通科	湖北官費	弘文学院卒業後、慶應義塾大学部予科も卒業、1907年中央大学に入学し、1910年卒業
沈秉仁	広東潮州	弘文学院普通科	私 費	
王鎮南	湖北漢川	明治大学法科	湖北官費	1908年卒業
黎 淵	貴州遵義	東京法学院大学	四川官費	第四代書報幹事/辞職、潘志愷（江蘇）が代理
馮有彝	湖南黔陽	弘文学院師範科	私 費	
胡 邁	湖南湘潭	弘文学院普通科	私 費	
吳鼎昌	直隸清苑	弘文学院師範科	直隸官費	
李士偉	直隸永年	早稲田大学	直隸官費	
稽 鏡	江蘇無錫	早稲田大学	私 費	第四代書記幹事/王舜臣が代理
林汝魁	広東番禺	東京同文書院	私 費	1903年来日
黃炳言	湖北沔陽	東京同文書院	湖北官費	1903年5、6月頃、来日/のちに早稲田大学に入学
何鴻翼	四川金堂	振武学校	雲南官費	

出典：「復選挙之実行」『東京留学界記実』清国留学生会館、1905年2月、43-53頁。記事の中では各幹事の具体的な職務が明記されていない。

注：1904年12月、中国人留学生会館は神田錦輝館で全体留学生大会を開催した。この大会では初めて「複選制」という選挙制度が導入され、会館幹事の改選が行われた。「複選制」は、各省の同郷会が事前に本省の代表者を選出し、さらに留学生大会で代表者の中から幹事を選出する制度である。

三、『訳書彙編』の「敘例」、「簡明章程」及「簡要章程」

下記『訳書彙編』の「敘例」、「簡明章程」は、沈翔雲編、勵志会増補『和文漢読法附訳書彙編叙例』（勵志会訳書処、1900年7月）に掲載されたものである。句読点は筆者による。原文にある割注は【】で示した。

「訳書彙編叙例」

救今日之中国，开民智其第一義矣。开民智之事，約有三端。曰学校，曰報章，曰訳書。学校之事，其用力也多，其及人也狹。啓一学校，受其益者数十百人。而鄉僻之区，遼遠之地，雖有好学有志之士，亦无从丐其餘潤。故非行之以国力，則未易广育人才矣。若夫報章訳書，所費少而及人遠，用力少而收效速。雖鄉僻遼遠之士，苟能購其一冊，手其一編。即可周知四国之形勢，研究専門之學業，有志之士可自任也。欧美諸邦刊出之報，国皆数千百家。著訳之書，歲至数千万种。此其所以驟進文明，而国勢因以富強者也。中国報館大都不過百家，而游戲无謂者，又過其半。夫以二千万方里之大国，而報章寥寥，止於此数，斯亦奇矣。

中国訳書三十余年矣。制造局之所訳，大都言兵，罕及他学。至於政治，闕焉无聞。故学者日読西書，而於西国經国之猷，富国之術，類皆瞠目結舌，不能語其本原，抑又奇矣。日本效法泰西，其所訳欧美之書，无慮千数百种，類能挾精撮要，深探政治學術之原。是以民智驟張，国勢驟奮。

蒙等留学是邦，感隣国之博興，恫吾人之闇蔽，不揣綿薄，用敢糾合同志，开会訳書，餉我人士。挾其当務切用者，刊為彙編，以快先睹，月出一冊。庶几僻遠有志之士，或亦手其一編，可以稍覩四国之情勢，少窺専門之學業欤。由是而闢我新学，進我文明，开我民智，張我国勢，或亦大雅君子之所不弃欤。

「簡明章程」

- 一 是編搜訳東西有用書籍，按月刊行，以饜吾華人士。
- 一 是編所刊以政治一門為主。如政治学、理財学、法律学、哲学、史学之類，另附雜錄。

【每期所出者，或四類、或五類。】

- 一 是編按月一冊，全年十二冊，每冊以五十頁為率。每月初一日出書。【第一冊定於九月初一日發行。】
- 一 是編用白紙洋裝編，首冠以東西各国人名所各種相片。
- 一 是編每冊定価二角，定購全年者兩圓。【価須先付】閏月照加，郵費另計。
- 一 代派処照価提二成作為酬勞，郵費不在折扣之内。
- 一 是編由同人捐資創辦〔辦〕，如蒙同志之士慨与資助，出書後謹酌量贈送，以酬高誼。
- 一 是編草創伊始，未〔未〕尽美善，尚祈同志糾而正之。
- 一 各処來函，請徑寄日本東京本郷区東片町一百四十五番地，訳書彙編發行所，不悞。

光緒二十六年五月

同人公啓

『訳書彙編』の「簡要章程」、「定価」、「購閱略則」は、同誌第 1 期（1900 年 12 月 6 日）に掲載されたものである。句読点が筆者による。なお、「定価」は同誌第 2 年第 1 期（1902 年 4 月 3 日）から「全年 12 冊 2 元 6 角、半年 6 冊 1 元 3 角、単冊 2 角 6 分」に値上げした。

「簡要章程」

- 一 是編所刊政治一門為主，如政治、行政、法律、經濟、政史、政理各門，每期所出或四類或五類，間附雜錄。
- 一 政治諸書乃東西各邦強國之本原，故本編亟先刊行此類，至兵農工商各專門之書，亦有訳出者，以後当陸續択要刊行。
- 一 是編之外，尚須刊刻訳成全部之書，目錄均附於後。
- 一 是編由同人捐資創辦，尚祈同志之士慨与資助，当酌量贈書以酬高誼。

「定価」

一月一冊洋兩角，半年六冊洋一元一角，全年十二冊洋兩元，郵税在內。

「購閱略則」

- 一 定閱本編可函向訳書彙編發行所挂号，每期当按址寄送，外埠可就近向各代派処購取。
- 一 价銀必須先付，挂号後若不付銀，及已送滿所付之价，均一律停止不送，外埠同。
- 一 代派処照定价提二成作為酬勞。

四、『訳書彙編』と『政法学報』の目次

1、『訳書彙編』の目次

第1期（1900年12月6日発行）

項目/タイトル	原著者	日本語訳/中国語訳	原 著
政治学	（米）伯蓋司〔ジョン・ウィリアム・バージェス〕	高田早苗訳/楊廷棟訳 ^(注1)	『政治学』東京専門学校政治経済科講義録、刊年不明
国法汎論	（独）伯倫知理〔ヨハン・カスパー・ブルンチュリ〕	加藤弘之訳/不明	『国法汎論』文部省、1872年
政治学提綱	（日）鳥谷部銃太郎	不明	『通俗政治汎論』博文館、1898年
社会行政法論	（独）海爾司烈〔ヘルマン・ロエスレル〕	江木衷訳述/不明	『社会行政法論』警視庁蔵版、1885年
万法精理	（仏）孟德斯鳩〔シャルル・ド・モンテスキュー〕	何礼之重訳/不明 ^(注2)	『万法精理』（7冊15巻）、何礼之、1875年-1876年
近世〔時〕政治史	（日）有賀長雄	不明	『近時政治史』東京専門学校講義録、刊年不明
近時外交史	（日）有賀長雄	不明	『近時外交史』東京専門学校出版部、1898年
十九世紀欧州政治史論	（日）酒井雄三郎	不明 ^(注3)	『十九世紀歐洲政治史論』東京専門学校出版部、1900年
民約論	（仏）盧騷〔ジャン＝ジャック・ルソー〕	原田潜訳述/楊廷棟訳 ^(注4)	『民約論覆義』春陽堂、1883年
權利競争論	（独）伊耶陵〔ルドルフ・フォン・イエーリング〕	宇都宮五郎重訳/不明 ^(注5)	『權利競争論』哲学書院、1894年
新書告白 広告部	和文漢訳法/東語正規/国民報告白 亜細亜東部奥図/開智録		

注1：高田早苗が翻訳した『政治学』は元々東京専門学校政治経済科講義録であり、のちに『政治学及比較憲法論』の書名で東京専門学校出版部により出版された。国立国会図書館デジタルコレクションに東京専門学校政治経済科第3回第1部講義録『政治学』が収録され、1898-1899年用と書かれている。高田早苗・吉田巳之助訳『政治学及比較憲法論』上/下、東京専門学校出版部、1901-1902年。楊廷棟は高田早苗の講義録『政治学』に基づいて中国語に訳出した。楊廷棟訳『政治学』作新社、沈兆禕『新学書目提要』上海通雅書局、1903-1904年（熊月之編『晚清新学書目提要』上海書店出版社、2014年、397頁）。

注2：『訳書彙編』の訳本以外、上海文明書局により出版された張相文の訳本もある。張相文訳『万法精理』上海文明書局、顧燮光『訳書経眼録』杭州金佳石好樓石印本、1934年（前掲熊月之編『晚清新学書目提要』、267、411頁）。

資料編

注 3：『訳書彙編』の訳本以外、華文祺訳の訳本もある。華文祺訳『十九世紀歐洲政治史論』上海教育世界社、1902 年 4 月、東京都立図書館実藤文庫。

注 4：同文は、のちに作新社により単行本が出版された。楊廷棟重訳『路索民約論』作新社、1903 年。

注 5：張肇桐が翻訳した『權利競争論』があるが、『訳書彙編』の訳本との関係について、張肇桐の訳本が手に入れない現段階ではまだわからない。張肇桐訳『權利競争論』上海文明書局、顧燮光『訳書経眼録』杭州金佳石好樓石印本、1934 年（前掲熊月之編『晚清新學書目提要』、342 頁）。

第 2 期（1901 年 1 月 28 日発行）

項目/タイトル	原著者	日本語訳/中国語訳	原 著
政治学	（米）伯蓋司	高田早苗訳/楊廷棟訳	『政治学』東京専門学校政治経済科講義録、刊年不明
国法汎論	（独）伯倫知理	加藤弘之訳/不明	『国法汎論』文部省、1872 年
政治学提綱	（日）鳥谷部銃太郎	不明	『通俗政治汎論』博文館、1898 年
万法精理	（仏）孟德斯鳩	何礼之重訳/不明	『万法精理』（7 冊 15 巻）、何礼之、1875 年-1876 年
近世〔時〕政治史	（日）有賀長雄	不明	『近時政治史』東京専門学校講義録、刊年不明
十九世紀歐洲政治史論	（日）酒井雄三郎	不明	『十九世紀歐洲政治史論』東京専門学校出版部、1900 年
民約論	（仏）盧騷	原田潜訳述/楊廷棟訳	『民約論覆義』春陽堂、1883 年
政法哲学	（英）斯賓塞爾〔ハーバート・スペンサー〕	浜野定四郎・渡辺治訳/不明	『政法哲学』前編/後編、石川半次郎 1884 年
理財学 原名経済論	（独）李士德〔フリードリッヒ・リスト〕	大島貞益重訳/不明	『李氏經濟論』上/下、鉄雲山房、1889 年
雑報	志士東遊/救世軍/禁煙律		
新書告白 広告部	和文漢読法/東語正規/国民報告白/日本学校章程一覧/累卵東洋 亜細亜東部輿図/開智録/東来書荘		

第 3 期（1901 年 4 月 7 日発行）

項目/タイトル	原著者	日本語訳/中国語訳	原 著
国法汎論	（独）伯倫知理	加藤弘之訳/不明	『国法汎論』文部省、1872 年
万法精理	（仏）孟德斯鳩	何礼之重訳/不明	『万法精理』（7 冊 15 巻）、何礼之、1875 年-1876 年
近世〔時〕政治史	（日）有賀長雄	不明	『近時政治史』東京専門学校講義録、刊年不明
近時外交史	（日）有賀長雄	不明	『近時外交史』東京専門学校出版部、1898 年

資料編

政法哲学	(英) 斯賓塞爾	浜野定四郎・渡辺治 訳/不明	『政法哲学』前編/後編、石川半次郎 1884 年
理財学 原名経済論	(独) 李士徳	大島貞益重訳/不明	『李氏経済論』上/下、鉄雲山房、1889 年
雑報	麦泥職人嘆息之言/畦路散泥哀/西伯利亚鉄道之効験/討議会 法蘭西及暹羅之影響/土耳其及路梅泥耶之同盟/俄羅斯東路方輿		
新書告白 広告部	和文漢読法/東語正規/国民報告白/日本学校章程一覽/累卵東洋 亜細亜東部輿図/開智録/東来書荘		

第 4 期 (1901 年 5 月 27 日発行)

項目/タイトル	原著者	日本語訳/中国語訳	原 著
民約論	(仏) 盧騷	原田潜訳述/楊廷棟訳	『民約論覆義』春陽堂、1883 年
物競論	(日) 加藤弘之	楊蔭杭訳	『強者の権力の競争』哲学書院、1893 年
権利競争論	(独) 伊耶陵	宇都宮五郎重訳/不明	『権利競争論』哲学書院、1894 年
理財学 原名経済論	(独) 李士徳	大島貞益重訳/不明	『李氏経済論』上/下、鉄雲山房、1889 年
雑録	帝国東洋学会/日本文部省高等専門両会議		
新書告白 広告部	和文漢読法/東語正規/国民報告白/日本学校章程一覽/累卵東洋/各国国民公私権考 亜細亜東部輿図/開智録/東来書荘/近世名家手簡/代售各書告白 (訳林、励学訳編)		

第 5 期 (1901 年 7 月 14 日発行)

項目/タイトル	原著者	中国語訳	原 著
現行法制大意	(日) 樋山広業	不明	『現行法制大意』大日本図書、1900 年
近世〔時〕外交史	(日) 有賀長雄	不明	『近時政治史』東京専門学校講義録、刊年不明
物競論	(日) 加藤弘之	楊蔭杭訳	『強者の権力の競争』哲学書院、1893 年
雑録：政治学研究 之方法	(日) 高田早苗	不明	高田早苗等述『東京専門学校政治科参考課目』、刊年不明
新書告白 広告部	和文漢読法/東語正規/国民報告白/日本学校章程一覽/累卵東洋/各国国民公私権考/新刻譚 壯飛先生仁学全書出售 亜細亜東部輿図/開智録/東来書荘/近世名家手簡/代售各書告白 (訳林、励学訳編)		

第 6 期 (1901 年 8 月 8 日発行)

項目/タイトル	原著者	日本語訳/中国語訳	原 著
政治学	(米) 伯蓋司	高田早苗訳/楊廷棟 訳	『政治学』東京専門学校政治経済科講義録、刊 年不明
現行法制大意	(日) 樋山広業	不明	『現行法制大意』大日本図書、1900 年
近世〔時〕政治史	(日) 有賀長雄	不明	『近時政治史』東京専門学校講義録、刊年不明
近時外交史	(日) 有賀長雄	不明	『近時外交史』東京専門学校出版部、1898 年

資料編

雑録：政治学研究 之方法	(日) 高田早苗	不明	高田早苗等述『東京専門学校政治科参考課 目』、刊年不明
新書告白	和文漢読法/東語正規/国民報告白/日本学校章程一覽/累卵東洋/各国国民公私權考/新刻譯 壯飛先生仁学全書出售		
広告部	亜細亜東部輿図/開智録/東来書莊/近世名家手簡/物競論全書出售告白/日本遊学指南告白 代售各書告白 (訳林、励学訳編)		

第7期 (1901年8月21日発行)

項目/タイトル	原著者	中国語訳	原 著
現行法制大意	(日) 樋山広業	不明	『現行法制大意』大日本図書、1900年
政治学提綱	(日) 鳥谷部銃太郎	不明	『通俗政治汎論』博文館、1898年
雑録： 政治学研究之方法〔完訳〕 経済学研究之方法	(日) 高田早苗 (日) 天野為之	不明 不明	高田早苗等述『東京専門学校政治科参 考課目』、刊年不明
新書告白	和文漢読法/東語正規/国民報告白/日本学校章程一覽/累卵東洋/各国国民公私權 考/新刻譯壯飛先生仁学全書出售		
広告部	亜細亜東部輿図/開智録/東来書莊/近世名家手簡/物競論全書出售告白/日本遊学 指南告白/代售各書告白 (訳林、励学訳編)		

第8期 (1901年10月13日発行)

項目/タイトル	原著者	日本語訳/中国語訳	原 著
政治学	(米) 伯蓋司	高田早苗訳/楊廷棟訳	『政治学』東京専門学校政治経済科講義 録、刊年不明
各国国民公私權考	(日) 井上毅	章宗祥訳	『内外臣民公私權考』哲学書院、1889年
近世〔時〕政治史	(日) 有賀長雄	不明	『近時政治史』東京専門学校講義録、刊年 不明/「第一部 独逸」(完訳)
理財学	(独) 李士德	大島貞益重訳/不明	『李氏經濟論』上/下、鉄雲山房、1889年
物競論	(日) 加藤弘之	楊蔭杭訳	『強者の權利の競争』哲学書院、1893年
雑録：日本外務省及 外交官官制	(日) 長岡春一	錢承誌訳	「第三章 外務省及ヒ外交官官制」『外交通 義』有斐閣、1901年
新書告白	和文漢読法/東語正規/国民報告白/日本学校章程一覽/累卵東洋/国家学原理出書/新刻譯 壯飛先生仁学全書出售/女子教育論		
広告部	亜細亜東部輿図/波蘭衰亡戦史出書/東来書莊/近世名家手簡/物競論全書出售告白/日本遊 学指南告白/代售各書告白 (訳林、励学訳編)		

第9期 (1901年12月15日発行)

項目/タイトル	原著者	日本語訳/中国語訳	原 著
現行法制大意	(日) 樋山広業	不明	『現行法制大意』大日本図書、1900年

資料編

政治学提綱	(日) 鳥谷部銑太郎	不明	『通俗政治汎論』博文館、1898 年
近時外交史	(日) 有賀長雄	不明	『近時外交史』東京専門学校出版部、1898 年
民約論	(仏) 盧騷	原田潜訳述/楊廷棟訳	『民約論釋義』春陽堂、1883 年
雑録：日本外務省及外交官官制	(日) 長岡春一	銭承誌訳	「第三章 外務省及ヒ外交官官制」『外交通義』有斐閣、1901 年
本社新書告白	国法学(岸崎昌・中村孝原著、章宗祥訳)/波蘭衰亡戦史		
広告部	丸善書店告白/東来書荘告白/本社代售各書告白(訳林、励学訳編)		

第 2 年〔壬寅年〕第 1 期(1902 年 4 月 3 日発行)

項目/タイトル		原著者	中国語訳	原 著
〔揭示〕		訳書彙編発行之趣意/本編改良規則/本編改良告白/本編之特色/訳書彙編社社員姓氏		
外交通義		(日) 長岡春一	銭承誌訳	『外交通義』有斐閣、1901 年
欧州財政史		(日) 小林丑三郎	金邦平訳	『欧州財政史』専修学校、1901 年
警察学		(日) 宮國忠吉	唐宝鏐訳	『警察学』博文館、1901 年
法律学綱領		(日) 戸水寛人	巖涯生訳	『法律学綱領』有斐閣、1901 年
附録	政法片片録	国家学説之影響/政治教育/各国政体表/欧州主権論之沿革/英国憲法/国家為有機体説 国際公法之由来/国際公法之字義/今日欧州之所謂国際公法		
		欧美日本政治法律經濟参考書紹介		
〔広告〕		清国留学生会館告白/教科書訳輯社広告		

第 2 年第 2 期(1902 年 5 月 13 日発行/5 月 28 日再版)

項目/タイトル		原著者	中国語訳	原 著
写真		日本明治兩陛下御肖像/日本学習院/日本女学校卒業式		
〔揭示〕		訳書彙編発行之趣意/本編改良規則/本編改良告白/本編之特色/訳書彙編社社員姓氏		
外交通義		(日) 長岡春一	銭承誌訳	『外交通義』有斐閣、1901 年
欧州財政史		(日) 小林丑三郎	金邦平訳	『欧州財政史』専修学校、1901 年
欧州各国比較財政及組織		(独) 海開路	本社訳	不明
附録	政法片片録	世人對科学之謬想/実学空理之辯/各国憲法与人民之關係/三權分立説/国際公法研究案		
		欧美日本政治法律經濟参考書紹介		
〔広告〕		新民叢報告白/新編東亜三国地誌/江西広智書荘/新書近訳予告(法学通論、新法律字典、憲法理對照)/清国留学生会館招待規則/教科書訳輯社広告		

第 2 年第 3 期(1902 年 6 月 23 日発行)

項目/タイトル	原著者	中国語訳	原 著	訳簡箇所
写真	世界航路図			

資料編

〔揭示〕	訳書彙編社社員姓氏			
外交通義	(日) 長岡春一	銭承詒訳	『外交通義』有斐閣、1901 年	
欧州財政史	(日) 小林丑三郎	金邦平訳	『欧州財政史』専修学校、1901 年	完訳
警察学	(日) 宮國忠吉	唐宝鏐訳	『警察学』博文館、1901 年	総論之部 (完訳)
附録	小学聞見録			
〔広告〕	清浄軒旅館謹白/五洲大地誌/増見屋水島氏謹白/新民叢報告白/新編東亜三国地誌/江西広智書莊/新書近訳予告 (法学通論、新法律字典、憲法理対照) /清国留学生会館招待規則/教科書訳輯社広告			

第 2 年第 4 期 (1902 年 8 月 31 日発行)

項目/タイトル	原著者	中国語訳	原 著	翻訳箇所
写真	第一高等学校卒業式/上海務本女学塾			
〔揭示〕	訳書彙編社発行書目 (已刊) /政法叢書第一編国法学/政法叢書第二編欧米日本政体通覧			
外交通義	(日) 長岡春一	銭承詒訳	『外交通義』有斐閣、1901 年	完訳
〔広告〕	新民叢報告白/新編東亜三国地誌/創設開明書店啓/江西広智書莊/新書近訳予告 (法学通論、新法律字典、憲法理対照) /清国留学生会館招待規則/教科書訳輯社広告			

第 2 年第 5 期 (1902 年 7 月 25 日発行)

項目/タイトル		原著者	日本語訳/中国語訳	原 著	翻訳箇所
写真		日本東京天文台/熱帯植物			
〔揭示〕		訳書彙編社発行書目（已刊）			
支那化成論（註1）		（英）コフーン	（日）立作太郎解説 /不明	『コフーン氏支那化成論』東京専門学校出版部、刊年不明	
欧美日本政体通覧		（日）上野貞正	巖渥生編訳	『欧米政体通覧』王道雑誌社、1901 年	
最近俄羅斯政治史		（日）有賀長雄	富士英訳	『近時政治史』東京専門学校講義録、刊年不明	第 三 部 露西亞部
附録	時事漫論五則	日米性質上之異点/日本国粹主義與欧化主義之消長/帝國主義/英國之強與俄國之強/日英同盟			
〔広告〕		清浄軒旅館謹白/五洲大地誌/増見屋水島氏謹白/江西広智書莊/新書近訳予告（法学通論、新法律字典、憲法理対照）/清国留学生会館招待規則/教科書訳輯社広告			

注 1 : 『支那化成論』は上海作新社が単行本を出版した。沈兆璋『新学書目提要』上海通雅書局、1903-1904 年 (熊月之編『晚清新学書目提要』上海書店出版社、2014 年、427 頁)。

第 2 年第 6 期 (1902 年 7 月 31 日発行)

項目/タイトル	原著者	日本語訳/中国語訳	原 著	翻訳箇所
写真	日本三崎臨海実験所/日本三崎臨海実験所寄宿舎			

〔揭示〕	訳書彙編社発行書目（已刊）			
支那化成論	（英）コフーン	（日）立作太郎解説 /不明	『コフーン氏支那化成論』東 京専門学校出版部、刊年不明	
欧米日本政体通覧	（日）上野貞正	巖渥生編訳	『欧米政体通覧』王道雑誌 社、1901年	
最近俄羅斯政治史	（日）有賀長雄	富士英訳	『近時政治史』東京専門学校 講義録、刊年不明	第三部 露西 亜部（完訳）
附録	勸業野人士遊学日本啓			
〔広告〕	清浄軒旅館謹白/五洲大地誌/増見屋水島氏謹白/江西広智書荘/新書近訳予告（法学通論、 新法律字典、憲法理対照）/清国留学生会館招待規則/教科書訳輯社広告			

第2年第7期（1902年9月22日発行）

項目/タイトル	原著者	日本語訳/中国語訳	原 著	翻訳箇所
〔揭示〕	訳書彙編社発行書目（已刊）/本社新書広告、最近俄羅斯政治史、外交通義、欧州財政史/教科 書訳輯社出書広告/美国独立史			
支那化成論	（英）コフーン	（日）立作太郎解説/ 不明	『コフーン氏支那化成論』東京 専門学校出版部、刊年不明	
論理学	（日）高山林次郎	汪榮宝訳	『論理学』博文館、1898年	上巻終
附録	日本学校系統説（未完）			
〔広告〕	清浄軒旅館謹白/五洲大地誌/増見屋水島氏謹白/新民叢報告白/新編東亜三国地誌/江西広智書荘 /新書近訳予告（法学通論、新法律字典、憲法理対照）/清国留学生会館招待規則/創設開明書 店啓/教科書訳輯社広告			

第2年第8期（1902年11月15日発行）

項目/タイトル	原著者	日本語訳/中国語訳	原 著	翻訳箇所
写真	清国留学生会館撮影/留学生壬寅新年会撮影			
〔雑誌告白〕	訳書彙編第九期改正体例告白/訳書彙編社発行書目（已刊）/本社新書広告（最近俄羅斯政治 史、外交通義、欧州財政史）/教科書訳輯社出書広告/美国独立史/最新精給学校建築模範図			
日本財政之過 去及現在	（日）小林丑三郎	王宰善訳	『財政之過去及現在』経済雑 誌社、1902年	
欧米日本政体 通覧	（日）上野貞正	巖渥生編訳	『欧米政体通覧』王道雑誌 社、1901年	完訳
附録	日本学校系統説			
〔広告〕	東京並木活版所/日本科学儀器専售公司/開明書店九月份出版新書/原鉄出張店/泰東同文局所出 図書綱目（日本学制大綱、五大洲志、東文易解、東語初階、東語真伝、支那交際往來公牘、野 操規例、養兵秘訣）			

第2年第9期（1902年12月10日発行）

項目	タイトル		著訳者	原著/備考
写真	日本皇宮二重櫓/日本国会議事堂/日本銀行内部/外部			
〔揭示〕	訳書彙編第九期改正体例告白/訳書彙編社出版書目/本社新書広告（最近俄羅斯政治史、外交通義、欧州財政史、美国独立史、法制新編、日耳曼史、亜細亞西南部衰亡史）			
政法通論	論研究政法為今日之急務		攻法子〔章宗祥〕	
政治	論国家（未完）		攻法子〔章宗祥〕	
	第十九世紀外交通観		署名なし	
法律	法典編纂方法論		赤門生	穂積陳重『法典論』哲学書院、1890年
	国際法上之印度観		瀧川学人	
経済	経済原理		無逸	
	財政概論		亜粹	
歴史	史学概論		袁父〔汪荣宝〕	坪井九馬三講述『史学研究法』東京専門学校文学教育科講義録、刊年不明
雑纂	政法片 片録	英人之權利思想/日人之權利思想/国民主義/法律與法理之別/愛国心與常識之關係	攻法子〔章宗祥〕	
附録	留学界	第一次速成師範卒業/各省留学生總数/浙江同郷会記事/第二次士官学校卒業	本社社員	
〔広告〕	清国留学生会館招待規則/最新精絵学校建築模範図/開明書店代售各種新書告白/教科書訳輯社出書広告/東京並木活版所/原鉄出張店/中外故事読本（文明編訳印書局）/日本科学儀器專售公司/横浜新小説広告/上海文明編訳印書局発行図書要目			

第2年第10期（1902年12月27日発行）

項目	タイトル		著訳者
写真	北京万寿山仏香閣図/日本甲午戦勝記念塔図		
〔揭示〕	訳書彙編第九期改正体例告白/訳書彙編社出版書目/本社新書広告（最近俄羅斯政治史、外交通義、欧州財政史、美国独立史、法制新編、日耳曼史、亜細亞西南部衰亡史）		
政法通論	論研究政法為今日之急務（続前稿）		攻法子〔章宗祥〕
政治	論国家（続前稿）		攻法子〔章宗祥〕
	法蘭西革新之機関		赤門生
法律	国際法上之印度観（続前稿）		瀧川学人
	国際法上之日本観		瀧川学人
経済	経済学之範圍及分類説		無逸

資料編

	財政概論（続前稿）	亜粋
歴史	史学概論（続前稿）	袁父〔汪榮宝〕
雑纂	警醒録	赤門生
	日本法律参考書概評	社員某
附録	浙江同郷会調査部叙例	
〔広告〕	政法叢書（国法学、欧美日本政体通覧、日本行政法綱領、日本国会起源）/清国留学生会館招待規則/最新精繪学校建築模範図/開明書店代售各種新書告白/教科書編輯社出書広告/覚民編訳所啓（最新外国地名人名字典、大国民、西力東侵史、十九世紀活動時代）/東京並木活版所/原鉄出張店/蔣鳳梧・季新益同啓（日本国民同盟会始末、教育学原理、教育哲学）/日本科学儀器専售公司	

第 2 年第 11 期（1903 年 2 月 16 日発行）

項目	タイトル		著訳者
写真	上海愛国学社図/上海愛国女学校図		
〔揭示〕	本社新書広告（美国独立史、日本行政法綱領、俄羅斯对中国政策二十世紀開幕時代之人物）/訳書彙編社出版及発行書目		
政法通論	対外觀念之適當程度論		攻法子〔章宗祥〕
	中国貨幣改革議		瀧川学人
法律	國際法上之蒙洛主義		無名氏
経済	生産論		無逸
	財政概論（続前稿）		亜粋
歴史	欧州歴史之新人種		汪榮宝
哲理	社会主義與進化主義比較		君武〔馬君武〕
雑纂	政法片片録	国民之欲望與文明程度之關係/国民之經濟思想與時間物質文明之必要/機關世界說/有治法無治人説	攻法子〔章宗祥〕
	留学界	恩施王女土蓮致某女土書/帝国婦人協會之主旨	本社社員編輯
〔広告〕	浙江潮広告/湖北学生界広告/遊学訳編/政法叢書（国法学、欧美日本政体通覧、日本行政法綱領、日本国会起源）/日本維新百傑伝（上海開明書店広告）/弥勒約翰自由之理出版板広告（馬君武訳、上海開明書店）/啓新訳書局啓（最近滿洲貿易志、蒙古地誌付印広告、西伯利亚大地誌付印広告）/國際公法総論/世界史要（上海開明書店）/日本科学儀器専售公司/新書近刊（上海開明書店）/東京並木活版所/原鉄出張店		

第 2 年第 12 期（1903 年 3 月 13 日発行）

項目	タイトル	著訳者	原著/備考
写真	法巴黎凱旋門図/米百里口海軍港図		
〔揭示〕	本社新書広告（美国独立史、日本行政法綱領、日本国会起源）/本編改名政法学報告白/本編緊急広告		
政法通論	創造文明之国民論	君武〔馬君武〕	
政治	日本国会成立之原動力在於日本国民	英峰	

資料編

	俄羅斯之国会		本社社員	戸水寛人『露西亞之国会』 有斐閣、1900 年
経済	生産論（続前稿）		無逸	
	財政概論（続前稿）		亜粋	
歴史	拔都別伝		汪榮宝	
哲理	社会主義之鼻祖德摩司摩児之華嚴界観		君武〔馬君武〕	
雑纂	欧美雁信		本社社員編纂	
附録	留学界	記歓迎会/勵志会章程	本社社員	
	[広告] 浙江潮広告/湖北学生界広告/直説/日本科学儀器專售公司/啓新訳書局啓（最近満洲貿易志、蒙古地誌付印広告、西伯利亚大地誌付印広告）/日本維新百傑伝（上海開明書店広告）/教育誌叢発刊辞（青年教育、国家教育、教育原理、社会学提綱、教科書訳輯社）/東京並木活版所/原鉄出張店			

2、『政法学報』の目次

癸卯年第 1 期（1903 年 4 月 27 日発行）

項目		タイトル	著者
写真		日本徳川幕府大政奉還図	
社説		論中国行政機関之欠点及其救済策	攻法子〔章宗祥〕
論説		論公德	君武〔馬君武〕
學術	政治	立憲論	耐軒（注 1）
	法律	論法治国	亜粹
	經濟	財政概論識入之部	亜粹
	歴史	抜都別伝（統壬寅年訳書彙編第 12 期）	汪榮宝
	哲理	社会党巨子加菩提之意加尼亞旅行	君武〔馬君武〕
訪問		日本法学博士田尻稲次郎氏談片/日本文学博士建部遜吾氏談片	攻法子〔章宗祥〕
講演		東三省叢話（注 2）	無逸訳
雜纂	他山集	孟子之政治主義	中季子
	名家片影録	機外劍客雜著六種（注 3）	耐軒訳
附録	留学界	錢恂夏偕復兩氏之送別/吳肇甫先生之追悼会/士官学校及速成師範卒業生帰国/江蘇同郷会之成立/湖北学生界及浙江潮之発刊/留学生統抵東京/留学生与日本博覧会	本社社員
	欧美雁信	美国悟一子来函覆某君書/仏国菅訖来函	
広告		訳書彙編社出版及発行書目/本社広告/清国留学生会館招待規則/本社新書近刊報告/日本科学儀器專售公司/最新精絵学校建築模範図、訳書彙編社告白/開明書店代售各種新書告白/本社新書出版報告、訳書彙編社/遊学訳編第五冊目録/湖北学生界第三期目録予告発行生雲堂、片桐本店/浙江潮第二期/江蘇/直説第二期目録/東京教科書訳輯社集股簡章/東京並木活版所/学堂必需教育図画告白、東京造画館	

注 1：1903 年頃、『政法学報』のほかにも、「耐軒」の筆名を用いる著者はそれぞれの雑誌に「自治制釈義」（『江蘇』第 4 期、1903 年 6 月）と「政法界：中国歴代刑法之変遷（未完）」（『華新報』第 6 期、1904 年）を寄稿したが、この筆名を用いる著者の本名がまだ解明できない。

注 2：この文章は、戸水寛人『東亜旅行談』有斐閣、1903 年により翻訳、掲載された。

注 3：この文は、渡辺国武の数種類の文章を合わせて翻訳され、本誌の第 1 期と第 2 期に掲載された。タイトルが示すように、すべて 6 種が掲載される予定だが、「政談一夕話」、「政海一瀾」、「先進遺響」、「獅子謎」の 4 種と「矯世危言」の一部しか掲載されなかった。渡辺国武はこれらの文章をまとめて 1906 年に一冊の本を出版している。渡辺国武『機外観』嵩山房、1906 年を参照。

癸卯年第2期（1903年8月13日発行）

項目		タイトル	著訳者
写真		仏蘭西上議院之表面、仏蘭西上議院之内観	
社説		論列国外交大勢及中国外交上之失敗	天民
論説		經濟上之支那觀	經濟研究生
學術	政治	立憲論（続第一章）	耐軒
	法律	世界五大法系比較論	攻法子〔章宗祥〕
	経済	財政概論（続前稿）	亜粋
	歴史	維也納會議之顛末	攻法子〔章宗祥〕
	哲理	論理学之重要及其効用	君武〔馬君武〕
訪問		國際公法 法学博士中村進午答/國際私法 法学博士山田三良答	金邦平・唐宝鐸
警醒絵図録		狼吞図、蜃食図、対峙図	英峰
雑纂	名家片影録	機外劍客雜著六種（続第1期）	耐軒訳
研究資料		日本鉱律	唐宝鐸
広告		学堂必需教育図画告白、東京造画館/東京築地活版製造所/杭州旅行招待社簡章/閩学会叢書広告/江蘇第三期目録/遊学訳編第八期/教科書訳輯社刊行書目/美史訳成、章伯初、上海開明書店/東京並木活版所	

癸卯年第3期（1903年9月13日発行）

項目		タイトル	著訳者
写真		美国西嘉郭大学校	
社説	中国外交之前途		瀧川
	読日本板垣伯爵之政党綱領及政策稿		英峰
論説		新學術と群治之關係	君武〔馬君武〕
學術	法律	論國際公法關係中国之前途	守肅
	経済	財政概論（続第2期稿）	亜粋
	歴史	日本国民第一快意之歴史	守肅
	哲理	人与下等動物之心才比較	君武〔馬君武〕
講演		日本高田博士早稻田同窓会演説（改造支那論）	
訪問		渡邊亨氏交易所経験談	金邦平・唐宝鐸
新書紹介		仏国政法書紹介	耐軒
欧米雁信		在留俄国某君來函、美国羅統幸撰穆那学校記	
研究資料		英吉利憲法史	
広告		訳書彙編社出版及発行書目 最新精絵学校建築模範図、訳書彙編社告白 開明書店代售各種新書告白 本社新書出版報告 浙江潮第六期目録 教科書訳輯社刊行書目 美史訳成、章伯初、上海開明書店 生雲堂、片桐本店 学堂必需教育図画告白、東京造画館 杭州旅行招待社簡章 閩学会叢書広告 東京築地活版製造所 東京並木活版所	

癸卯年第4期（1903年11月10日発行）

項目		タイトル	著訳者
写真		極東形勢一覽図	
社説		日本朝野名士対俄日開戦之意見	瀧川学人
論説		古今中東思想変遷説	木曾山人
学術	法律	論法學派之淵源	耐軒
	経済	俄国鉄道悲嘆考	芙蓉
	歴史	梅特涅伝	君武〔馬君武〕
	哲理	論理学之重要及其効用（続第2期）	
	政治	警察精義	唐宝鏐
雑纂	政法之友		耐軒
	警醒絵図録	日俄外交現象之図/俄羅斯外剛内柔図/俄人脚踏清韓二国図/英人勸日拒俄図	芙蓉
	欧美雁信	節録菅沚氏来信	
研究資料		日本砂鋸採取法（続前稿）	唐宝鏐
来稿附録		論学校不可破壊	崇有 ^{（注1）}
広告		本社緊要広告「聞報及代派諸君公鑑」/本社名誉賛成員寄附報告/訳書彙編社出版及発行書目/教科書訳輯社刊行書目/生雲堂、片桐本店/学堂必需教育図画告白、東京造画館 東京築地活版製造所	

注1：1910年の『教育雑誌』第2巻第1期に、「崇有」の筆名で掲載された文章「評論：学堂奨励章程疑問」が確認できるが、著者の本名が解明できない。

癸卯年第5期（1903年12月25日発行）

項目		タイトル	著訳者
写真		美洲中国留学生会写真、美国発林斯登大学	
社説		中国与英美日新訂通商条約之評論	耐軒
論説		中国国学保存論之一	春水
学術	法律	公法上之人格	瀧川生
		行政法概論	偉璠
	政治	立憲主義之由来	研究政法生
	経済	日本中央銀行之内容	瀧川
雑纂		警醒絵図録（十則）	
来稿附録		遼東湾一週遊覧記	陸宗輿
研究資料		中国与各国新結通商条約正文	
広告		催款再広告、訳書彙編社/訳書彙編社出版及発行書目/達爾文著物种由来出版、開明書店 教科書 訳輯社刊行書目/生雲堂、片桐本店/東京築地活版製造所/学堂必需教育図画告白、東京造画館	

癸卯年第6期（1904年3月20日発行）

項目		タイトル	著訳者
写真		海參崴軍港全景	
社説		日俄戦争及於中国之影響	守肅
		論日本定台湾答刑兼及在留華人事	野倫 ^{〔注1〕}
学術	法律	日本改定法律沿革考	攻法子〔章宗祥〕
	経済	日本鉄路政策	秀峰
	歴史	梅特涅伝（続前稿）	君武〔馬君武〕
雑纂		泰西十大家伝	
欧美雁信		美洲周君通信	
研究資料		日本関税法	唐宝鐔訳解
広告		江蘇第八期目録/訳書彙編社出版及発行書目/東京築地活版製造所/学堂必需教育図画告白、東京造画館/生雲堂、片桐本店	

注1：1904年『革新報』第2期に、「野倫」の筆名で「政法界：論日本定台湾答刑兼及在留華人事」が掲載された。筆者がこの二つの文章を比較してみれば、全く同じ内容であり、「野倫」の筆名を用いる著者は、同じ内容のものを二つの雑誌に寄稿したことがわかる。

癸卯年第7、8期合刊（1904年5月20日発行）

項目		タイトル	著訳者
地図		最新詳細東三省地図	
写真		日本総理大臣桂氏/海軍大臣山本氏/陸軍大臣寺内氏/俄国極東総督亜氏/陸軍司令官	
社説		論中国之局外中立	耐軒
		日韓議定書之評判	守肅
論説		新學術与群治之關係（続第三期）	君武〔馬君武〕
		文明戦争之規例	守肅
学術	政治	論満洲問題及各国之対満政策	天民
	法律	中国歴代刑法之變遷	耐軒
		論国际法上戦争之性質	天民
	経済	近世経済学之思潮	愛彌勒
	歴史	中俄交渉略史	守肅
	哲理	自然哲学 説熟	君武〔馬君武〕
研究資料		国际例案	黎淵訳述
		日本関税法（続第6期）	唐宝鐔訳解
雑纂		日俄戦時国際法之論評	耐軒訳纂
附録	日俄開戦前之外交文書		社員
	留学界	法政速成科之成立（開講式之記事）	記者
広告		北京第一書局開辦簡章/江蘇第九十期合冊目次/東京築地活版製造所/中野商店	

五、『訳書彙編』の代理販売所

下記の諸表は、『訳書彙編』の代理販売所の情報をまとめたものである。

その中、第5期から第8期までの4期、第2年第2期と第3期の2期、第2年第4期から第8期までの5期、第2年第9期と第10期の2期、第2年第11期と第12期の2期の代理販売所は変わらないため、省略した。

第1期（1900年12月6日発行）

地域	所在地	代理販売所
上海	大東門内	王氏育才書塾
	北市拋球場	広学会
蘇州	玄妙觀前	文経楼書坊
香港	九如坊南	張存徳堂
横浜	山下町二百五十三番	清議報館
合計	5	

第2期（1901年1月28日発行）

地域	所在地	代理販売所
上海	大東門内	王氏育才書塾
	北市拋球場	広学会
蘇州	廟堂巷	東來書荘
無錫	崇安寺	三等学堂
蕪湖	寧淵觀南岸	晋康煤炭公司
香港	荷理活道	聚文閣
	文武廟直街	文裕堂
	上環海旁	和昌隆
新嘉坡	衣箱街	天南新報
東京	神田区表神保町	東京堂
	神田区今川小路二丁目一番地	博愛堂
大阪	川口三十二番地	鎰源号
神戸	栄町三丁目	中外合衆保険公司
台湾	台北府大稻埕六館街二十一番戸	良德行
合計	14	

第3期（1901年4月7日発行）

地域	所在地	代理販売所
上海	新北門外	中西書室
	北市拋球場	広学会
	三馬路望平街	中外日報館
蘇州	廟堂巷	東來書莊
杭州	城内銀洞橋	訳林
無錫	崇安寺	三等学堂
蕪湖	寧淵觀南岸	晋康煤炭公司
江西	馬王廟背後	賦梅山房主人
香港	荷理活道	聚文閣
	文武廟直街	文裕堂
新加坡	衣箱街	天南新報
東京	神田区表神保町	東京堂
	神田区今川小路二丁目一番地	博愛堂
大阪	川口三十二番地	鎰源号
神戸	栄町三丁目	中外合衆保險公司
台湾	台北府大稻埕六館街二十一番戸	良德行
合計	16	

第4期（1901年5月27日発行）

地域	所在地	代理販売所
上海	新北門外	中西書室
	北市拋球場	広学会
	三馬路望平街	中外日報館
蘇州	廟堂巷	東來書莊
杭州	城内銀洞橋	訳林
無錫	崇安寺	三等学堂
蕪湖	寧淵觀南岸	晋康煤炭公司
江西	馬王廟背後	賦梅山房主人
香港	荷理活道	聚文閣
	上環海旁	和昌隆
	文武廟直街	文裕堂
新加坡	衣箱街	天南新報館
東京	神田区表神保町	東京堂

	神田区今川小路二丁目一番地	博愛堂
大阪	川口三十二番地	鎰源号
神戸	栄町三丁目	中外合衆保険公司
台湾	台北府大稻埕六館街二十一番戸	良德行
合計	17	

第5期（1901年7月14日発行）

地域	所在地	代理販売所
上海	新北門外	中西書室
	北市拋球場	広学会
	三馬路望平街	中外日報館
蘇州	廟堂巷	東來書莊
	元妙觀前東首	開智書室
杭州	城内銀洞橋	訳林
無錫	崇安寺	三等学堂
蕪湖	寧淵觀南岸	晋康煤炭公司
江西	馬王廟背後	賦梅山房主人
香港	荷理活道	聚文閣
	上環海旁	和昌隆
	文武廟直街	文裕堂
新加坡	衣箱街	天南新報館
東京	神田区表神保町	東京堂
	神田区今川小路二丁目一番地	博愛堂
大阪	川口三十二番地	鎰源号
神戸	栄町三丁目	中外合衆保険公司
台湾	台北府大稻埕六館街二十一番戸	良德行
合計	18	

第6期（1901年8月8日発行）、第7期（1901年8月21日発行）、第8期（1901年10月13日発行） 同第5期。

第9期（1901年12月15日発行）

地域	所在地	代理販売所
上海	新北門外	中西書室
	北市拋球場	広学会
	三馬路望平街	中外日報館
	後馬路盆湯弄	繩正学堂
蘇州	養育巷北女冠子橋堍	東來書莊

	元妙觀前東首	開智書室
	葑門內唐家巷	中西小学堂
	葑門內盛家壇	湯宅
杭州	城內銀洞橋	詠林
	城內菜市橋蒲場巷	求是書院
	城內大方伯	養正書塾
無錫	崇安寺	三等学堂
蕪湖	寧淵觀南岸	晋康煤炭公司
江西	馬王廟背後	賦梅山房主人
天津	宮北玉皇宮前	日日新聞社主筆
	紫竹林	信遠洋行
北京	米市胡同	日日新聞分社
	東四牌樓什錦花園	溥宅
香港	荷理活道	聚文閣
	上環海旁	和昌隆
	文武廟直街	文裕堂
	中環士丹利街	中国報館
汕頭	鎮邦街下富中華夏布莊樓上	李道南先生
新加坡	衣箱街	天南新報館
大阪	川口三十二番地	鎰源号
神戸	栄町三丁目	中外合衆保險公司
横浜	山下町一百五十二番	清議報館
合計	27	

第2年第1期（1902年4月3日発行）

地域	所在地	代理販売所
上海	新北門外	中西書室
	北市拋球場	広学会
	三馬路望平街	中外日報館
	後馬路盆湯弄	繩正学堂
蘇州	養育巷北女冠子橋堍	東來書莊
	元妙觀前東首	開智書室
	葑門內唐家巷	中西小学堂
	葑門內盛家壇	湯宅
杭州	城內銀洞橋	詠林
	城內菜市橋蒲場巷	浙江大学堂
	城內大方伯	養正書塾

湖州	城内	開智書室
無錫	崇安寺	三等学堂
蕪湖	寧淵觀南岸	晋康煤炭公司
江西	馬王廟背後	賦梅山房主人
	〔省城百花洲〕	広智書室
天津	宮北玉皇宮前	日日新聞社
	紫竹林	信遠洋行
北京	米市胡同	日日新聞分社
	東四牌樓什錦花園	溥宅
香港	荷理活道	聚文閣
	上環海旁	和昌隆
	文武廟直街	文裕堂
汕頭	鎮邦街下富中華夏布莊樓上	李道南先生
新加坡	衣箱街	天南新報館
大阪	川口三十二番地	鎰源号
横浜	山下町一百五十二番	新民叢報社
合計	27	

第2年第2期（1902年5月13日発行）

地域	所在地	代理販売所
上海	新北門外	中西書室
	北市拋球場	広学会
	三馬路望平街	中外日報館
	後馬路盆湯弄	繩正学堂
蘇州	養育巷此女冠子橋堍	東來書莊
	元妙觀前東首	開智書室
	葑門內唐家巷	中西小学堂
	葑門內盛家壇	湯宅
杭州	城内銀洞橋	訳林
	城内菜市橋蒲場巷	浙江大学堂
	城内大方伯	養正書塾
湖州	城内	開智書室
無錫	崇安寺	三等学堂
蕪湖	寧淵觀南岸	晋康煤炭公司
江西	馬王廟背後	賦梅山房主人
	省城百花洲	広智書室
天津	宮北玉皇宮前	日日新聞社

	紫竹林	信遠洋行
北京	米市胡同	日日新聞分社
	東四牌樓什錦花園	溥宅
	李鉄拐斜街陝西巷口	有正書莊
汕頭	鎮邦街下富中華夏布莊樓上	李道南先生
南京	三牌樓西首馬路明達別墅	沈叔美先生
安慶	省城內近聖街葉宅內	前和州正堂姚公館
保定	蓮池書院內知恥學社理事	籍亮儔先生
鎮江	西門外天主街立生煙舖	徐翊雲
寧波	東門內二鏡廟西首孟晉書莊	洪翰蒙先生
横浜	山下町一百五十二番	新民叢報社
東京	神田區駿河台鈴木町十九番地	清國留學生會館
合計	29	

第2年第3期（1902年6月23日發行）同第2年第2期

第2年第4期（1902年8月31日發行）

地域	所在地	代理販売所
上海	四馬路者巡捕房東首	開明書店
	新北門外	中西書室
	北市拋球場	広学会
	三馬路望平街	中外日報館
	後馬路盆湯弄	繩正學堂
蘇州	養育巷此女冠子橋塊	東來書莊
	元妙觀前東首	開智書室
	葑門內唐家巷	中西小学堂
	葑門內盛家壇	湯宅
杭州	城內銀洞橋	詠林
	城內菜市橋蒲場巷	浙江大学堂
	城內大方伯	養正書塾
湖州	城內小西街	開智書室
無錫	崇安寺	三等學堂
蕪湖	寧淵觀南岸	晋康煤炭公司
江西	馬王廟背後	賦梅山房主人
	省城百花洲	広智書室
天津	宮北玉皇宮前	日日新聞社
	紫竹林	信遠洋行
北京	琉璃廠	有正書局

	米市胡同	日日新聞分社
	東四牌樓什錦花園	溥宅
汕頭	鎮邦街下富中華夏布莊樓上	李道南先生
南京	三牌樓西首馬路明達別墅	沈叔美先生
安慶	省城內近聖街葉宅內	前和州正堂姚公館
保定	蓮池書院內知恥學社理事	籍亮儔先生
鎮江	西門外天主街立生煙舖	徐翊雲
寧波	東門內二鏡廟西首孟晋書莊	洪鞠蒙先生
横浜	山下町一百五十二番	新民叢報社
合計	29	

第2年第5期（1902年7月25日発行）、第2年第6期（1902年7月31日発行）、第2年第7期（1902年9月22日発行）、第2年第8期（1902年11月15日発行）同第2年第4期。

第2年第9期（1902年12月10日発行）

地域	所在地	代理販売所
上海	新北門外	中西書室
	北市拋球場	広学会
	三馬路望平街	中外日報館
	後馬路盆湯弄	繩正學堂
	南京路同樂里	広智書局
	五馬路寶善街	普通學書室
	大馬路拋球場	掃葉山房
	四馬路盡錦里	理文軒
	二馬路	千頃堂
	胡家宅	會文堂
	三馬路	蘇報館
	四馬路惠福里	選報館
	大馬路小菜場對面	金粟齋
蘇州	元妙觀前西首	東來書莊
	元妙觀前東首	開智書室
	葑門內唐家巷	中西小學堂
	葑門內盛家壇	湯宅
杭州	城內銀洞橋	訳林
	城內菜市橋蒲場巷	浙江大學堂
	回回堂	史學齋
	城內大方伯	中學堂
	三趾橋	杭州總派報處

	泗水方橋	瓜錫侯先生
湖州	城内小西街	開智書室
無錫	崇安寺	三等学堂
蕪湖	寧淵觀南岸	晋康煤炭公司
江西	馬王廟背後	賦梅山房主人
	城内百花洲	広智書莊
湖北	山後戈甲營土地廟转弯	広陵蔣廬
揚州	北柳巷	許公館
天津	宮北玉皇宮前	日日新聞社
	紫竹林	信達洋行
北京	琉璃廠	有正書局
	米市胡同	日日新聞分社
	東四牌樓什錦花園	溥宅
汕頭	鎮邦街下富中華夏布莊樓上	李道南先生
南京	三牌樓西首馬路明達別墅	沈叔美先生
安慶	省城内近聖街葉宅内	前和州正堂姚公館
保定	蓮池書院内知恥学社理事	籍亮儕先生
鎮江	西門外天主街立生煙舖	徐翊雲
寧波	東門内二鏡廟西首孟晋書莊	洪鞠蒙先生
横浜	山下町一百五十二番	新民叢報社
合計	42	

第2年第10期（1902年12月27日発行）同第2年第9期

第2年第11期（1903年2月16日発行）

地域	所在地	代理販売所
〔中国国内の〕 総經售処上海開明書店		
上海	新北門外	中西書室
	棋盤街北	広学会
	望平街	中外日報館
	大馬路東	広智書局
	棋盤街	普通学書室
	拋球場	掃葉山房
	二馬路	千頃堂
	棋盤街	会文堂
	棋盤街	商務〔印〕書館
蘇州	元妙觀西	東來書莊
	元妙觀東	開智書室

	察院前	知新書室
杭州	銀洞橋	白話報館
	菜市橋	浙江大学堂
	葵巷	安定学堂
	三橋趾	總派報処
	泗水方橋	東文学社
	回回堂壁間	史学齋
湖州	北門内	恒有東典
嘉興	城内	秀水県学堂
無錫	崇安寺	三等学堂
常州	城内打索巷	修学堂
南京	夫子廟	明遠書莊
揚州	旧城太平巷尾	王毓仁先生
	多子街	阜成衣莊
	新勝大街	華瀛公社
蕪湖	寧淵觀南岸	晋康煤炭公司
安慶	城内拐角頭	藏書樓
江西	馬王廟後	南昌派報処
	百花洲	広智書莊
	洗馬池	嘉惠書莊
湖北	武昌察院坡	文明書室
	武昌城内大火巷口	謙吉土莊李玉山先生
	武昌山後戈甲營土地廟轉弯	広林蔣廬
広東	広州府前大馬站北	林裕和堂
	広州双門底	萃盧閱報処
	広州双門底	聖教書樓
広西	潯州府	潯陽図書館
河南	開封府北書店街	時中書莊
四川	成都桂王橋北	成都図書館
北京	琉璃廠	有正書局
保定府	北大街	直隸官書局
山西	太原府	機器印書局
合計	43	

第2年第12期（1903年3月13日発行）同第2年第11期

六、『開智録』の目次

目次は正文のタイトルと著者名の表記が異なる場合、正文の表記に従っている。たとえば、「広」は「庵」の異体字であり、混用されるところも多く、便宜上、本目次は正文の表記を用いている。原文に（ ）あるところがそのままにして、筆者によって補ったところに □ で示している。

***備考の欄は、筆者によって補った内容。鄭貫一（貫庵、自立、貫公）、馮懋龍（自由）、馮斯樂（自強）の字は備考に省略される。**

改良『開智録』第一期 本会在横浜山下町二百五十三番		
中歴庚子年十一月初一日、東歴三三年十二月廿二日〔1900年12月22日〕		
項目	題名	著訳者
本会論説	開智会序	奮嗣生〔蔡鏐〕
	開智会録縁起	
	論演説之源流及其与国民之關係	馮懋龍自由氏
言論自由録	勢吞地球	自由
	革命之劍、義和団、成敗之英雄	自強
雜 文	論教享信	新会陳子襄来稿
訳 書	自由略論	日本大井憲太郎著 馮懋龍自由氏訳述
	法国革命戦史	日本洪江保原著 馮懋龍自由氏訳
偉人小説	摩西伝（教家之偉人）	貫庵編著
詞 林	政変後有感三首	未了生
	贈曾君遊学美洲	貫広
	義和団序（倣藤王閣序体）	畠村隱名氏
時事笑談	本来拳匪、原是良朋、小辯子、赤脚仙、両面刀、一条線	
粵謳解心	心点様解、憂到有了、無可奈	
	本会進支数、捐款芳名臚列（下期続録）	
改良『開智録』第二期 本会在横浜山下町二百五十三番		

中歴庚子年十一月十五日、東歴三四年一月五日〔1901年1月5日〕		
本会論説	論帝国主義之發達及廿世紀世界之前途、論基督天主 二教伝道中国之利害及其改良之法	自強
言論自由録	慎哉廿紀、廿紀之新戲台、阻力歟抑助力歟	貫庵
	偉人之中国	霹靂生
雜 文	吳奇人伝	仁和葉景范来稿〔葉瀚〕
	說大同之理	覺顛冥真人稿
訳 書	自由略論	日本大井憲太郎著 馮懋龍自由氏訳述
	法国革命史	日本洪江保原著 馮懋龍自由氏訳
偉人小説	摩西伝	貫庵編著
詞 林	廿紀元日贈高梨昆仲	未了生
	代高梨氏踐韻口占	貫庵
	寄贈星洲寓公〔邱菽園〕	自由
	偶成三首、附宗教革命一首	独立代表人
	和重田船政両君	旧庵
	奉題星洲寓公琴梅園	江海浮浪
時事笑談	八股又行運、二毛大発財、惜哉寿山、蠢爾星海、難乎其難、死而不死	
粵謳解心	無情月、真正怨錯、愁到極地	
	第一期正誤表、附印任公講義告白、本会核数告白、捐款芳名統列（下期統録）	
改良『開智録』第三期 本会在横浜山下町二百五十三番		
中歴庚子年十二月一日、東歴三四年二月二十日〔1901年1月20日〕		
本会論説	真少年説	自強
	論閱新聞紙之益	貫庵
言論自由録	国民不可缺之性質	貫庵
	演説学之精神鍛鍊	自由
雜 文	縱論二十世紀	訳日本報
	戰務妨害於商務説	福州来稿
訳 書	自由略論	日本大井憲太郎著 馮懋龍自由氏訳述
	法国革命史	日本洪江保原著 馮懋龍自由氏訳
偉人小説	摩西伝	貫庵編著

	貞徳伝（一名女子救国美談）	自由編著
詞 林	雑詠、横浜旅次夜宴、雨夜囲碁	旧広
	感懷二首（戊戌旧稿）	振素広主
	戊戌懷旧広	未了生
	詠懷	望治生
	踐韵	雪蓬天
	踐韻	貫庵
	戯為十八省秀才討康有為檄（倣徐敬業討武后檄体）	頑石稿
時事笑談	新鳥言、妖獠記、新法能避新党、老号収買老婆	
南 音	新出龍舟歌剛毅自刎	
	第二期正誤記、改期附印講義告白、捐款芳名統列	
『開智録』第四期 本会在横浜山下町二百五十三番		
中歴庚子年十二月十五日、東歴三四年二月三日〔1901年2月3日〕		
本会論説	平等説	熟庵
言論自由録	希望	自強
	老大国少年民、輿論之世界	貫庵
雜 文	吾人之責任	會員演説
	大同説	上海来稿
	祭剛毅文	江東旧酒徒稿
	論俄国於英徳協商之關係	訳外交時報
訳 書	法国革命史	日本洪江保原著 中国自由齋主訳
	人民論	貫庵訳著
偉人小説	貞徳伝	自由編著
詞 林	題経国美談前編十一首	鋒郎
	虞美人（庚子東渡舟中作）	貫庵
	五百石洞天揮塵小引、五百石洞天揮塵自跋	星洲寓公〔邱菽園〕
時事笑談	説夢、報恩、千金傳相、二鉄先生、羊牯欲食檀山、豚子頓忘梓里、我今守旧、他亦維新	
南 音	新出龍舟歌剛毅自刎（接前冊）（完）	
『開智録』第五期 本会在横浜山下町百五十二番		
中歴辛丑年正月十五日、東歴三四年三月五日〔1901年3月5日〕		

本会論説	振興女学説（一名女子吐氣編）	貫公 一名自立
言論自由録	新年、新支那歟旧支那歟、所謂英雄	自立
	国民之特性可改造、創造中国、国安可逃耶	自強
雜 文	論俄国於英德協商之關係（接前冊）	訳外交時報
	論支那真元氣	横浜有情人来稿
	説賭	香港中国報稿
訳 書	自由略論	日本大井憲太郎著 中国自由齋主訳述
	人民論	貫公訳著
偉人小説	貞徳伝	自由編著
詞 林	辛丑元日酔吟	貫公
	庚子歲暮香海和王質甫（二首）	遜公
	客次別熱血生	旧庵
	義和拳、張之洞	未了生
	金縷曲 庚子仲春与貫公壯別	自由
	和韵（庚子帰国）	貫公
	縦想、大願	母暇
	性入世吟六首	因明子（蒋智由）
時事笑談	笑死西人、辱及中国、異鏡、妙聯、朋驢、頑驢	
粵 謳	剛毅吊李蓮英、新春月	
『開智録』第六期 本会在横浜山下町百五十二番		
中歴辛丑年二月初一日、東歴三四年三月二十日〔1901年3月20日〕		
本会論説	義和团有功於中国説	貫公
言論自由録	不死之箇人、奴隸耶抑英雄耶	貫公
	自由、專制毒	自立
	群義	嚴腕
雜 文	東邦青年会之責任	朝鮮金祥演来稿
	体制解頤篇	隠名氏来稿
訳 書	法国革命史	日本洪江保原著 中国自由齋主訳
	人民論	貫庵訳著
	十九世紀外交之通観	日本有賀長雄著 中国抱器旧主訳

資料編

偉人小説	貞徳伝	自由編著
詞 林	嗚呼我國民、宿東京（二首）、元月与自由君壯別（四首）、東京酔楽樓口占	貫公
	題星洲寓公天外婦舟図（八首録二）	林四郎
	黄河（庚子六月過）、泰山（庚子六月過）	因明子〔蒋智由〕
時事笑談	寄人、捉賊、瞽者忽成智者、学生煩了先生	
南 音	国民嘆五更	
	新書発售、訳書彙編告白	

史料・文献一覧

新聞・雑誌

■日本

・『大阪朝日新聞』、『東京朝日新聞』、『東京日日新聞』、『時事新報』、『二六新報』、『読売新聞』、『万朝報』

・『愛知学芸雑誌』、『学習院輔仁会雑誌』、『教育報知』、『国土』、『国家学会雑誌』、『少年文学』、『女学雑誌』、『太陽』、『第一高等学校校友会雑誌』、『風俗画報』、『労働世界』、『早稲田学報』

■中国

『大陸』、『東方雑誌』、『東京留学界記実』、『翻訳世界』、『国民日日報』、『杭州白話報』、『湖北学生界』、『江蘇』、『江蘇省立国学図書館年刊』、『教育雑誌』（直隸）、『警鐘日報』、『開智録』、『勵学訳編』、『女子世界』（上海）、『清議報』、『時務報』、『蘇報』、『蘇州白話報』、『天南新報』、『天義』、『万国公報』、『無錫教育雑誌』、『湘報』、『新民叢報』、『新世界学報』、『選報』、『訳林』、『訳書彙編』、『雲南』、『浙江潮』、『政法学报』、『直説』、『中国旬報』、『中外日報』

檔案・公文書

■日本外務省記録(アジア歴史資料センター)

「在本邦清国留学生関係雑纂/陸軍学生之部 第一巻」、「在本邦清国留学生関係雑纂/陸海軍外之部」、「在本邦清国留学生関係雑纂/学生監督並視察員之部」、「在本邦清国留学生関係雑纂/留学生学費之部」、「在本邦清国留学生関係雑纂/雑之部 第一巻」、「在本邦清国留学生関係雑纂/取締規則制定並同規則ニ対シ学生紛擾之件」、「新聞雑誌操縦関係雑纂/国閑報（在天津漢字新聞）」、「帝国陸軍大演習関係雑件 第一巻」

■国立公文書館「新聞紙条例」

■台湾国史館蔵教育部檔案、台湾中央研究院近代史研究所檔案館蔵外務部檔案

■学校資料

・『講道館所蔵中国人留学生関連史料』、『日華学堂日誌第一冊』、『明治三十二年学堂日誌』、『明治三十二年 教務課日記』（学習院アーカイブス）、『明治三十三年九月東京専門学

校政学部学費舍費月俸領収簿』（早稲田大学大学史センター）、『文部省往復』（東京大学文書館）、『経費報銷冊 自光緒三十二年十一月至光緒三十三年八月』
・『学習院一覽』、『京都帝国大学一覽』、『第一高等学校一覽』、『東京高等工業学校一覽』、『東京高等商業学校一覽』、『東京帝国大学一覽』

東京都立中央図書館実藤文庫所蔵資料

陳規『物理易解』東京：教科書訳輯社、1905年第5版。
陳規輯著『物理易解』東京：教科書訳輯社、1905年7月訂正第5版（初版1902年11月）。
華文祺訳『十九世紀欧洲政治史論』上海：上海教育世界社、1902年4月。
李宗棠『東游紀念第一考察学務日記』、1901年。
沈翊清『東遊日記』福州：福州吳玉田印刷、1900年。
唐宝鏐・戢翼翬著『東語正規』上海：作新社、1906年1月第10版（初版1900年8月）。
訳書彙編社同人『波蘭衰亡戦史』東京：訳書彙編社、1901年11月30日初版。
章宗祥『日本遊学指南』、1901年。
周祖培・楊廷棟共訳『女子教育論』上海：作新社訳書局、1902年7月再版（初版1901年11月）。

中国語文献（アルファベット順）

研究書

阿英『小説四談』上海：上海古籍出版社、1981年。
包天笑『鉤影樓回憶録』香港：大華出版社、1971年。
北京大学『馬藏』編纂与研究中心編纂『馬藏』第1部第4卷、北京：科学出版社、2019年。
北京図書館・人民教育出版社図書館合編『民国時期総書目中小学教材 清末中小学教材』北京：書目文献出版社、1995年。
北京清華学校編『遊美同学録』北京：北京清華学校、1917年。
北平故宫博物院編『清光緒朝中日交渉史料』卷70、1932年。
蔡鈞撰、張曉川整理『外交辯難』上海：上海古籍出版社、2020年。
陳力衛『東來東往——近代中日之間的詞語概念』社会科学文献出版社、2019年。
陳錫祺主編『孫中山年譜長編』上冊、北京：中華書局、1991年。
陳顥川『1905年張繼訳『社会主義神髓』献疑』『中国図書評論』2023年第3期。
陳旭麓主編『義和団運動盛宣懷檔案資料選輯之七』上海：上海人民出版社、2001年。
陳学恂主編『中国近代教育史教学参考資料』北京：人民教育出版社、1986年。
陳学恂・田正平編『中国近代教育史資料匯編・留学教育』上海：上海教育出版社、1991年。

- 戴海斌『晚清人物叢考』北京：生活・讀書・新知三聯書店、2018年。
- 丁守和主編『辛亥革命時期期刊介紹』第1集、北京：人民出版社、1982年。
- 丁文江・趙豐田編『梁啟超年譜長編』上海：上海人民出版社、1983年。
- 董守義『清代留學運動史』瀋陽：遼寧人民出版社、1985年。
- 杜春和・耿來金・張綉清編『榮祿存札』濟南：齊魯書社、1986年。
- 杜邁之・劉泱泱・李龍如編『自立會史料』長沙：岳麓書社、2009年。
- 范源廉著、歐陽哲生等編『范源廉集』長沙：湖南教育出版社、2010年。
- 翻譯館編『江南製造局訳書提要』2卷、上海：江南製造局、宣統元年七月（1909年8月頃）。
- 方漢奇『中國近代報刊史』太原：山西人民出版社、1981年。
- 方紅『馬克思主義在中國的早期翻譯與傳播——從19世紀晚期至1920年』上海：上海三聯書店、2016年。
- 房兆楹輯『清末民初洋學學生題名錄初輯』台北：中央研究院近代史研究所、1962年。
- 馮自由『中國革命運動二十六年組織史』上海：商務印書館、1912年。
- 『中華民國開國前革命史』上編、上海：良友印刷公司、1928年。
- 「革命逸史——尤列事略」『逸經』第2期、1936年。
- 『革命逸史』初集、長沙：商務印書館、1939年。
- 『革命逸史』初集、重慶：商務印書館、1943年。
- 『革命逸史』初集、北京：中華書局、1981年。
- 『革命逸史』第4集、北京：中華書局、1981年。
- 付建舟編『晚清民營書局發行書目』哈爾濱：黑龍江教育出版社、2016年。
- 傅雲龍『遊歷日本図経』王宝平主編『晚清東遊日記彙編』上海：上海古籍出版社、2003年。
- 戈公振『中國報學史』上海：商務印書館、1926年。
- 郭漢民主編『湖南辛亥革命人物伝略』長沙：湖南人民出版社、2011年。
- 郭榮生校補『日本陸軍士官學校中華民國留學生名簿』東京：龍溪書舍、2014年復刻版。
- 侯鴻鑑『無錫教育沿革大略』『無錫教育雜誌』第1期、無錫縣教育會、1913年1月。
- 胡鈞重編『張文襄公（之洞）年譜』卷四、1939年。
- 黃帝之子孫『黃帝魂』上海、1903年11月。
- 黃福慶『清末留日學生』台北：中央研究院近代史研究所、1975年初版。
- 黃璟『考察農務日記』鍾叔河編『走向世界叢書』長沙：岳麓書社、2016年。
- 黃開沅・劉宋斌・房列曙編『五四運動前馬克思主義在中國的介紹與傳播』長沙：湖南人民出版社、1986年。
- 黃振威『番書與黃龍——香港皇仁書院華人精英與近代中國』香港：中華書局、2019年。
- 江瀚著、鄭園整理『江瀚日記』南京：鳳凰出版社、2017年。

- 江勇振『楚材晉育——中國留美學生 1872—1931』新北：聯經出版事業股份有限公司、2022 年。
- 姜義華編『社會主義學說在中國的初期傳播』上海：復旦大學出版社、1984 年。
- 金觀濤·劉青峰『觀念史研究——中國現代重要政治術語的形成』北京：法律出版社、2009 年。
- 孔祥吉·村田雄二郎編『罕為人知的中日結盟及其他——晚清中日關係史新探』成都：巴蜀書社、2004 年。
- 孔祥吉『驚雷十年夢未醒——檔案中的晚清史事與人物』廣州：廣東人民出版社、2017 年。
- 藍微微編著『藍天蔚年譜長編』上海：上海交通大學出版社、2016 年。
- 李谷城『香港『中國旬報』研究』台北：文史哲出版社、2010 年。
- 李軍林『馬克思主義在中國的早期傳播及其話語體系的初步建構』北京：學習出版社、2013 年。
- 李其駒·王炯華·張耀先主編『馬克思主義哲學在中國——從清末民初到中華人民共和國成立』上海：上海人民出版社、1991 年。
- 李仁淵『晚清的新式傳播媒體與知識份子——以報刊出版為中心的討論』台北：稻鄉出版社、2005 年。
- 李喜所『中國留學史論稿』北京：中華書局、2007 年。
- 李毓澍等『戡翼翹先生訪問記錄』中央研究院近代史研究所口述歷史叢書 6、1985 年。
- 利興民主編『馬克思主義哲學在中國的傳播和發展』廣州：廣東高等教育出版社、1988 年。
- 廖梅『汪康年——民權論到文化保守主義』上海：上海古籍出版社、2001 年。
- 林逸『民國蔡松坡先生鏢年譜』台北：台灣商務印書館、1987 年。
- 林子勲『中國留學生教育史 1847 至 1975 年』台北：華岡出版、1976 年。
- 留日同學生編『中國危亡警告書』『近代史資料』總 53 號、北京：中國社會科學出版社、1983 年。
- 劉坤一·張之洞撰『江楚會奏變法三摺』沈雲龍主編『近代中國史料叢刊續編』第 48 輯、台北：文海出版社、1977 年。
- 魯迅博物館藏『周作人日記（影印本）』上冊、鄭州：大象出版社、1996 年。
- 胡景桂『東瀛紀行』學校司排印局、1903 年（呂順長編著『教育考察記』下冊、杭州：杭州大學出版社、1999 年）。
- 呂順長『清末浙江與日本』上海：上海古籍出版社、2001 年。
- 『清末中日教育文化交流之研究』北京：商務印書館、2012 年。
- 馬光仁『上海新聞史（1850—1949）』上海：復旦大學出版社、1996 年。
- 莫世祥編『馬君武集』武漢：華中師範大學出版社、1991 年。
- 潘光哲『華盛頓在中國——製作「國父」』台北：三民書局、2006 年。

- 彭國興・劉晴波編『秦力山集（外二種）』北京：中華書局、2015年。
- 皮明庠等編『吳祿貞集』武漢：華中師範大學出版社、1989年。
- 錢半士厘『癸卯旅行記・掃潛記』長沙：湖南人民出版社、1981年。
- 秦孝儀『中國現代史辭典 人物部分』台北：近代中國出版社、1985年。
- 秦毓璠著、周新國・劉大可校閱「天徒自述（節選）」『近代史資料』總 111 号、北京：中國社會科學出版社、2005 年。
- 清國留學生會館幹事『清國留學生會館第一次報告』東京：東京並木活版所、1902 年 10 月。
- 『清國留學生會館第二次報告』東京：東京並木活版所、1903 年 3 月。
- 『清國留學生會館第三次報告』東京：東京並木活版所、1903 年 11 月。
- 『清國留學生會館第四次報告』東京：東京並木活版所、1904 年 5 月。
- 『清國留學生會館第五次報告』東京：東京並木活版所、1904 年 12 月。
- 清・陳瑀修、清・王荃纂、屈映光統修、陸懋勳統纂、齊耀珊重修、吳慶坻重纂、民國『杭州府志』（1922 年）卷 17（『中國地方志集成・浙江府縣志輯』1、上海：上海書店出版社、1993 年）。
- 清・徐繼畲著、宋大川校註『瀛環志略』北京：文物出版社、2007 年。
- 瞿立鶴『清末留學教育』台北：三民書局、1973 年。
- 璩鑫圭・唐良炎編『中國近代教育史資料彙編・學制演變』上海：上海教育出版社、1991 年。
- 桑兵『清末新知識界的社團與活動』北京：生活・讀書・新知三聯書店、1995 年。
- 上海圖書館編『汪康年師友書札』上海：上海古籍出版社、1986 年。
- 上海孫中山故居紀念館編『孫中山——紀念孫中山先生誕辰 130 週年』上海：上海人民出版社、1996 年。
- 上海通志編纂委員會編『上海通志』第 41 卷、上海：上海人民出版社、2005 年。
- 沈殿成主編『中國人留學日本百年史』瀋陽：遼寧教育出版社、1997 年。
- 沈國威編著『新爾雅——附解題・索引』上海：上海辭書出版社、2011 年。
- 沈渭濱『孫中山與辛亥革命』上海：上海人民出版社、2016 年。
- 沈翔雲編、勵志會增補『和文漢讀法 附訳書彙編叙例』勵志會訳書處、1900 年 7 月（李長波編集・解説『近代日本語教科書選集』第 7 卷、東京：クロスカルチャー出版、2010 年初版）。
- 史和等編『中國近代報刊名錄』福州：福建人民出版社、1991 年。
- 舒新城『近代中國留學史』上海：中華書局、1927 年。
- 舒新城編『近代中國教育史料』第 1 冊、第 2 冊、上海：中華書局、1928 年。
- 孫宝瑄『忘山廬日記』上海：上海古籍出版社、1983 年。
- 孫江主編『『共產黨宣言』在中國——『共產黨宣言』的訳本與底本』南京：南京大學出版社、2020 年。

- 孫延撰、徐和雍等整理『孫衣言孫詒讓父子年譜』上海：上海社會科學院出版社、2003年。
- 譚汝謙主編『中國讀日本書綜合目錄』香港：香港中文大學出版社、1980年。
- 湯志鈞編『陶成章集』北京：中華書局、1986年。
- 田伏隆「趙必振伝略」『常德県文史資料』第3輯、1987年。
- 田正平『留學生與中國教育近代化』廣州：廣東教育出版社、1996年。
- 汪榮寶・葉瀾編纂『新爾雅』上海：文明書局、1903年。
- 汪向榮『日本教習』北京：生活・讀書・新知三聯書店、1988年。
- 王汎森『思想是生活的一種方式——中國近代思想史的再思考』新北：聯經出版事業股份有限公司、2017年。
- 王柯『亦師亦友亦敵——民族主義與近代中日關係』香港：香港中文大學出版社、2020年。
- 王敏『蘇報案研究』上海：上海人民出版社、2010年。
- 王奇生『中國留學生的歷史軌跡 1872—1949』武漢：湖北教育出版社、1992年。
- 王曉秋『近代中日啓示錄』北京：北京出版社、1987年。
- 『近代中日文化交流史』北京：中華書局、1992年。
- 王有朋主編『中國近代中小學教科書總目』上海：上海辭書出版社、2010年。
- 王余光・吳永貴著『中國出版通史・民國卷』北京：中國書籍出版社、2008年。
- 項旋『『共產黨宣言』早期中譯者“蜀魂”考索』『歷史研究』2021年第6期。
- 熊月之編『晚清新學書目提要』上海：上海書店出版社、2014年。
- 徐友春主編『民國人物大辭典（增訂本）』石家莊：河北人民出版社、2007年。
- 徐素華『馬克思主義哲學在中國——傳播・応用・形態・前景』北京：北京出版社、2002年。
- 『馬克思恩格斯著作在中國的傳播——MEGA2視野下的文本、文獻、語彙學研究』北京：中國社會科學出版社、2013年。
- 徐志民『近代日本的中国留日學生政策史』北京：中國社會科學出版社、2020年。
- 徐志民・孫安石・大里浩秋編『團體與日常——近代中國留日學生的生活史』北京：社會科學文獻出版社、2022年。
- 嚴修撰、武安隆・劉玉敏点校『嚴修東遊日記』天津：天津人民出版社、1995年。
- 楊芾等著、楊早整理『扶桑十旬記（外三種）』南京：鳳凰出版社、2014年。
- 楊天石・王學莊編『拒俄運動 1901—1905』北京：中國社會科學出版社、1979年。
- 佚名『清季中外使領年表』沈雲龍主編『近代中國史料叢刊三編』第16輯、台北：文海出版社、1985年。
- 于寶軒編纂『皇朝蓄艾文編』卷16 學校、上海官書局、1902年。
- 苑書義等主編『張之洞全集』石家莊：河北人民出版社、1998年。
- 張桐撰、龔雄選編『張桐日記』上海：上海社會科學院出版社、2003年。

- 張繼『張溥泉先生回憶錄·日記』沈雲龍主編『近代中国史料叢刊三編』第3輯、台北：文海出版社、1985年。
- 張靜虛輯注『中国近代出版史料·初編』上海：群聯出版社、1953年。
- 『中国現代出版史料·甲編』北京：中華書局、1954年。
- 張難先『湖北革命知之錄』上海：商務印書館、1944年。
- 張朋園『梁啟超与清季革命』台北：中央研究院近代史研究所、1964年。
- 張玉法『清季的立憲团体』台北：中央研究院近代史研究所、1971年初版。
- 『清季的革命团体』台北：中央研究院近代史研究所、1975年初版。
- 章清『清季民国时期的「思想界」』北京：社会科学文献出版社、2014年。
- 章宗祥「任闕齋主人自述」中国人民政治協商會議全國委員會文史資料委員會編『文史資料存稿選編·教育』北京：中国文史出版社、2002年。
- 趙爾巽等『清史稿』第41冊第452卷、北京：中華書局、1977年。
- 趙林鳳『中国近代憲法第一人——汪榮寶』台北：新銳文創、2014年。
- 趙統『南菁書院志』上海書店出版社、2015年。
- 鐘家棟·王世根主編『20世紀——馬克思主義在中国』上海：上海人民出版社、1998年。
- 中国蔡元培研究会編『蔡元培全集』第15卷「日記」、杭州：浙江教育出版社、1998年。
- 周佳榮『瀛洲華聲——日本中文報刊一五十年史』香港：三聯書店、2020年。
- 朱家偉『近代中日詞彙交流的軌跡——清末報紙中的日語借詞』北京：商務印書館、2020年。
- 朱有獻主編『中国近代学制史料』第1輯下冊、上海：華東師範大學出版社、1986年。
- 著作編譯局馬恩室編『馬克思恩格斯著作在中国的傳播——紀念馬克思逝世一百周年』北京：人民出版社、1983年。
- 鄒振環『影響中国近代社会的一百種譯作』北京：中国對外翻譯出版公司、1996年。
- (米)孔飛力(Philip A. Kuhn)著、李明欽譯『他者中的華人——中国近現代移民史』南京：江蘇人民出版社、2016年。
- 『辛亥革命時期期刊彙編』編纂委員會『辛亥革命時期期刊彙編』第2冊、北京：首都師範大學出版社、2011年。

論文

- 陳匡時·寧樹藩「評『開智錄』」『復旦學報』1984年第3期。
- 『中国文化研究集刊』第4·5輯、1987年。
- 陳力衛「近代各『主義』的傳播与清議報」孫江·陳力衛主編『亞洲概念史研究』第2輯、北京：生活·讀書·新知三聯書店、2014年。
- 陳靈海「攻法子与『法系』概念輸入中国——近代法学史上的里程碑事件」『清華法學』2017年第6期。

- 陳啓源「論馬君武對社會主義學說的初步評介」『廣西大學學報（哲學社會科學版）』1995年第2期。
- 陳穎川「1905年張繼譯『社會主義神髓』獻疑」『中國圖書評論』2023年第3期。
- 陳翼思「清末民初日書訊介研究」上海師範大學修士論文、2018年5月。
- 川尻文彦「清末西學與明治日本——早期社會主義再考」黃愛平·黃興濤主編『西學與清代文化』北京：中華書局、2008年。
- 鄧華瑩「清末「國體」「政體」區分說的源起與變異」『中山大學學報（社會科學版）』2018年第6期。
- 杜京容「清末留學生刊物『游學訊編』研究」華中師範大學修士論文、2014年5月。
- 范鐵權·孔祥吉「革命黨人戴翼翬重要史實述考」『歷史研究』2013年第3期。
- 傅光培「庚子漢口起事中的傅慈祥」『湖北大學學報』1982年第5期。
- 閔曉紅「陶模與清末新政」『歷史研究』2003年第6期。
- 谷長嶺·葉鳳美「辛亥革命時期的留日學生期刊」歐美同學會·中國留學人員聯誼會編『留學人員與辛亥革命』北京：華文出版社、2012年。
- 郭品萍·徐珊珊「美國海關檔案與清末南洋公學留美生史實」『歷史檔案』2020年第1期。
- 郭夢奎「湖廣總督張之洞之孫張厚琨的日本留學」關正宗等編『佛教·歷史·留學——交流視角下的近代東亞和日本』新北：博揚文化、2021年。
- 胡夢穎「20世紀初杭州『訊林』雜誌的傳播網絡及編譯群體」『浙江學刊』2016年第1期。
- 黃嘉謨「馬君武的早期思想與言論」『中央研究院近代史研究所集刊』第10期、1981年7月。
- 蔣大椿「五四運動前唯物史觀理論在中國的傳播」『安徽史學』1995年第2期。
- 蔣逸人·戴夢桃「『社會主義神髓』的最早中譯本」『歷史研究』1982年第4期。
- 「『社會主義神髓』的中譯問題及其它」『浙江學刊』1983年第1期。
- 金安平「近代留日學生與中國早期共產主義運動」『近代史研究』1990年第2期。
- 孔祥吉·村田雄二郎「孫中山友人沈翔雲史實考略」林家有主編『孫中山研究』第1輯、廣州：中山大學出版社、2008年。
- 李海濤「『天南新報』研究」東北師範大學博士論文、2017年5月。
- 李玲「從刊報未分到刊報兩分——以晚清報刊名詞考弁為中心」『近代史研究』2014年第3期。
- 劉紅「近代中國留學生教育翻譯研究1895—1937」華中師範大學博士論文、2014年5月。
- 劉慶霖「譯者的作用——論及馬克思及其學說的清末漢譯日書」『中共黨史研究』2018年第10期。
- 劉訓華「近代留日學生的革命性——對『浙江潮』編輯群的歷史考察」『江西社會科學』2014年第3期。
- 毛策「包天笑文學活動側影——編輯生涯述略」『清末小說』第15號、1992年12月。

- 苗禕琦「『西政』徂東——『訳書彙編』与晚清政治学伝播の「日本渠道」」中国人民大学修士論文、2020年6月。
- 寧金苑「清国留学生会館研究」武漢大学修士論文、2018年。
- 歐陽躍峰「20世紀初革命派對馬克思主義的紹介」『安徽師範大学学报』第35卷第2期、2007年3月。
- 潘光哲「『時務報』和它的読者」『歴史研究』2005年第5期。
- 潘世聖「近代国家」構想与「民族主義」及「革命」志向——1900年代留日学生雜誌考察之三」『貴州師範大学学报』2017年第3期。
- 裴植「1903年の漢訳日文社会主義著作及其馬克思主義中国伝播」『理論学刊』2020年第6期。
- 彭爽「清末留日学生雜誌研究」東北師範大学博士論文、2021年12月。
- 邱佩文「明治時期成城学校中国留学生之研究」浙江工商大学修士論文、2017年12月。
- 邱雪松「開明書店、「開明人」与「開明風」——中国現代知識分子与出版の一種關係」華東師範大学博士論文、2010年4月。
- 桑兵「清末民初伝播業の民間化与社会变迁」『近代史研究』1991年第6期。
- 尚小明「同盟会成立前留日学界革命団体の衍変」『広東社会科学』2023年第3期。
- 沈慶会「包天笑及其小説研究」華東師範大学博士論文、2006年。
- 石錦「早期中国留日学生の活動与組織（1896—1901）」『思与言』第6卷第1期、1968年。
- 孫宏雲「學術連鎖——高田早苗与欧美政治学在近代日本与中国之伝播」『中山大学学报（社会科学版）』2013年第5期。
- 「楊廷棟訳『原政』の底本源流考」『政治思想史』2016年第1期。
- 孫建昌「社会主義学説在中国的早期紹介与伝播（1900—1908）」山東大学博士論文、2014年10月。
- 孫順順「我国近代社会思潮中对儒家井田制的重構」『当代世界社会主義問題』2019年第4期。
- 譚其秦「譚其莊事略」『四川文献』第136期、1973年12月。
- 田正平「救亡与啓蒙の二重奏——以留日学生刊物『浙江潮』為個案の考察」『教育研究』2005年第11期。
- 王毅「近十年来馬克思主義在中国早期伝播の研究with展望」『教学与研究』2018年第8期。
- 吳倫霞「香港反清革命宣傳刊及其与南洋の聯繫」『中国文化研究所学報（香港中文大学）』第19卷第28期、1988年。
- 夏曉虹「從男女平等到女權意識——晚清的婦女思潮」『北京大学学报（哲学社会科学版）』1995年第4期。
- 「和文漢読法」清末小説研究会『清末小説から』第53号、1999年4月。

- 徐佳貴「維新、經世与士人辦報——以杭州『經世報』（1897—1898）為箇案再論維新報刊史」『新史學』第27卷第2期、2016年6月。
- 徐志民「晚清留日學生報刊与中日關係」『日本學』第13輯、北京：世界知識出版社、2006年。
- 許小青「1903年留日學生刊物的傳播網絡」『中州學刊』2001年11月第6期。
- 楊瑞「清季民初法系知識的東學背景及其衍行」『近代史研究』2022年第2期。
- 尹德樹「文化視域下馬克思主義在中国的早期傳播与發展」南京師範大學博士論文、2013年5月。
- 遊海華「新中国60年来的「蘇報案」研究」『福建論壇（人文社会科学版）』2014年第6期。
- 余偉雄「辛亥革命時期港澳地区之宣傳及影響」『能仁學報』第3期、1994年。
- 曾業英「沈翔雲回国參加過自立軍起義考辨」『社会科学輯刊』2017年第3期。
- 翟貞瑋「清末留日學生翻譯活動研究」遼寧大學修士論文、2018年5月。
- 張灝「中国近代思想史的轉型時代」『二十一世紀』1999年4月号。
- 張國偉「馬克思主義著作在中国的出版与傳播（1899—1945）」華東師範大學博士論文、2017年5月。
- 張曉溪「『民約』与『社会契約』究竟有多遠——以馬君武訳介『民約論』為例」『廣東社会科学』2012年第4期。
- 章小麗「杭州日文学堂學生之研究——以林長民与林文潛為例」『浙江外國語學院學報』2013年第1期。
- 「林長民的訳作及其翻訳特点」『浙江樹人大學學報』第14卷第4期、2014年7月。
- 鄭匡民「社会主義講習会与日本思想的關係」『社会科学研究』2008年第3期。
- 莊馳原「近代中国最早的法政翻訳期刊『訳書彙編』探微」『翻訳論壇』2018年第3期。
- 鄒振環「接受環境对翻訳原本選擇的影響——林訳哈葛德小説的一個分析」『復旦學報』1991年第3期。
- 「辛亥前楊蔭杭著訳活動述略」『蘇州大學學報（哲学社会科学版）』1993年第1期。
- 「戢元丞及其創辦的作新社与『大陸報』」『安徽大學學報』2012年第6期。
- 「晚清書業空間轉移与中国近代的『出版革命』」『河北學刊』第40卷第3期、2020年5月。
- 左松濤「清末學堂師長与辛亥革命——以自強學堂為中心」『武漢大學學報』2011年第4期。

日本語文獻（五十音順）

研究書

- 赤松克麿『日本社会運動史』東京：通信教育振興会、1949年。
- 阿部洋編『日中関係と文化摩擦』東京：巖南堂書店、1982年。
- 『中国の近代教育と明治日本』東京：福村出版、1990年。
- 天野郁夫『旧制専門学校論』町田：玉川大学出版部、1993年。
- 荒畑寒村『新版 寒村自伝』上巻、東京：筑摩書房、1965年。
- 有賀長雄講述『近時政治史』東京専門学校蔵版、年代不明。
- 飯田錦之助『東京十五区分地図』東京：博益社、1904年（人文社編集部『明治東京区分地図 日本地図選集』東京：人文社、1968年）。
- 伊藤泉美『横浜華僑社会の形成と発展——幕末開港期から関東大震災復興期まで』東京：山川出版社、2018年。
- 絲屋寿雄『幸徳秋水伝』東京：三一書房、1950年。
- 『日本社会主義運動思想史 1853—1922』東京：法政大学出版局、1979年。
- 上垣外憲一『日本留学と革命運動』東京：東京大学出版会、1982年。
- 内田直作『日本華僑社会の研究』東京：同文館、1949年。
- 宇都宮太郎関係資料研究会編『日本陸軍とアジア政策 陸軍大將宇都宮太郎日記』第1巻、東京：岩波書店、2007年。
- 大里浩秋・孫安石編著『中国人日本留学史研究の現段階』東京：御茶の水書房、2002年。
- 『留学生派遣から見た近代日中関係史』東京：御茶の水書房、2009年。
- 『近現代中国人日本留學生の諸相——「管理」と「交流」を中心として』東京：御茶の水書房、2015年。
- 『中国人留學生と「国家」・「愛国」・「近代」』東京：東方書店、2019年。
- 『明治から昭和の中国人日本留学の諸相』東京：東方書店、2022年。
- 大田英昭『日本社会主義思想史序説』東京：日本評論社、2021年。
- 小野寺史郎『近代中国の国家主義と軍国主義』晃洋書房、2023年。
- 岡本隆司・石川禎浩・高嶋航編訳『梁啓超文集』東京：岩波書店、2020年。
- 織田一『国債論』東京：博文館、1890年。
- 海後宗臣等編『日本教科書大系』近代編第23巻理科第3、東京：講談社、1966年。
- 郭夢焄「清末中国人日本留學生の初期活動について——励志会と訳書彙編社を中心に」前掲大里浩秋・孫安石編著『中国人留學生と「国家」「愛国」「近代」』。
- 「清国留學生會館の設立と励志会・訳書彙編社との関係について」『中国研究月報』第75巻第11号、2021年11月。
- 『『崇明県志』から見る清末における江蘇省崇明県の留日學生——馮閻模と馮閻模を事例に』『駿台史学』第174号、2022年2月。
- 「清国留學生と『訳書彙編』の発行——創刊、財政と販売を中心に」前掲大里浩秋・孫安石編著『明治から昭和の中国人日本留学の諸相』。

- 鎌田栄吉『欧米漫遊記雑記』東京：博文館、1899年。
- 川尻文彦『清末思想研究——東西文明が交錯する思想空間』東京：汲古書院、2022年。
- 外務省情報部『改訂 現代支那人名鑑』東京：三秀舎、1928年。
- 北岡正子『鲁迅 日本という異文化のなかで——弘文学院入学から「退学」事件まで』
吹田：関西大学出版部、2001年。
- 見城惕治『留学生は近代日本で何を学んだのか——医業・園芸・デザイン・師範』東京：日本経済評論社、2018年。
- 巖安生『日本留学精神史』東京：岩波書店、1991年。
- 胡穎『清末の中国人日本留学——派遣と経費を中心に』姫路：学術研究出版、2021年。
- 孔祥吉・村田雄二郎『清末中国と日本——宮廷・変法・革命』東京：研文出版、2011年。
- 黄尊三著、実藤恵秀・佐藤三郎訳『清国人日本留学日記 1905—1912年』東京：東方書店、1986年。
- 講道館『嘉納治五郎大系第11巻・嘉納治五郎伝』東京：本の友社、1988年。
- 幸徳秋水『社会主義神髓』東京：朝報社、1903年7月初版。
- 故下田校長先生伝記編纂所編『下田歌子先生伝』東京：故下田校長先生伝記編纂所、1943年。
- 近衛篤磨日記刊行会『近衛篤磨日記』東京：鹿島研究所出版会、1968年。
- 小島淑男『留日学生の辛亥革命』東京：青木書店、1989年。
- 小宮山綏介『洋学大家列伝』東京：博文館、1897年。
- 酒井順一郎『清国人日本留学生の言語文化接触——相互誤解の日中教育文化交流』東京：ひつじ書房、2010年。
- 酒井雄三郎『十九世紀歐洲政治史論』東京専門学校出版部、1900年3月。
- 笹川潔『財政学』東京：博文館、1899年。
- 実藤恵秀（さねとうけいしゅう）『中国人日本留学史稿』東京：日華学会、1939年。
——『近代日支文化論』東京：大東出版社、1941年。
——『明治日支文化交渉』東京：光風館、1943年。
——『増補 中国人日本留学史』東京：くろしお出版、1970年。
——『中国留学生史談』東京：第一書房、1981年。
- 洪江保『印度蚕食戦史』東京：博文館、1895年。
- 周一川『中国人女性の日本留学史研究』東京：国書刊行会、2000年。
——『近代中国人日本留学の社会史——昭和前期を中心に』東京：東信堂、2020年。
- 成城学校留学生部『留学生部出身者名簿』東京：軍人会館出版部、1937年。
- 曹汝霖著、曹汝霖回想録刊行会編訳『一生の回憶』東京：鹿島研究所出版会、1967年。
- 宋教仁著、松本英紀訳注『宋教仁の日記』京都：同朋舎、1989年。
- 高西賢正編『東本願寺上海開教六十年史』上海：東本願寺上海別院、1937年。

- 高橋五郎『社会主義活弁』東京：大日本図書、1903年4月。
- 高橋橋樹編『日用品製造篇』東京：博文館、1895年。
- 田島義方編『明治大学校友会名簿』東京：三秀舎、1910年。
- 田中惣五郎編『日本社会運動史・資料』第1巻、東京：東西出版社、1947年。
- 田原天南編『清末民初中国官紳人名録』北京：中国研究会、1918年。
- 譚璐美『帝都東京を中国革命で歩く』東京：白水社、2016年。
- 張迪「近代中国における日本書籍の翻訳と紹介——19世紀末から20世紀初頭の概況とその特徴」『言葉と文化』第10巻、2009年。
- 坪谷善四郎編『博文館五十年史』東京：博文館、1937年。
- 田雁著、小野寺史郎・古谷創訳『近代中国の日本書翻訳出版史』東京：東京大学出版会、2020年。
- 戸水寛人『露西亞之国会』東京：有斐閣、1900年5月。
- 樽本照雄「『迦因小伝』に関する魯迅の誤解」上/下、清末小説研究会『清末小説から』第78、79号、2005年7、10月。
- 中島重義編『宝閣先生追悼号』東京：中央商業学校、1940年。
- 中臣明畝編『龍北先生追憶集』福井：花岡苑、1939年。
- 永井算巳『中国近代政治史論叢』東京：汲古書院、1983年。
- 永見七郎『世界を股にかけて——井上雅二氏の前半生』東京：日本植民通信社、1932年。
- 長谷川勝政『英学者本田増次郎の生涯 信仰・博愛と広報外交』東京：教文館、2019年。
- 狭間直樹『中国社会主義の黎明』東京：岩波書店、1976年。
- 『近代東アジア文明圏の啓蒙家たち』京都：京都大学学術出版会、2021年。
- 橘川時雄編『中国文化界人物総鑑』北京：中華法令編印館、1940年。
- 干河岸貫一編『近世百傑伝』東京：博文館、1900年。
- 浜口裕子『満洲国留日学生の日中関係史——満洲事変・日中戦争から戦後民間外交へ』東京：勁草書房、2015年。
- 藤田佳久監修解説、高木宏治編集『東亜同文会報告』第1、3、6巻、東京：ゆまに書房、2011年。
- 編纂委員会『成城学校八十年』東京：日産印刷株式会社、1965年。
- 宝閣善教『行雲録』、『行雲録』未公刊。
- 法政大学大学史資料委員会『法政大学史資料集 第11集（法政大学清国留学生法政速成科特集）』東京：法政大学、1988年。
- 前田千賀良編『最近全国新聞紙雑誌総目録』東京：警眼社、1907年。
- 松本亀次郎『中華留学生教育小史』東京：東西書房、1931年。
- 明治大学百年史編纂委員会編『明治大学百年史』第1巻史料編、東京：明治大学、1986年。

森岡優紀『近代伝記の形成と東アジア——清末・明治の思想交流』京都：京都大学学術出版会、2022 年。

山口一郎『清国留学生記』後藤基巳編『東海往来物語』東京：河出書房新社、1959 年。

洋々道人（高木伊三）『退去者人物論』東京：金鱗堂、1888 年。

樂殿武・柴田幹夫編著『日華学堂とその時代——中国人留学生研究の新しい地平』西東京：武蔵野大学出版会、2022 年。

李廷江編著、衛藤沈吉監修『近衛篤磨と清末要人——近衛篤磨宛来簡集成』東京：原書房、2004 年。

李海『日本亡命期の梁啓超』相模原：桜美林大学北東アジア総合研究所、2014 年。

劉建雲『中国人の日本語学習史——清末の東文学堂』東京：学術出版会、2005 年。

劉坤一・張之洞共著、東亜同文会訳『劉張変法奏議 一名清国改革上奏』東亜同文会、1902 年。

六条隆吉・近藤千吉『中等教育 世界商業史』東京：博文館、1893 年。

早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史』第 1 巻、東京：早稲田大学出版部、1978 年。

早稲田大学校友会編『大正 4 年 11 月調 早稲田大学校友会会員名簿』早稲田大学校友会。『日本留学支那要人録』興亜院政務部、1942 年。

論文

石母田正「幸徳秋水と中国——民族と愛国心の問題について」『石母田正著作集』第 15 巻、東京：岩波書店、1990 年。

石川禎浩「梁啓超と社会主義——1903 年訪米時の社会主義者との問答より」『東方学報』第 94 号、2019 年 12 月。

内田慶市「香港「文裕堂」およびその周辺」『文化交渉学と言語接触——中国言語学における周縁からのアプローチ』吹田：関西大学出版部、2010 年。

大村泉「幸徳秋水/堺利彦訳『共産党宣言』の成立・伝承と中国語訳への影響」『大原社会問題研究所雑誌』第 603 号、2009 年 1 月。

小野和子「京都大学最初の中国人留学生——『女性の権利』の訳者馬君武」京都橘女子大学女性歴史文化研究所編『京都の女性史』京都：同朋舎、2002 年。

王曉雨・陳其松「清国人日本留学生の見た「世界」とその言説」『北東アジア研究』第 30 号、2019 年 3 月。

王曉鑫「『西学東漸』における清末留日学生の翻訳活動——訳書彙編社への考察を中心に」北京外国語大学修士論文、2019 年 5 月。

王彩芹「法律関係新語の形成において赴日留学生が果たした役割——『訳書彙編』を中心に」天津外国語学院修士論文、2009 年 2 月。

- 王鼎「雑誌『湖北学生界（漢声）』から見た清国日本留学生の諸活動」『現代社会文化研究』第64号、2017年3月。
- 「清末における湖北留日学生の留学経験とその影響——黄州府三兄弟を事例に」『アジア教育史研究』第30号、2021年3月。
- 老松信一「嘉納治五郎の中国人留学生教育」『武道学研究』第8巻第2号、1976年。
- 「嘉納治五郎と中国人留学生教育」『講道館柔道科学研究会紀要』第V輯、1978年。
- 蔭山雅博「清末における教育近代化過程と日本人教習」阿部洋編『日中教育文化交流と摩擦——戦前日本の在華教育事業』東京：第一書房、1983年。
- 鹿野政直「社会問題の発生と初期社会主義」橋川文三・松本三之介編『近代日本政治思想史Ⅰ』東京：有斐閣、1971年。
- 紀旭峰「戦前期早稲田大学のアジア人留学生の軌跡——中国人と台湾人留学生数の動向を中心に」李成市・劉傑編『留学生の早稲田——近代日本の知の接触領域』東京：早稲田大学出版部、2015年。
- 北村淳子「東京同文書院における初期日本語教育（明治32-34年）——チェンパレン本をめぐる」『日本国際文化学会年報』第7号、2009年6月。
- 清水稔「中国人留学生と日本の近代（アジアのなかの日本）」『佛教大学総合研究所紀要』1995年第1号。
- 「湖南への社会主義思想伝播に関する一考察」『佛教大学総合研究所紀要』第3号、1996年3月。
- 「近代中国とマルクス主義との出会いについて——とくに辛亥革命前後を中心として」『文学部論集』第92号、2008年3月。
- 荊建堂「清末における留日学生派遣政策の成立——「弘文学院」設立経緯の再検討」『KGU比較文化論集』第4号、2012年。
- 「嘉納治五郎の留学生教育と中国近代教育——中国教育視察中の言動を中心に」『KGU比較文化論集』第5号、2013年。
- 「弘文学院における嘉納治五郎の留学生教育思想」『神話と詩』第11号、2013年3月。
- 胡穎「清末の日本における中国人留学生同郷会について——湖南省留日同郷会の初期活動を中心に」神奈川大学人文学会『人文研究』第199号、2019年12月。
- 高明珠「日本留学生の歴史的貢献からみた清末留学生派遣政策の効果」『同志社政策科学研究』第14巻第1号、2012年9月。
- 小林共明「振武学校と留日清国陸軍学生」辛亥革命研究会『中国近現代史論集』東京：汲古書院、1985年。

- 近藤邦康『『井上雅二日記』——唐才常自立軍蜂起』『国家学会雑誌』第98巻第1、2号、1985年。
- 佐藤慎一「一八九〇年代『民権』論——張之洞と何啓の『論争』を中心に」金谷治編『中国における人間性の探究』東京：創文社、1983年。
- 佐々木敏二『『国民之友』における社会問題論』『キリスト教社会問題研究』第18号、1971年3月。
- 「日本の初期社会主義（3）』『経済資料研究』第10号、1976年3月。
- 鈴木正弘「留日中国人学生の学んだ日本史教育の一端——振武学校・成城学校における日本史教育』『立正史学』第103号、2008年3月。
- 盛福剛「中国におけるマルクス主義文献の初期受容に関する研究——日本からの伝播・翻訳を中心として」（日本）東北大学博士論文、2016年。
- 宋晓煜「清末における加藤弘之の著作の翻訳および受容状況——『強者の権利の競争』とその中国語訳を中心に』『ICCS 現代中国学ジャーナル』第10巻第1号、2017年6月。
- 孫安石「清国留学生会館研究初探——「国家」と「愛国」のはざま」大里浩秋・孫安石編著『中国人留学生と「国家」・「愛国」・「近代」』東京：東方書店、2019年。
- 孫瑛鞠「清末、中国人日本留学生の近代国民意識形成に関する一考察——1896年から1901年までの留学生界に着目して』『中国研究月報』第849号、2018年。
- 高木理久夫編、呉格訂「錢恂年譜（増補改訂版）』『早稲田大学図書館紀要』第60号、2013年3月。
- 高木理久夫・森美由紀「早稲田の清国留学生——『早稲田大学中国留学生同窓録』の記録から』『早稲田大学図書館紀要』第62号、2015年3月。
- 高田幸男「中華留日基督教青年会について——同会『会務報告』を中心に』『明大アジア史論集』第23号、2019年3月。
- 高橋強「清末中国人留日学生と『人生地理学』——『浙江潮』を通して』『東洋哲学研究所紀要』第19巻、2003年。
- 玉岡敦『『共産党宣言』邦訳史における幸徳秋水/堺利彦訳（1904、1906年）の位置』『大原社会問題研究所雑誌』第603号、2009年1月。
- 沈国威「日本発近代知への接近——梁啓超の場合」関西大学大学院東アジア文化研究科『東アジア文化交渉研究』第2号、2009年。
- 陳力衛「梁啓超『和文漢讀法』における「和漢異義字」について——『言海』との接点を中心に」沈国威編著『漢字文化圏諸言語の近代語彙の形成——創出と共有』吹田：関西大学出版部、2008年。
- 陳力衛「成城学校中国人留学生史へのアプローチ』『成城・経済研究』第231号、2021年1月。

- 富田昇「社会主義講習会と亞洲和親会——明治末期における日中知識人の交流」『集刊東洋学』第64号、1990年11月。
- 島居高「中国人留学生と神田神保町『中華街』の形成と特徴——明治末期を中心に」高田幸男編『戦前期アジア留学生と明治大学』東京：東方書店、2019年。
- 中村義「成城学校と中国人留学生」前掲辛亥革命研究会『中国近現代史論集』。
- 狭間直樹「幸徳秋水の第一回社会主義講習会における演説について」『鷹陵史学』第1号、1975年3月。
- 浜口裕子「日露戦争直後の中国人留学生——振武学校8期生東北出身者の動向を中心として」『政治・経済・法律研究』第23巻第1号、2020年10月。
- 浜口裕子・家近亮子「留学生に関する成城学校史料目録——個人情報保護法と歴史史料」『政治・経済・法律研究』第24巻第1号、2021年10月。
- 二見剛史・佐藤尚子「〈付〉中国人日本留学史関係統計」『国立教育研究所紀要』第94集、1978年。
- 二見剛史「京師法政学堂と松本亀次郎」前掲阿部洋編『日中教育文化交流と摩擦——戦前日本の在華教育事業』。
- 細野浩二「清末中国における「東文学堂」とその周辺——明治末日本の教育権収奪の論理をめぐる素描」前掲阿部洋編『日中教育文化交流と摩擦——戦前日本の在華教育事業』。
- 朴雪梅「初期中国人女子留学生の政治思想と理想的女性像——雑誌『江蘇』の「女学論文/文叢」を中心に」『比較日本文化研究』第18号、2016年3月。
- 松本武彦「清末留日学生刊行諸雑誌の流通ルートにみえる在日華僑について」『研究紀要（大分県立芸術文化短期大学）』第25巻、1987年12月。
- 宮城由美子「成城学校と中国人留学生についての一考察」『佛教大学大学院紀要』第35号、2007年1月。
- 『『国民報』社説にみる国家と国民について』『佛教大学大学院紀要・文学研究科篇』第37号、2009年3月。
- 村松弘一「調査報告 明治一昭和前期、学習院の中国人留学生について」『学習院大学国際研究教育機構研究年報』第3号、2017年2月。
- 孟芮竹「幸徳秋水と中国天義派の平民主義とアナキズム——『共産党宣言』の翻訳を端緒に」『創価法学』第51巻第3号、2022年3月。
- 渡辺祐子「もうひとつの中国人留学生史——中国人日本留学史における中華留日基督教青年会の位置」『明治学院大学教養教育センター紀要：カルチュラル』第5巻第1号、2011年3月。
- 吉川次郎「雲南同郷会と『演話報』」『国際教養学部論叢』第10巻第2号、2018年3月。

李慶国「呉禄貞と日本（1）——呉禄貞に関する伝記資料をめぐって」『追手門学院大学国際教養学部紀要』第10巻、2016年。

——「呉禄貞と日本（2）——呉禄貞に関する伝記資料をめぐって」『追手門学院大学国際教養学部紀要』第13巻、2020年3月。

劉建雲「清末中国人日本留学の政策と郭開文の日本留学——郭沫若兄弟の日本留学研究において出会ったいくつかの問題をめぐって」『白鴎大学論集』第34巻第1号、2019年9月。

呂順長「清末の留日学生監督——浙江留日学生監督孫淦の事跡を中心に」浙江大学日本文化研究所編集『江戸・明治期の日中文化交流』東京：農山漁村文化協会、2000年。

神奈川大学大学院
言語と文化論集 特別号

2025年3月 印刷
2025年3月 発行

編集発行 神奈川大学大学院
人文学研究科
(横浜市西区みなとみらい4-5-3)

製作 共立速記印刷株式会社

LANGUAGE AND CULTURE
BULLETIN
OF
THE GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES
KANAGAWA UNIVERSITY
Special number, March, 2025

Doctoral Course, Chinese Languages and Cultures
(Date of Degree Awarded : March 31, 2023)

Group Activities of Chinese Students in Japan in the
Late Qing Dynasty and Yi Shu Hui Pien

GUO MENGYAO
